明治三十六年十二月廿五日第三種郵便物認可
明治四十年十一月廿日發行
每月一回五日發行

女學世界定期增刊

寶の藏

第七卷第十[illegible]號



博文館發行


新年の御慶
目出度申納候
明治四十年一月一日
越
東京市日本橋區駿河町
三越呉服店

女學世界定期增刊 第七巻第貳號

寶の藏目次

鼇頭目次

口繪

寫眞版


五二共進會銀牌受領
宮内省御買上光榮ヲ得タリ
I LIKE IT.
I LIKE TOO.
VERY GOOD.
WE SHOULD LIKE IT.
VERY GOOD.
CREME
PEARL
秘蔵本品も四季ニ適し
毛髪ひげを保護養し
生シ愛すべき香気
を有する世界有
數ノ逸品ニ
煉香油パール發賣元東京平尾分店画葉書

（甲の一）



少女世界
第二卷　第二號



少女世界の定期增刊として、名を聞いたばかりで、早く讀みたい氣のする『**新女藝**』を、一月十五日に發行します。新らしい年を迎へたと共に、少女諸孃は、いろ〳〵の學問や技藝を習ひ、ます〳〵その智識を廣め、趣味を高尙にせねばなりません。そこで新女藝には、先づ卷頭に**巖谷小波氏**の**少女芝居**を掲げて、諸孃のおたのしみを增し、次に**文藝、禮式、裁縫、編物、刺繡、割烹、理科、遊戯**などの諸科に涉つて、少女の心得ておかねばならぬことや、毎日行はねばならぬことを、親切に平易に、且つ面白く記したものを掲げます。また婦女鑑と題して、昔からの名高い婦人や、感心な少女のお話をあつめ、**特別懸賞文**には、天下の才媛が、根をねり文を飾つて寄せられたものを、滿載します。その他、**少女會館**は、**學藝室、娯樂室、談話室、顧問室**、などが、いつもの通りに賑ひます。

全一冊洋裝大判
正價金拾錢
郵稅壹錢五厘
既成發行



（甲の二）

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

女(甲の三)

(甲の四)

たま椿



河崎蘭香筆

關根正直先生校註

公事根源新釋

和裝全二冊 定價金六拾錢郵稅金六錢

本書は年中の公事世俗の慣例等を平易なる文にて記し簡にして要を得たれば朝野行事の由來故實風俗を知るに重寳なり然るに善き註解なきを以て今之を校註し本書をして一層解し易からしめたり國文國史の講習者は勿論歌人俳家其他一般の讀書家操觚者の必ず座右に置くべき書なり

關根正直先生著

改版増補 裝束甲冑圖解

和裝全二冊 定價金六拾五錢郵稅金八錢

本書が國史國文の良參考書たるは大方の認知せらるゝ所にして發行以來非常の好評を得既に第六版も磨滅するに至れり故に今般更に版を改め又々解說の項目圖畫等を增し新に弓箭刀劍馬具類の圖解を附錄して大に紙數を增加したるを以て二冊にして發行せり倍舊御購讀あらむ事を請ふ

關根正直先生著

宮殿調度圖解

和裝全一冊 定價金四拾五錢郵稅金四錢

本書は曩に刊行せし裝束甲冑圖解の體に傚ひ內裏諸宮貴人の殿舍門墻室門の飾品財車輿の種類に至る迄圖を出し詳解せしものなり故に國史國文の學に志す諸君購讀し給はゞ便益多からむ

關根正直先生著

十六夜日記 庭のをしへ 諺解

和裝全一冊 定價金參拾錢郵稅金六錢

十六夜日記は誰も知る所「庭の訓」は女子の心得を美文にて書ける物「十六夜」と對照して阿佛尼の志操を見るべし「十六夜」の注は多けれど皆粗略にして精しからず庭の訓に至ては世間詳註なし先生の著はありふれたる書と違ひ詳細親切到らざる所なし諺解とは先生謙遜の命名にして實に詳解と云を憚らず

東京市日本橋區數寄屋町九番地 發兌元 振替貯金口座番號(第二三七一一番) 六合館

女(乙の一)

新編 義士銘々傳

洋裝大判○正價金貳拾五錢 郵稅貳錢五厘

既成發行

文藝俱樂部第十三卷第貳號定期增刊

彼の日本武士の精華を萃めたる赤穗四十七士の復讐譚は、洽く世界の人口に膾炙して、其の銘々傳の如きも實に棟に充ち牛に汗する程既に世に公けにせられしが、其の多くは徒らに事實を誇張して眞相を誤るもの尠からず。本誌は來る本月十五日發刊の定期增刊として當代知名の講談師諸氏に囑し、各自其の最も得意とする義士に關して、其の掬すべく貴むべき傳記を講ぜしめて是を一卷と成す。首尾有り脈絡あり。此の書を繙くものは、親しく血あり淚ある義勇の諸士に接するの思ひあらむ。左に其の目次の槪要を掲ぐ。切に愛誦を賜へ！

目次

發兌元 東京本町 博文館

女(乙の二)

乙


THE GEM
衛生家必携
懐中良藥
ゼム
ゼム一粒の馥郁たる香氣と愛すべき美味とは一度用て終生忘るゝ能はざらしむ故にゼムは廣く萬人に愛用せらる
ゼム二粒は煙草の味を美にして心神を爽快にし疲勞を減じ息切れを防ぎ渇を醫す故にゼムは外遊學生に愛用せらる
ゼム三粒は音聲を美くす音聲は美の一要素也故にゼムは紳士佳人に愛用せらる
ゼム五粒を食前食後に用ふれば食慾を増進し消化を助く故にゼムは衛生を重んずる士の常用劑として愛用せらる
ゼム十粒は異境に於ける風土病疾癘食當り水傷りを治して神効あり舟車の醉を防ぐ故にゼムは進取的遠征家及び旅行家の必携劑として愛用せらる
ゼム定價 七十五粒入十錢 四百卅粒入五十錢 容器入ゼム 百六十粒入廿錢 九百粒入一圓二十錢
日本一手發賣 東京馬喰町二丁目 愛國堂山崎榮三郎 支舗 大阪高麗橋二丁目 山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり

(乙の四)



高　嶺

三宅克己筆

歐米に今流行しつゝある束髮前髮じん



▲高貴婦人の最も賞賛の經濟品
▲輕き事「ハ子」の如く伸縮自在
▲頭部を冷して「フケ」を除去す

▲上品の容姿を裝ふヘヤロール
▲切り結び手数を省く便利のヘヤタイ

☞賣捌所　各地和洋小間物店

東京市京橋區鎗屋町一番地
日本一手發賣元　日加商店　電新二八三四番

當代無類の奇文!!!毒舌文の一大機軸!!!

龍門を見ざれば天下の深きを知らず
元祿姉さんを見ざれば天下の文を知ることなし

巫山を見ずして天下の勝を說くこと勿れ
元祿姉さんを知らずして天下の文を談ずる勿れ

▲咳唾珠を成す奇才子の文!!!▼

噫是れ現代婦人の心裡を解剖せる觀象國也、見よ現代婦人千百の疑問が奈何に靈警なる著者の眼光に映じ如何に燃犀なる著者の筆に依つて解決されつゝあるかを。

元祿姉さん著



著者元より小說家にあらず、然れども實在の滄海より掬び來れる一滴の甚麼を千倍の顯微鏡に映じこれを萬人の眼前に展觀せしむるの技に至つては眞に是れ當代の傑品、一度び巻を繙かば、老婦は嫉み、壯婦は怨み、貪婦は恥ぢ、嬌婦は怒り、而して妙齡の才人は忽ち紅潮して以て手に汗を握らん。

本書編目

▲人を魅する妖婦の文!!!▼

東京 博文館 本町

(丙の二)

謹告

合資會社共益商社樂器店一手販賣ノ山葉製風琴ハ構造堅固音律精確内國製風琴ノ巨擘タリ第五回内國勸業博覽會へ各製造所ヨリ出品ノ風琴中第一等賞牌ヲ得タルヲ以テモ知ルヲ得可シ

合資會社共益商社樂器店一手販賣ノ山葉洋琴ハ從來本邦ニ於テ製造サレタル洋琴中其品質尤モ優秀ナルノミナラズ之ヲ歐米各國ヨリ輸入スルモノニ比シ些ノ遜色ナキ迄ニ其技術ノ進歩セシ點ヲ以テ我樂界ノ諸大家ハ或ハ證明書或ハ玉章ヲ寄セテ之カ成功ヲ賞讃セラレタリ

合資會社共益商社樂器店一手販賣ノ鈴木製ヴァイオリンハ其製作上長足ノ進足ヲ遂ゲ今ヤ何レノ點ニ於テモ舶來品ニ劣ル處ナキニ至レリ而シテ其價ハ頗ル廉ナリ

合資會社共益商社樂器店ハ以上ノ外有ラユル内外ノ樂器及音樂書等ヲ販賣ス樂隊用吹奏樂器ノ如キハ何時ニテモ取揃ヒ御注文ニ應ズ

合資會社共益商社樂器店ハ「ピアノ」「オルガン」ノ調律修繕ニ最モ熟練ナル技士ヲ派シ懇切叮嚀ニ御需ニ應ズ

合資會社共益商社樂器店ハ誠實ト迅速ト廉價ト販賣品ノ豐富トヲ以テ其特色トス



女(丙の四)

西洋音樂器
和洋音樂書
大販賣所

東京市京橋區竹川町十三番地

合資會社共益商社樂器店

電話新橋五二九、電信略號キヨ

たからの藏



戸田玉秀筆

鴛鴦



一條成美筆


各女學校御用
美術造花
材料
附屬品
造花器械類一式
東京市日本橋區横山町一丁目十六番地
天野卯兵衛
電話(長)浪花一六四三番
(切取線)
營業目録御入用ナレバ此切取リ添ヘ御申越被下度候
縣　郡　町(村)
女學世界第七巻第貳號

(丁の一)

家庭整理の指導

當代第一流の女子教育家編著



家庭百科全書

全部五拾册――毎月二回發行――第一巻二月創刊す

和裝頗美本◉紙數二百五十頁◉石版彩色口繪一葉、挿畫十數個

▲定價一册金四拾錢――郵税八錢

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、輙もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概ね理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過るか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に敎師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ことに家庭に敎師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は、最良なる家庭敎師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人敎育の缺點を補はんと欲するなり。

發兌元 東京

女（丁の二）

婦女必讀の大全書發行

去れば本書は全部を五十卷と爲し、毎月二卷づゝ、左の諸大家に請ひ、編を遂ふて發刊す。著者は皆な現代婦人教育界に第一流の諸名家にして、各家皆な多年の經驗に徵し、最も實際に適切なる事物を選み、文章は平易流暢を旨とし、之れを讀で趣味多く、記事は明細精確に之を實地に施して遺憾なきを期せらる。幸ひに世上の女流にして、各一本を家庭に備へられんには、恰も常に家庭教師を自家に聘し、日々に起る所の事物に對して、一々指導を受くるに異ならざる裨益あるべきなり。

第一編

新家庭訓

三輪田高等女學校長 三輪田眞佐子女史著

紙數二百五十頁
石版極彩口繪挿入
挿畫十數個

●續刊

四季料理 宮中臣民兩流料理師範 大日本割烹學會々長 石井泰次郎君著

禮式と作法 女子高等師範學校教授 佐方鎭子女史著

家政要訣 女子高等師範學校教授 後閑菊野女史著

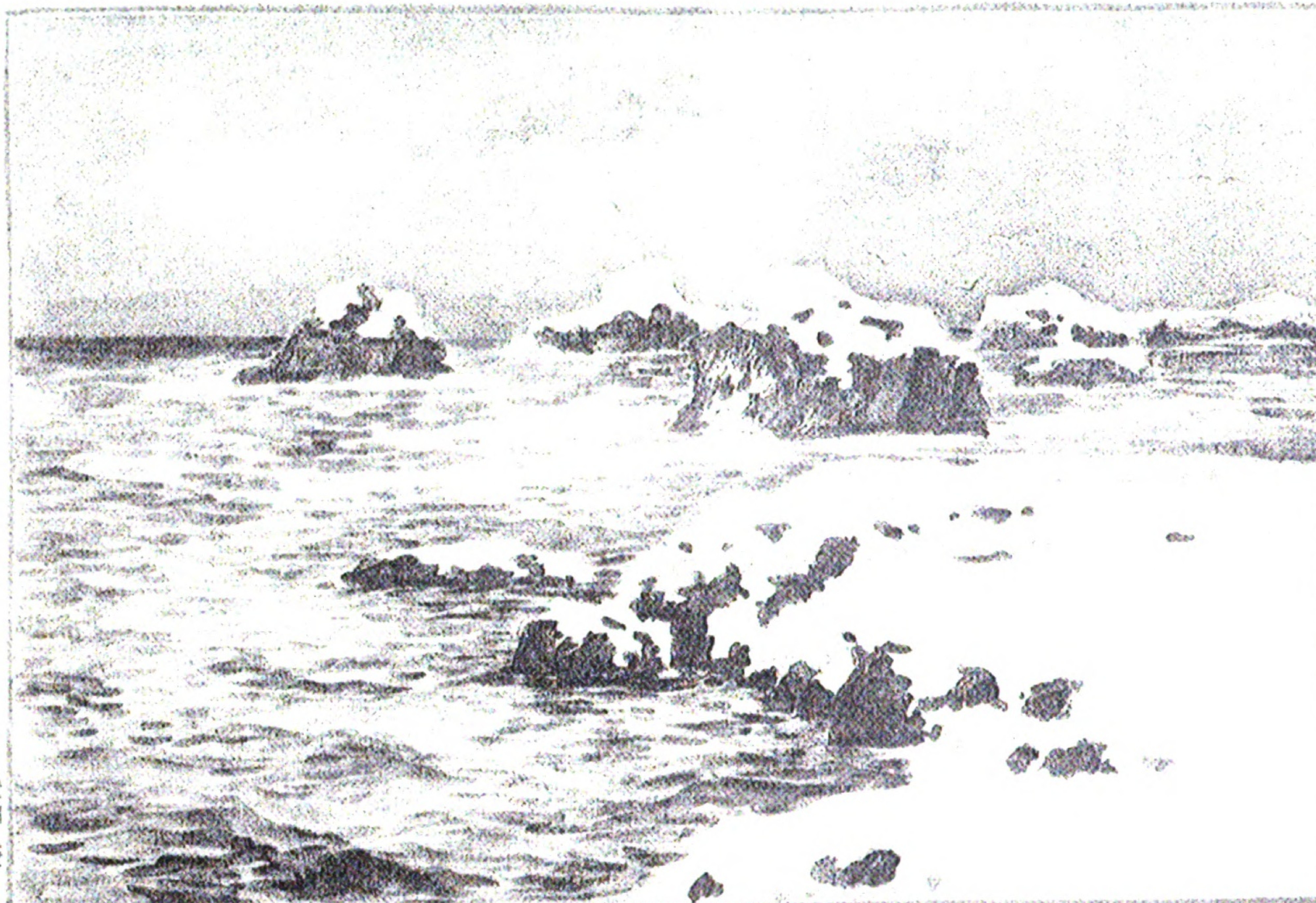
本町 博文館

女(丁の三)


SANKODO GRAPHOPHONE Co.
蓄音器應用
英語會話獨習
大聲蓄音器平圓盤發音販賣
獨逸及米國製
平圓盤新曲譜着荷
藝界の妙手絶技を網羅し發音好良體裁優美
英國グラモホーン會社平圓盤
米國コロンヒヤ會社平圓盤
獨逸國ベカーレコート會社平圓盤
東洋一手販賣
三光堂
本店
東京市京橋區銀座一丁目（長電話新九四二七〇九四番）
支店
東京市淺草區並木町（長電話下九八八番）
大坂市南區順慶町四丁目（長電話東二四一四番）
福岡市博多下西町（電話五〇一番）
北海道小樽區色內町（電話三二三番）
定價表御一報次第進呈
●弊堂が新に平圓盤に吹込たる語學練習用音譜兩面盤日本譜及朝鮮譜
十四枚一組　英和兩譯二冊附屬發賣●米國人カンニングハム先生吹込み
學校及家庭には缺くべからざる設備品なり

女（丁の四）

絶島ノ雪



A.M 筆

女(戊の四)

錦衣鶴裳



芝離宮にて各皇族殿下最近の御撮影なり。後列中央海軍服を召させ玉へるは山階宮殿下。其御左より伏見大將宮殿下。朝香宮殿下。北白川宮殿下。久邇宮殿下。東久邇宮殿下。前列御洋裝の妃殿下中央より山階宮妃殿下。閑院宮妃殿下。東伏見宮妃殿下。久邇妃宮殿下。

世界の廣衢



米國華盛頓府の宏街

日本橋婦人會新年小集



倒影



獨逸ニルンベルグ市の教會堂

女(己の二)

●英學新報社出版書類 ●發賣元 東京本町 博文館 東京神田 東京堂

文學士 淺野馮虛先生譯註
英文譯註 **奇々怪々**
洋裝(中判)美本 正價金三十錢 郵稅四錢

前山口高等學校教授 戸川秋骨先生譯註
英文譯註 **世捨人**
洋裝(中判)美本 正價金三十錢 郵稅四錢

文學士 戸澤姑射先生譯註
英文譯註 **浮世の旅**
洋裝(中判)美本 正價二十五錢 郵稅四錢

海軍教授 豐島 定先生譯註
英文譯註 **帳中說法**
洋裝(中判)美本 正價三十五錢 郵稅六錢

文學士 田中西熊先生譯註
英文譯註 **みさを物語**
洋裝(中判)美本 正價三十五錢 郵稅六錢

津田梅子女史撰 文學士 畔柳芥舟先生解說
ドンキホーテイ
洋裝(袖珍)美本 正價金三十錢 郵稅四錢

ハーツホン、津田梅子兩女史共撰
法螺先生
洋裝(袖珍)美本 正價金二十錢 郵稅二錢

宇野光三郎先生編
イノックアーデン
洋裝(袖珍)美本 正價金二十錢 郵稅二錢

宇野光三郎先生譯註
エヴァンゼリン
洋裝(中判)美本 正價金三十錢 郵稅四錢

ハーツホン女史編
嚴本嘉志子 **英文集**
洋裝(袖珍)美本 正價金三十錢 郵稅四錢

ハーツホン女史撰
イリアッド物語
洋裝(袖珍)美本 正價金三十錢 郵稅四錢

津田梅子女史撰
氷洲之少年
洋裝(袖珍)美本 正價金二十錢 郵稅二錢

東京高等商業學校教授 高島捨太先生著
和文英譯集
洋裝(中判)美本 正價三十五錢 郵稅四錢

岡田市治先生著
二十世紀 **英語異同辨**
上製(袖珍)美本 正價金六十錢 郵稅八錢

宇野光三郎先生著
シャルとウイルの用法
洋裝(袖珍)美本 正價二十五錢、郵稅四錢

英學新報社編纂
英文書簡
洋裝(中判)美本 正價四十五錢 郵稅八錢

嚴谷小波先生原著新訂
英國リッデル女史英譯
米國グリーン女史英譯
英國コルビー女史英譯
英國ソントン女史英譯

洋裝大判頗美製本
每册紙數八十餘頁
正價一册十三錢
▲郵便稅四錢宛

和英對譯 **日本昔噺**

全部十二册目次

●桃太郎 リッデル女史譯 富岡永洗君畫
◎玉の井 グリーン女史譯 小林永興君畫
●猿蟹合戰 リッデル女史譯 村田丹陵君畫
◎松山鏡 リッデル女史譯 武內桂舟君畫
●花咲爺 グリーン女史譯 水野年方君畫
◎舌切雀 コルビー女史譯 三島蕉窓君畫
●勝々山 ソントン女史譯 寺崎廣業君畫
◎俵藤太 リッデル女史譯 藤島華僊君畫
●大江山 グリーン女史譯 歌川國松君畫
◎瘤とり コルビー女史譯 山田敬中君畫
●物臭太郎 リッデル女史譯 梶田半古君畫
◎文福茶釜 グリーン女史譯 鈴木華村君畫

村井弦齋先生原著 高柳龍吉君英譯
和英對譯 **近江聖人**
洋裝(袖珍)美本 正價三十五錢 郵稅四錢

(己の三)

携帶至便　東京市編纂　價格至廉

東京遊覽案内

本年三月より東京勸業博覽會の開設せらるゝに當り東京市役所にては隈なく東京市の名所舊蹟娛樂場遊覽地より諸官衙公署銀行會社等を首とし凡そ商業百般の機關とを網羅し且つ最も詳密なる地圖を添ひ帝都の事は此一冊を袖中に携ふれば案内者を要せずして全市の事情に精通すべき遊覽案内を編述せられ僅かに印刷の實費を以て數十萬部を頒ち以て博覽會來觀者に便し兼ねて將來永遠に東京市に遊ぶ人々の指導者たらんと期せられ發賣を弊館に命ぜらる實に最も廉價にして最も携帶に便に最も巧みに編述せられて最も趣味多く殊に最も多くの部數を發行せらるゝは本書に及ぶものなし博覽會來觀の方は勿論東京遊覽の案内者としても無比の好書なり

全一册

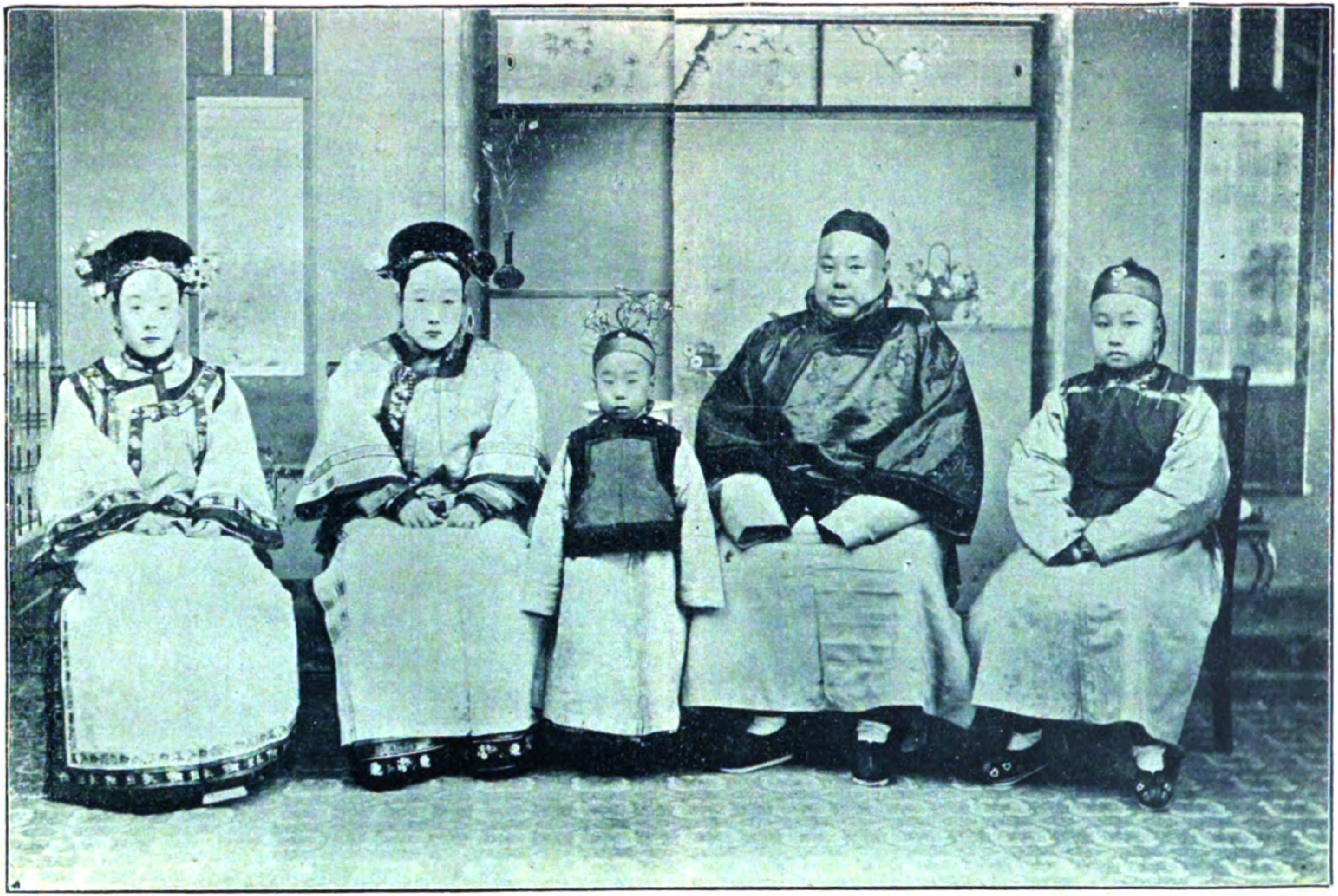
正價金四拾錢
郵税金六錢

●縱五寸横三寸（ポッケット入）
●總クロース美裝上製
●紙數三百頁（名所寫眞版五拾頁刷込）
●全國交通略圖（本文中に挿入）
●東京市及郡部詳細地圖（町名、主要の建物名稱明細記入）大判壹枚
●二月下旬……出來
●東京市へ上納部數壹萬壹千部

發賣元　博文館　東京本町

(己の四)

滿洲紳士の家庭



挿花



茶の湯



野上の雪



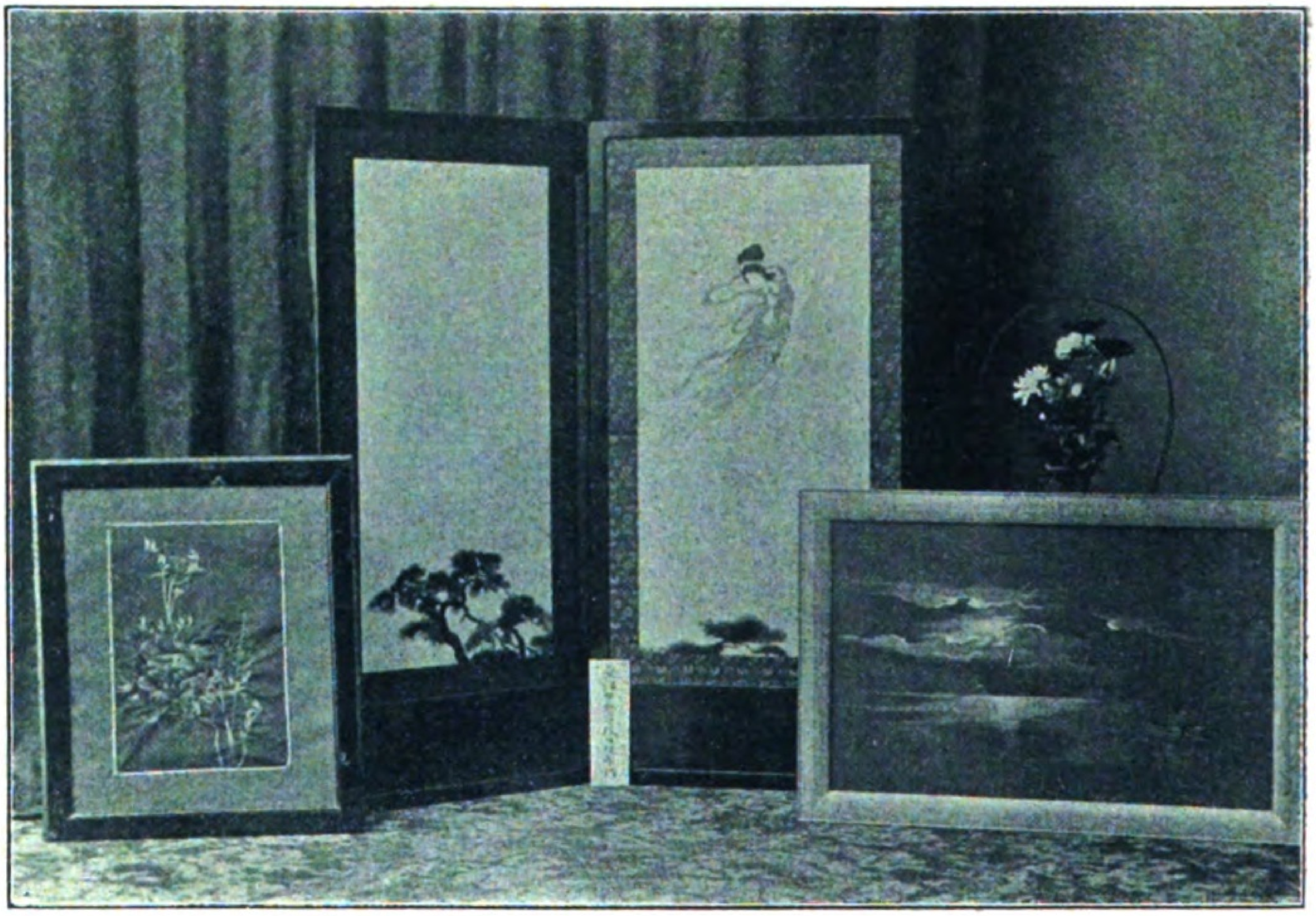
倫敦中等家庭の郊外散歩

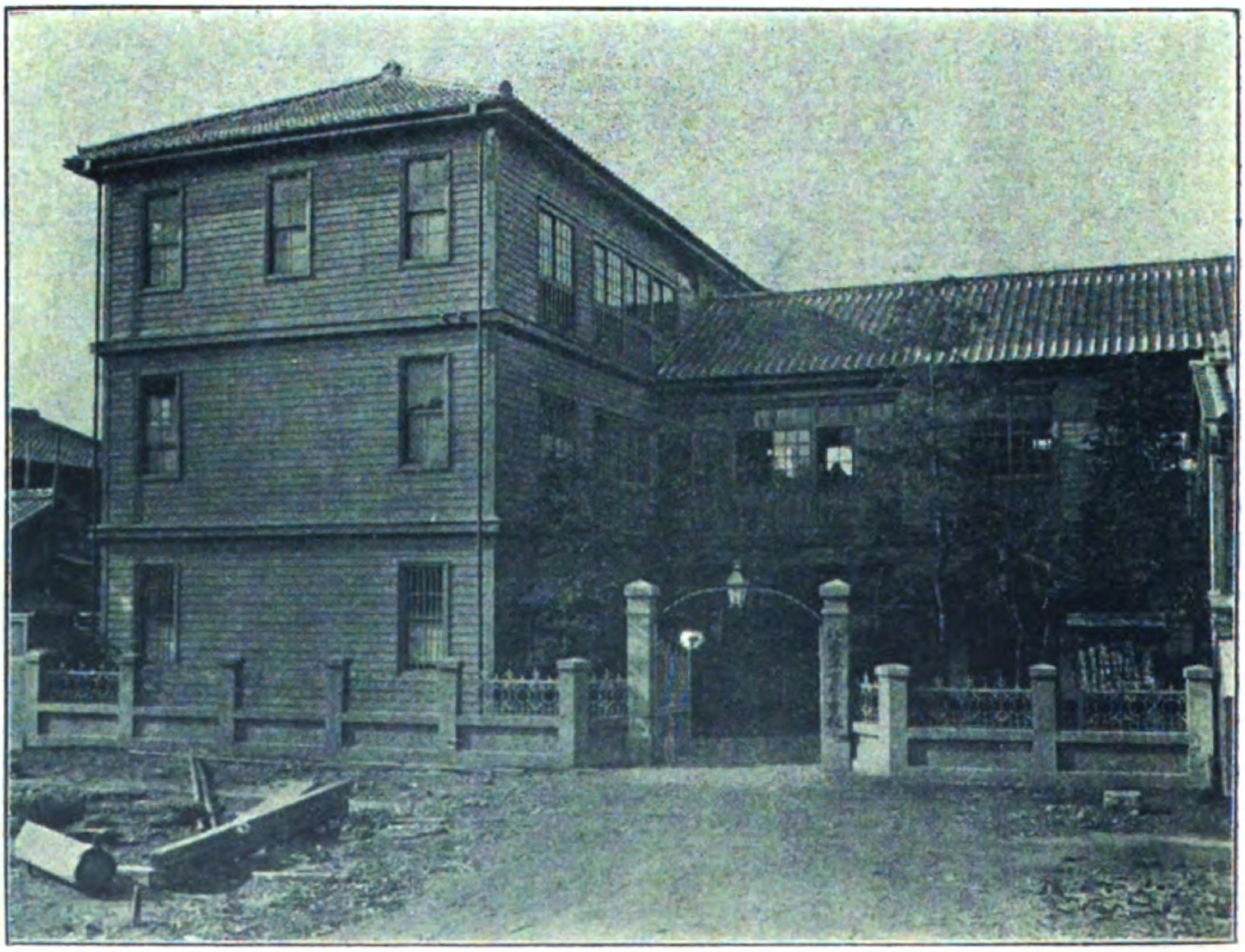


江畔の冬



東洋女藝學校と生徒製作品





（庚の一）

第一巻 英吉利

口繪には國旗、帝王、帝后、[illegible]宮城其他。並に英國領地の地圖

目次

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

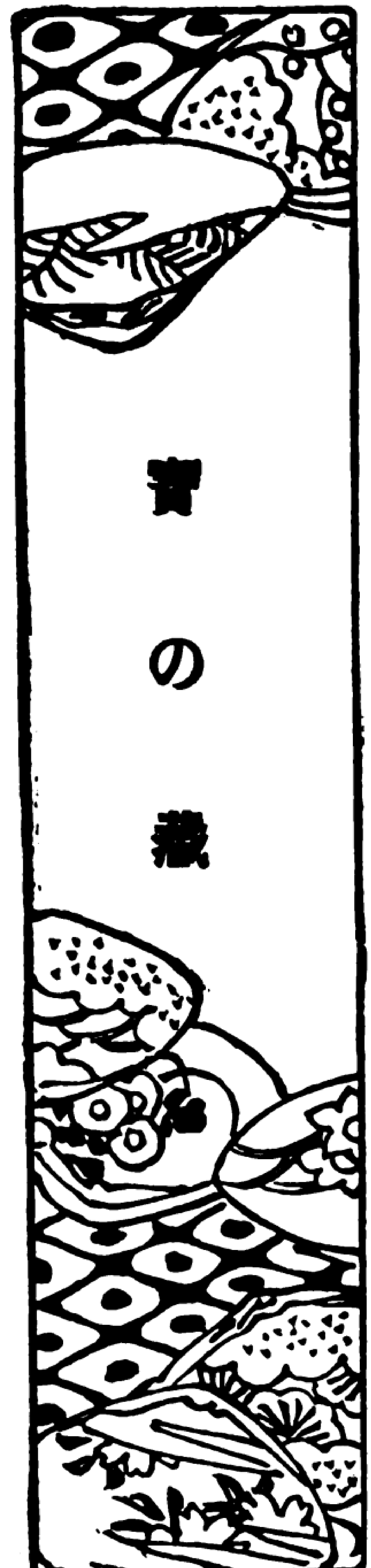
(庚ら三)

（廣の四）



金銀、瑠璃、硨磲、瑪瑙、琥珀、珊瑚、眞珠は、佛說に唱へたる寶なれども、寶は必らずしも這の物質に限るべからず 高潔なる品性は人間中の寶にして子孫の繁榮は家の寶なり、健康は身の寶にして操正しきはこれ女の寶にあらずや

崇高なる山を見よ、明艶なる水を見よ、晴朗なる天日を見よ、開豁なる宇宙を見よ、是れ皆吾人に幸する至大の寶にあらずして何ぞや



日常生活に寓意されたる

七福の神

戯人戯筆

寶の藏といふ芽出度い號の卷頭に七福神のお話を致すのも一寸興味あらうと存じます。七福神は一體何であるかといふに是れは勿論架空の物ですが古來傳說のあつた種々なる神仙的人物の中から私はこの七人を抽象して人間界の幸福和樂を代表させたものであらうと存じます即ちあらゆる人間生活上の福利充實を具體的に顯はしたものがこの七福神であらふと思ひます。

大黑天——勞働、忍耐

七福神の中で尤も生活的なのは大黑天である、大黑天は生活上第一の方便たる穀と財との代表者で、其路

まへてゐる米俵は農を顯はし、其負ふて居る處ろの財嚢は商を顯はしてゐる、更に其手に持つ打出の小槌は財貨の無盡藏を顯はしたもので、財寶、貨物は人の勞力の德に依つて宇宙、覆載間に無盡藏であるとの意を寓したものである。而して彼れの顏面の福々しくして微笑を湛へてゐるのは、滿足和樂の意味であるが、何故に滿足和樂であるかは更らに其體軀の倭小短脚なるに依つて一段の意味が寓してある、即ち體の倭小短脚は彼れの不斷の勞働と彼れの耐忍克己とを十分に顯はしたもので實に大黑天は、忍耐克己を以て生活の資源を產出し得る處ろの德を表出したものである。彼れは日本人の生活の本資たる穀の神、財の神である。

惠比須――生產、貨殖

惠比須は大黑天に次いで又生活の代表者である大黑は專ら陸の生產を表はしてゐるが、惠比須は海產の無盡藏を獵獲する、日本は海國である、日本古來の歷史は海と密接してゐる、隨つて日本の寶藏は海面にある、そこで海中に向つて働らきを爲すは日本人の約束である事を惠比須に依つて寓意されたものである、彼れは人間生活に必要なる寶物を海中から釣りあぐる處ろの生利を具體したものである。大黑が勞働と忍耐を代表する如く彼れは生產貨殖を代表したものである。

毘沙門――除厄、降魔

彼れは人間の福利を保護する處ろの守護神である、惠比須、大黑が忍耐克己、勞作活働を以て獲た處ろの福利を他より掠奪さるゝを防ぐ處ろの防禦の神である、辨天の愛嬌、布袋の度量、福祿の智惠も彼れの守護に依らなければ福を全ふする事は出來ないのである、見よ彼れの全身の甲冑を以て裝はれたる、見よ彼れの顏面の

如何に猛勇にして其の態度の如何に凛然たるかを、彼れは、人間百般の幸福を守護する處ろの軍神である、彼れが手に携ふる處ろの劍は即ちその守護劍である。彼れは他の神が、勞働、貨殖、忍耐、圓滿、愛嬌、美觀、長壽、名譽を顯はすと同時に彼れは勇氣を顯はす處ろの神である、彼の本職は禍鬼を攘ふ處ろの利劍である。

辨財天——美觀、慰安

彼女は美の神である、人生の美的方面は彼女に依つて代表されてゐる、財あり、福あり、勇あり、壽あり、名譽あるも人間世界に美がなくては乾燥無味である、そこで彼の女は美の精粹を以て顯れてゐる、即ち愛嬌、慈悲、美貌、艶麗は彼女の本體である、六福如何に福を以て具備すと雖も彼女微かりせば全く無味殺風景となるのである、彼女は實に人生の單調に一點の色彩を與ふる處ろの美の神である、七福神中より一人彼女を除けば終に無意味となる彼女は實に生活界の一の慰籍者として顯はされたものである、彼女の全體は美術である、如何に其の顏面の夭姚たるよ、如何に其の姿態の裊々たるよ、如何に其の風貌の妖艶なるよ、惠比須大黒布袋を見れば可笑しくなる、毘沙門を見れば恐ろしくなる、福祿、壽老人を見れば、爺むさくなるに反して彼女を見れば實に美々しく眞に惚々して恍然となるのである。

布袋——度量、圓滿

彼れの本體は度量である、寬仁大度の德は彼れに依つて十二分に顯はされてゐる、人間世界は正邪混合、薰猶無差別の有樣であるから、此間に處する人間が若し、局量狹隘であつたならば一日も一刻も落付て暮らす事は出來ないものである、そこで人には度量がなくてはならず人間の處世上には度量の無邊宏大なるが最も必

要である、布袋さんは即ちこの度量を具體的にしたものである、前の滿洲軍總司令官、陸軍大將大山君が若し假裝會に出られたならば、乾度布袋に扮されるに極つてゐる、大將の大腹中は即ち度量の袋である如く、布袋の腹の膨らんでゐる處ろは天晴なる度量の袋ではあるまいか、彼れの大腹中には如何なるものも包容されて仕舞ふ、その腹の大なるに加へて猶脊中に大きな布袋がある、この袋にも又あらゆる物を包容する事が出來る、彼れは實に宇宙の萬物を包括して綽々餘裕ある處ろの神である、小事に齷齪する處ろの人間はよろしく彼れに學ぶべしとの寓意であらう。

福祿神――德望、名節

惠比須、大黑が忍耐、勤勉、克己、勞作して生產する處ろの生活上の必需品を蒸溜器にかけて變形したものが福と祿である、人間は惠比須大黑の如く、働らかねばならぬが、それと同時に又働らいたものを蓄積して福と祿とに變化させなければならぬものである、即ち勞働の結果を變形して永久に保存するの必要がある、福祿神は即ちこの勞作の保存を代表したものである、人間福なければ德なく、祿なければ恥なし、聖人も衣食足つて禮節ありと言はれた如く、福祿がなくては人間の貴重なる處は顯はれない即ち祿といふものは生產や、勞働や、作業の醇化した物である、富の權化である、表彰である、惠比須大黑を以て生產、生意、作業、勞作活動を代表せしめ、福祿神を以て美祿、名節、榮譽、智識、禮讓、德望、自重心等を代表せしめたものである。即ち一と口に福祿神は人間の德の分子を寓したものである論より證據、彼の福祿神なるものは手に一卷の軸を持つてゐるではないか、これが祿の證據である、彼の大黑天や惠比須は、直接の勞作を顯はす處ろの米俵、金囊、釣竿の如きものを持つてゐるけれども福祿神に至つては唯一卷の卷物である、卷物は即ち富貴榮達の

最上の表彰である。

壽老人――長壽、延命

福あり、德あり、武あり、勇あり、美貌あり、慰藉あり、度量あるも人間にして壽命なくんば萬事空しく、壽命なくんば何事も爲す事能はざるべし、西哲の言にも健康は百福の第一なりと言ひ、又長壽は萬寶の隨一なりとあり必竟壽あつて人間の生活てふものがあるなれば、百福具足するもこの福なくんば福にあらずとの意を寓してさては福神の意匠中に一個壽老人なるものを打ち出たものである、富貴にして長命これ實に人間幸福の行き止りなり、活動あり、財產あり、武勇あり、美貌あり、度量あり、名譽あり而して長命あり、これ實に人間生々の福德を具足したものと言はねばならぬ、彼れが携ふる處ろの杖は即ちこの壽を代表したもので、長く生きるの表彰物、壽命の權化である。

以上の七福を約めて言へば第一と第二は人間生活の物資を作り出す本體である、第三は、生活を保護する處ろの番人である、第四は生活を美化する處ろの慰藉者である、第五は生活の範圍を宏大無邊にする處ろの圓滿人である、第六は生活上の價値を示す處ろの代表者である第七は生活を永續せしむる處ろの生命の代表者である。天地覆載の間、人間生々の世に於て苟くも此の七つの德を具備せんか其の身の幸福は疑ひなしとの深意ある敎訓を得るのである。

（參照）七福神は惠比須、大黑、毘沙門天、辨才天、福祿壽、壽老人及び布袋にして中世以來福を與ふる神として今日に至る迄一般に信ぜらる右の中惠比須は蛭子と稱せられ七福神中唯一の日本神たり、大黑は元と印度の大黑天なれども後世大國主神と混ぜられて今は寧ろ一般に大國主と信ぜらるゝ傾あり、毘沙門天も亦印度の神にして多門天といふ、財寶を授くる神とす辨才天は印度の女神、もと辨舌を司どる神後世市杵島姫神に附會せらる福祿壽、壽老人いづれも支那人にして壽星と南極老人星との化身延命を司る神とす布袋も又支那の人彌勒の再生と自稱す云々と家庭字業に見えたり。





寶由來記

岫雲　耄碌

寶といふものは一體どんなものであるかといふのに、一と口にいへば世の中に珍らしいもの、尊といもの、千年萬年經つても朽ち磨らないもの、又は非常なる人工を加へて製したもの、或は五彩燦爛として人の眼を驚かすもの、無垢にてし燒ても、潰しても其の質を變じないもの、若しくは由來の久しい古物、などは皆「寶」である。

三種の神器

日本では三種の神器が國の寶である、これは由緒の正しいのみならず、國の開闢からして現代に傳はつてゐるといふ、世にも目出度い物、且つ尊といものである、天孫が之を持たせて蒼溟を探らせ給ひたる由緒あらたかなものである。

寶の字義

寶といふ字を分析すると家冠に珍らしい貝となる、即ち家の中に珍らしい貝がある事になる、これは昔時草昧の世には貝を以て通貨の代りとしてゐた、即ち人間の勞力と價値を代表するものは貝であつた。そこで珍らしい貝が家に在れば其家は財に富で尊とく、即ち「寶持」といふ事になるのである。

世が進むに随つて、寶の區域は漸次に擴まつて來た、即ち前述の如く、宇宙間に珍奇なもの、勢力のかゝつたもの、燦爛たるもの、美麗なるもの、年代を經て磨滅しないもの、水に遭ふても火に遭ふても質の變らないものは皆「寶」として尊重せられるやうになつた、今これ等の物を具體的に示したならば、珠である、金銀である、寶石である、錦、金爛である、或は珊瑚、眞珠のやうなものである、又は稀代な名人の手になつた彫刻物繪畫の類である、すべて室内の裝飾物、身邊の修飾物は皆「寶」といふ字の範圍に入るのみならず、今日では有形無形の財產、權利は皆「寶」である事になつた。

酋長の寶

野蠻國の酋長が其の身邊を飾るに動物の牙、骨、角、若しくは美麗なる玉石、貝殻の綴いだものを以てする彼等はこれ等を以て天晴れ「寶」としたものである、いづれも人の勞力と加工の力を集めたものである。

鬼ケ島の寶

又昔譚に桃太郎が鬼ケ島を征伐して分取ッて來た「寶物」は何であるかといふに、矢張り珊瑚、瑇瑁、瑪瑙水晶の玉、黄金、白銀、錦、金爛の卷物、隱れ蓑、隱れ笠、打出の小槌といふ様なものであるが、こんな幼稚な作り物語にすらもよく「寶」の代表物を言ひ顯はしてゐるのである。

寶物の範圍

さて「寶」も世の開明に随つて次第に其の範圍を擴めて來た、彼の車輿の十二乘を照し、城の七十二城にも代

はるべき價ある所ろの夜光の珠も、遂には一人物に如くものなしといふ樣な有樣になつて、拔群の智慧ある者超絕なる品性ある者、偉大の德あるもの、非常の技倆ある者などは一般に國の寶として尊重せられるやうになつた事は二千四百年前の支那戰國の世の歷史の證する處ろであるが、今日とても又人物は國の寶として世界一般に認められてゐる。隨つて是等人物の遺した筆蹟や言語や著作などは皆國寶として尊重せられ、一個鉅萬の價を有するダイヤモンドと光を爭ふてゐるのである、金岡、雪舟の畫、弘法行成の筆、支那では王右軍、文天祥などいろ／＼ある、又孔子の言語は論語となつて老子の著作は老子となつて數千年間國家の床の間に飾る處ろの一大裝飾物となつてゐる、又今より二三千年前の昔し支那の周の世、若しくは漢の世に崇廟祭祀に用ひられた、酒器、食器の如き銅器が今日日本に傳はつて住友、岩崎の如き富豪の所有になつてゐるのがある、これ等元より一銅器に過ぎないけれども、三千年の面影を存して、今日猶其の色澤を存してゐる是等は眞に立派な寶物といつてよいものである。

以上の如くこの寶といふものは矢張年代を經て磨滅しないもの、覆載間に稀有なもの、驚くべき人工を加へたるもの即ち過大なる勞力の塊、亦は通常人の手にては容易に作り得難いもの、滅多に人の眼に觸れないもの光輝あるもの、玲瓏たるもの無垢にして瑕のなきもの、深山の奧に隱れてゐたもの、大海の底に潜んでゐたもの、乃至は古今に類の乏しき名人の手に作られたもの、數千年を經過して其面影を損じないもの、考古の材料となるものすべて珍らしいもの奇なるもので人間の好奇心と驚異心を動かすもの、又趣味心を起さしめて垂涎せしむるもの、燦爛眼を奪ふものは悉く「寶」といつてよいのである。

修飾品

寶の普通なるものは多く珠によつて代表されてゐる珠は明玲瑩徹、溫醇にして光あり、山より獲來りたる珠に工を加へて磨きあげて珠となすまでには幾千百の人工を費したものである故に其價も計るべからずである、況や其の徑のいよ／＼大なのものに於てをやだ、蓋しこの珠といふは今日の鑛物學上或は剛玉の一種であらうか、眞珠、珊瑚、琥珀等の大形なるもゝ、いづれも價の貴きは單に美麗にして光彩あるのみならず其の品の稀れなると、其工を加ふるの困難なるとに依ッて一段の高價を占むるのである。近世に至つて鑛物の學其の步を進め、寶石の分類いよ／＼密に入り金剛石より硝子に至るまで凡そ七八等の度の差違を分くるに至つた隨つてその價格に於ても千百倍の等差を見る、即ち徑一寸のダイヤモンドは世界稀有のもので其價數千萬弗、由緒ある一大國の帝王王妃の冠上の飾りとして存するのみである、徑一分のものでも價は猶數百圓に上り流行の名妓にあらざれば以て其の指背を飾ざるべからず。一に是れ其の類の少きと、其の加工に困難なるとの致す處ろである、古代錦、古金襴、僅か一尺の巾でも矢張數十金の價がある、若し夫れ絕代の名僧親鸞、蓮如の大德智識が掛けられた袈裟であるといへば十萬圓の價も猶惜しいとは思ふまい。

詠物詩選、器財の部に琥珀を詠じた句がある。

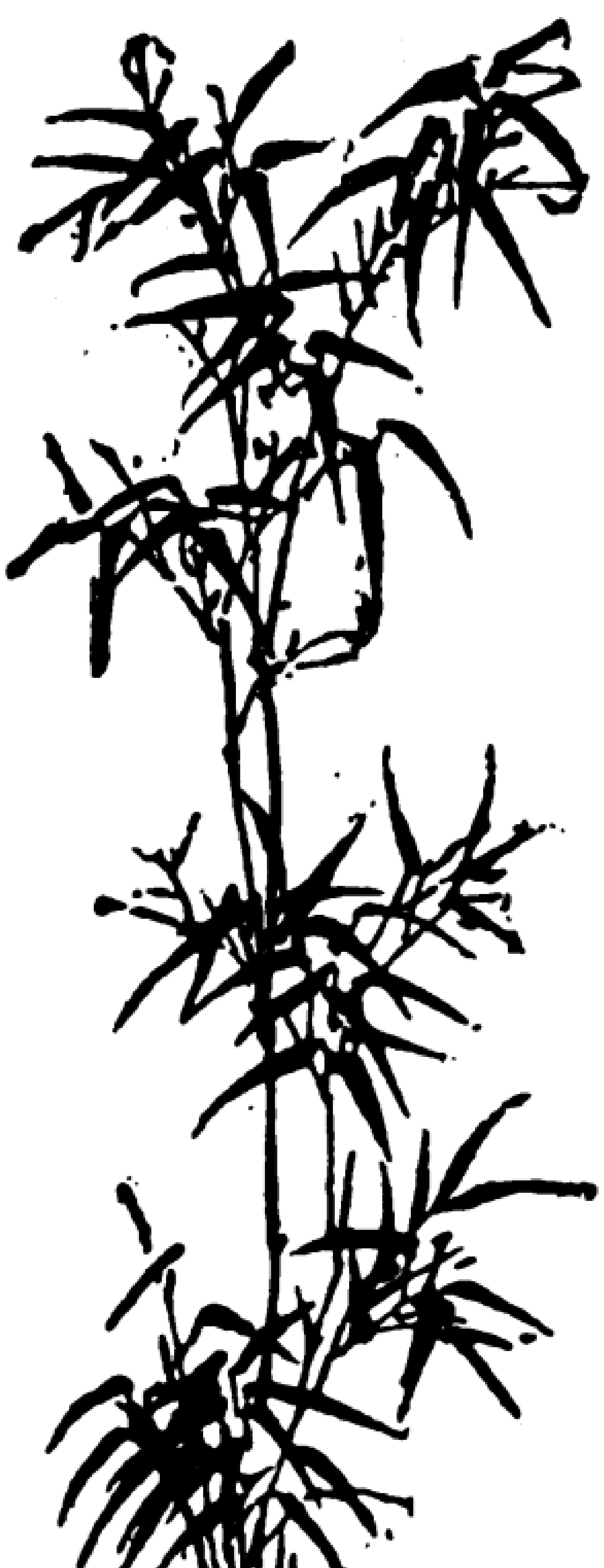
松液地中に入り凝りて琥珀となる、蚊虻其中に落ちて千年猶鑑るべし

琥珀は樹脂の凝つてそのまゝ化石したるものである、故に其色が黃褐色を帶びてゐる、蜘蛛の如き小虫が誤つて樹液の中に入つて其儘凝りて千年の後ち琥珀となつたものである明玉の中に虫の形を現存して天工の奇絕を示したもの、虫入琥珀の高價なる事、支那では親王、王族の冠冕の飾物として珍重されてゐる、又眞珠は貝の液の化したものである一粒の砂が液に包まれて年代を經て層々遂に珠となつたものである光澤明麗、艶美愛すべきは眞珠である。

黄金は金屬中最も美麗なるもので又尤も質の密なるもの、而して如何なるものにも腐蝕されず、千年土中に埋沒してゐても猶よくその原形を損じないのは發掘された刀劍の裝飾等の其儘なのを見ても其貴いといふ事がわかる、且つこれを線となし、これを箔となして細きは蠶の糸のごとく薄きは虻の羽のごとくすることをも出來る、眞に金屬中第一の加工品たる事は其の貴重なる所以であるが、一は其の類、覆載間に極めて少くて之を普通の鑛石から得やうとすれば百貫目の石を粉砕いて溶解して僅かに二三匁の純金を得るに過ぎない、此の如く人力を用する事莫大であるから價の高さは知られる但し近世採金冶工の學が進み、世界金鑛の發見に伴て、產金の額は夥しく、今は新嘉坡の醜業婦すらも黄金を指環にするのを恥づるやうになつた。

黄金の產出の少かつた時代に名古屋の天主閣上に金の鯱を掲げたのは誠に日本一大名の誇りとしたものであらう、況んや平人の分限で金の茶釜を有つてゐたと言はゞ人の驚いたも其筈である。

以上寶の變遷を述べた筆の序に左の一言を添へて置きませう曰く六百年の昔銀の猫を捨てたりとて千載の下其の高風を慕はれし西行の德も、今日にありては尋常の事にして高潔の士にあらずとも又これを捨つるに惜まざるなりと。



婦人裝飾品の原籍

希璞

婦人は、優美を貴ぶゆゑ、裝飾には、甚だ念を入れるものです。裝飾品には種々ありますが、普通ありふれたる物につき、それが如何なる鑛物或は如何なる動植物から製出されるのであるか、又其原品は如何なるもので、如何なる所から產出するか即ち其原籍地の有樣は如何なるものかを一通り知り置いても宜しからうと思ひます。彼の金剛石や綱玉（紅玉、靑玉）綠玉、黃玉の如き、無論裝飾品となるのですが、これらの寶石は、非常に貴重なもので、餘り世間に見えない、又白粉、紅脂、麝香、薔薇水の如きは、化粧品に屬するから、總べて是等の物を省き、たゞ主なる裝飾品についていま婦人方の御參考に供へませう。

◎金

金は、金屬中の王で、貨幣をはじめ、諸々の贅澤品に用ゐます。此金はたゞに美しいのみならず、長く空氣中にさらして置いても錆が出ません、又王水の外他の藥品に遇ふも變色しない。併かも柔かであつて、延展性に富み、展せば一萬分の一ミリメートル（三厘三毛の）薄箔となり、引けば僅か一グラム（二分六厘六毛）の小塊が、一千間以上の線となる等の便益があります。けれども產出することが甚だ尠ないので、價は非常に高く、一匁五圓位です。

日本では文武天皇の二年對馬國をして金鑛を治めしめ、次いで聖武天皇の天平二十一年陸奥國小田郡から黃金を獻じたので、年號を天平感寶元年と改め、其後續々と多くの金を出したので、一時は黃金國と稱せられしこともあつたが、だん〳〵減少して來ました。然し現今でも佐渡の相川の如き、年々少からぬ金を出し、それから陸中の尾去澤、岩代の半田、十和田、羽後の大葛、加賀の金平、但馬の生野、薩摩の芹ケ野、大隅の山ケ野などより金を出し、明治三十六年度には八百三十五貫も產出しました、外國では北米合衆國の西岸

を第一とし、濠洲のビクトリヤ、南阿のトランスバアルなどが有名な産地です。

總べて金屬は、他の金屬と混合して出るのですが、金のみは純金のまゝで出るのが多く、薩摩、大隅、越後などよりは、よく自然金が出ます。俗に之を山金と呼び、古の支那人は、山に生えてる韮の下に金があるといひ、又生金には毒があるが、鷓鴣の肉や金蛇は、よく其毒を消すといつてゐました。

金の一種に砂金といふのがあります。これは金を含んでる石英の塊が、崩壞して河水に落ち、金は分離して砂の中に混り、河の底に沈澱したのであります、けれども砂金の中には、往々二十貫前後の大塊があるといふことです。日本では北海道の夕張川に産し、又臺灣にも産する所がある。

◎銀

銀は、白色の光澤を放つから、一にシロカネと稱へ、金銀とて、金に次ぐべき貴金屬であります。純銀は金よりも堅いけれども、久しく空氣中にさらして置くと錆が出來、又硫黃に觸れると黑色に變じます。しかし延展性に富み、金の如く薄板となり、又細線と爲すことが出來ます。水銀は、銀とは別種類のもので、辰砂といふものからとるのです。

銀は、自然銀として出づること少く、多くは硫銀鑛方鉛鑛、黃銅鑛などゝ爲つて産出します。硫銀鑛は、一名輝銀鑛といひ、銀と硫黃の化合物であつて、大概の銀は此鑛物から取るのです。我邦銀の産地は羽後の院內、但馬の生野、佐渡の相川を最大とし、又陸中の小坂、尾去澤、備中の吉岡、石見の大森、岩代の半田などより産出し、明治三十六年には、一萬五千六百二十七貫餘に達しました。世界では、北米合衆國を第一の産地とし、メキシコにも多く産し、濠洲及び獨逸も産地として世に知られてゐます。

銀は金に比べると、價低く、二十錢の銀貨は、十圓の金貨と同じ位です。けれども價が廉すい上、産出高が多いから、其用は却て金よりも廣く、人類の利益と

なります。

◎水晶

水晶は、婦人の裝飾としては、主に簪の珠や、指輪に用ゐられてゐます。水晶は石英の一種であつて、質極めて堅く、熱に遇ふも溶くることなく、色は無色透明であるから水晶又は水精と書き、古はミヅトルタマ又はコホリイシと稱し、六角形の結晶を爲してるので、一に六方石と呼び、全面に細き横條があります。多くは大小長短の六角柱が、一所に簇生し、大なるものは、長さ二三尺に達し、甲斐の金峰山は最も有名な產地であります。昔は又加賀、大和、信濃、日向などから良品が出ました。

水晶には無色透明なるものゝ外、紫水晶、黒水晶、黃水晶、紅水晶、草入水晶などの種類があります。紫水晶は滿俺を含み、紫色であつて、陸前、磐城、及び伯耆に產します。黒水晶は、一に烟水晶といひ、酸化鐵を含み、黒色或は黒褐色即ち烟色にして、近江及び美濃に產し、草入水晶は、陽起石ともいひ、一種の綠色礦物を含むを以て、草の入りたる如く見えて、世に珍重され、普通の水晶と共に、甲斐の國より產出す。

◎瑪瑙

瑪瑙は、主に簪の珠や緒締として用ゐます。此ものは水晶と同じく、石英の一種でありますが、脆くして、完全なる結晶を爲さないのです。普通紅色の縞を爲して、馬の腦に似てるので、初めは馬瑙と書いたそうです。又白色、黒色、褐色など種々の色あり。渦瑪瑙、竹葉瑪瑙、漿水瑪瑙、筋瑪瑙、苔瑪瑙などの種類があります。往々人物や鳥獸の形を爲してるのがあつて、世に珍重されます。我邦で良質の瑪瑙を產するのは、越中、加賀でありますが、昔は南京產の瑪瑙が持囃されたそうです。玉髓は半透明で、白色、紅色、靑色などあり、瑪瑙と同じ種類で、越中、越後邊から產します。

◎琥珀

琥珀は、古名アカダマといひ。簪の珠や、パイプの吸口に用ゐます。此ものは、大古代に於ける松杉類の樹脂の地中に埋れたるものゝ化石であつて、燒けば燃へて、松脂の如き臭を放ちます。瑪瑙などよりは遙に輕く、濃黃色で透明であるから、甚だ綺麗です。そうして往々大古代の蟲類を包藏してるのがあります。之を蟲入琥珀と呼んで珍重されます。琥珀は、絹布に磨すれば、よく電氣を發して物に吸ひつきます。我邦では、陸中に產しますが、多くは舶來品です。今產地としては、獨逸の海岸が知られてゐる。

◎珊瑚

珊瑚は、主に簪の珠や根掛に用ゐて貴重されます。このものは、珊瑚蟲といふ極めて微小なる動物の骨骼から製えるのです。微小なる動物が何うして、あんな大きな骨骼をつくるかといふに、勿論一匹ではない、何千匹といふ大數の蟲が、炭酸石灰を分泌して、協同的に作りあげるのであります。珊瑚蟲の生きてる內は、骨格は共通の皮膜に被はれて見えないのですが、之を採集して皮膜を剝がし取ると、中から堅い骨格が出るのです。此骨格は數多の枝あつて、恰度植物の樣であるから、昔は珊瑚樹と稱へ、海底に生ずる、植物の一種と思つてゐたのですが、今より二百年前にペイッソネルといふ人が、植物でなくて、下等動物の骨格であることを發見いたしました。で裝飾品に用ゐられるには、十年位を經たもので、珊瑚には桃色珊瑚、紅珊瑚、白珊瑚、黑珊瑚などの種類があります。裝飾品としては、桃色珊瑚が第一で、紅珊瑚之に次ぐ、けれども濃紅色なのは、血玉といつて下品であるそれから白珊瑚や黑珊瑚には價値がない、黑珊瑚は、鐵樹ともいひ、主に床の間の飾りに爲てあります。

紅珊瑚は、我邦では土佐の海に多く、薩摩、肥前の海にも產します。外國では地中海が最も有名な產地で、紅海、波斯灣にも產する。地中海產は、我邦の產より

やゝ小さいが、淡紅色で、白い斑がないので最も貴重されてゐます。珊瑚は磨きて珠になつたのを珊瑚珠といひ、古來七寶の一に數へられ、往々金に五倍するの價を有するのがある。

◎象牙

象牙は種々の用あるけれども、婦人の飾物としては、主に櫛に製えます。此ものは象の牙であります。牙といつても、獅子や虎の牙即ち犬齒と違つて、實は上顎の二門齒の伸びたもので、即ち俗にいふ前齒であります。象には亞細亞象と阿弗利加象との二種で、亞細亞象には、たゞ牡ばかりに長い牙があるが、阿弗利加象には、牡牝共に長い牙を具え、併かも亞細亞象の牙より大きいのです。何でも大きいのは六七尺に達し、重さも十五六貫はある。象牙は種々の用ひ方があるから、世界では年々十萬頭位の象を打殺し、阿弗利加象の如きは、それが爲め、だん／＼種族が減つて來ました。

象牙は、質堅くて色白く、併も文理があつて美しいから、細工物には適してゐます。けれども其質が非常に堅くて、細工するには困難である、隨つて價高かつたが、近頃燐酸を用ゐて柔かにし、細工をしてから水で洗ふと、全く舊の樣に堅くなつて、變質しないことを發見しました。夫故今では譯なく製作することも出來る、隨つて象牙細工物の價は、大に安くなりました。

◎鼈甲

鼈甲は、主に櫛、笄など頭髮の飾物に作り、貴重されてゐます。此ものは瑇瑁といふ海龜の背の甲からとるのです。瑇瑁は蠵龜よりやゝ小さく、熱帶の海に棲み、魚類を食べてゐますが、四本の足が鰭の樣な狀になつてるので、泳ぐのは、なか／＼巧みです。我邦では、琉球、臺灣、小笠原島の海に產し、外國では、アツシエンシヨンといふ島が、最も有名で、年々何千匹といふ程捕獲される。

瑇瑁の背には、十三枚の甲が、瓦をのせた如くに生えかぶり、又其緣に二十五枚の小さい甲が連つてゐま

す。瑇瑁の甲は、所謂鼈甲色で、所々に黒色の斑があつて、綺麗ですけれども、黒色の斑のない方が價値がある。鼈甲を製えるには瑇瑁を殺してから、熱にかけると、甲が剝がれるから、之を取つて熱湯中に浸すと、柔かになる、其柔かになつたとき、多く積ぎ合はせて、種々な裝飾品に作ります。

さて瑇瑁の甲を何故鼈甲、即ち鼈の甲と呼ぶかといふに、舊幕時代に、一時非常に奢侈の風が行はれ、身分不相應の贅澤品を求むるので、幕府は之を矯めやうとして、瑇瑁の甲で製えた贅澤品をば賣せなかつた。けれども商人は利益を得たさに、瑇瑁の甲で作つた本物をば、假りに鼈の甲、即ち鼈甲だといつて、賣り販いてゐたが、其まゝ今日まで鼈甲と言ひ通してしまつたのです。今では、牛馬の爪を燒鏝で伸ばして鼈甲を作るやうになつた。猶鶏卵の蛋白でも造れるやうになつた。

昔支那人等が、可笑なことには、瑇瑁の遺精を鮫がのんで、再び吐き出すと、それが凝つて鼈甲になるのだといつたが、無稽極まる迷說です。それから犀牛の糞で鼈甲の擬物を作ることが出來るといつてた。また古の人は瑇瑁の甲は犀角とゝもに毒を消すに妙だといつたが、果して解毒の効あるや否や甚だ疑はしいものです。

◎眞珠

眞珠は、主に指輪の飾りといたします。此ものは、介類の產出したるものであります。介類の殼と、外套膜の間に、砂粒などが入いると、痛いから、外套膜より頻りに眞珠質を汾泌して其砂粒を被ひ包みます、それがだん／＼積み重つて、珠となります、之が即ち眞珠であつて、キラ／＼と美しい光を放つので、古來貴重の品とされてあります。眞珠質とは何んなものであるかといふに、石決明や淡貝などの內面にピカ／＼と光つてゐるのが眞珠質で、圓く切つてシャツのボタン


櫛
玳瑁
タイマイ
鼈甲
笄
金指環
眞珠
金
珊瑚
珊瑚根掛
紅珊瑚
象牙櫛
象牙
水晶
水晶指環
金剛石
珠母
眞珠
瑪瑙
鼈甲
琥珀
銀結晶
銀指環
寶貝
銀
竹舟

にしたり、或は細く碎いて、漆に混ぜ、塗物とします。

眞珠の出來る介は、第一珠母であります。珠母は蠟貝とも書き、一に眞珠貝といひ、伊勢の海から多く出たので、別に伊勢眞珠とも呼びます。今は肥前、志摩、能登などから出ます。外國では、印度のセイロン島産が、大くて、美しくて、最も良質である。

池や沼にすんでる 蚌からも眞珠が出ます。珠母より出る眞珠に比べると小さいから、小眞珠といひ、英國には、昔から多く産出してるが、古人の説に 蚌が雷の音を聞くと、眞珠を孕むから、之を珠胎といふとあり、又月のあるとき、孕むとしてありますが、いづれも迷信です。

此外、石決明、蛤、淺蜊、厚貝、玉珧、胎貝、牡蠣などからも眞珠が出ます。淺蜊の眞珠は、尾張から多く出たので、一に尾張眞珠と呼びます。厚貝は、珠母に似て殼厚く、良い眞珠を出します、我邦では琉球、臺灣に產しますが少ない。外國では、南洋の、木曜島が、名高い產地。

眞珠は、飾品として古から持囃され、單にタマと稱へ、或は珍珠、具珠、貝珠、白珠など、色々な名があります。概ね粟粒位から豆粒位であるが、嘗て長さ一寸八九分に達したのが、あつたそうです。近頃阿刺比亞から出たのは、長さ二吋、直徑一吋といふ珍品で、當時五萬圓の價があつたといふことです。支那人は、人工眞珠を造ることに長じてゐます、之を造るのは、珠や小さな佛像を珠母の殼と外套膜の間に挿こんで置くと二三年のうちに、眞珠のメッキが出來る。我邦でも、大黒樣の像などが出來てゐます。獨逸では、蚌の一種河貝から、人工的に良い眞珠を造つてゐる。

昔允恭天皇が、淡路島まで獸獵に御出でなさッたとき、漁夫に命じて、石決明を漁り、其殼から大きな眞珠を得、島の神に供へて、多くの獸を獵り獲たといふことです。

教訓十二ヶ月

楓蔭主人

○ほつ〳〵と喰積あらす夫婦かな　嵐雪

舅姑に氣兼もなく、子供の厄介もなく、新婚旅行してまもなき若夫婦。三ヶ日も過ぎ、新年宴會も濟ては、さしあたり外出の要もなく、訪ひ來る人も、と絶えて、今日は元日以來、初めての閑暇。こゝに炬燵櫓のさしむかひ。主人公はコスメチックに髪を固め、鼻下には生やして間もなき髭薄く、丹前姿寛濶なり。細君は日ごろの髪庇やめて始めて結はせたる丸髷姿うつりよし。初刷の新聞紙の一と通り目を通したるのみにて積み重ねおきたるを、うちひろげて二度目の細讀。それも倦み果てゝは、目につく床の間の蓬萊もはや誰も來まじと、主人公先づ手を下して蜜柑一つ摘みたまへば、細君、私もとて串柿を挿みたまふ。二つ取り三つ崩し、蓬萊山は日に痩せて山骨を露はす。かくて軒の松飾りとる頃となれば榧もかち栗も栗も橙も昆布も姿なく、色褪せたる松竹と野老穂俵とのみ、あはれげに殘る。

○憂き事になれて雪間の嫁菜かな　拾女

貧しき家に生れたる悲しさには、だうせ良縁はあるまじと思ひあきらめけるを、資産はしか〳〵なり、婿君の氣立はかやうなり、姑はあれども年老いて家事にはたづさはりたまはずと、よき事づくめなる月下氷人の言に、さやうの御家にふさはしき嫁入ごしらへの及びなければとて、一度はことわりたるを、人をこそ貰へ衣裳の多少は問ふものかはと、いひたまふにぞ、そは願うてもなき良縁ぞと父も母もわれも思ひ定めて、ほんの柳行李一つにて嫁げる此の身。來て見れば世帯は思ひの外に苦しく。姑君はをゝしき氣質、今尚ほ家政を掌りたまへば、萬事は夫の心に任せず。花嫁よとやさしう、もてなされしも夢の間にて、日數經ては氣が利かぬ家風に合はぬとて事々に叱られ、少しいらへの詮れば、不愛想者よと窘めたまひ、はては今更にこ

しらへの少きことをさへ口にしたまふにぞ、人知れず紅涙を絞りしことも幾たび。その上、他へ緣付居たまひし小姑の俄に緣切れて家へ歸りたまひて後は、一しほわれにつらく、有るがなしにいはるゝ悲しさつらさ、いはんかたなけれど、こゝぞ辛抱のしどころぞと、こらへし中に、はや五月の岩田帶、やがて可愛ゆきもの產れては、度胸も据りて、わが境遇もさまでつらしとは思はず。さすがに初孫の愛らしさに、母上も、これまでのやうには我につらからず。小姑も近き中にまた再緣したまふとかや。やがてわが身に降り積れる雪も融けてのどけき春に逢はんかな。

○一かゝへあれど柳は柳かな　千代

草深き田舍に鎌鍬とりて田畝を耕し、泥に塗れて早苗植ゑし手を洗ひて、都會の初奉公。裁ち縫ひのわざには暗ければ、まづさしあたり、飯炊き水仕事、朝早く起き出でゝより終日てん〳〵と立ち働き、坐る間とてはなき運動に、粗食も苦にならず、顏の色紅に、頰はいやが上にも張り出で、尻はさながら臼の如く、膂力飽くまで强ければ、漬物の重し石を扱ふに人の手を煩はさず、時によりては、わるふざけする長松の手を捻ぢあげて、これでもかと、たしなめ、出入の魚屋八百屋よりは梅が谷の尊號を受くれど、落し仕舞の風呂に入りては優に一時間を費し、立ち出でゝは、そと鏡に向ひて薄化粧、小町水の用意もあり。髮も讓樣の眞似して當世風の庇髮。多くもあらぬ給金を積み貯へて一枚二枚の着物をこしらへ、時々柳行李の蓋あけて數の殖ゑゆくを樂しむは、さすがに女なり。やさしくもまた情あり。

○さくら狩子であるかるゝ夫婦かな　其角

花盛りの日曜、天氣もあつらへ向きなり。今日を過してはと滿都家を空しうして出で、上野の公園、隅田の堤、綺羅粉黛の簇がる中に、けふを晴れと盛粧せさせたる愛らしき娘の子の手とりて練りゆく夫婦の、夫は日ごろ窮屈なる洋服姿にひきかへて和服身にゆたかに、鳥打帽子、頭に輕げなり。細君の衣裳また流行に遲れず、恰好よき丸髷には珊瑚の玉紅く。爪はづれ淸

らかなる指頭には金色燦爛たり。花を看んために來れるか、そも〳〵花を看る人を看んために來れるか、否否、花を看る人にわが花の如き少女を看せんがために來れるなるべし。

今は歐米の風とやらんにて夫婦手に手を執りて物見遊山にゆくは珍らしからねど、なほ人の指目を惹き易し、されどそこに子といふ添物あれば、見て可笑しからぬのみか、却てゆかしくも羨まし。



○若竹や雪の重みはまだ知らず　乙由

きのふまで母の袖に縋りて、市松人形よ羽子板よと、むつがりし乙女子も三五の春を迎へては、見かはすまでに背丈も伸びて肩の縫ひ上、いつしか取れ、髪かたち日に日に艶やゝかなり。庇髪にリボンの色濃く、例の海老茶袴着なして學校に通ふさまも、女にさまで學問の要なしとて深閨に琴かきならし、繡窓に衣縫ふさまも、夢に描くは未來の家庭、理想の夫。清らかなる胸に此の世を唯をかしく面白きものよと思ひなせるは、げに是れ雪の重みを知らぬ若竹。かくて其の前途はいかに、苦學の雪のかず〳〵身に降り積る

も、よく之をはねかへして呉竹の色かへぬもあるべき。重さにえ堪へで折れ伏すもあるべし。

○さをとめや泣く子の方へ植ゑてゆく

梅雨始めて霽れ、水は溶々として千町田に滿ちぬ。山も林も倒に影を水面に落し、苗代の早苗伸ぶること幾寸。村は今挿秧に忙し。

猫の手もほしといふ程なれば、乳呑兒かゝへたる身なればとて安閑として家に居るべきにあらねば、人並に手甲脚絆に身を固め、赤襷かひ〴〵しく田に出でゆき、深泥の中に下り立ちて苗植るに、よき畚へ入れて田の畔に置きつる愛兒は、初の程こそ、側に立てたる花車を餘念なく見つめ居つれ、やがて乳索めて泣く聲のひし〳〵とわが胸にこたへて、氣もそゞろ。今暫しよと祈るかひもなく倘ほ絶え入らんばかりに泣きたつるにぞ、せんかたなく列を離れて泣く子の方へ植ゑてゆく。母の慈愛はかゝる忽忙の間にも見ゆ。

○ゆくすゑは誰が肌觸れん紅の花　芭蕉

小學校に幼稚園に、無邪氣に遊び戯るゝ乙女子のみめかたちこそ様々なれ、見渡せば唯是れ一様にやさしき紅の花、ゆくすゑの運命やいかに。あるひは一生を金殿玉樓に中に終ふるもあらん。あるひは賤が伏屋にわびしき生涯を果すもあらん。圓滿なる家庭を造るもあれば、悲慘なる運命に泣くもあらん。佳人或は痴漢と同棲せんも測られず。王昭君は絶世の才色をもちながら胡地に紅涙を灑げり。醜女却て美丈夫に嫁せんも知れず。孟光は伯鸞に嫁せり。げに測り難きは婦女の運命、ゆくすゑ誰に歸せんかは神ならで誰か知るべき。みめよきとて誇るべきかは、醜きとて歎くべきかは。

○負ふた子に髪なぶらるゝ暑さかな　千代

夏は正に中し、暑氣は一日一日と烈し。家人は皆北窓に午睡の夢を貪るに、今を過してはと、蒲團衣類の洗濯糊付に餘念なき世話女房の辛勞はいかに。

そと子供を寢させおきてと思へば、生憎とみに寢付かず。獨り捨ておかんは危險なれば、背に負ひながらの立ち働き、背は一面に汗びたり、それだにうるさき

に、無心の兒は手、動かして亂れ髪をつかみ、叱れど制すれど感じなし。暑さは一しほなり。されど此の汗は滴々皆珠玉。家庭の光明はやがて輝々として此の裏より生ずるならむ。

少女

⊙紅さいて口も忘るゝ清水かな　千代

人は矯飾の動物なり。婦人は殊に然り。家にありては子供を口ぎたなく叱り主人に口答へもしかねまじき女の、人中に出ては挨拶しとやかにちよぼ口しほらしく、蟲も殺さぬ顔なるがあり。お寺の本堂にお説教を聽聞し、殊勝げに珠數つまぐりて随喜の涙をこぼす、老婆も、家へ歸りては嫁をいぢむる言葉は相當に慳貪なり。されば公園の會合、劇場にての見合ひ、矯飾の上にも矯飾したる婦女を一見して、



直に其の可否を斷定するなどは危險此上なかるべし。影濃やかなる夏木立の下、一泓の清水、底見え透きて清らかなるには紅さいた口も忘れて渇を癒やさんとす。婦女の爛熳たる天眞は此の如き瞬間に見るを得べし。されど暑中の外出、暑さをこらへての歸宅に、すぐさま晴着脱ぎすて、姫ごぜのあられもなき湯もじ一つの醜態に氷水めし上るは決して褒むべきことには非ず。

○白菊の眼にたてゝ見る塵もなし　芭蕉

これ芭蕉翁が千代女を頌せし句、千代女は果して此の句に當るべき品格ありしや否やを知らずと雖も人生婦女とならばかくありたし。

一簇の白菊、霜を帶びて開き點塵の侵すを許さず。

何ぞその高潔玲瓏なるや。櫻はあでやかなり、牡丹芍藥ははでなり、海棠の婀娜なる梨花の淡白なる、いづれはあれど、氣品は菊に及ばず、菊の色またさま〴〵なれど白菊ことに勝れたり。

今の世には櫻の如く牡丹芍藥の如く海棠梨花の如くにして、交際場裡の花と謠はるゝ婦人に乏しからず、而して凛然侵すべからざる氣品あること白菊の如くなるは極めて稀なり。

○姑の出たあとぬくき炬燵かな

此の姑は炬燵を出でしのみにはあらで寺參りか何かに他出せるなるべし。嫁の身は何事も遠慮勝ち、霜月師走の寒空に水仕事しては寒さは骨にこたへ手はちぎれんばかりなれば、火よと炬燵へ一とあたりと思はぬにはあらねど、そこは早や姑に占領せられて近よるべきにあらねば、古火鉢の炭團、灰がちなるに、胼胝の手を烘り辛じて煖を取る。けふは珍らしくも姑の外出、旅順は開放せられたれば、鬼の居ぬ間に何とやら、そと手を入れて見れば、さてもほこ〳〵と温きとよ。其温きだけ、夫丈姑の冷さの想ひやられてあはれなり。

○何事もなきを寶ぞ年の暮

事わざしげき世の歳晩は一しほの多事、足を空に馳せまどひて年の瀬を越す算段に四苦八苦するが多きを、何事もなしとは、さりとてはまた天下泰平。掃煤も餅搗も早う濟ませて、家は小ぢんまりと綺麗に、一重ねの鏡餅は既に三寶の上に在り、白襟紋付の禮服とてはなけれど、木綿布子のまだ手を通さぬはあり、あすを待たるゝ寶船とてなけれど、おひめの催促する鬼も來ず。かくて一家恙なく新年を迎ふ。げに前に譽あらんは後に毀りなきにいづれぞ身に樂みあらんよりは心に憂なきを勝れりとす。歳晩の無事、之に增すべき清福あるべきやは。(以上)

四季の花壇

庭園の中に梅塢櫻埒を設け、あるは楓林を造りて、坐ながら春花秋葉を賞するは富貴の人のすなる事にて貧しき身には及びなけれど、何れの家にもあらまほし

きは小花壇なり。

春の花は梅櫻桃梨海棠に限るものかは、一株の草花、半叢の灌木にも春は宿れり、山吹の七重八重に吹けるは、賤が屋にも時ならぬ黄金の色を眺むべく、笑靨花の粉米撒きたらんやうなるは、軒の雀のいかに見るらむ。名さへゆかしき櫻草の丈こそ高からぬ花の姿のさくらに似て愛らしき、鳳仙花の花も葉も楚々として罪なげに生ひ立てる東菊の紅白紫さま〲なる。その他、木瓜、連翹、石楠花、沈丁花、九輪草、母子草など、千紫萬紅、何れの花壇の彩ならざるべき。たんぽゝ、すみれ、れんげ草も、野に限るものかは、植ゑなば庭前の眺ともなるべし。

夏は青葉の時節などいへど、草花の



眺は却て春よりも多し牡丹。芍藥の艶麗なるはいふまでもなく、罌粟の花の紅白咲き揃ひたるは牡丹にも伯仲すべし燕子花の姿清く眼さむるばかりなる。紫陽花の色さま〲に變りゆく。姫百合の思ふさま瓢ろげたる。葵の勢よく伸びてその花の段々に咲き上れる。夏菊の淡白にして嫌味なき、凌霄花の我が物面に籬を占領するなど、皆とり〲に愛すべし。鷺草の瘦せて、しほらしき花着けたる、檜扇の葉の幅、廣くはびこりて花は濟まし顏に咲ける、また捨て難し。香り高き扇子の花は、人の饒舌を警め顏に、末摘花

はゆくする誰が肌觸れんと知れず。酸漿の實の赤くなれるは、娘子の目を惹くべく、絲瓜のぶらりと下りたるは、またなく可笑しき姿なれど、其の水は佳人の肌を美はしくする効ありとか。薔薇の花の艶にして香り高き、朝顔夕顔のやさしきは言ふまでもなし。いづれも皆收めて花壇を飾るに足るべし。秋の初には桔梗、女郎花、撫子、秋棠海は缺くべからず。雁來紅の色鮮かなるに夕日の映じたるはまたなく美し。菊はもとより秋の花王なればいふまでもなし。此の上に萩の三株四株を植ゑんも處せきまでには至らじ。

冬はさすがに花に乏しけれど、水仙福壽草など新年の花として植ゑまほし、山茶花の一もとも缺くべからず。

花壇大ならば、此の外、さま／＼の花木を植ゑ、洋花さへも養はんこと、心のまゝなるべし。たとひ一坪二坪の花壇なりとも、少し心せば、今擧げたる花の幾種も植ゑんことさまでの難事にあらじ。かくて四季をり／＼に目を樂しますが上に、折て御佛に捧げんも、花瓶に挿みて、夫の書齋を飾らんも心のまゝなるべし。もし其の家の子らを此の小植物園の長とせば、自ら草木の名も知り、自然を愛する情も起り、氣品高き人ともならん。之に增すべき家庭の淸福はあらじとぞ思ふ。

淺深紅白宜相間。先後依須次第栽。　歐陽修

拋却故山花事盛。翻來燕市買花看。　王澤弘

日記

日本人は日記を記けるとに餘り重きを置いて居無い傾があります、殊に婦人方の日誌をお記けなさるのは少ない樣に見受けます、偶々女學生などが、學校にてやかましく云はるゝがつらいので、いや／＼ながら筆をとる方もあるが、是れとて永續きは出來ず、直ぐに飽きが來て廢して了ふのが多い、人間の記臆と云ふものには限りが有つて。見たこと聞いたこと乃至は自から行て來たことの、數限りも無い日々の出來事を、剩さず漏さず一々記臆して居るとは迚も出來るものでは無い、さればとて記臆が出來ぬから皆忘れて了ふやうな事では、迚も完全な世渡りは出來ぬから、是非とも日記の力に依りて、主要なる事だけは何時でも繰返へすことの出來る樣にして置かねばなりませぬ、取分けて家庭の本位たる奥樣方には其實行をお勸め申したいのである。

装飾品としての貝子

貝子は、俗に寶貝と書き、別に子安貝と呼びます。此介は、螺、蝸螺、海扇などと同じ類であつて、背が圓くて高く、腹は左右の殼、相接近して中央に細長き縱孔をのこし、殼の緣は、鋸歯の如く缺刻がある。故に歯貝ともいひ、種類頗る多くて百五十種もあり、形小さいけれども往々三四寸に達するのがあり、又中には甚だ美しいのがある。で霞貝子、縮緬貝子、褐色貝子、梨色貝子などは、皆色澤によつて名づけられたのである。

此介は、古代は貨幣として、廣く通用せられたので、寶貝といはれ、秦の世になつてから、金屬の錢に換へたといふことです。又婦人が産褥についた時、此介殼を堅く握つてると、易々と子を産むことが出來るといふので、子安貝と呼ばれ、それから紙を磨つて滑かにするに適するので、紙磨貝ともいはれてゐる。そうして貨幣に代用するのは、たゞに東洋のみならず、阿弗利加西部の土人も貨幣に代用して、年々多額な貝子を輸入してるといふこと。

此貝は、古代の人は曲玉の如く、紐に連らねて、飾物にして貴んでゐましたが、今は野蠻人の外、餘り飾物として貴びません。しかし古代にあつては、寶物或は飾物として、廣く用ゐられた物です。貝子は種類多くて到る所の海に産し、肉は食用となり、殼は小兒の玩物になり、南洋の土人は、今だに此貝を貴んで、帽子の飾りにして居ます。

對話の禁條

人と人との交際は對話によりて始まるものなれば、輕卒を愼み、鄭重を期すべきこと言ふまでもなし、左に對話に就て誡しむべき數々を列記す。

▲長話すべからず。

人の欠伸の種となり陰にて箒を立てらるゝの恐れあり。

▲耳語すべからず。

若しや自己の事を囁くにはあらずやと傍人に疑はるゝ丈が損也。

▲人の談話を聞きながら傍を見るべからず。先方の感情を害すること尠からず。

▲他人同士の談話に口出すべからず。

人の話の腰を折るゆゑ先方の癇癪に觸るものなり。

▲諧謔も時としては座客を悦ばしむるものなれども下品の駄洒落を屢々吐く時は、藝娼妓輩と同一視せらるゝ憂あり。

▲問はれもせぬ我身の自慢話、又は親類の有福なる事、父兄の手柄話などを語るべからず。

智慧の淺きが人に知れるものである。

▲人の歡心を買はんとて法圖もなき御世辭を言ふ可からず。

心の中を忖度さるゝ虞れあり。

▲己が話を人の聞かざるをもどかしく思ひ、手首などを捉へて迫るべからず。

何も喧嘩腰で聞いて貰はずともよし。

▲野鄙の言葉を用ひて人を惡口すべからず。

西洋の俚諺に曰く惡口は己を惡口すと、却て己の人品が下るものなり。

▲事に托して人を諷刺すべからず、人過あらば面責せよ。

面責すること能はざる者は意久地無しの卑怯
者也。

▲話出さんとする時は先づ列座の人を見渡すべし、
人にありては話の模様の當り障りとなることあり

▲三人言へば吾が師あり、よく意を用ひて聽くべし

▲人と對話する時は必ず其人の面を見よ。
俯けば罪を謝するが如く、仰けば横柄に見え
る。

▲人の密事を語るべからず。
是は君にばかり極内で御話し申すのだといふ
のが、甲より乙へと傳はり、竟に其人の迷惑
となることあり。

▲早口に語るべからず。
是れ先方に聞取り難ければなり。

▲高聲にて話す勿れ。
人が喧嘩かと思ひ、肝を潰すものなり。

▲餘りに低聲なること勿れ。
人の耳に入りがたく且つ秘密を語らうかの疑
を來す。

▲同じ事を段落なしに續けて語るべからず。
人に嫌はるべし、婦人には殊に此の癖あり。

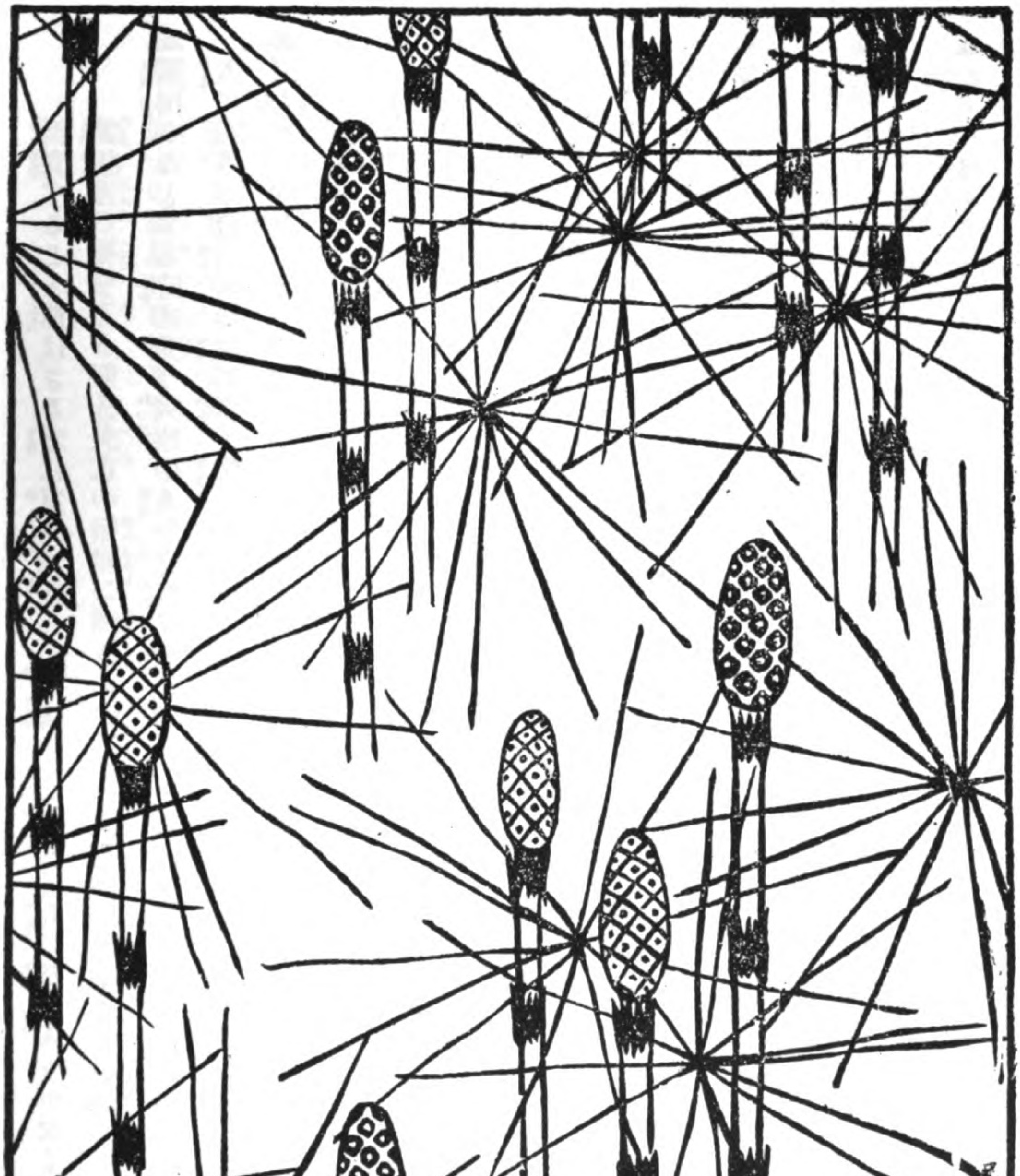
▲人の話を辯駁するには、故と温和なる言語を用ゆ
べし。
面色も亦不快なること勿れ。

▲人と語るに己の學識を衒ふべからず。
物識顔の口の利き様は徒らに生意氣の譏を買
ふのみなり。

▲人の揚足を取るべからず、
人に憎まる。

▲爭論はつとめて之を避け、對手の言葉愈々劇から
ば、此方の言語は益々温和なるべし。

▲目上に對して口返答すべからず、又下人に對して
は口を尖らすべからず。(舟人)



清俗 深閨婦人

盍簪子



日本人から想像して清國の貴婦人といへば唯深閨の裡に閉ぢこもつて足一歩も外へ出ないものと思つて居る方もありますが、中々そうではありません、矢張りあちらの貴婦人は歐洲の交際社會などゝ同じく訪問を以て一つ仕事として居るのであります、清國貴婦人の訪問をする樣は實に大した儀式なもので恰どむかしのお大名然たるもので、ズラリと行列をして行くのである、今時日本などでは迚も見る事は出來ません、一體清國は虚禮が盛んに行はる國ですから一寸誰々さんのお宅へお訪ねしやうと言ふにも、矢張行列を整へて儀式正しくするので、先づその順序を申しますと、馬に乘つた從者が一人先驅となり、それが婦人の名刺を持つて參り、其次に主人が馬車に乘つて行きます、馬車といつても日本の大八車のやうなものに輿を載せた按排式でその輿の四方を布で圍つてありますから勿論外からは少しも見えませぬ、そして侍女が御者臺の後に乘つて居ます、そして其の車は決して急がず、そろりそろりとねつて行くのであります。

　さて訪問を致しますと、先方は如何なる按排に應接するかと申すに、勿論來客と主人との間の應對や、待遇の樣子は大分日本と違ひます、これは清國の家の構

造が全然日本と違ふのでありますから自然そうでもありませう。清國の上流社會は大概其家に三重の門があります、先驅の者が第一門を這入つてそこへ名刺を渡しますと先方の從者が二人こゝに居てそれを受取つて恭しく來客を迎へ入れて第二門へ案内をする、第二門では更らに又二人の侍女が居て第三門まで案内をします、此所で先方の主人が自身に出迎へて應接所に案内するといふ工合です、勿論侍女や從者も主人と共に應接間に參りますから應接所の内には双方の侍女や從者で中々多人數になり、自然種々なる事を囁き合ふて中々うるさく服裝の批評なども出るわけです。

次に室内の模様はどうかと申すに、裝飾などは中々立派なもので器物に金銀珠玉を用ひてあるものが多い實に驚くばかりで厶います、室内には必らず姿見鏡が備へてあり床には書畫の幅が懸てあり、如意のやうなものが正面に整然と飾られてあります、又窓側の裝飾には紫や赤や青や色々な珠玉をちりばめて中々趣向を凝した器物があつて、椅子、卓などは皆高價なる唐木製の物ばかり其他客に出す茶道具なども實に精巧なる物ばかりで、すべて是等の裝飾や配合は皆婦人の意匠注意に成つたもので清國の婦人は一體に細い事に注意力が強いと申してよいでせう。

さて又庭園の模様を見まするに清國は日本と違つて庭園の趣が餘程單純です、たとへば日本ならば狹い區域の内に池があるとか、築山があるとか、樹木の植込の工合など中々工風がしてありますけれども清國のそれは至つて單調なもので、廣い庭園内に草花などが植てあつてもたゞ繁り放題にしてあまり手は入れてない様です、草花は季節々々でいろ〳〵ありますが菊の花など殊に賞翫されるやうです、又親王、王族などの邸には立派な庭園があつて巨大な岩なぞを用ひて作られてあります。

又清國では盆栽類も隨分珍重致します、これは支那燒の立派な鉢などに植ゑて庭前に數多く並べるといふ風で隨つて種々なる草花が流行して居る樣でありますそして此の盆栽は室内裝飾品の一となつて居ます、又

邸宅の後ろには大概野菜畠が作つてあります。

一體淸國は禮儀の國ですから作法がなか／＼むづかしいのです、一例を申しますとお茶を喫みますに淸國の茶碗は總て蓋附で飲むには左の手で茶卓を受け右の食指で蓋を押へ兩手でさし上げて口に取るのです、そしてこのお茶を飲む時は歸る時に限るのでムいます、今日上流社會一般お茶の飲み方は大概これで僅かに二三の親王家で西洋風に珈琲などを出さるゝのは例外の事でムいます。



かるたとり

「秋の山の後を云ふ間もあらばこそ、讀み手も上手、取り手も巧み、暫し入り亂れての合戰………歸つて臥床に入り、脫衣の折、不思議や一通の―　妾は其儘燒き捨てたれど……男子の方失敬な行爲をなさいますワ（波多野松枝）

支那風俗　玉輿記事

翠柳

結婚は世界各國いづれも一生の大禮、大儀として文明、野蠻共にそれそれ盛んなる儀式を行ふのであるがわけても支那人は結婚を以て眞に人生の大義となし人間生活中の最第一の祝義として之を見るのである隨つて其の式の重々しき其の費用の大なる日本人の想像の外である、そこで結婚に就ては無論兩親の選擇が大部を占めてゐるが、間々當人同志で選擇する事もある、いづれにしても彼女ならば

生涯我が半身として恥かしからぬものと決定し、兩親にても彼の娘なれば倅の妻として適當であると思ふ女を見定めし上百方手を盡して、其娘の血統、家柄、性質品行を探索して、大丈夫と思へば媒介人を賴み、正式に談判して申込を爲し、結納を送るのである、すると娘の方では承諾の驗に二羽の雁を返禮する習慣である、何故に雁を以て返禮するかと云へば、之には中々意味がある、一體雁といふ鳥は奇妙な鳥で、何時も群を爲して遊ぶにも拘はらず、一旦雄鳥が死ぬると、其雌鳥は決して他の鳥とは遊ばない、そこで吾々の娘も雁と等しく良人を失つても必ず貞節を守つて、再婚するやうな不面目な事は致さないとの意を示したものである

そこで雙方の結納が濟むと婿の方では吉日を撰んで婚禮の式を擧げる準備をするのである、そして此の吉日、凶日に就ては支那には又た奇妙な習慣があつて、其の迷信は專ら暦によつて支配される即ち支那の暦を見ると、今日は吉日であるか、凶日であるかゞ直に分かるやうになつてゐる、これは日ばかりでなく又た月にも吉凶があつて、普通三月と九月が吉月になつてゐる、それ故この月の吉日には、彼處にも此處にも矢鱈と澤山に式が行はれるのである。

そこで段々と目出度い日が近か寄つて來ると婿の方では宴會の準備に取り懸る、嫁の方では衣服調度其他萬般の裝飾品、手廻物の購入を始める、さて其の嫁入仕度といふのは、如何なものかといふに、これは日本の嫁入仕度よりも、一層御念の入つたもので、四季折り折りの衣服は勿論の事、夜具、髮飾りの品、靴、傘或は便器、唾壺といふやうなものまで苟も女の生活に必要なものは悉く携へなければならないのである、であるから此の仕度には隨分と莫大の費用を要するが、一生一度の大禮故、決してそれを惜まず、貴賤貧富の別こそあれ、凡て身分不相應（支那ではこれが相應として）の品物を購ふの習慣である、一例をいへば日本で宮內省の判任官位な格で、年俸僅かに二百テール位に過ぎない、地位に在る所ろの人の娘の結婚に六百テール（日本の八百圓）を費したといふやうなのがある之

れは畢竟支那人固有の性質、氣風に基くもので、持參の荷物の多い嫁でなくては肩が狹く、幅が利かないのである。

次に婿の方の準備はどうかといふに、種々ある内に先づ天盤といふものを作るのが最も必要であるこの天盤といふものは、一體何物かといふと高い四本柱を立てゝ其周圍にアンペラで以て張りツメたものであるまづ日覆のやうなものであるそして其大さは家の中庭の廣狹に依りて種々の差はおるが、其の目的は畢竟野外に宴會を開く天幕である、御存じの通り支那の普通の室は狹くて、トテモ多人數の宴會に不便である、そこで結婚の當日は此の天盤内に數個の食卓を列べて例の豚の丸蒸、鴨の丸揚



紹興酒、魚の天麩羅、豚の吸物、羊の羹、海月の膾など所謂酒地肉林を築くのである。

そこで愈々結婚式の當日となると、媒酌人を始め、近親、朋友の或者が早朝から禮服を着用して、嫁の里へ參つて、萬般の打合せをする婿の方からは、迎への使者が參る、此の使者は勿論婦人で、通例婿の縁戚から選ぶのを例としてある、迎へが參ると、間も無く嫁入の行列は繰出されるので、支那人は行列的人種で、行列を盛んにやるのを富貴としてゐる、そこで嫁入の際にもなるべくその行列を盛大にして一家一門の富有を誇るの風俗であるが、これが又中々奇觀である、如何なる下等社會の嫁入の行列でも二三十人の列を見るのであるがこの行列は大抵乞食であるといふに至つては頗る奇態である。

何處の市街にも、葬具屋、婚具屋といふものがあつて此處へ申込むと幾人にても乞食人足を集めて、之れに黑色の着物を纏はせ、太皷や笛や笙や又は至極目出度い詞を記したる制札のやうなものを持たせて注文主の處へ繰出すのである、一體此の乞食行列なるものは結婚に限らず、葬式の時でも進士及第の時でも、また目出度い時、不吉な時、何時でも、同じ様に乞食行列である、が只異つた處は制札の文字が吉、凶、祝不祝によつて異るのである、行列の順序は制札持が幾人となく先きに進み、次に笛、太皷、笙を吹き鳴らして隨ひ其の後に瑞の輿が六人乃至八人にて舁がれて參る此の瑞の輿は日本の神輿同樣で周圍は實に金銀珠玉で鏤め美々しいものである其の輿につゞいて馬車が幾十輛此の内には親戚知己が其行を盛にせん爲めに附添ふて參る、其の後に荷物の行列があつて、簞笥、長持、鏡臺、痰壺、机、傘の用具を人夫に擔はして參るのである。

間も無く行列は婿の家に達する、此時豫て準備して置いた爆竹が一時に破裂してパチ〳〵の音を發する歡迎の意はこの如き不意の爆聲によつて表さるゝのである其音は實に壯快なもので、門前宛然一齊射擊を爲す様な心地がする、行列の賑やかしとなつた乞食共は此

處で暇を貰つて各々、太皷、笛、笙、銅羅の類を携へて退散する殘るは新嫁の瑤の輿と親族の馬車、瑤の輿は嫁の乘つて居る儘で門内へ舁ぎ入れて、結婚式の行はれる部屋の外まで運ばれるのである、輿の中なる新婦は美人か、醜婦か、賢婦か、愚婦か、今しも輿の内より出で來らんとする一刹那、新郎は支那固有の禮服華々しく弓矢を取つて部屋の入口迄走り寄り、弦を滿月の如くに引きしぼり乾の方角に向つて三本の矢を放つのである、之れ新婦と共に惡魔の入るを防ぐの意を示したものであるそうな。

媒酌人に導かれて新婦は設けの席に就けば、新郎も



亦た其の席に就く、此の時、酌人饅頭を半分に割りて一半を新郎に與へ、殘る一半を新婦に與へ、聲高からかにシオウブシオウと尋ねると、孰れもシオウと答へる、其の意は饅頭の生か生でないかを尋ねるのであるがこれは後日生兒を得べしとの緣起を示したものである、これが濟むと媒酌人は暫く室外に退出する殘るは、對向ひの新郎新婦、四海波穩やかに收まるのである暫くして媒酌人は再び室内に入り、新郎新婦を導きて天盤の處に出で來り、今や酒宴を開かんとする親戚朋友知己に紹介すると同時に懐中より白紙に紅を塗つたものを出して、新婦の處女であることを證明し、新郎新

婿の爲めに萬歳を祝し、來客一同歡をつくして酒宴を開き、酒地肉林、弦歌舞踏曉に徹するまで宴燕するのである。

村俗

婚禮の贈物

林天然

結婚は、子孫繁榮の基礎で、家庭に於ける幸不幸の分るゝ所であるから、最も大切なることであります。平常無頓着な人でも、結婚には、能く注意して、相性だの、日取りなどについて隨分氣を採みます。また結婚の式は人間一代の大盛典であるから、婚禮に用ゐるものは、成るべく芽出度ものをとり、殊に贈物などは緣起のよい物ばかりを選みます。貴族社會では、種々芽出度物品を釣臺に載せて、遣り取りをいたしますが中流以下のものは、大抵形式に止まります。勿論都會と田舍では、贈物に多少異るところもあらうが、多くは左の書式の如き目錄をつくり、物品に添へて交換いたします。

目錄

一家内喜多留　一對
一嘉滿壽　一荷
一勝男婦志　一連
一友志良賀　一束
一壽留女　一連
一袴（或は帶）　一
一末廣　一對

右之通幾久敷御祝納被下度候也

○○郡○○村○○　何某

年月日

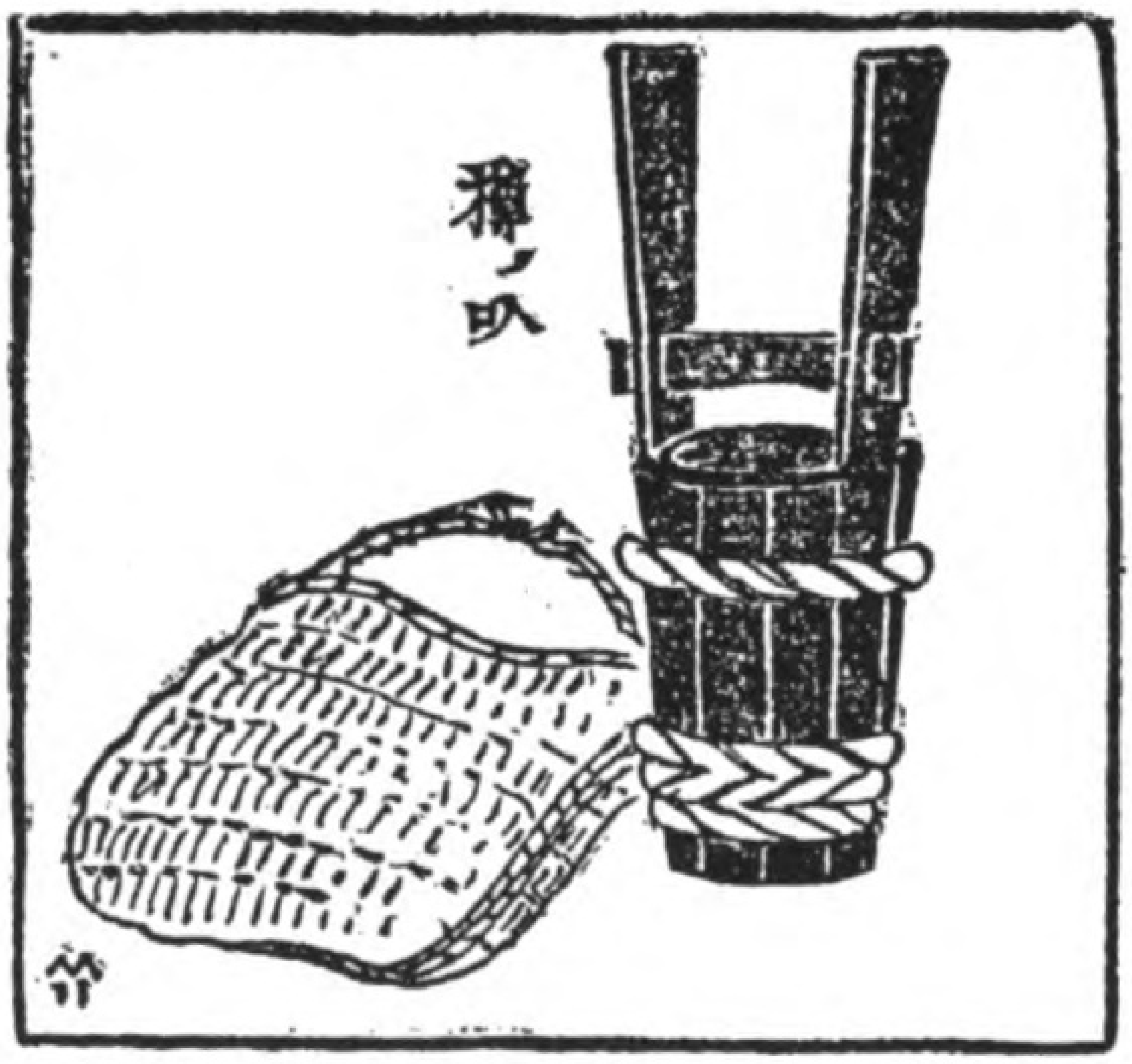
何某殿

○○郡○○村○○

以上示したる如く、いづれも芽出度物ばかりであります。凡そ世の中に牽强附會の文字あれども、婚禮に用ゐる文字程、妙にこじ附けた文字はありますまい。

何にしろ一代の盛典であるから、緣起のよい上にも緣起よかれかしと希ふので、氣が濟めば、それが何より芽出度のです。いざこれから其芽出度贈物につき、簡單なる說明を試みましやう。

▲家內喜多留。これは柳樽のことで、酒は神事或は禮式に用ゐる飮物であるから、婚禮に贈るのは、まことに當然のことであります。併かも家內來多留は、家內來たるとも讀まれ、俗間妻のことを家內と呼ぶゆゑ、妻來たるの意義となり、婚禮には、至極適當してゐます。殊に喜多留の如き、悉く祝辭の文字であります。抑も柳樽とは、古代柳の樹にて造りたる酒樽にて、祝儀に用ゐるのは、殊に柄を支へる兩角を長くするので、別に角樽又は柄樽といひ、非常に太いタガを箝め、上部を赤色に下部を黑色に塗り、何となく裝飾的器具に見えます。



▲嘉滿壽。これは席囊即ち叺のことで、藁蓆で製らえた袋であります。叺は農家では、種々の收獲物を入れ置くに用ゐ、なか／＼便利な道具です。嘉もよければ滿もよい壽も又よくて、文字の上に於ては充分である。夫故婚禮には、此內に百穀の王たる米を入れて贈物にいたします。

▲勝男婦志。これは鰹節のことで、日常缺くべからざる食品であります、正月に搗栗（勝栗の意）を食べると同じく、總べて祝賀の時には、勝利即ち勝といふことを貴ぶゆゑ、婚禮に用ゐられ、殊に勝男に婦志とは、まことによい配合です。

▲友志良賀。これは白髮麻とも書き、年老ひて白髮の生えるまで長生をしたい。所謂偕老の意義で、俗謡の

「お前百まで、わしや九十九まで共に白髪の生ゑるまで」の心情を表はすには、至極宜しい。通例友志良賀として、白色の麻を用ゐます。

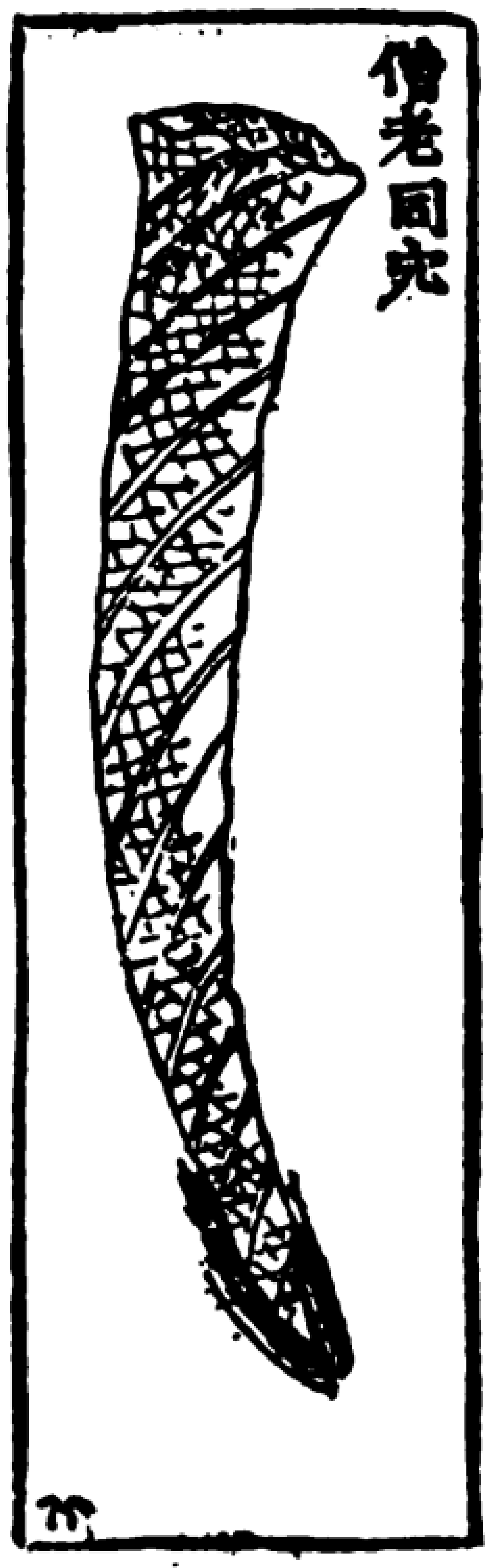
▲壽留女。これは鯣のことで、烏賊の肉を開いて乾しあげたることは、何人も知つてゐます。壽留女とは、字々皆婚禮にかなつた名稱であります。

▲袴或は帯。これは何づれも男女の禮服には必要なものでありますから、婚禮には女の方から袴を、男の方から帯を贈ることに爲てゐるのです。然し袴も帯も自分で注文したでなければ、何うも具合ひがわるい。夫故通例代價を封入し、袴料或は帯料として、遣り取いたしてゐます。

▲末廣。これは扇のことで、壽惠廣とも書きます。扇は禮式に用ゐる器物で、開くと末の方が廣くなりますから一にスヱヒロガリとも稱え、結婚後は、長しへに榮えに榮えんことを希ふ人情としては、適當な贈物であります。

右の外熨斗、安樂満喜、子生男婦などを贈物にするものもあります。

▲熨斗。熨斗は熨斗鮑のことで、これは鮑の肉をカンペウの如く、薄く細長く剝きて乾したるものです。傳ふる所によれば、我國古代にあつては、肉食の風大に行はれ、贈物には、多くは鳥類とか、魚類とかを用ゐ



偕老同穴

ました。けれども若し肉類以外の物を贈るには、鳥の羽を添へて、肴の代品であるとの意を表はしましたが其後細長く剝いた鮑、即ち熨斗鮑を添へて、肴の代品といふことを表したのです。所で其後何物にも此熨斗を附けるが、獨り肴類には用ゐない、それは其筈、熨斗は肉類の代りといふことであるから、若し肴類に熨斗を附けると、全く重複になるのです。現今では平常の贈物には、紙で折つたノシを添へます。然し丁寧に

すれば、紙で折つたものゝ中央に、熨斗鮑を挿して置きます。此紙製のノシ。。は、神代の人を形どつたといふ說です。又紙ノシを略して、たゞのし●●と記るし、間に合はせる場合も多くあります。

▲安樂滿喜。安良滿喜とも書き、苞苴のことで、蘆や細竹などで、魚類を卷き、贈物にするので、アラマキは粗卷の意義なりといふことです。附會とはいひながら、いづれも芽出度文字です。

▲子生男婦。來有婦とも書き、昆布のことで。昆布は通例コブ。。と略していひ、喜ぶのコブに通じてるから、萬事喜ぶことのあるやうにとて、祝賀の時には、よく用ゐられます。

抑も人類社會に行はるゝ禮式には、場所により多少の差異あり、又時代により變更するものであつて、絕對的に舊式を守るの要はないから、時々改良しても宜しいのです。今日婚禮には、多くは形式に止まり、贈物の如きも目錄のみ交換し、たゞ樽代や袴代及び帶代のみ、遣り取りしてゐます。

近頃生物學者間では、知人の中に婚禮があると、紀念として、よく偕老同穴と呼べる海綿の一種を贈ります。此海綿は圓筒形にして、大なるものは三尺以上に達し、無色透明で甚だ綺麗であります。西洋では、愛の神樣の玩ぶ花籠と稱へてゐるそうです。奇妙なことには、此長籠の如き洞內に、小さき一種の蝦が、而かも雌雄二匹が必ず雙棲してるので、偕老の契を結べるものとみなし、偕老同穴と名づけ、世界にては、僅か比利賓群島の近海に產し、我邦では相摸及び長門の海に產するので、動物學上有名であります。斯の如き贈物こそ紀念として眞に價値あるものであります。

▲祝酒　霙酒

これは精白米一升をよく洗ひ強く蒸して莚の上に擴げ、よく冷し、一粒ならべにしてこれを太陽に晒して乾しあげ再び洗ひて又乾しあげ、斯の如くすること大凡五回にして粗き篩にかけ、上味淋一升を瓶の類に納め、堅く封じて置くこと二週間にして製造成る、婦人客などに出して上品なるものなるが、地方によりてはこれを祝酒に用ふる處もありき。

子供の命名

雀の舍

去年は丙午の年であつて、くだらぬ俗說があるから、子の出生に就いて人知れず苦心なされた親達もあつたらうと思ひますが、今年はそんな心配も懸念もなく、元日早々初鶏の聲と共に呱々の產聲を聞いて祝うて居らるゝ人が多いでせう。凡そ始めて出來たものに名を附けるといふことは、むつかしいもので、軍艦はいふまでもなく、一つの商店を開くのでも、料理屋待合を初めるのでも、成るべく人の耳に入り易くて、氣がきいて、そして緣起のよい名を附けやうと思ふのが人情でちよつと新聞紙の廣告を見ても、新刊書、發明品、藥品、化粧品などの命名に、世人が多大の注意を拂うて居ることが知れます。まして可愛い我が子が出來たとあつては、その命名といふことは親の身に取つて當面の大問題であらうと思ひます。されば昔しから支那でも日本でも命名の說を學者に書いてもらつたり、また知名の士に頼んで名付親になつてもらつたり、大層念を入れた人々もある位です。歐米諸國の事は詳しく知りませんが、その命名も決して無意味ではありますまい。既に無意味でないとして見ると、其の子に名を命ずる親の心を分析して見たならば、定めて面白いことだらうと考へます。

△名の撰みに就いて

或は其の子の長命を祈る心より、或は其の子の才智品性の人に勝れんことを希望する心より、其の他、出生の場所年月干支などより取るものもあらうし、其の時の出來事例へば戰爭のある時なれば勇ましい名を付けるといふやうなのもあらうし、又無雜作に太郎二郎などの其の順番によるのもありませう。それも子澤山な家では、さう／＼子の生れるたびに命名に心を碎く餘裕もないでせうが、新郎新婦の間に始めて可愛らしいのが出來た時、否、出來ぬ前から、男の子ならば何とせう、女の子ならば何とせうなどゝ寢物語に研究して居らるゝのも少くはあるまいと思ひます。だうで御座いませうか。さて月滿ちて、いよ／＼玉のやうなのが出來たところで、昔しは母親が命名する習慣もあつたさうですが、今ではだうして／＼親御だけの意見で定めることが出來ませぬ。第一に初孫の顏を見て喜んで居らるゝお祖父さんやお祖母さんの意見も採用せればならず、時によりては、有力なる伯母さんや小姑が口を挿むこともあらう。さて德造や善吉が、生長の後、不德不善の事をせぬにも限らず、お貞お操が、不貞操な女となるかも知れず。才吉、賢太郎と附けて置いて、それが馬鹿であつたら何とするかなどゝ考へて見ると、品性才智の上から附けるのは險呑千萬である。さりとて權兵衞、太郎兵衞、伊左衞門、助六、忠兵衞、長右衞門、乃至おかる、おいし、おはつでもあるまいし、何とか當世向きの氣のきいた名を附けてやりたい。隆盛、利通、博文、歌子、愛子、俊子これはおさしつかへだ。長吉は丁稚らしく、番六は番頭らしく、富市龜市は按摩らしく、お松お梅は下婢らしい。其

の上、親子の關係も考へればならぬ。親が愛吉で、子が太郎兵衞、源太左衞門も何だか異樣である。

△苦心慘憺

近頃はまた女の子の名に無暗に何子何子と附けることが流行するが、竹の子、きの子、たま子、數野子、何だか八百屋の棚おろし同樣である、愛野子、龜野子、みつ子、もとの子、鐵子などに至つては、尙更抱腹絶倒だ一層度外れて變つた名を附けやうなど丶苦心慘憺の餘り、考へついた名を幾つも紙片へ書いて、之を丸めて盆に乘せ、無邪氣な子供に其の一つを摘み取らせて、それでやつと確定するなどといふのもあらうと思ひます。妙なもので彌次郎といへば、直に膝栗毛を聯想し、權兵衞といへば直に種蒔きを思ひ浮べますから、今時さういふ名を可愛いお子さんに附る人もありますまいが、さて考へて御覽なさい。品川彌次郎、山本權兵衞、人は決して可笑しく思はないでせう。象次郎といへば餘り優美な名でもないが、後藤象次郎、何と立派ではありませんか。平八郎といふ名は東郷大將によつて大層價打が上つて世界に響き渡つて居るではありませんか、吉之助でも、隆盛でも、俊助でも、博文でも、狂介でも有朋でも、岡太でも、馨でも、名に由つて其の人の品性功業に高下を生ずるものでないのですから、名は畢竟、其の人の符牒で、どうでもよいのですが、さてさうはゆかぬ、成るべく佳名を附けて遣りたいのが親の情であつて、犬や猫の名を附けるやうに無雜作にはできないので苦心するのであります。

△事故に因める名

私の名は錬之介といふのですが、これは無論、「雄辯雄斷は男子の胖といふところから附けたのでせうが、講談詼談落語などで、ちき錬公が顔を出すものですから、時によりては赤面することがあります。又學生時代に、私が理化學室で、今の高師の生駒氏と兩人で、何か實驗をやつて居たが、瓦斯の爆破のために私は前額を試驗管の破片で傷けました。それで同學生が、私に「向ふ傷の錬」なんて綽號を附けました。私に今審學士になつて北海道に居る弟と、他へ嫁して子供の三人もある妹とがありますが、これが雙兒であつたので、親父は構はぬ氣質ですから、大層之を祝して男を勉藏、女をお勵と附けました。隨分類の少ない名でせう。

昔は隨分思ひ切つて奇名を附けた人があつたと見えて、一二三四五六、八萬九千九萬太、七里鎌倉兵衞などゝいふ名か、德川時代の各藩士の奇名番附に載せてあつたのを記憶して居ります。

△變つた名前

現に私の知つて居る人にも百々百兒、岸健藏之進といふのがあります。二人とも伊賀上野の士族ですが、此の岸といふ人に就て一場の奇談があります。明治三十年頃でしたか、攝河泉の平野で、陸軍の大演習がありました。其の時、今の近衞師團長陸軍大將大島久直氏が、第三師團の旅團長であつて、その演習に參加の途次、伊賀の上野町で一泊せられました。ところが將軍は宿舍の主人を呼んで、此の土地に岸健藏之進といふ士族があるはずだが、今も達者なら面會したいがといはれる。主

人は小首を傾けて、士族の中に岸弘、岸嘉耶といふ人はあるが鐵藏之進などいふ珍らしい名の人はないといふ。それでも、だうしてまた改名したかも知れぬから、ぜひ一つ搜索してくれと、氏が切に頼まれるものですから、主人はいろ〳〵と聞き合して見たところが果して有る。當時第八十三銀行の支配人をして居る岸弘氏は、もと鐵藏之進と稱したことが知れた。此の事を報告すると大島將軍は非常の悦びで、直に副官某に命じ車で岸氏を迎へにやつた。さあ岸氏は旅團長からの急用と聞いて不審が晴れない。何の用かと聞いて見ると、副官は仔細は知らぬが唯急いでお迎ひ申して來いとの命であつたといふ。それでは何か軍隊の經理上の用談だらうと思つて、大島將軍の宿舍へいつて見た處が、將軍は鄭重に出迎へられて、いざこれへと奥座敷へ案内して將軍上座に請じて。岸氏はます〳〵疑が晴れぬ。夢ではないかと思ひながらも座に就いたが、將軍は下座に兩手をついて、恭しく一禮して久濶を敍し、さていはるゝやう、私も全く先生のお蔭で陸軍に志し、終に今日の地位にまで昇進しました。天緣未だ盡きず、今日御尊顏を拜することを得て、此上もない喜であると挨拶せらる。岸氏は大に狼狽して、そは人違ひに非ずやといふに、決して人違ひではないので。よく〳〵聞いて見れば陸軍少將大島久直こそは、岸氏が藤堂藩氏として嘗て會津の戰に從軍した時、始めて圖式の調練を教へてやつた十五歳の美少年秋田藩の大島何太郎であつたさうです。さあそれから大層な御馳走をして、少將自ら周旋して酒を勸められたので、岸氏も舊審の情に堪へず、此の夜は終に兩人共に飲み明したさうです。大島將軍が舊恩を忘れずして舊師を禮遇せられたのは誠に感ずべき事ですが、鐵藏之進といふ名はつれて、なかしき名が永く少將の腦底に刻まれてあつたればこそ、此の奇遇を媒介したのでせう。

△畫の多き名前

右は奇名のために不思議の對面をした話ですが、我が名のあまりむつかしいために、失敗したのは、第何期かの三重縣選出の代議士であつた深山氏です。氏の名は[illegible]といひますが、これには誰でも辟易するのです、皆さん讀めますか。これは「メカツラ」と讀むので、千代萩か何かにありさうな名です。ところが選擧、競爭の時、此の字畫の多い名を有權者に數へるのに、どれほど苦心したか知れなかつたさうです。氏はこれに懲りて、其の後、平易も平易、一（ヘウメ）といふ名に改められたのは、なんと可笑しい話ではありませんか。つまり餘り異つた名や、むつかしい名は、今の世には不便であらうと考へます。

前に申しました通り、私の名は鐵で、安すぼく呼び捨てにしられるのが面白くないので、私は長男を擧げました時に愼一と名づけて、そして鹿爪らしく、こんな命名說を書きました。

△愼一の說

明治二十六年の秋、われ初めて一男を擧げ、名を愼一と命じぬ。時にわれ京都に客寓し、赤貧洗ふが如くなりければ、疎宴を張りて親戚を集ることは思ひもよらず。濁酒枯魚、聊か命名の式を擧げ、兒を懷きて之に告げて曰く。汝この世に生れ日光を仰ぎてより僅に數日。口固より言

ふこと能はず、眼も亦視ること能はず。蠢々として動き呱々として啼くのみ。されど一寸の蟲にも五分の魂ありと聞く。汝若し知覺だにあらば、よく乃父の言を聽け。乃父今年、齡方に二十有六若し人壽を五十とせば旣に其の中を過ぎつるなり。さるに碌々無狀、一も成就せし事業とてはなく、文を賣りて口を糊し、營々として日の力を竊むれども、なほ回や屢空しの歎あることを免れず。指を屈して舊友を數ふれば、業成り志遂げ、世に時めく者も多きに、われ獨り零落せること此の如く、今汝の命名を祝するにも亦蕭條たること此の如し。われ舊友に對して面目なきのみならず、汝に對しても愧づる所多し。嗚呼是れ天性の魯鈍なるに由るか。學問の乏しきに由るか。はたまた機會に遭遇せざるに由るか。否々。われの業進するを能はざるは、十年來の操行に愼の一字を缺きたるを以てのみ。飲酒を愼まず、故に鯨飲引大醉以て胸中の磊落に注ぎ、終に頽然として醉ひ、前後を知らざることありき。言語を愼まず。故に屡々興に乘じて舌を鼓し、情に激せられて辯を愛し。爲めに禍を招き怨を買ひしこと多かりき。交際を愼まず。故に淸濁を辨ぜず、妍醜を別たずして人に交り、或は身にも應ぜぬ義俠心を起して人を救ひ、却て一身の累を招きしことありき。經濟を愼まず。故に入る者は以て出づる者を支ふるに足らず、膝を容るべきだけの陋屋に住み、身を蔽ふだけの敝衣を纏ひ、食に魚なく出づるに車なく、尙且つ米櫃時に空しく債鬼門に逼ることあり。攝生を愼まず。故に三たび大患に罹り再び死に瀕し、肌膚光澤なく、髓肉日に減じ意氣銷沈して復た昔日の活氣なし。嗚呼人間萬事愼めば成り愼まざれば敗る。愼の一字は實に處世の要訣、生涯の靈符といふべし。われ今汝に命ずるに愼一の二字を以てせしは、蓋し汝をして乃父の覆轍を履まざらしめんための老婆心なり。汝其れよく之を心に銘せよ。



△行末を考へてつけし名前

昔し馬援といへる人、兄の子を戒めて曰ひき、伯高に倣ひて得ずとも

猶ほ謹敕の士とならん。謂はゆる鵠を刻みて成らずとも尙ほ鶩に類する者なり。季良に效ひて得ずはば陷りて天下の輕薄子とならむ。謂はゆる虎を畫きて成らず、反て狗に類する者なりと。有名なる諸葛孔明も亦、先帝臣の謹愼なることを知れる故に臣に寄するに大事を以てしき、といへり。凡そ人の斯の世に處するには、よしや人に勝れたる才智學問なくとも、愼の一字を守りて失はずば、決して世に棄てられざるべし。愼か愼か、汝が名は是れ汝が終生守るべきことを表するものなり。願ふに人生は朝露の如し。われ何時いかなる日にわれは汝の成立を見るに及ばずして汝に先たんも測られず。果して然らば汝、造次にも顚沛にも、己が名を省みて己が行を點檢せよ。庶幾くは無事に一生を送ることを得んか。若し夫れ汝の行が汝の名に背馳して世の指彈を免れざるが如きことあらば、われは死すとも瞑せじ。汝それよく心に銘せよと。無心の嬰兒も亦わが言を解せし者の如く、われに向ひて點頭するに似たり。乃ち記して以て他日の訓戒となしぬ。

これはまあ、何うなり斯うなり、愼一で育つて居りますが、長女の美枝といふのは、明治三十六年の三月三日に三重縣の三重郡の第二中學に居つた時に生れた三田村の子だといふので、三重と名づけやうと思ひましたが、女に三重といふのは、どうも面白くないといふ異論があつたので美枝と定めたのです。ところが其の美枝が美はしい枝ではなくて、しかも大層な三平二満であるのには、私は常に頭を搔いて其の命名を誤つたことを笑つて居るのです。彼が三歳の新年に私が國元の父上へ出した年賀狀の端に

元日やお美枝の鼻の低さかな

宮中御歌會の御題新年の山に對して、孫の鼻の低さを報じたのには、お爺父さんも、新年早々大笑ひであつたさうです。

舊藩時代に伊賀の城代をして居られた藤堂采女といふお方は通稱佐十郎といつて後に元施と改められましたが、其の三男を佐吉と命名せられまして。自分の通稱の佐十郎と附けやうと思つたが、若し車曳きにでもなつた時に車夫の佐十郎は、ちと不似合だ。佐吉ならば呼び易いではないかと笑つて居られました。これらは誠によく捌けた者で、當り障りのない善い名だとおもひます。畢竟餘り考へ過ぎるのは却て好くない。淡さりとやるのが宜しいと思ひます。世の親御達の御參考にまで、思ひ浮んだまゝをかくの如し。

英國の紳商ホワイテー、カーライトといふは莫大なる富を有し有らゆる贅澤を盡したる人なり七八年前ゴダルミングに別莊を購ふや數千人の人夫を使用し一千二百五十萬圓を費して庭園を造りたる由にて庭内には六萬坪の池あり大なる瀑あり水泳場あり長さ四百呎の石の階段あり水晶宮あり美麗なる暖室あり地下室あり夜間には數萬個の電燈を點ずる設けあり佛國ヴエルサイユ宮の庭園にも劣らざるものなりと云ふ。



年中行事 手びかへ帳

これは昨年一月發行「女重寶記」の中に收めたる「手びかへ草」の補遺なれば彼是參酌して御覧あるべし

考古博士 述
桐のや女史 記

◎春の卷

▲**四方拜**――これは正月元日の曉方四時頃　天皇陛下、天地及び四方の山陵を拜して、今年の災厄を拂ひ、且つ寶祚の愈々益々榮え給はむことを祈らせたまふ儀式なり。清涼殿の外に御座を設け、屏風を立て廻らし、白木の机に、香華などをも備へ、扨て、北斗七星中、御自からの年にあたる星の名をお唱へなさりつゝ、先づ北に向て天を拜し、次に西北に向て地を

四季節用文例

〔一月〕

○松の内はかるたよ羽子よと申すうちに過はて

○日々かるた雙六と遊びくらしぬ候ほどにはや學校もはじまり

○年たちかへり候物からいまだ寒さの堪がたく

○軒近き梅やゝほころび候頃

○田舍にてはいまだ舊暦をもちいよろづの取納など片づき申さず候へば改まる年ともおぼえず

○門の柳園の玉椿にまたき春
なうながし顔なる
○夢のまに月の中ば過し候を御
許様には

〔二　月〕

○春たつ今朝とわきて霞こめ候
な
○世は花鳥の春になり殊に一陽
日はしのぎよく候
○餘寒はげしく候へども
○いまだ雪氣の空さむく候處
○花鳥の聲はさすがに春めきて
○門の柳の糸打けぶり春の姿
となり候頃
○鶯の聲遠近に聞へやゝ長
閑になりそめ候
○此頃三日は空も長閑にてよ
ろづ春めき候な
○今日は近頃になくいとうらゝ
かにて
○雪間の若菜も色見えそめ候て

拜し、其れより次第に四方に在す諸神及び山陵を拜し給ふなり。茲に序でに述ぶべきは七星の名にして、巨門、貪狼、祿存、文曲、廉貞、武曲、破軍の中　陛下御自身子の歳ならば貪狼星、丑又は亥の歳ならば巨門星、寅又は戌の歳ならば祿存星、卯又は酉の歳ならば文曲星、辰又は申の歳ならば廉貞星、巳又は未の歳ならば武曲星、午の歳ならば破軍星の名を唱へながら拜し給ふなり。此の四方拜の起源は宇多天皇寛平二年にして、今を去る事大凡そ七百有餘年の昔なり。

▲**屠蘇**――この語の意味は、邪氣を屠り、人魂を蘇醒せしむと云ふより出づ。桂心、防風、桔梗、大黄、尚ほ其他數种の藥品を調合して、緋絹の袋に入れ、酒に浸して、三ケ日の間これを飲めば年中の邪氣を拂ふとあれどなほ此他に白散、度嶂散をも併せ飲む事ありき。白散は白朮、桂心、細辛桔梗等を調合したる物、度嶂散は白朮、肉桂、山椒、細辛等を調合したる物なり。茲に注意すべきは、今日屠蘇を飲むに、先づ一家の主人よりこれを飲めど、此は故實を知らぬ者の爲ることにして、一家の中最も幼少き者より飲みはじめ次に主人これを受けて飲むべきなり。往古朝廷の御儀式には藥子と云ひて、未だ他家に嫁せざる一少女先づ天皇に先ちて、お屠蘇のお毒味をするなり。朝廷に於ける此儀式は人皇五十二代嵯峨天皇の御代より始まれりと云ふ。

〔三月〕

○昨日の雨にて少しく寒さもうすらぎ申候

○打つゞき空も長閑になり候な

○御地も此頃は雪なごりなう解けはて嶺の早蕨蕗のつく〴〵しなど折からの御遊山もあるべき頃

○きは〴〵しう春めき申候ところ

○野べは雲雀の聲も打かすみて

○春雨しめやかにふりくらし

○草木はやう〳〵萌えいで

○歸りゆく雁につけて一筆申上候

○霞かくれに雁もかへり小田の蛙もなきそめて

○霞む軒端の去年の燕は來ぬる春雨の音だにしたまる心もとなきに

○花もやう〳〵けしきだつ頃と

▲門松＝常盤堅盤に變る事なき松の緑を、扨ては年の首に祝ひことほぐまゝ門ごとに一家の繁榮を競ひて立て連ぬるには相違なけれど、茲に又一説として興味深き荒唐譚あり。

天竺の北方に九相國あり、九相國の内に吉祥園と云へる園ありて、これを守護する神を牛頭天皇といふ。佛家の本地垂迹の說にては、此の牛頭天皇は即ち素盞嗚尊なりと雖ども、元より取るに足らず。此の牛頭天皇、一日、南海に沙渴羅龍王と云へる王あり、二女ありて、長女は既に嫁したれど、次女は未だ何人にも嫁せず、容色頗る嬋妍たるを聞き、早速取るものも取りあへず、南海に下らむとする途すがら、日暮れて如何ともしがたく、漸くにして燈火を便りに人家を求めしに、其の土地に於て蘇民將來、巨旦將來と云ふ二人の兄弟あり。弟の巨旦將來は其の身甚だ富めるにも拘らず性質頗る邪貪にして、一泊の惠みは愚か、一粒の米すら惜みて牛頭天皇の宿泊を切望するを斥けしかば、牛頭天皇は巳むなく兄の蘇民將來に一夜の宿泊を乞ひしに、此はまた頗る恩惠深くして、家貧しきにもかゝはらず、粟殼を褥とし、粟の飯を奉りて、待遇いと懇ろなり。斯くして牛頭天皇は旅行の途中恙なくして南海に至りて沙渴羅龍王の次女と婚し、止まること八年にして八王子を儲け、歸途再び蘇民將來の家に立寄り、先年の恩に報いむとて、蘇民の爲めに茅の輪を造りて與へ、疫癘若し起らば其輪を潛

なり候な

〔四　月〕

○そよふく風も寒からず花も咲そむる時節となり

○空打かすみて百千鳥の囀り くらす此頃の春を

○うら〳〵と霞みわたりて花もさきいで

○いづこの花も咲出候折

○白雲のかゝらぬ山なくおほえ候花ざかりの頃

○籬のもとの山吹池の汀の藤も咲きそめ候を

〔五　月〕

○花もいつしか青葉となりながめすゞしくなり候折ふし

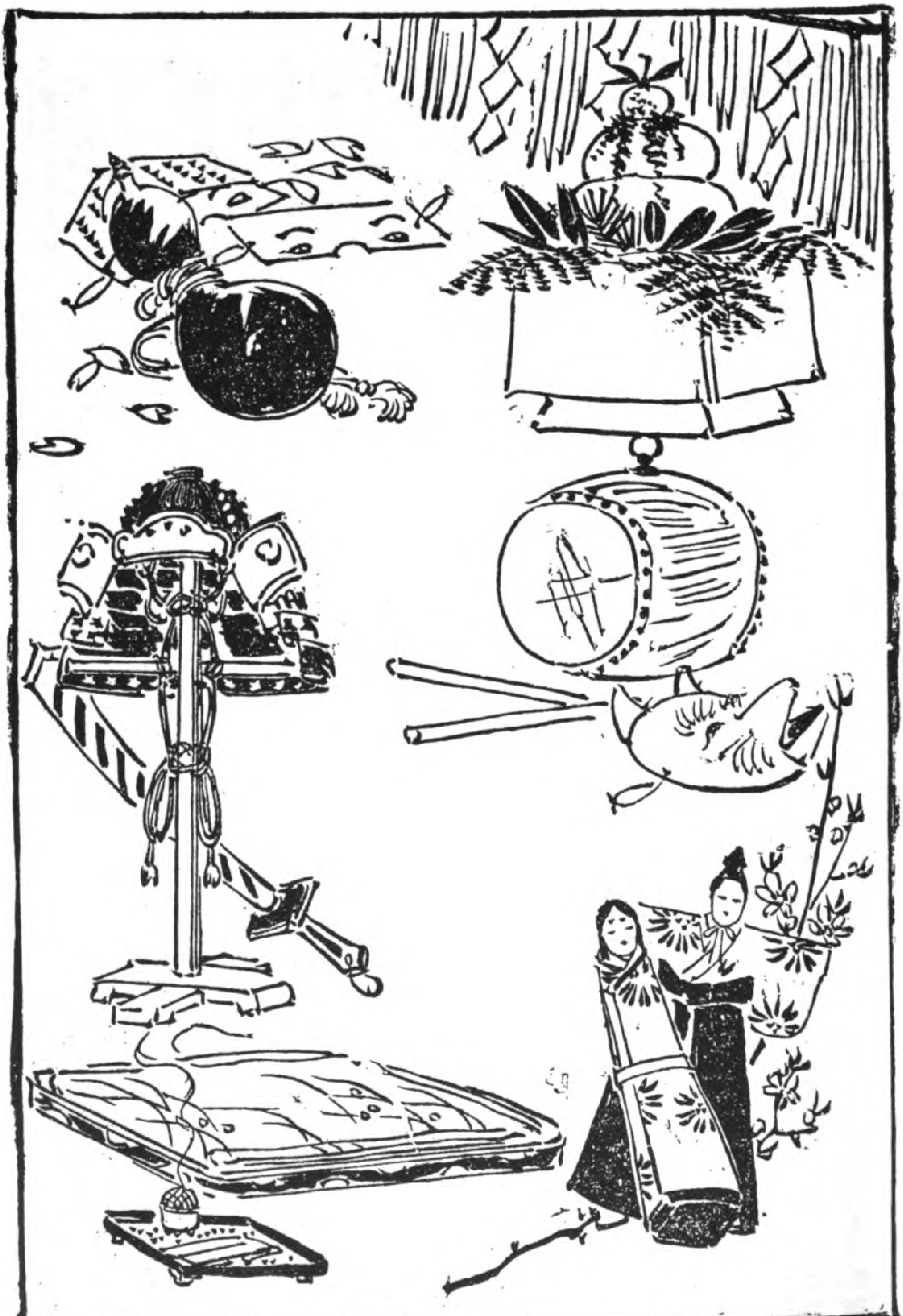
○青葉がくれの遲櫻初花よりも珍らしう見やるころ

○暑からずはた寒からぬ頃

○にはかに暑さをもよほし候

○山の端も霞の衣ぬきかへ

るべしと敎ふ。然るに其夜より疫癘大に起りしかば天下の民大概病死すれど、蘇民は牛頭天王の敎へたるが如く其輪を潜りしかば天下の民大概病死すれど、蘇民のみは遂に疫癘に罹らざりしと云ふ。是れ今日、六月の晦日に胎内潜と稱して神社に大なる茅の輪を造り、これを潜れば病氣にかゝらず息災なりと云ふの起源なりとぞ。扨て、それより牛頭天皇は、彼の貪婪にして邪惡極まる巨旦將來を誅したるが、此の巨旦將來は殆んど惡魔の權化の如き奴原なりしが故に後世門毎に門松を立つるは、此の巨旦將來を目出度く退治終りて、その屍體を埋めたる所に殖ゑし墓標の松に形りたるなり、門松の周圍に炭などを置くは、彼れが屍體を焚きたる炭に形りたるなり、三月三日に紅白の菱餅を喰ふは、肉の赤きと骨の白きとに形りたるなり、五月五日に粽を喰ふは巨旦將來が髮の毛に形りたるなり、七月七日に索麪を喰ふは彼れが身體の筋を形りたるなり、九月九日に菊酒を飮むは巨旦將來の血を啜るなりと。斯くの如くして日本の五節句は皆な、巨旦將來と云ふ惡魔を退治る事に因んで起れるやうに說けり。かゝる妄說は、元と支那に流行し、陰陽五行說と唱へゐたりしが、支那の文明が日本に入込むに當つて、此等の陰陽五行說も共に我が邦に入來たり、迷信深き藤原氏は專ら之れを信じ、當時阿倍淸明などゝ云ふ人は此等の怪しき說を吹き立てゝ、多く無智蒙昧の人民を迷はしたり。巨旦將來の說の如きも阿倍淸明の著書中に記しあり。



て綠涼しき夏となり

○時鳥の初音ゆかしくなり候

○やう／＼溽暑をもよほし申候

○新茶のかをりめざましう候頃

○ほの／＼と明行く片山畑の麥の微風何となく心地よく

○垣の卯花雪の如くにさきいで窓近き若竹の卷葉の露心地よき頃

○筍もやゝおい出る時節となり

○卯花月夜雲間の郭公などもなかしく候へばあがた見におもひたゝせ給はずさふらふや

軒端の棟風にふり亂れ候頃

〔六月〕

○さみだれ晴間だになき此日頃

○軒の若竹をぐらうしげりゆく頃

○昨日今日もふりつゞき寂しさ

▲若水＝＝現今では正月元日の朝、若水を汲むが習慣なれど、往古朝廷にては、先づ去年の中から惠方に當る所の井戸に蓋をして置き、今年立春の日に、これを汲んで天皇に奉れば、一年中の邪氣を除くと云ふに基きしなり。

▲七菜＝＝現今では正月七日にときめきたれど、往古は最初の子の日にこれを用ひたり。さて七菜とは、薺、繁蔞、芹、菁、すゞしろ、御形、佛の座なり。正月七日に七種の菜を喰へば、其人萬病なく、又邪氣をも除くと云ふ。宇多天皇の寛平年中より始まれりと云ふ。

▲子日の遊＝＝現今では子日の遊をする者なく、たゞ僅かに屛風、繪卷物の繪にのみ殘れど、往古は正月の子日に、天皇を始め左右大臣より以下、皆なお辨當御持參にて小丘郊野に遊び、幔幕を張り、其中に小廷を作りて澤山の小松を植ゑたまふなり。これ元來、當日高き丘に登りて遠くを望めば、氣靜まりて煩惱を除くを得ればなりと。松を植うとは云はずして、松を引くと云ふ、これ松を以て白馬の節會の馬に因みてなり。今日、何某親王お手植の松などを云ふも、一は紀念のためなるべけれど、一は此事のなごりとも見るを得べし。

▲白馬の節會＝＝また靑馬の節會とも云ふ。馬は陽の獸類にして、靑は春の色なり、故に正月七日に白馬を見れば年中の邪氣を除くと云ふ。此日

やるかたなく
○時鳥のなくれしげくなり候折から
○降りくらすながめはいとゞ物しくて
○一日二日だにあかれ候とかう晴間も見えぬ空梅の實なくれどうみはて
○つれ／＼と降るながめにうけう託すさび
○しづの女の手わざ隙なきころ
○梅雨の空はれてにはかに暑氣をもよほうし申し候ところ
○秧鍼の時節となり候ところ
○菅の小笠も取あへず雨にそぼぬれてさ苗とりきそう頃
○庭の青梅色づき申候所
○花橘も香に匂ふてゆふべ涼しき時節となり
○新樹の風ことに涼しく覺へ候

天皇、二十一匹の白馬を引出さしめて御覽せらる。動機は異なれども、稍現時の觀兵式にも似たらむ乎。此事、ふるく天武天皇の頃よりありと云ふ。

▲餅粥＝正月十五日に餅粥を喰ふは、最初、粥のみを喰ひしを、十五日の粥なる故に望粥と云ひ、轉じて餅粥となりしなり。此の起源には二說あり、一は、昔支那に蚩尤といふ額は銅にして砂を喰へる惡漢ありしが、遂に黃帝と云へる帝に誅戮され、其首は飛んで天狗となり、其身體は蛇となる。正月十五日、この天狗を祭り、粥を具へて禮拜せずむば年中の邪氣を拂ひがたしと云ふ、一は、昔支那の高辛氏に女あり、心甚だ邪惡なりしが、正月十五日俄かに往來にて死せり。其の亡魂道路に止まりて行人を惱ますに依り、此娘存生中好むところの粥を供へて祭れば災なしと。宇多天皇の寛平年中に始まると云ふ。いかに平安朝時代は迷信深かりしかを見るべきなり。

▲踏歌の節會＝正月十五六日に行ふ節會なり。都の中の男女にて其聲美しき者は召集め、宮中にて年始の祝詞を唄ひて舞はしむるなり。これは夙く天武天皇の時代にもありたり。後、聖武天皇の時には此儀式の濟みて後短册に仁義禮智信の五字文を別々に記して、皆の者に抽かしめ、それに依りて各々祿を與ふ。これ後世の福引なり。

▲釋奠＝これは孔子及びその十哲（顏淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓、宰我

〔七　月〕

○たへがたき暑さに候

○昨日の朝例もよりはげしく

○時節とは申しながら金も流るるあつさ

○日にそへ增る暑さくらし難う

○日ざかりは命とたのむ風もたえ

○夕立のかゝるべく見えし雲もはれていとゞ暑さにたへがたく

○たのむ扇の風へぬるくいかにとも暑さ凌ぎかね

○とかく不同の氣候にてかへりて凌ぎよく覺て候

○よべはこゝちよき夕立にて門田の稻ことゞくいきほひよく相成

○しかし雷のなりわたり候はいとわびしく御近邊には落ち申すず候や御案じ申上候

子貢、冉有、季路、子游、子夏）を、二月の最初の丁の日に大學寮にて祭るなり。文武天皇の大寶元年二月に始まりたりと云へば、當時如何に儒敎の盛なりしかを推知すべし。一年の中二回、二八月の最初の丁の日に釋奠を行ふ。但し釋奠と云ふは、禮記の註に「菜を釋き、幣を奠きて、先師を禮す。」といふに出づ。

▲桃の節句――三月三日を桃の節句と云ひて、蓬餅、白酒を供へて佳節を祝ふ事は德川時代の最初より行はれたり。此日は女子の節句とて、女子ある家には雛人形を飾り、桃花の紅と白酒の白と相對し、夜に入れば絹燈の光り更に一段の炳灼を加ふ。桃の節句の起源に就ては昨年の正月の臨時增刊女重寶記に掲げたれば略すとせむ。

▲曲水の宴――これは餘程往古より行はれしやうなれど、藤原氏隆盛時代には殊に盛んに行はれき。宮中に於ける文人達、御苑の水の流るゝところに居ならび、水上より盃を流し、己が前に流れ來たるまでに詩を作り、その盃をとりて酒を飲むなり。これは勿論、漢學傳來と共に支那より入來たりし遊戯なるが、支那にては、既に周の時代より始まれりと云ふ。

◎夏の卷

▲更衣――四月朔日はすでに夏に入るなれば、往古より更衣とて宮中にも

〔八月〕

○秋たち候へどいまだかわらぬ暑けさ
○殘るあつさもやゝうすらぎ
○朝夕はやう〳〵くらしようなり候ところ
○夕月の影はさすがに秋となり
○蟲の音に秋のけしきしろくなり候頃
○庭の眞萩もさきそめ候折から
○宵ごとの蟲の聲も日にましけくなり候
○秋の夕はいづくも同じさびしさにおぼえ申し候
○一葉ちる桐の木の間の夕月夜ねざめにそよぐ萩の上風やゝ秋のけしきとなり候
○いつしかと待いし門田の稲も花咲みち朝げの風に打そよぎ候さまを見候へば露も思ふ事なく梅も櫻もこれにはしかじとた

其儀式行はる。掃部寮の役人、内裏へのぼりて萬づ夏の裝飾に改む。御臺も新しく敷きかへ、天皇の御衣を更へさせ給へるは素よりなり。

▲氷――四月朔日より九月晦日まで、天皇に氷を奉る。抑も夏に氷を奉りしは仁徳天皇の時を以て最初とす。同天皇の御宇六十二年五月 皇兄大中彦皇子、大和國山邊郡の闘鷄と云へる所へ狩獵に行き給ひしに、忽ち野中に庵を結びてあるを見給ひ、近隣の者を召して問ひ給ひしに、此の庵は窟を掩へる者にて、窟は即ち氷室なりと答ふ。土を深く掘りて草、茅萱などを敷けば、夏日と雖ども氷の決して融くることなしとの言に愕きたまひて、その氷を貰ひうけて仁徳天皇に奉りしかば、天皇の叡感斜めならずして、此れより諸國に氷室を設けて、寒中に結氷せしめ、四月以後出だして天皇へたてまつる事となれり、仁徳天皇六十二年と云へば今を距つること實に一千五百三十三年なり。かゝる上古に於て既に暑中氷ありしとは愕かざるべからず。

▲灌佛――天竺の倶毘藍城に釋迦如來御降誕ありし時に、天空より龍舞ひ下りて、釋尊に水を注ぎかけたりとの故事により、我國に佛教傳來して程もなく、推古天皇の御代より四月八日には佛生會を行はる、宮中に御簾を垂れて、山形を造り、凡て釋尊降誕の時の景色を型り、絲を以て瀧を落し五つの鉢に五種の香水を入れて供ふ、釋尊の前に僧侶等拜座し、勸行終り

のもしく存じ候
○薄の糸を經緯に機織蟲や
おり出しけん野へはことゞゝく
錦となり候
○たちこめたる朝霧のはれゆく
まにゝゝ萩の花づま女郞花など
かざしの玉も露とみだれ候さま

〔九　月〕

○朝夕は一きは凉しくなり候と
ころ
○野べの千ぐさは錦の如く
○葎の宿はことに露けくおぼ
え候折ながら
○月のおもしろさに寢もやらず
○いつしか秋も最中となり候て
善き宵の望の夜も近づき
○蟲の聲々おのがまゝゝゝなき
つれ
○野も山も秋のけしきになりは
て候頃
○初雁の聲雲ゐにきこえて

て後、五つの鉢の水を一つに合はせて灌佛す。其場に並びゐる公卿等も亦たこれに倣うて禮拜す。現今は各寺院には必ず少さきお釋迦樣を飾りて、普遍く衆生に灌佛せしむ。

▲菖蒲＝＝五月五日に菖蒲を以て軒を葺く事、今も尙ほ諸所に見受くれど此は德川時代を以て最も隆盛なりとす。此の菖蒲を葺く事は既に天平年間より行はれたり。斯すれば毒氣を拂ふとの例の迷信より出でたる者なり。

▲藥玉＝＝藥玉といふ物、今は少女の簪にのみ跡を止めて殆んど知る人稀れなり。五月五日は往古、宮中に五日の節會に云ふが行はれ、群臣に藥玉を賜はる。藥玉とは種々の香料を玉にして、樣々の造花を結びつけ、現今見る簪の藥玉に似たり。これに八尺許りの五彩の絲を垂して、御簾又は柱などに掛くれば不淨を拂ひ邪氣を避くと云ふ。又群臣に賜はる物は、群臣これを臂に掛けて惡氣を拂ふと云ふ。今日あるところの香料袋は藥玉の退化したる者と知るべし。

▲端午の節句＝＝五月五日は端午の節句なり、これを童子のみに節句のやうに云へるは德川時代よりの事にして、從つて德川時代以前に於ては、幟鯉などを立て、又五月人形にて金時、關羽などを飾る事もなかりしなり。往古は此日に粽を喰ふを例とす。其は前に巨旦將來の故事に依れるを說きしが、斯かる荒唐譚は素より信ずるに足らず、尙ほ此他に二說あり、昔支

○人まつ蟲の聲々打まれく尾花のそでもなつかしきに
○昨日今日いたく風も身にしみそめ候を
○初雁の御玉章いとうれしくくりかへしながめ候
○春の霞とゝもにおもふかせ給ひて後はいかに御暮してかと日ごとに御上のみかたりくらし候ひき
○雨風のついでよろしくたり穂のいれも年見え候て望月のかけたる事なき年に候
○梢の色はまた淺く候へどふかき御心にふりはへ音つれ給へる御玉章いとく嬉しくて

〔十月〕

○朝夕は肌寒う木々梢も色づき
○昨日の雨にてひとしほ冷氣を催し
○露ふく風もそゞろに物寒きこ

那に高辛氏の惡子あり、五月五日、船に乘りて海を渡りしに、俄かに暴風吹起り、其船沈沒して海中の藻屑と消えしが、その怨靈殘りて水神となり常に人を惱ます。然るに或人五色の絲を粽に結んで海中に投せしに、五色の鮫龍になつて現はる。其れより海神人を惱ます事なく、海路頗る安全なりと云ふ。又曰く、五月五日に楚の忠臣屈原が、懷王を諫めて聽かれず、悲憤慷慨して汨羅に投じて魚腹に葬むられし時、楚民これを憐んで其の靈魂を祭りし時の供物は粽なりしに依り、漢文學の我が邦に傳來してより、五月五日に粽を喰ふ風も併せて傳來したるなりと云ふ。果して何れが信なりや、今俄かに信じがたし。

▲大祓＝これは一年に二回、即ち六月三十日と十二月三十日となり。人は不知不識の間に罪穢を身に受けてあるが故に、一年に二回づゝ此の罪穢を祓ひ淨むるなり。朝廷の百官悉く朱雀門に集まり、卜部氏祝詞を唱へて罪穢を祓ふなり。今日でも稍々舊家めきたる家にては、產土神の神官を招じて大祓をなす。此の儀式は天武天皇の時より行はれ、日本固有の風習なれば、其れ以前もありしが、儀式としてあらはれしは同天皇時代を以て初めとす。

▲胎內潜＝六月三十日に行ふ。今日にても諸神社にて大なる輪を作りて參詣者をして隨意に潜らしむ。その起源に就ては不明なれども、前に巨旦

のころ
○はや茸狩の時節になり申候
た
○庭の淺茅生うらがれて秋風寒くなりまさり
○蟲の音も夜ごとによはりゆき
○籬のもちの菊いつしかにほひそめ
○園生の菊のみ人待かほにさきにほひ
○夜永き頃となり候まゝ
○露霜はおけども菊はいまだ盛にて
○やう〳〵秋深くなり候折ふし御さわりもあらせられず候や
○今朝はじめて霜むすびそめ池水の蓮の枯葉をふく風いと寒く

〔十一月〕

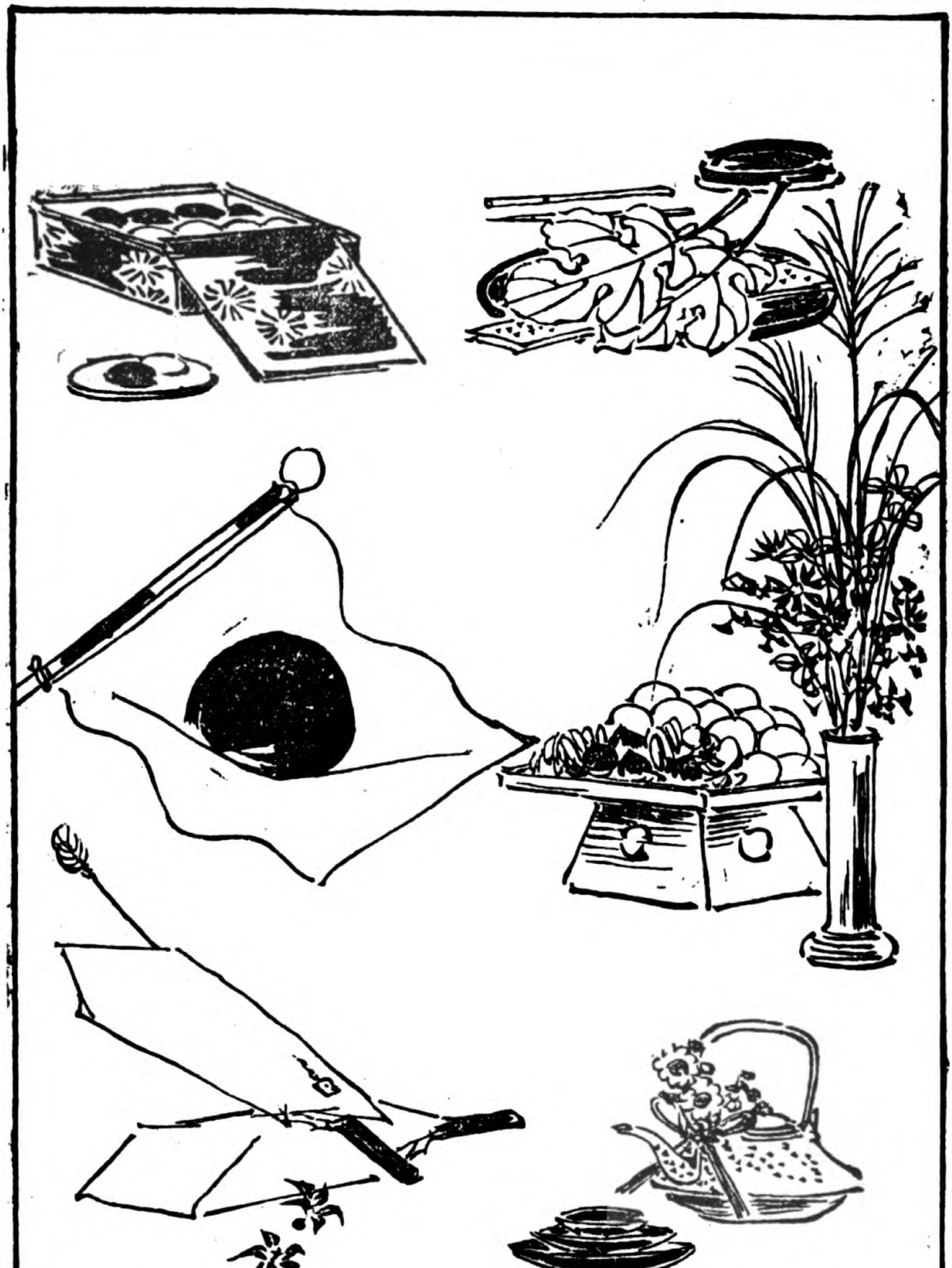
○日にまし寒さに向ひ候
○もみぢ葉もはやちりそめし夜のけしきと相なり

將來の譚の中に述べたれば、茲には之れを略す。

◎秋の巻

▲乞巧奠＝＝七月七日の七夕祭のことを乞巧奠と云ふ。今宵は牽牛と云ふ星と織女と云ふ星が、一年に一度相逢ふ夜とて、天の河に鵲來たりて織女を渡すなりと支那の書籍淮南子と云ふに記されたり。淮南子とは前漢の皇室の支流に淮南王安と云ふ人の著書にして、安は當時の學者として、又南方に居住してゐたれば、頗る黄老の學にも通じてゐたりと見え、神仙不可思議のことを多く識したり。さて、此夕香華を供へ、棹の先端に五色の絲や、五色の短冊を掛けて、一藝の巧みならむことを願掛すれば、三年以内にて必ず叶ふと云ひ傳ふ。故に、婦女子は此夕、多く縫針の願をかくるを通例とす。一藝に巧みならむことを乞ふが故に乞巧奠と云ふ。此日索餅を喰ふことは巨旦將來の節に述べたり。

▲蟲干＝＝今は土用干とて、衣服を干す事や、書籍を暴すことを新暦の土用の時節にする故に、却て夏季の空氣濕潤にして効果少し。其れに引換へて、往時は七月七日に蟲干をなしたるが故に、既に秋立ちて、空氣乾燥して甚だ宜しきを得たり。此の蟲干は元と支那より傳はりしことにて、竹林の七賢人の一人阮咸と云ふ人は、竿の先端に己れの褌を掛けて干し、又郝



○空はしぐれて晴間もみえず
○日あしもやう／＼みぢかくなり
○霜がれの時節となり候
○時雨のふりみふらずみ定めなき頃
○木枯に落葉みだるゝ冬となり
いとゞさびしく
○遠山はゝや雪しろく降かゝり
○媚びたく時節となり
○小春の天氣いとうらゝかに候
○木々の梢に二つ三つかへり花さき出申候
○日向の水仙は花をもようし候頃

〔十二月〕

昨日の氷今朝の霜と日々寒くなり候
○日にまし寒げをもよほし候
○今朝の初霜は野山もなべて銀世界となり

隆と云ふ人は、日中仰臥して曰く、我れ腹中の書を曝すなりと。此二人は何れもすねたる學者なれば斯かる事をなしたるなり、蟲干の逸話として序でながら記し置く。

▲盂蘭盆――七月十四日は盂蘭盆の日なり。盂蘭盆は梵語にして、譯すれば倒懸の苦を救ふ器となる。釋尊の弟子目蓮、己れが母餓鬼の中にありて大に苦しむを救はむとて釋尊に哀願し、百味百果を盆に盛りて偏く僧侶に供養すれば、汝の母自から餓鬼の苦痛より脱すべしと敎へられ、目蓮之れに從へば果して釋尊の高敎の如し。是れ盂蘭盆經に記載せるところにして本邦にても夙に齋明天皇の時、盂蘭盆會を設けられたりと云ふ。

▲重陽の宴――九月九日は共に九陽の數の相重るが故に重陽と云ふ。往時朝廷にては此日群臣に菊酒を賜はる。又、彼の藥玉の條に逃べたるが如く御帳の左右に茱萸の嚢を懸く。又、茱萸を折りて頭に挿せば邪氣を去ると云ふ。その故事は、昔支那に費長房と云へる仙人あり、或日、汝南と云へる地の青年桓景と云ふ者に語つて曰く、九月九日には汝が家に災あらむ、若し茱萸の嚢を縫ひて臂に懸け、丘に登りて菊酒を飲まば、この災汝の身には及ばざるべしと。桓景拜謝して仙人の言葉の通りに從へば、九月九日に至つて果して自分のみに恙なかりしが、己が家の家畜悉く死し居たりと云ふ。かゝる故事に依りて、我が邦に於ても、九月九日の重陽の節句

○珍らしき初雪にて寒さも忘れ見出候折から
○埋火のもとさりがたく候ところ
○寒さもよそに匂へる窓のもとの梅は諸木の魁とてこの寒さにも凌ぎ咲いて候
○みぞれまじりにふる雨の音ものすごう候頃
○はや年の瀬と相なり
○もはや年内は餘日もあらず
○御年むかへ給ふ御祝事ともしげき頃

▲手かく事

よろづよりも、手はよくかくまほしきわざなり歌よみ學問などする人は、ことに手あしくては、心おとりのせらるるを、それ何かくるしからんといふも一わたりことわりはあることながら、なほあらず、うちあはぬこゝちぞする

に餘程大切に取扱はれ居れり。此等の故事何れも一時の出來事か、若しくば迷信より出でしものなるべけれど、支那に於ける黄老の神仙の道、及び一轉して陰陽五行の說は、漢土に於てよりは却て日本に傳來して以來一層盛んに行はれ、奈良朝より平安朝にかけては、日本國民全體盡く迷信家となつて了ひ、藤原氏の滅亡も一面より觀察すれば此等の迷信實に內腑に染込たるの結果なりと云ふを得可し。九月九日高丘に登りて茱萸を頭に挿して邪氣を拂ふとは、支那に餘程流行せしと見え、其詩も決して少からず。

九月九日望鄕臺、他席他鄕送㆑客杯、人情已厭㆓南中苦㆒、鴻雁那從㆓北地㆒來。（王勃）

獨在㆓異鄕㆒爲㆓異客㆒、毎㆑逢㆓佳節㆒倍思㆑親、遙知兄弟登㆑高處、遍插㆓茱萸㆒少㆓一人㆒。

但し茱萸とは俗名やまぐみ、○○○。東京小石川の植物園にあり。

▲蟲えらみ――切々嘈々、あはれにうたふ蟲を籠に入れて、軒端の涼風と共に愛づる者多けれど、昔朝廷にては蟲えらみと云ひて、殿上人わざ〳〵嵯峨野わたりに逍遙して、聲善き蟲を籠に入れて天皇に奉る事、堀河天皇の御時頃より初まれりと云ふ。

◎冬の卷

や、のり長いとつたなくて、常に筆とるたびにいと口惜しういふかひなくおぼゆるを人のこふまゝにおもなくたんざく一ひらなど書き出て見るにも、われながらだにいとかたはに見くるしうかたくなことを、人如何に見るらむと恥しくむれいたくて、若かりし程に、なとて手習はせざりけむと、いみしうくやしくなむ。

（本居翁）

▲物まなび心得

物學びに心ざしたらんには、まつ師をよくえらびて、その立たるやう、をしへのさまをよく考へて從ひそむべきわざなりさとりにふき人はさらにもいはず、もとよりさとりとき人といへども大かたはしめに從ひそめたるかたに、おのづから心はひかるゝわざにてその道のすぢわろけれど惡きことを得さとらず、又後には、さとりなかくも、年

▲更衣＝＝更衣といふ事強ち首夏のみのやうに思ふは惡し。十月朔日にも亦た更衣あり、例に依りて掃部寮の役人、宮中に於ける一切の裝飾を冬拵らへにするなり。孟夏のみと思ふ人あらむと思ひて念の爲めに記し置く。

▲亥子餅＝＝此月の最初の亥の日に餅を食へば萬病を除くと云ふ。故に平安朝時代にても夙くよりこれを行へり。これ亦た陰陽五行說より出でたるものなり。

▲五節＝＝十一月の中の丑の日、宮中にて五節の舞あり。五人の舞姫、天女の天降りて舞ふが如くに舞ふ。彼の百人一首中の僧正遍照の歌、

天津風雲のかよひ路ふきとぢよ少女のすがたしばし止めむ。

は、此の五節の舞姫の美しさを賞讃したる時の歌なり。抑も此の五節の舞ひ起源は、彼の淨見原の帝と云はれたる天武天皇、大和の芳野の宮に在して琴を彈き給ひし時、前方に聳ゆる山の峰より天女數多降り來て、天の羽衣を五度飜して、

をとめども少女さびすもから玉を袂にまきてをとめさびすも

と謡ひたりしに由來せりと云ふ。

▲新嘗會＝＝今年稔りたる初穗を神に供ふる儀式にて、日本の如き稻を以て常食とせる國民に取りては最も重き儀式と定められたり。天皇御即位の年の新嘗會は特にこれを大嘗會と云ふ。現今は新嘗會又新嘗祭と云ふ。

ごろのならひは、さすかにすてかたきわざなるに我とかいふ禍神さへ立そひてとにかくにしひごとして、猶そのすぢをたすけむとするほどに、終によきことは得もせで、ひがたとのみして身をへふるたぐひなど世におほし、かゝるたぐひの人は、つとめてふかく學べはまなぶまに〳〵、いよ〳〵わろきことのみさかりになりて、おのれまとへるのみならず、世の人をさへにまとはすことぞかし、かへす〳〵はじめより師をよくえらふへきわざになむ、此ことはうひやまふみにいふへかりしを、もらしてけれぱ、こゝにはいふなり。

（本居翁）



▲荷前＝十陵八墓に年の終に幣帛を奉るを云ふ。兼好法師が徒然草にも曰く、『年の暮れはてゝ人毎にいそぎあへる頃ぞ又なくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月の寒けくすめる、二十日あまりの空こそ心細きものなれ。御佛名、荷前の使立つなどあはれにやむごとなき。』と兼好の文あまりに淒麗にして、殊に荷前の使を點出して年末の忙しきを記せる何等の妙筆ぞ。

▲追儺＝現今は新暦二月の三日か四日の夜、即ち節分の夜る行ふ『福は内鬼は外』なり。これ亦た陰陽五行説より出でたる迷信にして、此の儀式は文武天皇慶雲二年十二月三十日より初まる。此年疫病多く流行して、百姓の死する者夥しかりしかば、これより毎年朝廷の儀式となる。此夜は、宮中に燈火を多く燈して、年中の疫鬼を追拂ふなり。先づ方相氏と云ふ鬼の一種に打扮つ者は、黃金四眼にして犬歯上下に露出せる恐しき假面を被り、玄き衣、朱き裳を附け、左手に矛、右手に楯を握り、疫鬼を追拂はんとする勢を示せば、又振子とて紺色の布衣を着たる童子二十人方相氏に從ひて内裏の四門を廻る。徒然草に公事どもしげく春のいそぎに取り重ねて催し行はるゝ樣ぞいみじきや。追儺より四方拜につゞくこそおもしろけれ」と。實にや『今はたゞ一夜になりて葦の矢の射るが如くに年ぞ暮れぬる。』



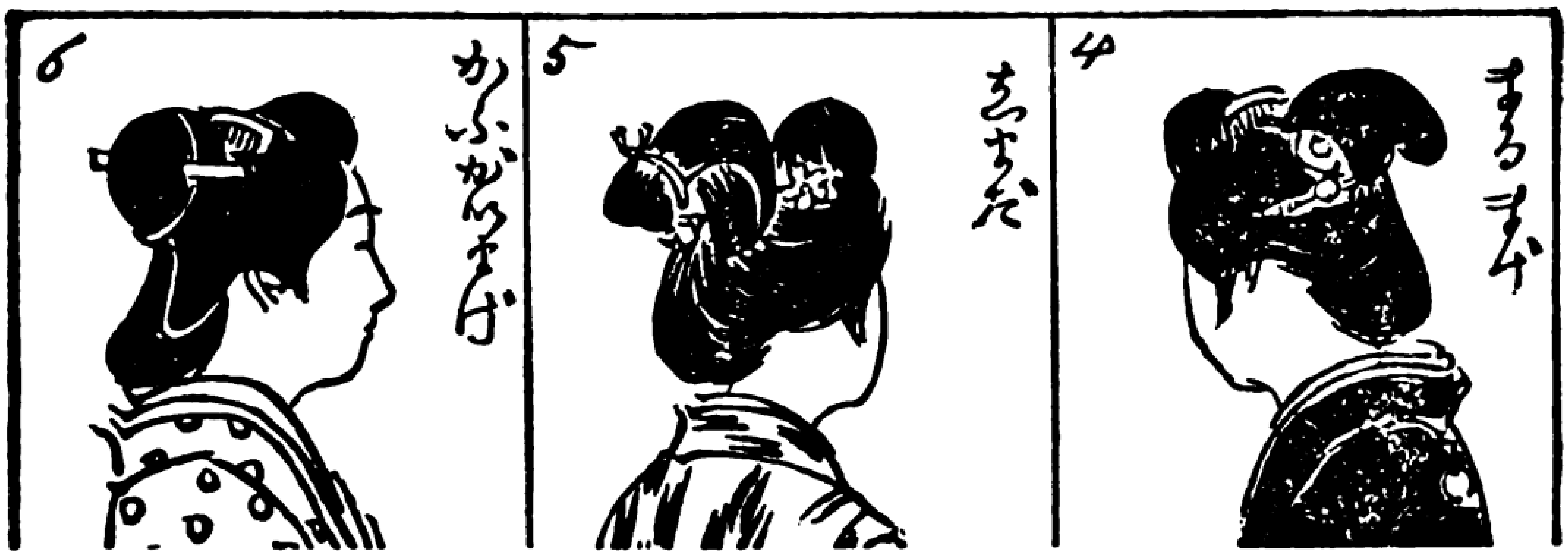
古今髪の結ぶり

勝間舟人

御婦人方の腦頭の裝飾たる御髪は、婦人の生命とも申す位なもので、最も尊重すべく、又た最も意を用ふべきもので御座ます、それに髪の形は容貌の美醜にも關するもので、所謂眉目より髪形、如何に容色の美しい御婦人でも蓬頭亂髪では折角の美貌も掩ひ隱れて見劣りが致し、容色の左程美くない方でも黒髪を房々と結び上げて、髪飾を程好くあしらひますと誠に優しく立勝れて見ゆるものですから、髪の格好に注意を致すことは、修容の第一義で御在ます、されば玆に修容の御參考までに古來よりの髪の風と其の種類を擧げませう。

▲垂髪＝太古の婦人は髪を一つに束ねて其の餘りを背後に垂れ下げたものらしく思はれます、古典に「天照大御神の男裝せさせ玉はんとて御髪を解して美豆羅にまかせ」とありますから、髪の根元で結び束ねた事が分ります、又た「下照姫の美はしき髪は翠の雲の棚引くが如く地に垂れ」と云ひ、人代となつては日本武尊が女裝し玉ふ條に、童女の髪の如く其の結髪を梳き垂れとあります故、大昔の婦人は髪を長く背後に垂らし下げて居た事が分ります。

▲結髪＝天武天皇の御代に男女悉く結髪せよとの詔が下つて、皆な髪を結ぶやう



になりました、けれど垂髪の風習は俄に改り兼ねたものと見えて、直きに又た婦人は髪を垂下げることになりました、其後慶雲と云ふ年に復た結髪の詔が下りたのでしたが、普く行はれないで、平安朝の頃には皆な悉く垂髪の風に遷つて了つたのであります。

奈良朝時代の髪風を申せば、

▲ふかそぎ＝子供が三四歳の頃になると、初めて掻き垂らしてあつた髪の末を揃へて剪るのを深そぎと云ふのです。

▲振分髪＝ふかそぎが延びゆくに從ひて肩のあたりにて剪るのを振分髪ともはなりとも申します、

▲わらは＝八歳よりは剪らずに延ばして、左右に垂らして置きますが、之をわらはと申します。

▲うなゐはなり＝頭髪が延びゆきて肩を過ぐるまで垂れると、之をうなゐはなりと申ます。

▲髪上げ＝是は男の元服と同じく、女に成つた時に結つたものです、即ち其の仕方は、髪に鬘を添へ飾をかけて鬢をふくらませ、垂れた髪を梳き上げるのです、但し此の髪上は婚禮其他儀式の席などに出る時に結つたものと思はれます。

▲寶髻＝是は延喜の御代の書物に見えた髪で、結ひ束ねたのではなく、垂た髪の儘、冠を戴いたもので、髻ではないのです。



▲筋髷＝是が髷の起原だと申しますが、其の形も時代も分らないのです。

▲片外し＝此の髷は髪を揃へて、毛を右手に取り、大輪を作りて笄を挿し、餘りの毛末を笄に卷き付けて留め、其の片方の端は笄を外すのです、此の髷は足利氏の時義政の室妙善院が初めて結んだのが起りで、德川氏の頃になり熾んに行はれたもので、幕府及び諸侯の奧向に仕へて居た婦人は一般に此の髷を結つたもので御在ます、この髷は足利氏の創作ですけれど、斯う云ふ名の起つたのは、德川氏の女中が其片方を外して結つたからであります。

▲唐輪髷＝髷の最も古いのは此の唐輪で、極く昔は男の兒ばかり結つたものですが、天正の頃より婦人も結ふやうに成つたと申します、此の髷の結び樣は、髪の元を揃へて頭の頂上へ上げて結び、其の末を二つに分けて額の上に丸く輪に結ぶのです。

▲兵庫髷＝此の髷は唐輪に次いで起つたもので、慶長の末頃攝津國兵庫の遊女が始めたものと申します、元祿の以前は大いに是が流行つて、凡そ六十年程の間といふものは、都鄙の別なく中以下の婦人は皆な此の髷を結ひましたが、後、島田勝山の二風に壓されて次第に廢れて了ひました、けれど天明の頃までも遊女の間には此の風が殘つて居たのであります。

▲勝山髷＝是は承應の頃、神田の丹後殿邸前の紀の國風呂の湯女が後に吉原の遊女に成つて結ひ創めたのが起原で、其の遊女の名が勝山と申す所から勝山髷と稱へたと申ます、又た丹後殿の邸宅前と云ふ譯から、丹前風とも申します。



▲島田髷＝此の髷は寛文の中頃、東海道島田宿の遊女が創めたのが起りで、時により形狀に少々の變化はありますけれど、全然廢れたことはありませんで、今も尙ほ都鄙を問はず、貴賤の別ちなく、妙齡の婦人方に持囃されてゐるのであります、此髷にはいろ〳〵の種類がありますが、近來は至つて高尙な風が行はれるやうです。

▲圓髷＝此の髷は島田と共に何時に成つても廢つたことなく、人の妻と成つた婦人方の結ぶ髷としてあります、年齡に依つて髷に大中小と厚いと薄いとの氣味はありますけれど、近頃の嗜好は概して大きからず小さからず、こんもりと少し厚みを持つてこ後髷の立つたものゝやうに見受られます、因に當時流行の圓髷の形を申しますと。

●鍋町形、●お初形、●歌舞伎形、●米屋町形、●茶筌形、●牡丹形、
●富士見町形、●雀形、などであります。

▲やつし島田＝此の形は貞享の頃に行はれたものです。

▲大島田＝此の髷は形に依つて名付けたものです、貞享頃の遊女の風俗を記したものに、小枕なしの大島田とあれば品の良い風ではないらしいのです。

▲中島田＝大島田と同じ頃に行はれたものです、其頃の腰元の風を記したものに、平髷の中島田に掛け捨ての元結高初心とあれば、年齡の若い女が結んだもので、品のあるもので在つたらしい。

▲投島田＝此の髷は根元を高く結んで、後髷を小さく、後に引かないで、前髪を大きく高くし、鬢は下鬢に梳き付けて、髱を長く上に反らして結んだものです、貞享の頃、



二十七八歳の女の風を記したものに、髪は投げ島田に平元結掛けて云々、三人連れし下女共にひとり〳〵三人の子を抱せける、さては年子と見えてをかし云々、などありますから、此の頃の婦人は娘に限らず、嫁して子供を產みても島田に結つたものと見えます。

▲かうがい＝此の髷は元祿の中頃より始まり一般に流行つたものです、結ひ風は根元に笄を挿し、髮の毛を卷き付けて、形を作るのです。

▲御所風＝此の髷は今の島田崩しの樣な結方で、元と垂髪を卷き上げて笄で留め、其の笄を拔き取れば復た垂髮になるといふ結樣から、起つたのだと云ふことです。

▲おさふね＝此の髷は根元を結び、毛を揃へて後髷を結び、餘りの毛で左右に輪を作り、その輪の上に丸髷形に覆せ、元結で留めて置くもので、品の好い形です。

▲糸卷＝是は髮を揃へて中挿を横に差し、其を軸にして右へ左へと綾に卷付けて留めるので、其の格好が糸卷によく似て居ます。

▲割唐子＝髮を揃へて大きく後髷をとりて之を二つに割り、楕圓形を作り、中差を挿し、餘りの毛を輪の中で糸卷の樣に卷き付けて留めて置くのです。

▲かつくりかへし＝毛を揃へて其の毛先を結び、前へくるりと返して置くもので、至つて下品の結び樣です。

▲蝦蛄＝髮を揃へて後髷を結び、餘りの毛を後髷に卷付け、かき付けて後髷の輪先を横より簪を差して留めるもので、其の形が蝦蛄に似てゐる所から此の名があります。







▲田螺蝦蛄＝髪を揃へて右手の方へ一捻り捻りて輪を作り、毛末を疊んで其の輪の内へ少し通し、其の先へ簪を差して留るのです、是は田螺の形に似てゐるので此く名があります。

▲おばこ結＝此の結び方は髪を揃へ、右手の方に捻りて輪に取り、根を元結で締め、餘の毛を右巻にまき付け、頭上に平たく輪を押し付けて、中差で留めて結ぶのです、形状は恰度蛇の蟠居りたる如く、至つて下品の頭です。

▲櫛巻＝此の髪は安永の頃より流行り出したものです、品が良いとは申されませんが至極輕便な結方でありますから、商家の婦人などは大抵此の頭で外出も致します、洗髪を櫛巻にした風は粋な所があります。

▲唐人髷＝此の髷は髪を揃へて、毛を十分一程殘し置き、銀杏返しの様に結んで、ふつくりと丸く輪を作り、前の殘した毛を輪の上に十文字にあや取り、根を元結で留めます、是は若き婦人の間に行はれたものです。

▲銀杏返し＝是は島田より來たもので、髪の上げ方は髪を揃へ、毛を眞二つに分けて、銀杏の葉の樣に左右に輪を作り、餘りの毛末を程好く輪の中へ褶み込て梳き付け、元結で留めます、是は十歳内外より何歳までも結へる髷で、丸髷に次いで調法なものです。

▲天神髷＝意氣な婦人間に行はれる髷で、品格はありません、結ひ方は髪を揃へて三筋に割り、後の一筋を右に捻り、其餘の毛を先の二筋の毛と合せて、銀杏返しとなし、之に前の捻り毛を覆せ掛けて簪を竪に差して留めるのであります。



▲忍髷＝島田の樣に結つて、前髪を左右に割つたのを忍髷と申します。

▲竪兵庫＝是は唐人髷の通りの結ひ方で、只だ輪を前高に立たせる爲に張紙を用ゐる丈の差違が御在ます。

▲兵庫結＝此の結び方は髪を揃へて右手に廻し、輪を作りて餘りの毛を疊み、其を半ば輪の上に引出し、そこへ簪を差して留るのです、是は元結を用ひずして出來る至つて簡易の結ひぶりであります。

▲達摩返し＝是は前髪も鬢も髱も取らずに、髪を揃へて毛の末を輪に取り、手柄と共に卷き込み、其の結目へ簪を差し、前に返して黑元結で留めます、その形は恰も達摩に似て居ります、是も亦た簡便の結風です。

▲おたらひ＝是は意氣の婦人間に行はれたもので、素人の結ふ髪とは思はれません。

▲松葉返し＝此の髪は後髷を作り、其餘の毛を銀杏返しにして、後髷の毛を前に返して銀杏葉の上にかぶせ掛け、簪を横に差して留めるのであります。

▲桃割れ＝是は銀杏返しに似て元結を掛けません、又た根掛の代りに鹿の子などあしらひます故、十四五歳の少女に適した可愛らしい髷です。

▲ふくら雀＝桃割れと同じ樣ですけれど、是は兩輪の間が隙かないで、擴がつた狀が恰もふくら雀の翼の樣になるのです。

▲久米三＝是は割からこと同じ結ひ方ですが、たゞ後ろに十文字の綾を取る丈が違ひます。







▲島田崩し＝此の島田は安永の頃から始つたもので、後髪は一文字の形に、或は丸みを持たせても結ひます、又た前髷は綾に取つて、其の殘りの毛を綾のぐるりへ掛けて納め、中差で留めます、是は上品とは謂へない髪風であります。

▲結綿島田＝之を結ふには、後髷は少し小さく、前髷もフンワリと結んで、半懸を下より入れて上で結ぶのであります、是は十五六の少女に相應した、愛くるいし頭髪です。

▲辰松島田＝此の島田は元結を悉く巻揚げ、月代の上の方へ高く上げて、髷をもつて樣に結ぶのです、辰松風とて享保の頃から流行り出したものです。

▲文金島田＝此の形は中高に根も高く上の方に結ふのです、是は二十歳以下の婦人に似合はしい髷で、島田の内では一番高尚なものであります。

▲針打文金＝是は元結じめを高くし、げに其の高みへ針を差して元結を留めます、此の針には金銀を用ひ、其に定紋など付けたものです。

▲つぶし島田＝是は中が凹んで前髷を大きくし、後髷は長くして上へ反り目に結ふのです、茶屋女などが結ふ髪で、良家の子女には不似合のものであります。

▲三ツ輪＝髪を三筋に振り分けて後髪を作り、餘りの毛を左右の二筋に合せて銀杏返しを作り、其上に前の後髪を冠せ、元結で留めるのです。

▲花月卷＝是は束髪の内でも一番よく流行つた頭です、結方は鬢髱共にフンワリと押出し、圓輪の四方へ殘餘の毛を花の如く搦ませたものです、一時は年増も娘も皆んな此頭を結ひましたが、當節は庇髪に壓されて、一部の人が稀に結ふ位のものです。



曠衣の取扱ひ

曠衣は人前に出る時の着料とて、何は措いても見綺麗ならんことを尙ぶものなれば、常に之が取扱に注意して、汚さじ損はじの心を怠るべからず、よつて左に之に要する種々の注意を示す。

一、曠着を脱ぎたる時には、直ちに竿に乾し、能く埃を拂ひ置くべし、帷子などは日光にあてゝ乾すをよしとす。

一、着物は能く其の皺を伸し、袂の中に物あれば之を取出し、若し皺の甚しき時は、火熨斗又は鏝をあてゝ、然る後に疊みて押をかけ、簞笥に納む可し。

一、羽織もまた着物と同じくし、紐は外して紙に包み置くべし。

一、襦袢は衣紋竹又は衣桁の類にかけて十分乾したる後に疊むべし、汗染みたるを其儘に疊みおくは惡し。

一、帶は其の結び目の皺にあるものなれば、能く注意して納むべし。

一、色の褪め易きものは、可成く紙、又は風呂敷などに包みて納むるやうにすべし。（舟人）

整頓と保存

家具什器、飲食具、衣服手道具等の取扱方を丁寧にし、而して是等の物の置場所を一定して、常に整然と片付け置き、入用に際して狼狽せざるやうにし、又た之が保存の方法に宜しきを得る等の事は、一家を理むる者の宜しく心得べきことなり、今整頓と保存に關する注意の箇條を擧げんに、

一　膳、椀、皿、小鉢などは之を箱に藏め、常に一定の棚に載せ置くべし、箱に入れざるものといへども置場所は一定し置くべし

一　刃物の類は別して心を用ひ、定りたる場所に置くを要す。

一　桶、手桶の類は使用後丁寧に洗ひて、乾かして後納むべし、箍などの切れたる時は直ちに修繕すべし。

一　蠟燭、燐寸の類は不時に入用を生ずるものなれば、見易き所の抽斗などへ藏ひ置くべし。

一　下駄は手置にて永くも保てば、且つ見綺麗で在るものなれば、泥つきたる時は其の土を洗ひ去り、能く乾かし其上にて鼻緒を包みて收むべし、而して日和と雨天用とを區別して納め置くべし、下駄箱に泥をためる如きは、最も見にくし。

一　羽織の紐は必ず兩方を結び置くか、又は一つにして紙に包み、箱に納め置くべし。

一　常に使用すべき物品と差當り使用せざるものと、當期入用の品と入用ならざる品とは、便宜に從つて其の置場所を區別すべし

一　例へば夜具蒲團の如き、夏になれば左まで多くは入らぬもの故、其の必要ならざるものを收め夏蒲團、蚊帳等を出すべし。

一　漆器の膳などを藏るに當りては、先づ其上に布巾を敷きて重ね、紙の袋か但しは風呂敷などに包みて、而して後箱に納むべし。又た椀などは一つ一つ隔紙を入れる事を忘るべからず。

一　模様物及び蒔繪物などは、柔かなる布片をあてゝ保存し置くべし、假りにも物にあたり、他の物と摩擦せぬやう注意すべし

一　傘は濡れたるまゝ強き天日に乾かすは甚だ不可なり、善く水を切りて後中開となし、始めは陰干になしおき漸次日光を受けて乾すべし。

一　硝子類はわけて注意を要す、殊に浮模様あるものは塵が掛れば容易に脱れぬもの故、一層注意して納めざるべからず、

一　鐵器、又は銅器などは動もすれば錆の生じ易きものなれば、常に手數に注意せざる可からず。

少女の見たる父母

あき子

内の阿父さんと來たら、夫れや可笑しい面白い方なんでせう、だからお怒りなさる時にはお怒りなすつて、誰れでも叱つたりなさるけれど、直ぐに又御機嫌が回復るから些つとも恐かぁ無いんだもの。

夕方やなんぞ御役所から御歸宅になつて、御飯の時なんかは眞の僅少だけれど、ビールか御酒でも召し上がると、直ぐにもう御顔の色を眞赤にしてね、善い具合に御目出度くなつちまふの、而してお鼻を曲げたり眼を剝いたり頰邊を脹らしたり、變な／＼お面相なすつて妙ちきりんな節の面白いお唱歌をお歌ひなすつたりね、大人の癖して其れや猥戯けたりなんかなさるのよ、其の御容子の可笑しいつたら／＼、眞個にありやし無いんだもの、お祖母さんも吹き出してよ、竹もお給仕しながら腹を抱へてきやつ／＼つて大笑ひするは、可笑しいから私も笑ひ出すの、けれどね、怎うしたもんだが、這麽時に限つて阿母さんは乾度御笑ひなさらなくつてよ不興いお顔して御自分お一人でもつてつうんとすつかり澄まし込んでお仕舞ひなさるの、妙ね、内の阿母さんは眞箇に妙な方なんですよ、其れでも何なのよ、彼のね、

内の阿母さんは、御茶の水の女子高等師範とかつて立派な學校を御卒業遊ばした、偉いお出來なさる方なんですつて、だけども日常から夫れや怒りぽい方なんでせう、だから阿父樣が餘り猥戯けたりなんかなさると、直ぐにお一人で怒つちまつて、ついと次ぎの間へでも入らして御本なぞ讀んでいらつしやる事もあるし、そでない時には怒つた樣なお聲でもつて、突如に明了と、

貴郞つて仰つしやる事もあつてよ、而して、其麽時にはね、何時も斯う仰つしやつてよ、………貴郞千代子がお側に聞いてるじやありませんか、少しは子供の教育と云ふ事もお考へ下すつて、其麽卑猥な浄瑠璃なん

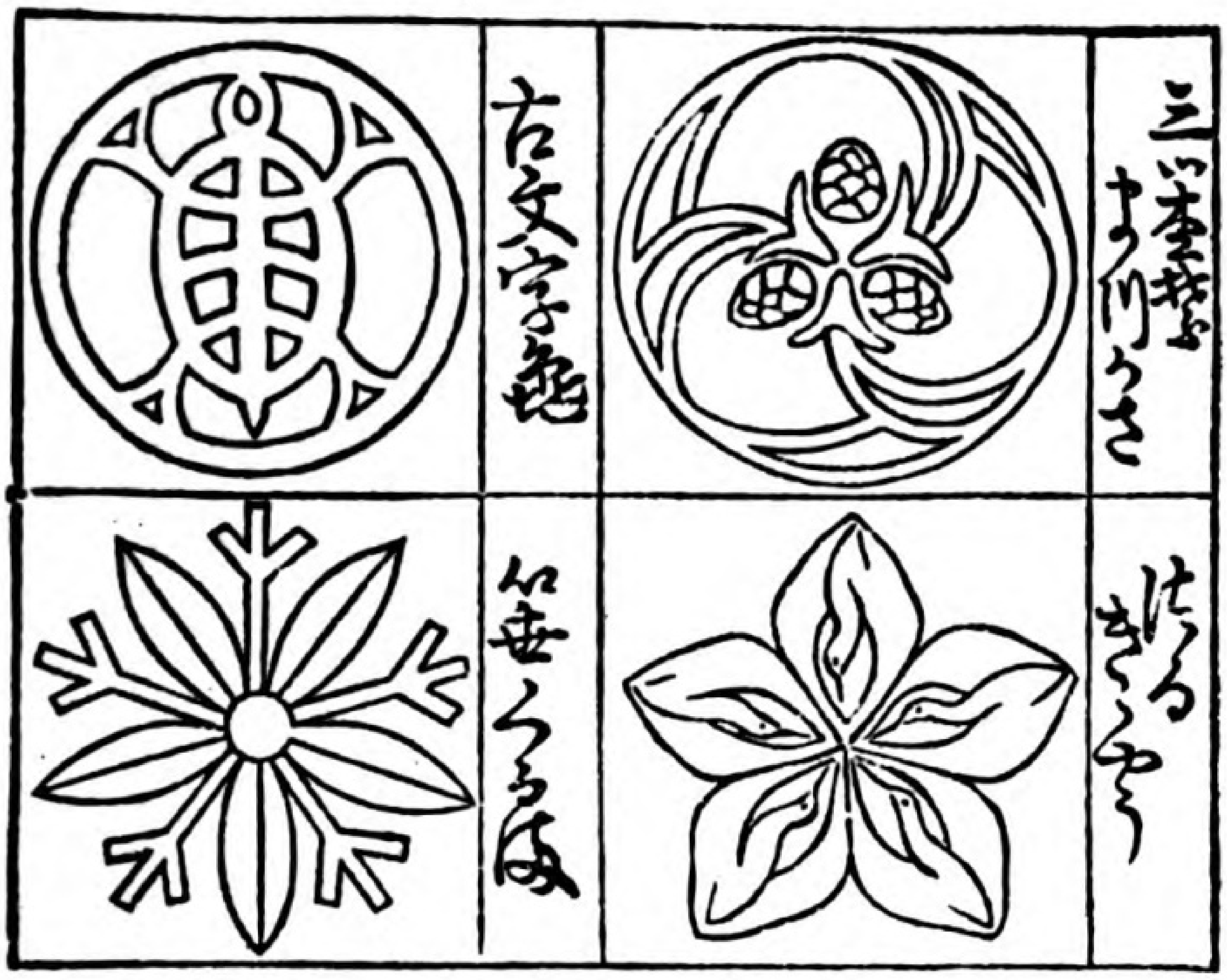
かお止しなすつて戴きたいつて……然うだつた、其のね何よ、お唱歌の事を淨瑠璃つて云ふんだつたわ、其れや阿母さんのお云ひなさる事なんか、私には餘つ程むづかしいから全然何の事だか分りやあし無いけれど、妾がお側で聞いてると怎うして惡いんだらうね、

　でも阿父樣は些つともお怒りはなさらないの、さも弱つたと云ふ風に妾の方をくるりと向いて、成る程な——これは阿父樣の御口癖よ、——我る程な、敎育のある御婦人は違つた者だ、ねえ千代子、お前も今に大きくなつたら阿母さんの樣に偉くおなりよ、阿父さんは迚も敵やし無いぞつて、お一人でアハ〳〵笑つてらつしやるの、だからね、這麼に阿父さんさへ負けてらつしやる位だから、乾度内の阿母さんは誰れよりもお偉い方なんだらうと妾は思つてよ。

　此間もね、外の偉は叔父さんが入らして、神田とかに女學生の模範寄宿舍つてものを建てたいんだが、其れに就いて内の阿母さんに何か御意見が無いかつて、お有りなすつたら敎へて戴き度いんですつてのよ、後で阿母さんが然う云つて居らつしたわ、其の方は日本でも名高い敎育家とかで居らしやるんですつて。

　其れやお偉いの、何時かも何とかつて雜誌に阿母さんの御寫眞が出てゝよ、だからお祖母さんも妾に、何でも阿母さんの仰つしやる通りにさへして居れば、御利口になれるから、ちいちやんは乾度阿母さんの云ふ事を聞くんですよつて。

　今年取つて漸う六つの才はじけ、何處で何時誰れに聞き噛りしか、ラブつて美い姉さんの事でせうとて氣烟卻々に當るべうもあらず、何時ぞや友が送りし繪葉書の行燈の繪の彩色無かりしが、ぐつと癪に障りしか其の後十日目ばかり一日友が其の家に訪問せし時、顏を見るが早いか其の繪葉書を持ち出して、這麼燈りの點かない行燈なんてあるもんですか)(さん〳〵の叱責、否もう僕も彼の時位敗亡した事は全く無かつたよと友は大濳しの事もありし。



意匠自在

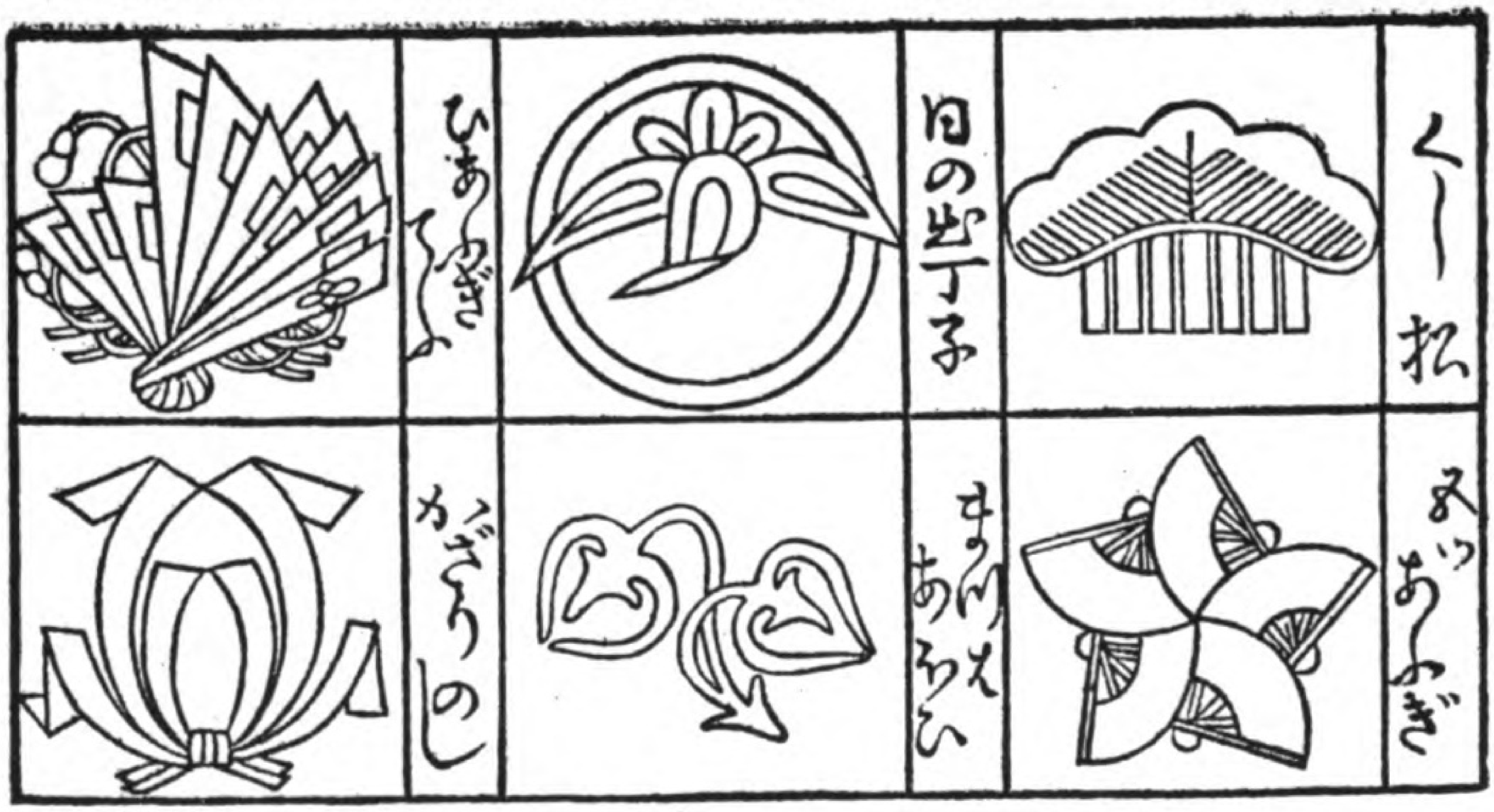
これは古代紋づくしの稿本に基き、其中より最も意匠の奇拔なるもの、百種を撰みて配合せり、紋は禽鳥、草花より天象器物に亘りて圖樣極めておもしろく古匠家經營の妙縱橫自在の意匠翫味して盡きず、尤も稿本の一部は女重寶記に揭げたれば一二重複せるものあらん諒焉。

庖厨

實地研究　臺所百事便

柞の屋

○米櫃の取扱方
○竈は如何なるものを撰ぶべきか
○竈の掃除法
○坩爐取扱法
○鍋釜は何品を用ふべきか
○飯櫃と手桶の取扱ひ方
○俎板と庖丁の使用法
○鼠不入に就ての注意
○陶器と漆器の取扱方
○拭巾と雜巾と箒は如何に區別すべきか
○薪炭の德用不德用
○飯米に就ての心得

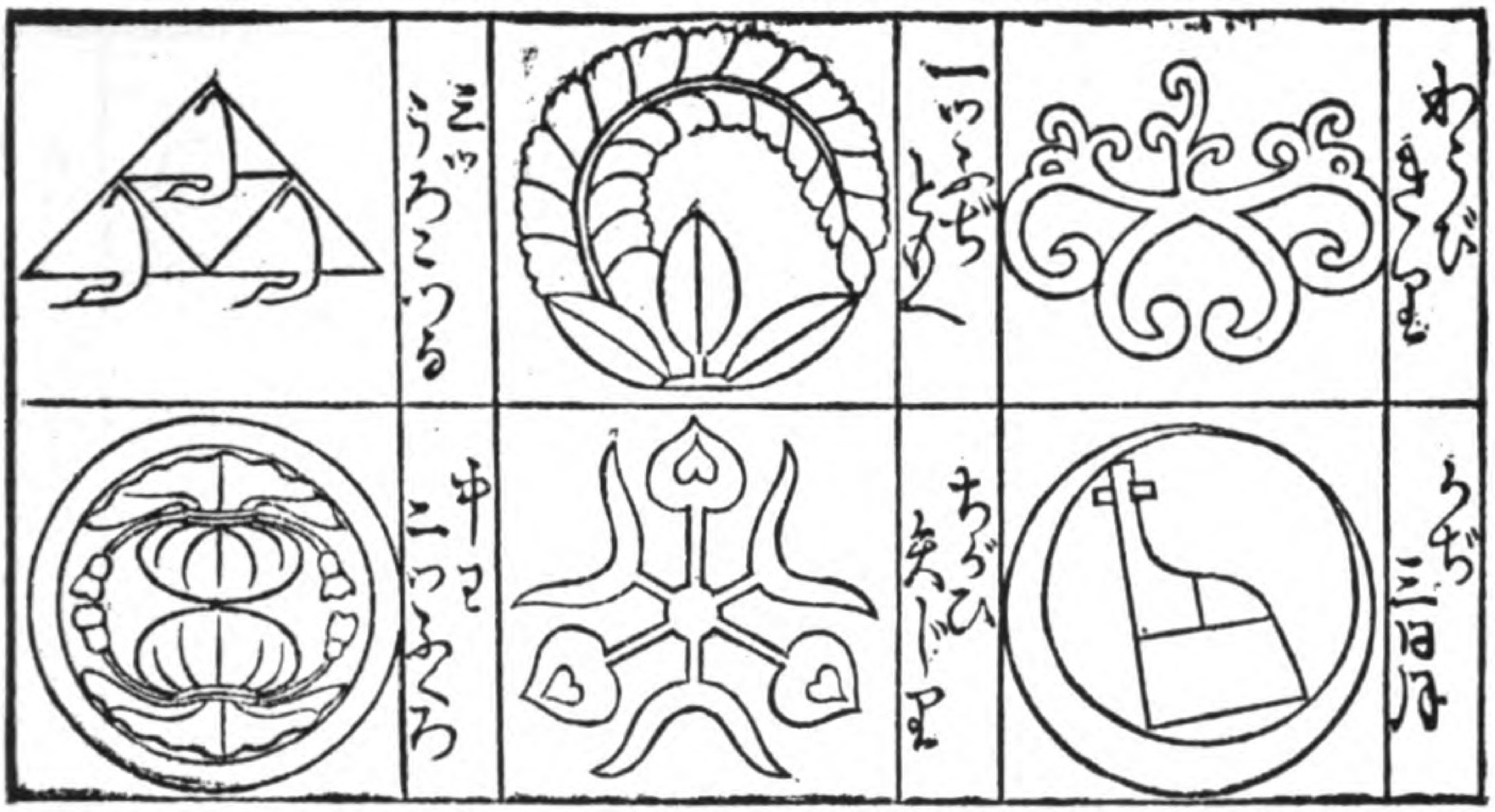


○鹽、味噌、醤油の撰び方
○鰹魚節の使ひ様

若い御婦人方の爲めに、日々の生活を愉快にし且つ經濟的にする道しるべとして、食糧の調進所たる臺所の經濟法を御話し致します、一體此の臺所の經濟と申す事は、隨分細かな煩はしい問題でありますが、茲に私の申上ます事は此の大切な問題に對し幾分の智識を御敎することが出來る事と思ひます。

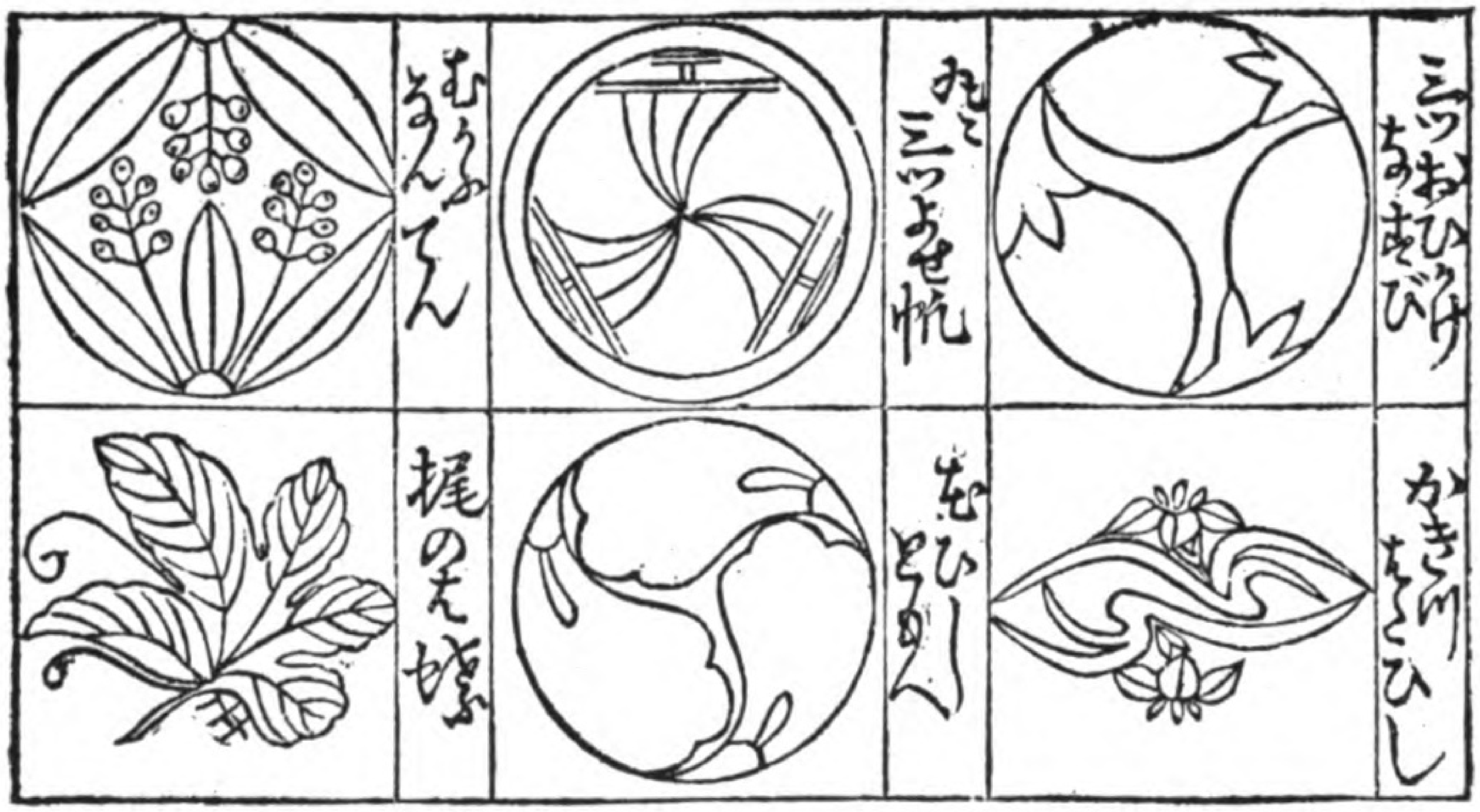
扨て此の臺所經濟の要點を摘んで申しますと、衞生と經濟の二つに歸しますが、先づ衞生上から申すと清淨と云ふことが最も大切な事で「清き水は清き源より流る」とも申しますから、一家の口を賄ふ臺所及臺所道具は命の源泉と思召して、清淨の上にも清淨にして置くことが肝要だと思ひます、又た經濟の源泉も此處に在るのですから、器具萬端の手置きよくして永く保存せる等の細密な注意が必要なことゝ思ひます、然し殘念な事は此の勝手元を御預りに成つてゐる御婦人方が此の事をよく知つて居られぬことです、だが、何をするにしても正當の仕方と間違つた仕方とあるものでして、この正當の仕方を能く〳〵御承知になると云ふことが立派の主婦には最も必要な事であります。

假令種々の藝が出來ても、實地に最も用のある勝手元の事が少しも出



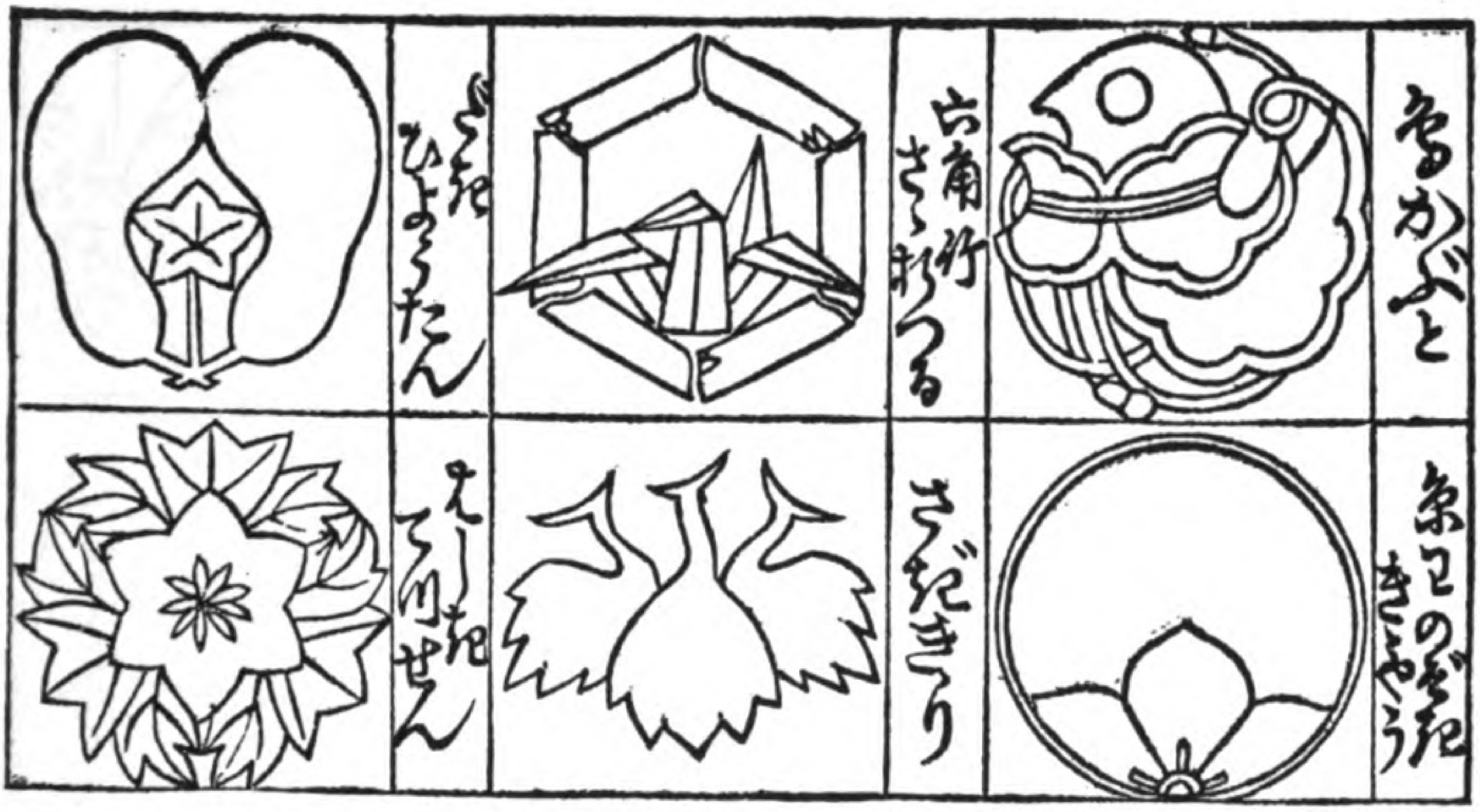
來ないでは、何よりも差支へる譯で御在ます、例令へば主婦の事務など爪の垢程も御存知ない、經驗の御若い娘さんが來て主婦と成つて御覧なさい、直ちに茶碗は破れる、膳や盆の漆は剝げる、布巾は裂けた袴〆た樣に眞黑になる、手桶や小桶はガラン〳〵に乾燥いで箍が切れる、庖丁は柄から扱出し、鍋釜は酸化る、竈の口は灰で埋る、米櫃は鼠が嚙つて米粒が零れる、其は〳〵色々な失敗を仕出來します、其故之を見た若い御主人は悲しみ呆れて、まア此先は何う成るだらう、二人は何うして暮して行くことが出來ようかと愚痴を零すでありませう、さア恁うなると奧さんも、何うして良人の家を支へて行かうかと心配に堪えない、そこで初めて是は何しても、自然に任して置いては不可ない、是非共家政の道を知らなくてはならないと云ふ事が御了解になります、又下女を使ふにしても、自身に其の心得がなくては駄目だと云ふ事も御合點になるのであります、據て茲に右の目的に就て少許御話し致します、是は新處帶を經營なさる淑女方に對する當然の義務だと思ひます、又た是は年頃の御孃さん方に對しても極く必要な敎へ草だと思ひますから、どうぞ御一讀を願ひます。

米櫃　は命の親の食糧を入れて置く大切な容器でありますから、大事に扱はねばならぬ事は無論です、是には檜製のも、欅製のもあります



が、欅製が一番丈夫であります、米櫃と申せば兎角鼠の嚙りたがるものですから、之を防ぐには内部を鐵葉か亞鉛で火鉢の落しの様な工合に貼つて置く事です、而して米櫃の内部は時々糠を拂つて綺麗に拭いて置くが宜いし、又外周圍も丁寧に拭いて光る程にして置くが宜いのです、糠が板に粘り着いてゐたり、或は糠の着いた手で觸つたりして、其儘で置きますと、詰り鼠が近寄るもとですから、餘計な事の様ですけれど、綺麗に拭いて置くに限ります。

竈　在來の物では銅壺付が便利であります、銅壺付にも總銅壺と中銅壺とがありますが、小人數の家で使用するには中銅壺の方が德用で御在ます、而して此の銅壺には凡そ水が手桶に二杯餘も入りますが、朝御飯と汁とを煑ますと、其の火氣で自然と銅壺の水が沸いて了ひ、極寒の中でも微溫湯には成りますから洗面するにも雜巾掛するにも都て便利で御在ます、たゞ銅壺付の竈を使用するに就て注意を要する事は、湯を汲み出したらば直ぐに水を汲み入れるといふことです、是は兎角忘れたがるものですから、直ぐに水を入れるといふことを忘れてはなりません、若し之を忘れようものなら空虛鐵瓶を火にかけて置く様なもので、横腹に孔が明いて了ひます、又た薪や十能の尖端をコチ〳〵打付ては不可ません、而して何時も綺麗に磨いて置かなければ不可ません。

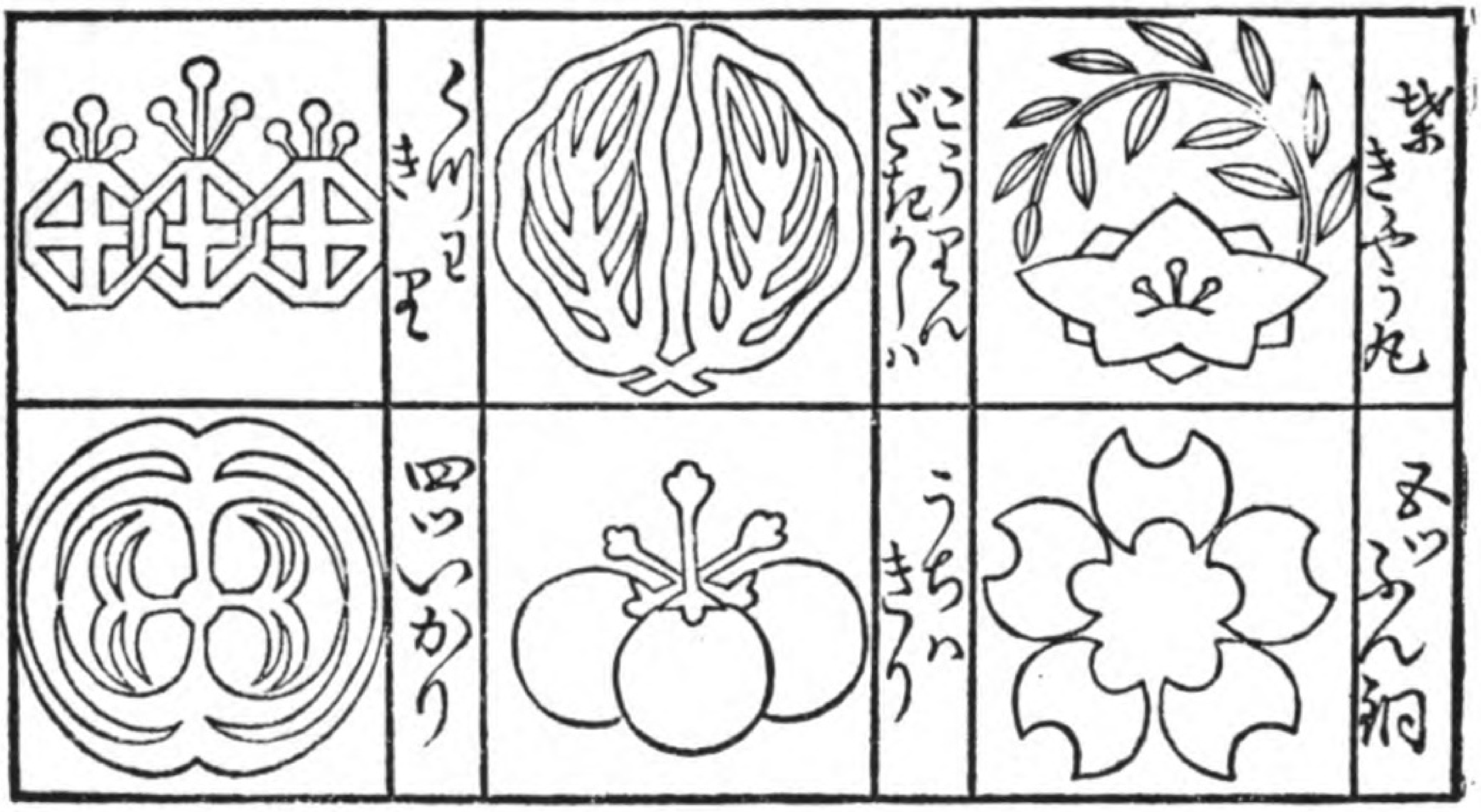


竈の掃除

是が又た緊要の事であります、昔の人は竈の前に灰を溜ると病人が出來ると言つて誡めた位のものですから、此許の掃除には最も意を用ひないと不可ません、其には前に溜つた灰を稈心箒で中へ掃き込んで綺麗にして置き、而して灰を掃込んだら竈の口に蓋をして置くのです、是は灰の飛ばない爲めと、猫などの潛入らない爲です、それから竈の周圍を雜巾を掛けて清淨に拭いて置くのです、臺所では一番此の竈が目に立つものですから、よく掃除して、よく拭き込んで、テカテカ光らせて置いた方が、見てくれもよければ、氣持も快く、第一衞生にも副ふと云ふものです。

改良竈は物理の原則に基いて改造したものですから、在來のものに比べて無論經濟であるに違ひありませんから、成らう事なら之をお用ひになることを御勸め致します、唯だ是は使ひ付けない内は、使用に困難を感じますが、一月二月と用ひ馴れて使用法を呑み込みますと、大層便利なことが解るやうになります、但し煙突のある物は煤の掃除に氣を付けないと不可ません、煙突に煤が溜ると危險でもあれば、又た火の燃え方も惡くなります。

右の外に在來のもので、二口竈があり一口竈があり近頃のもので俗に西洋竈と云ふのがあり、之に鐵葉製のと亞鉛製のとあります、是等は

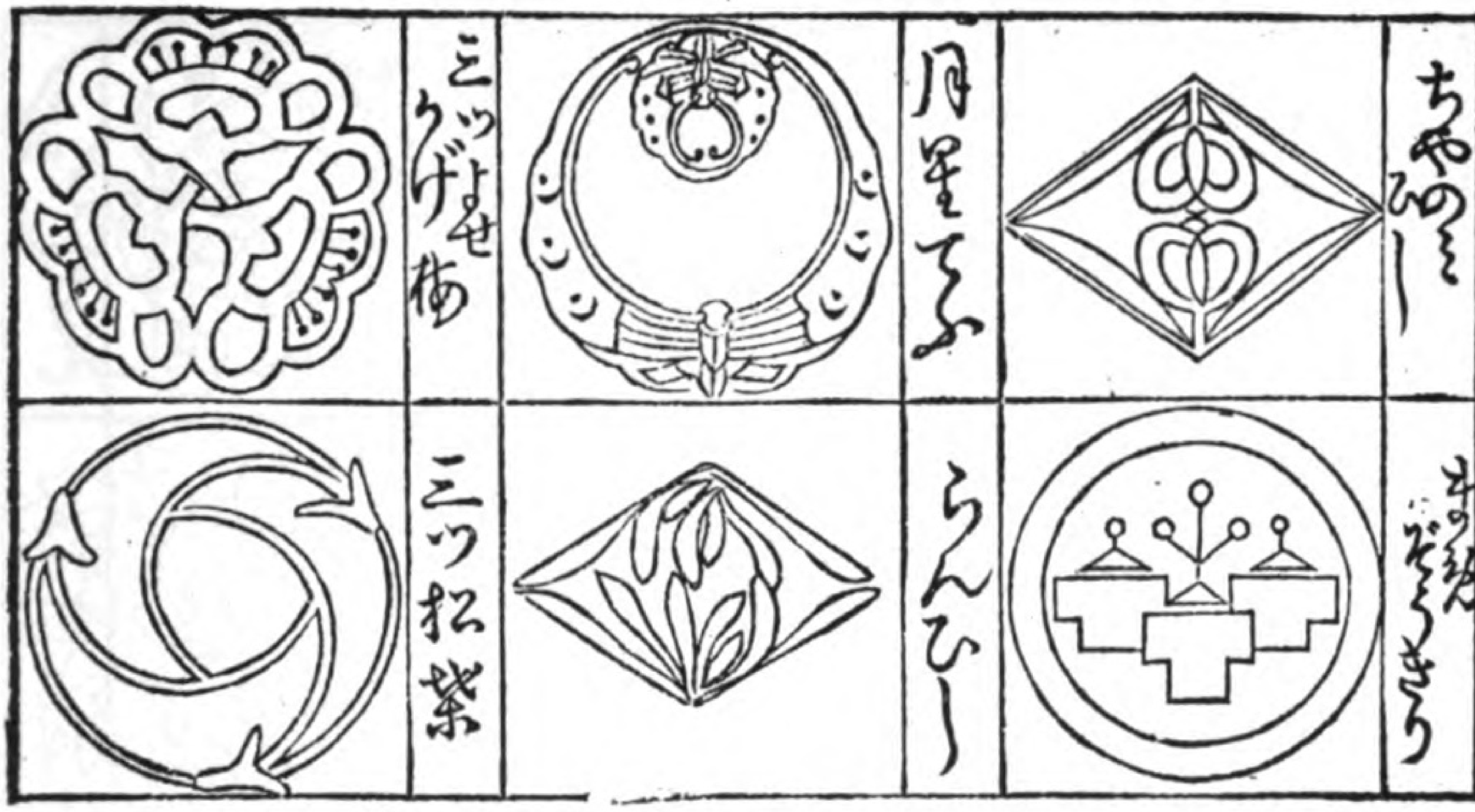


孰れも安く買へて持扱ひが輕便ですから、小人數の臺所や狹い勝手元などには寧ろ適當で御在ます。

十能と火箸　十能は銅製が一番德用です、銅製なら永く保つて子孫に讓れる位です、鐵葉のも亞鉛のもありますけれど、是等は安く求められる丈其丈早く傷んで、一代の内に百本も二百本も要りますから、安物買ひの錢失ひたることを免れません、十能は使つた後は釘へ掛けて置くやうにしないと、つひ足に引かゝつたり、物に衝突つたりして、曲り屈りになります、其故掛くべき處へちやん〳〵と掛けて置く事です、竈用の火箸も同樣ですから便宜の處へ釘を打つて掛けて置くやうになさい

坩爐　には鐵製のもあり、石製のもあり、瓦製のもあり、土製のもありますが、一番永く保つて使ひ易いのは石製のであります、たゞ石製は重いので、取扱ひに輕便を缺きますけれど、大きな臺所なら石製の坩爐を据えて置くに限ります。

又た最も安直で輕便なのは瓦製ですが、其代り瓦製のは最初に火を强く起すと直ぐに割れが來ますから、買立は弱い火で煖め、チリ〳〵と强くしないと不可ません、總べて坩爐を使ひまするは、炭を溢れる程注いでは火氣が無駄に外に洩れて了ふばかりですから非常に不經濟です、故に炭は溢れぬ程に適度に注いで置く事です、それから坩爐の戸は最初火

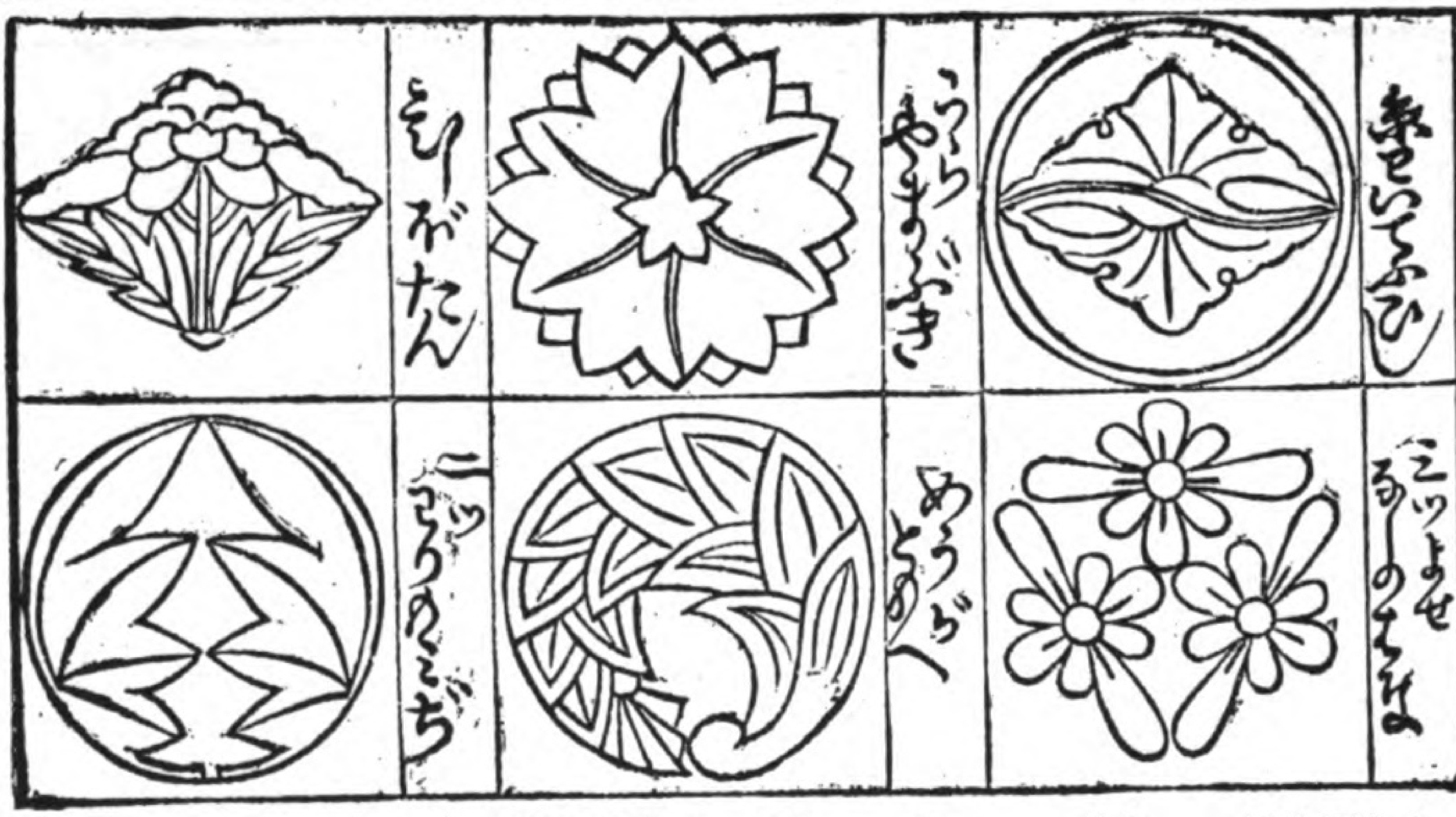


の起る間は全體を明けて置き、煮物が半ば煮えた頃に成つたら細目に明けて置くやうになさい、斯うしなくば何時までも開放しにして置くと、汁物は煮干つて了ふし、煮物は焦付く憂があります、加之、炭も無駄になつて了ひますから大層な損で何によらず斯う云ふ細な所に注意するのが肝腎です。

坩爐の底に溜つた灰は使用後直ぐに餘燼と一緒に能く浚つて、火鉢に移すやうになさい、坩爐の底に灰を溜めて置くと、火力を弱くするし、灰も飛ぶし、不潔でもあるし、危險でもあるし、又た不經濟でもあります。

釜には鐺釜、鐵釜、土燒の物などがありますが、鐺は値段は張るが薪木が德用です、其代り御飯が旨しくないと思ひます、又た土燒の物は水氣がよく取れないから夏向は腐敗し易いといふ缺點があります、何と云つても御飯を炊くには鐵釜が一番よいと云ふことは經驗ある主婦の口にさるゝ通りであります。

鐵釜を使用致すに、綺麗好の奥樣は下女を苦めて、お釜の尻を銀光りに光るまで磨かせて、是れ見よと言はぬ許に自慢なさいますが、成程斯うすれば清潔で好いには違ひありませんけれど、經濟から言へば大層損です、何故かと申せば焚き付けると水氣が釜の尻に廻り、容易に燃え付



かず、従つて沸騰が遲いのです。さればと言つて少しも洗はないで釜の尻を眞黑にして置いては火の利きが惡く、是又た不經濟ですから、時々黑い炭を掻落す丈の事は致さねばなりません。

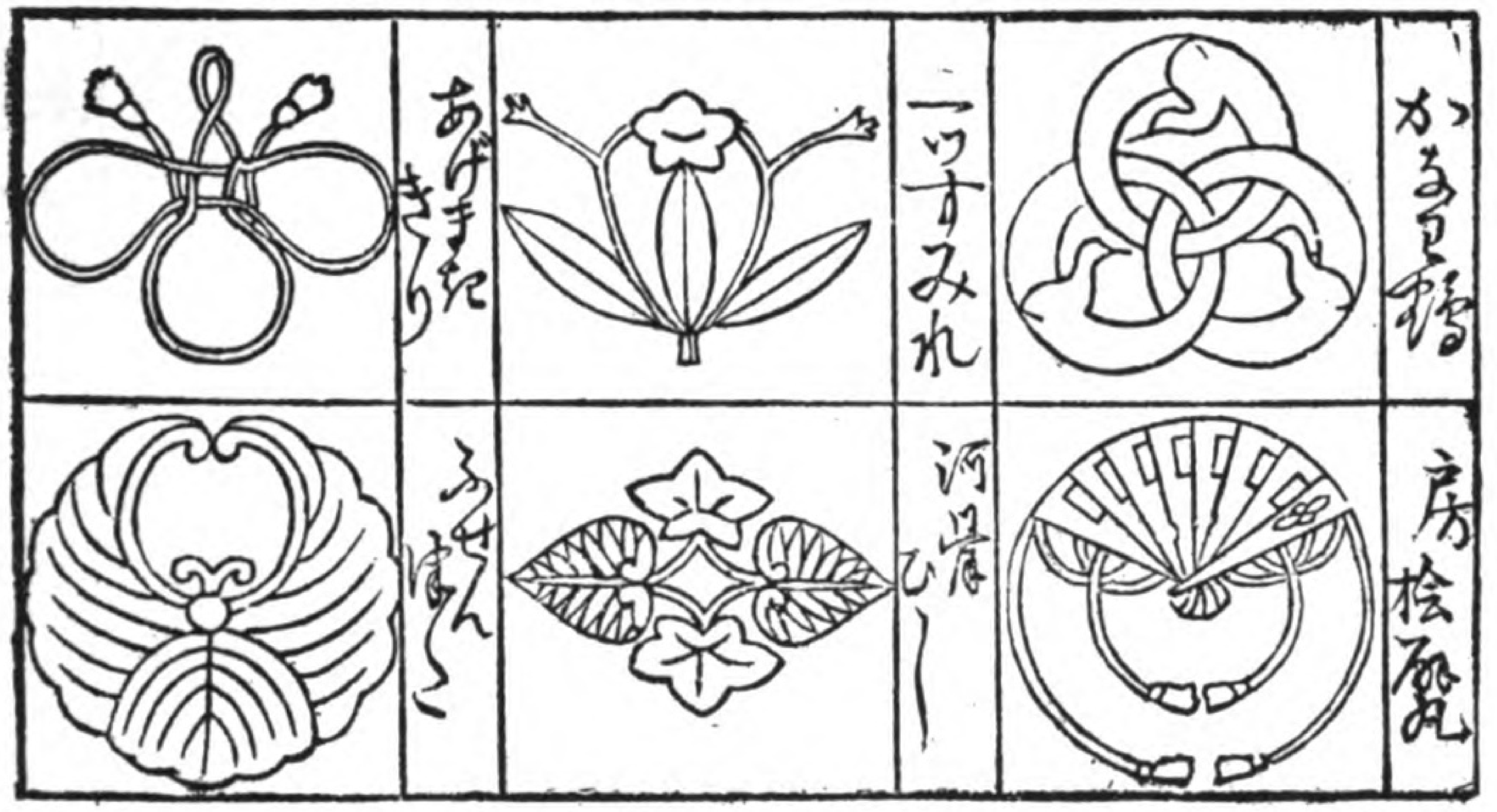
蓋は少し大き目で、キチンと隙間のないのでなければ、御飯が良く出來ませんから、新調なさる時は其邊に御注意なさい。

それから新調の鐵釜の鐵氣を除るには、薩摩芋の皮か馬鈴薯の皮を入れて煮出すが一番宜しう御在ます、鐵瓶、鐵鍋も又た同樣であります。

鍋　にて鎕製の物、銅製の物、眞鍮製の物、鐵製の物、瀬戸引の物土鍋など種々ありますが、中でも鎕鍋や銅鍋は俗に尻が早いと言ふ位で、煮え立ちが早くて焦付かず煮干らず、大增徳用です、けれど鎕、銅製は白蠟の取れたものを使用しては衛生に害になります、又た眞鍮や銅製は、煮物をして直ぐに食器に移さなかつたり、手置が惡かつたり致すと綠青が生いて是が又た毒になりますから、白蠟は必ず引かせて置くことにし、綠青は生かさぬ樣に氣を付ける事です。

鐵鍋は斯う云ふ心配のないのみか、煮物をしても揚物をしても一番味が好く出來ます、而して鐵鍋なら少々の錆が出ても決して害毒になりません。

白鑞を引いてある鍋を洗ふには、拭巾で洗つて、中をよく拭いて置く



のです、タワシを掛けると忽ち白鑞が落ちますから用心なさい、又た灰汁で擦つては不可ません。

鐵鍋に限らず何でも洗ひ終つたら、よく水を切つて、棚に伏せてお置きなさい。

鐵鍋の尻は使用毎に水で洗つて灰を除つて置くこと。

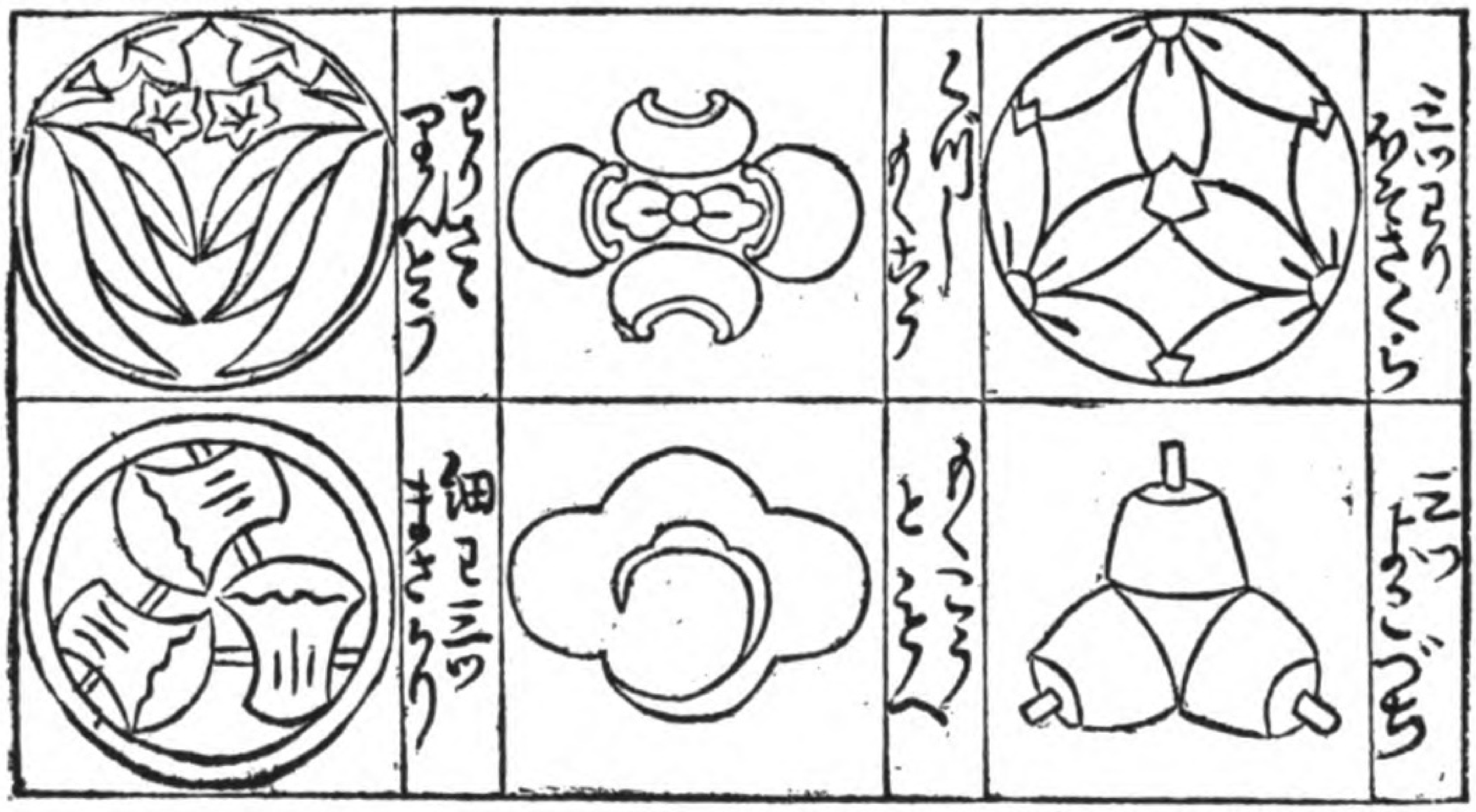
銅鍋の尻は能く灰で磨いてお置きなさい。

土鍋は瓦の坩爐と同じく、最初に強い火にあてると直ぐに罅が生ります。

鐵瓶 の内部は時々乾かさなければ不可ません、其には夜分休む前に蓋を取つて、餘燼のある火鉢の上に逆樣に伏せて置くと、好い工合に乾くもので、斯う致しますと湯の味も好くし、永くも保ちます。又た外面を清淨にすると言つて水で洗つては不可ません、朝、釜に湯を沸した時に、蓋の上から其の湯を浴せ掛け、而して鬱金の布片で丁寧に拭いて置る樣にしますれば、美い光澤が出るものです。

飯櫃 は第一に木の質を選ばなければ不可ません、一番良いとしてあるのは椹の木で造らへたもので、此の木の使ひ込んだのなら極暑の時分でも御飯の腐敗る憂ひが少う御在ます。

飯櫃を洗ふには、長く水に浸けて置いて能く乾燥かせば宜いのですけ



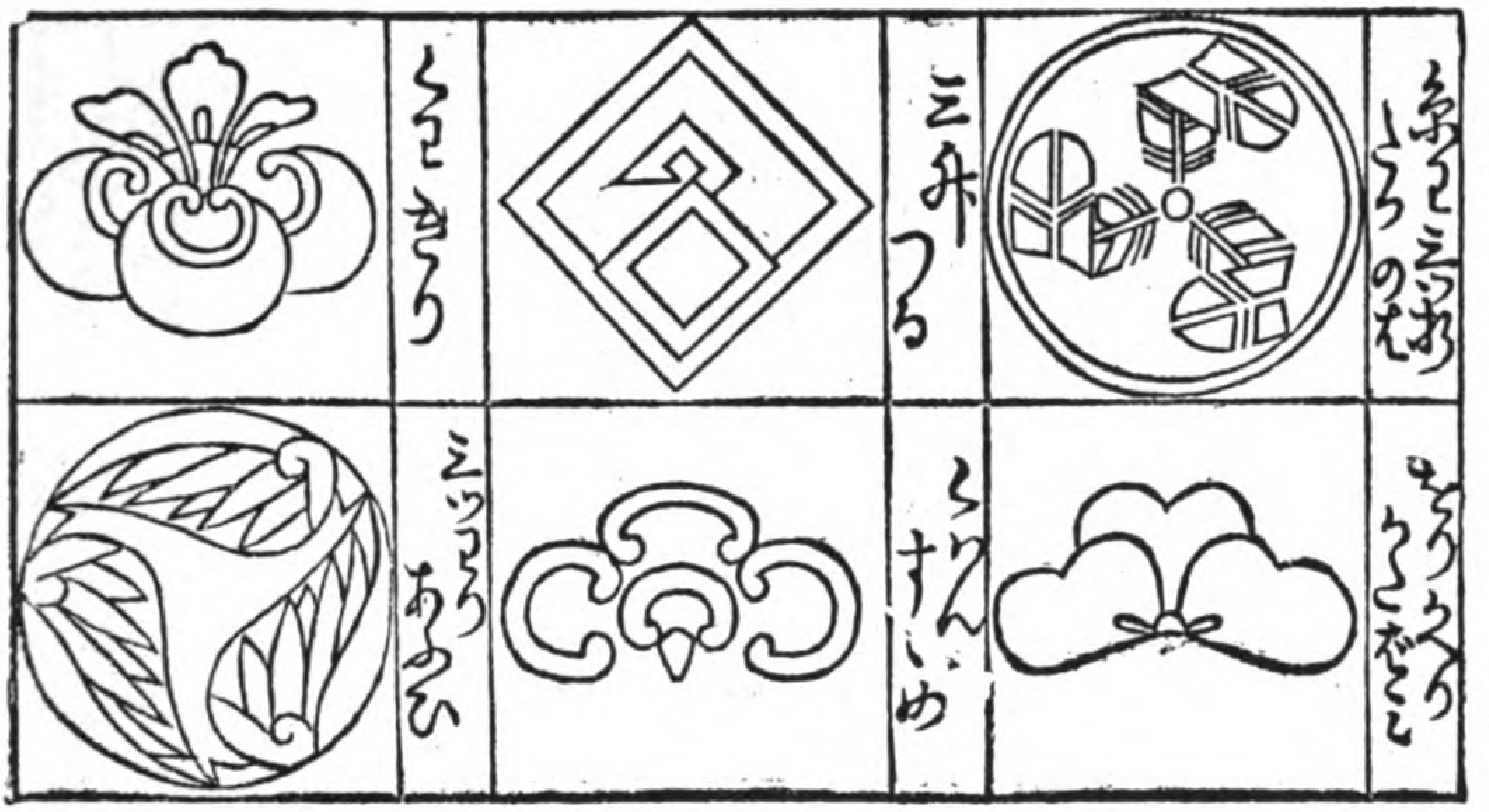
れども、未だ十分干もしない内に御飯を移す時は、夏向は早く腐敗します、左うかと言つて又た日に乾かし過ぎると板の繼目がバラ〳〵に離れて菊の花の樣になります、故に取扱方に注意することが肝腎で、手置さへ宜ければ五十年若しくは百年の久しき間も使用に堪えて、孫子の代にも讓れるので御在ます。

序手ながら、新處帶を持つ者は兎角小さいのを買ひたがりますが、何時まで二人や三人では居りません、追々子供も殖えて來ますから、大は小を兼ぬる譯で、最初から一升五合入か二升入の椹の飯櫃で、銅か眞鍮の金箍を掛けたのを選ぶ方が得策で御在ます。

手桶　は時々能く洗つて、外側は灰なり磨砂なりで磨いて、日に乾すのが宜しう御在ます、而して夜分は、逆樣にして水を切つて置くやうになさい、不注意の下女などはよく爲ることですが、手桶を地上に直接に置くことは、穢いばかりか、底の腐れの本でするから御注意なさいまし。

すべて桶類は小桶にしろ盥にしろ、是等の注意が必要で御在ます。

柄杓　は使つて了つたらば、手桶やバケツの中に漬けて置かないで、水を切つて、便宜の處へ掛けるとも、手桶の縁に架して置くともして水から揚げて置いた方が宜いのです、水へ漬け放して置くと終には柄の處

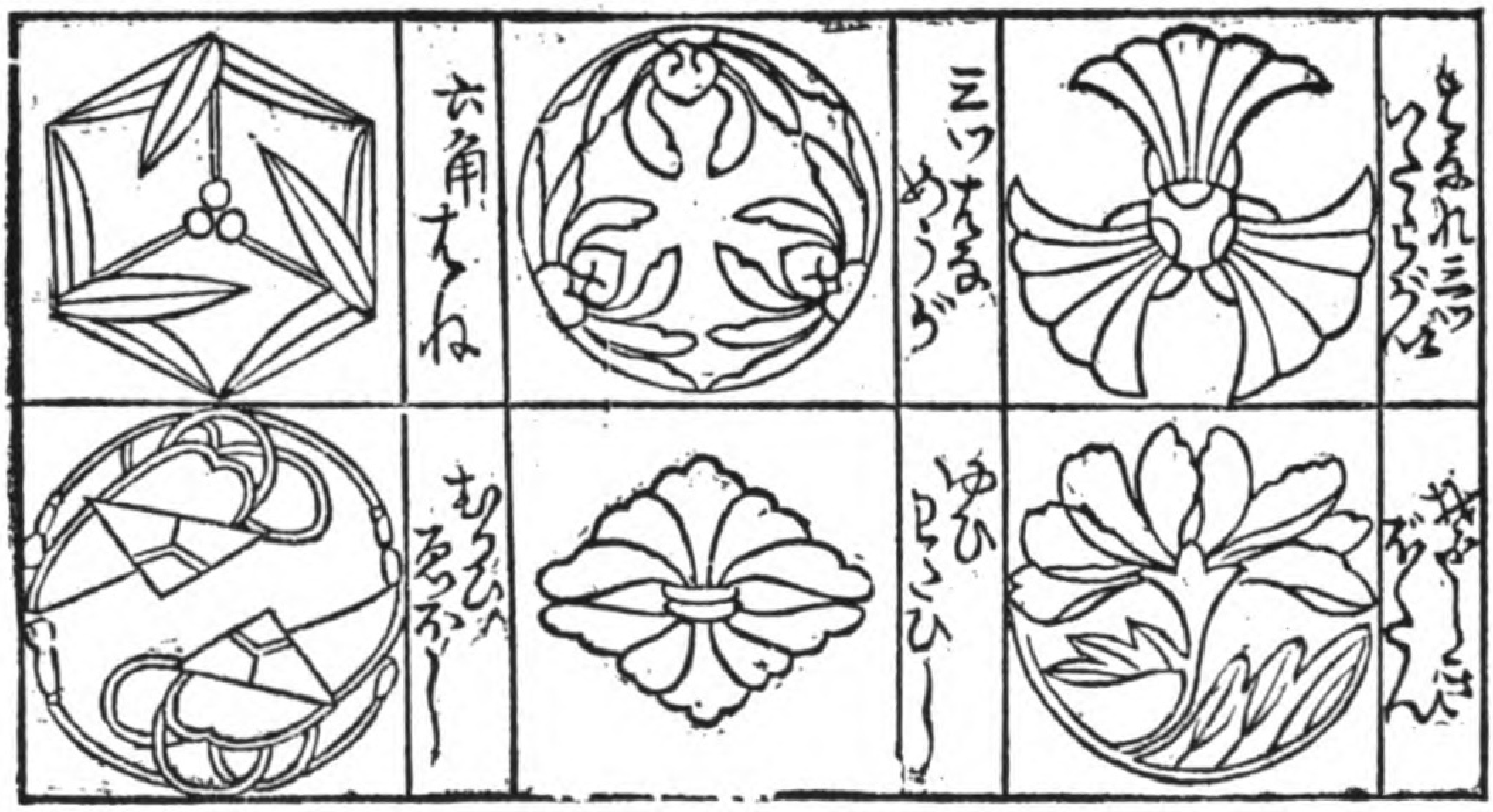


が腐れて折れて了ひます、當節は亞鉛の柄杓が行はれますが、是は太層使ひ易くて德用で御在ます。

俎板　は使用後ばかりでなく、初中心掛けて洗はなければ不可ません、よく世間の若い奥さん方の爲さる所を拜見すると、表面の中央部ばかり洗つて、餘は打棄つて置きますけれど、這麼事では決して十分とは謂へません、表面を隅々まで灰で洗つたら、引繰返して裏面を洗ひ、足をも縁をも全體にゴシ〳〵と、船頭が船を洗滌する樣な鹽梅式に丁寧に洗ひ清めなければ不可ません、是は獨り俎板に止らず、飯杓子にしても、匙にしても、菜箸の樣なものにしても、先端許洗つて置かないで、序手に手に把つ部分までも、淸淨にして置くのが宜いので、詰り行屆くと行屆かぬの區別は斯う云ふ處にあるのです。

庖丁類・菜切庖丁、刺身庖丁、出刄庖丁、切出シ、薄刄其他いろいろ入用でありますが、日々使用の多いのは菜切庖丁で、之は一番多く鹽氣に觸れるものですから、可成く銹させない樣に、使用後は能く灰で磨くか、砥石で擦るかして置かねば不可ません、而して使用後は庖丁掛に懸けて置くやうになさい、刺身庖丁出刄庖丁等も使用後は菜切庖丁同樣手置をよくして置くことです。

薄刄、刺身庖丁は鋭利を尙ぶもので、其の切味は桶へ浮べてある豆腐



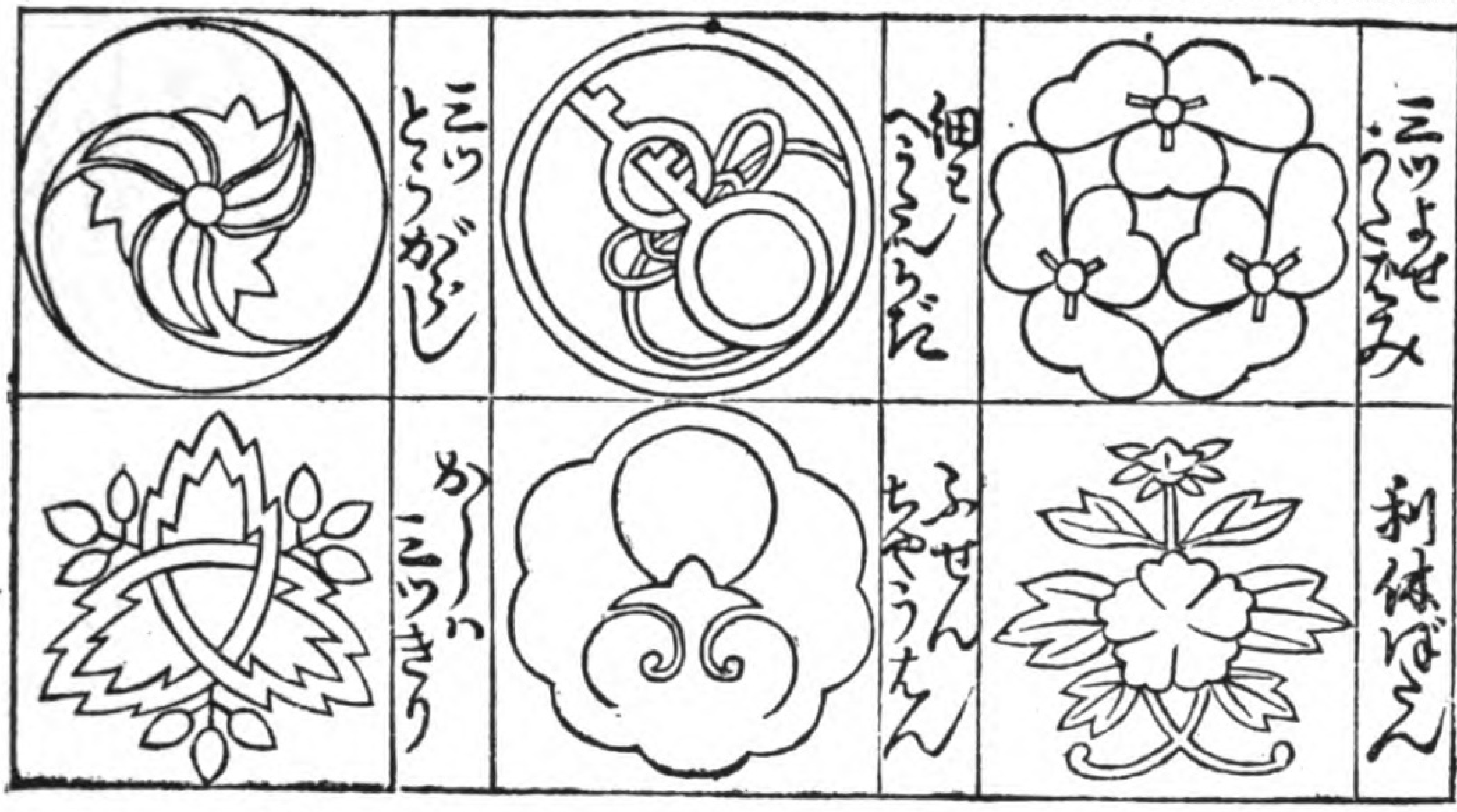
が即座にスーッと切れる樣でなければ、善い料理は出來ないとしてある位のものですから、よく磨いて置かなければ不可ません、鈍刄にして置く位なら寧ろ無い方が優で御在ます。

鼠不入　は欅のが一番堅牢でもあるし、使ひよくもあります、此の取扱ひに就ての注意を二つ三つ申しますと、

第一に内部を能く拭く事、何しろこゝは食器食品を納むる處ですから清潔の上にも清潔にして置く事が必要で御在ます、若いお方はよく下の板さへ清潔であれば良い氣で、其處ばかり一生懸命に御拭きになさいますけれど、天井から、後から、横、總てを拭かなければ何の効もありません、其れで之を拭くには膳拭巾を熱湯に浸して、丁寧に擦るのです、斯うして少くも一週間に一度は内部ばかりでなく外側までも綺麗に拭かなければ不可ません。

第二に整頓に注意する事、清潔に次いで、食器食品の入場所を極めて置いて、一定の場所に一定の物を納め、キチリンと整頓さして置く事です、例へば瀨戸物類を鼠不入の抽斗へ入れて置くと、引出す毎に觸れ合つて破れます故、こゝへは椀箸の樣な物を納れて置く等の注意は、最も肝要の事で御在ます。

第三に廢物を排斥する事、それから役にも立たない腐り物や、虫の付



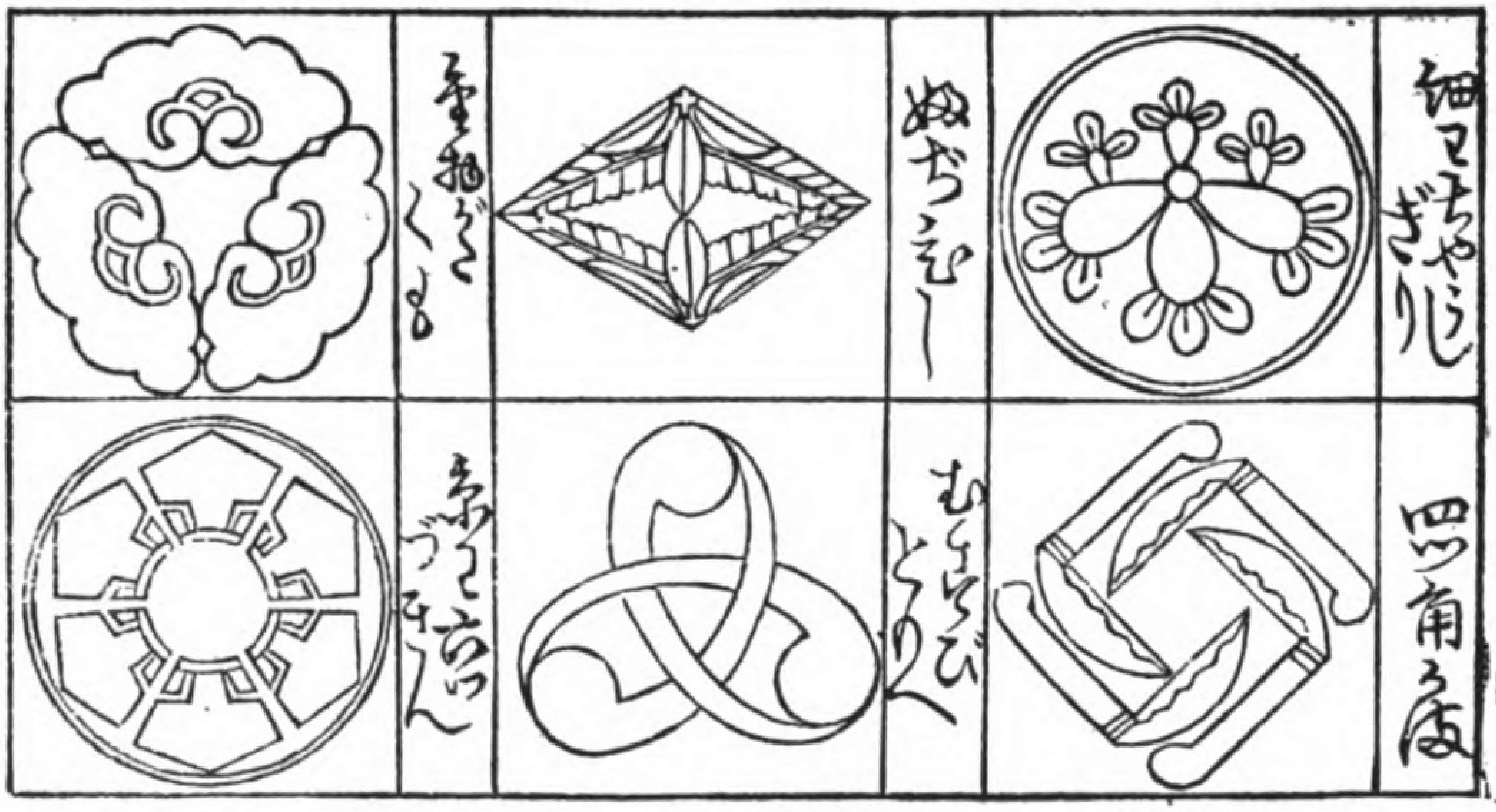
いた粉類などを納つて置きますのは、何の事はない虫を製造する樣なものですから、掃除毎には必ず廢物を取出すことに注意しなければ不可ません。

陶器類　は新調したら直ぐに釜に入れて熟く煮る事で、斯うすると丈夫に成つて保が宜う御在ます、寒い時など買つて匆々熱い物を入れますと、罅が生ることがありますが、煮ると左ういふ事がありません、又た使用後も汚れ目が見えたら時々灰汁で煮た方が綺麗にもなり丈夫にもなります。

陶器類は何に依らず取扱ひが肝要です、丁寧に取扱へば損傷することが少う御在ます。

水甕は水道の引いてある家では必要は御在ませんが、井戸から汲上る所では汲み置く爲めに是非共之を備へなければなりません、扨て水甕は何う云ふ物が宜いかと申すと、底に穴を明けあるもの丶方が、水を零すに便利で、從つてサヽラを入れて底を洗ふのに容易でありますゆゑ、自然清潔に成つて宜しう御在ます。

漆器類　は最も手置が肝要です、膳にしろ椀にしろ水氣があると剝げますから、使つたらよく丁寧に拭いて置く樣になさい。上等の物例へば蒔繪を施た物の如きは、拭巾で拭いた後、更に紅絹の布で拭いて、白



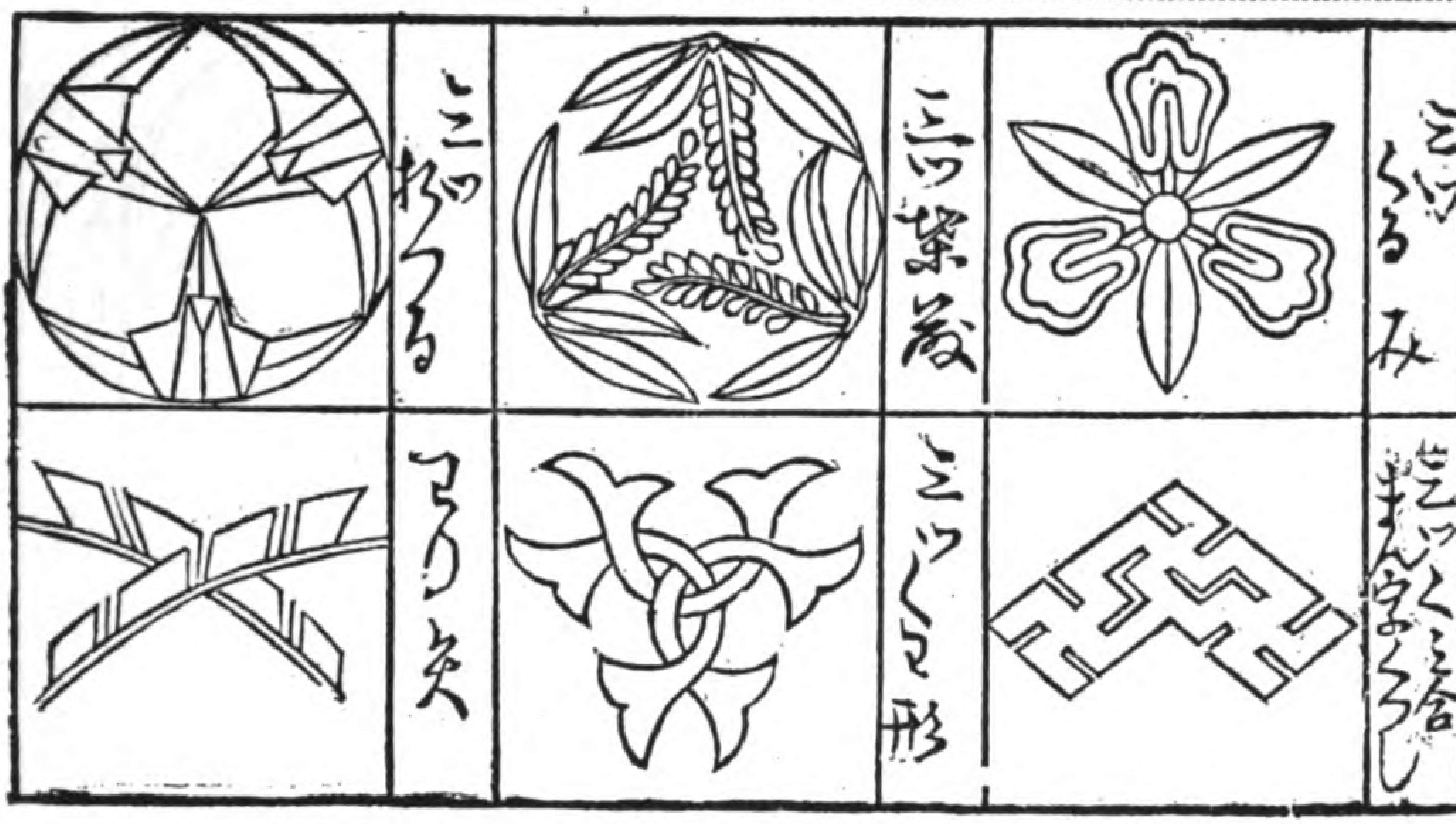
布を掛けて藏つて置くやうになさらぬと不可ません。

笊類 は終日、日光に干して置いては傷みますから、凡そ三四十分間干して、水が乾いたら直ぐに御取込みなさい。

網類 魚網は使つたら直ぐに洗ひ落して了はないと不可ません、銅網になると矢張緑青が生きますから、よく洗つて水を切つてお置きなさい、鐵弓も網同樣洗はないで置くと錆び腐りますから御注意が必要です、餅網は中央部の處ばかり火に掛けますと、終に其處が燒け焦げて丸く穴が明いて了ひますから、順番に隅々までも火が當るやうに、數々位置を變換すると云ふ注意が要ります。

瓶類 は硝子瓶にしろ、德利にしろ、德利差に挿して置いた方が、倒す恐もなければ零す心配もなくて宜しう御在ます、而して是は栓をすることを忘れてはなりません。瓶の中にコロップの落ちた時は、系を輪にして入れて引出すと、其に引懸つて譯なく上つて來ます。又た德利、瓶の内容を洗ふには、玉子の皮殼を碎いて入れ、水と一緒に振つて洗へば、内部の滓や塵が除れて清淨になるものです。

拭巾 は少くとも三通はなゝてはなりません、即ち茶器を拭くものと、膳や盆を拭くものと、其他の食器を拭くものとは、何うしても別にする必要があります、而して三度使用致したら直ぐに熱い湯で洗ひ出し

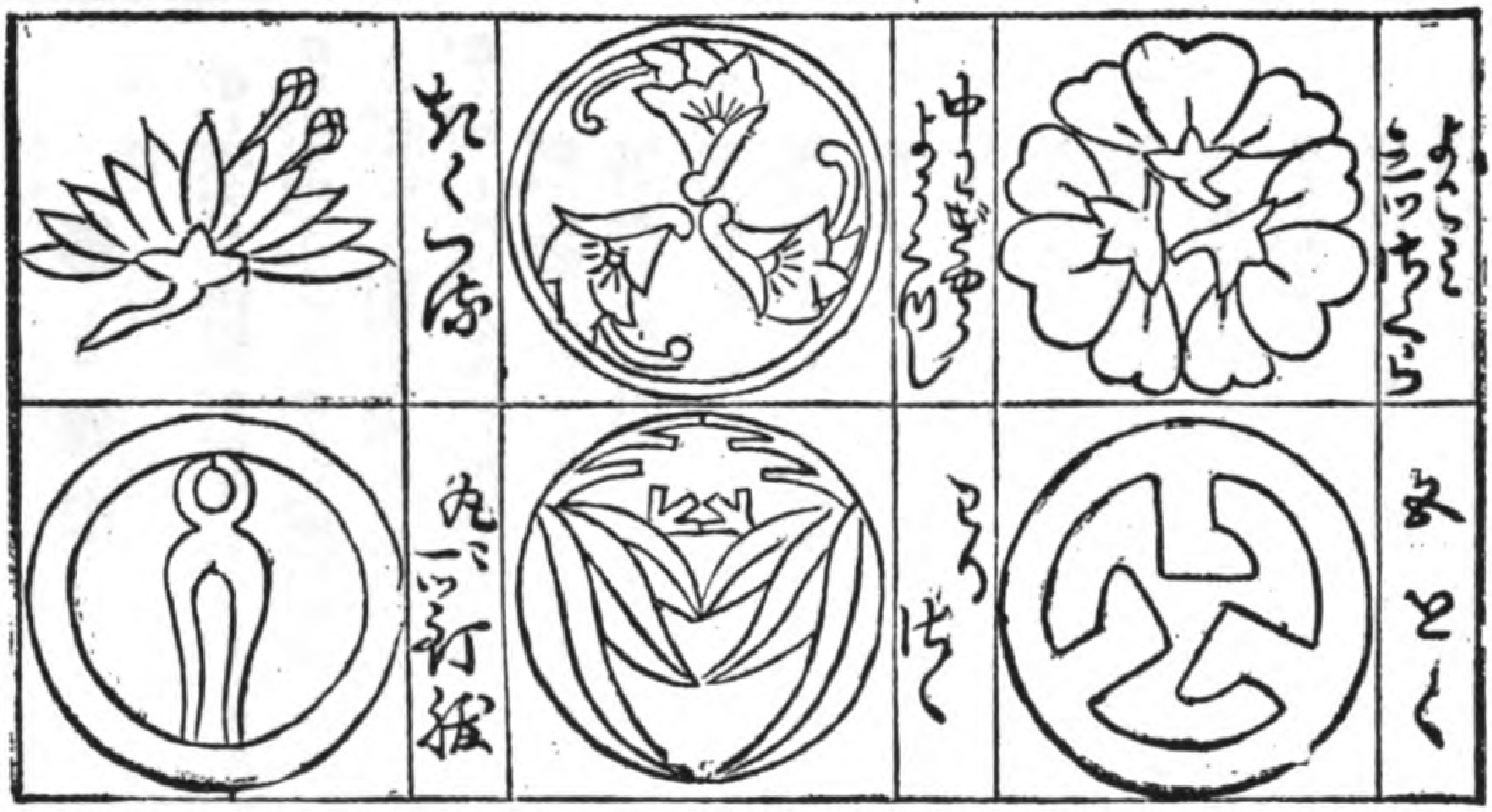


て日に干すことを怠つてはなりません、大概何處の家でも薄墨色位に成つてゐるのを平氣で使つて居りますが、汚れた拭巾は氣持の惡い許でなく、衞生上にも毒でありまして、拭巾の不潔から病毒を受けることは往々ある事ですから、よく〳〵氣を御付けなさらぬと不可ません。

されば拭巾の洗滌には意を用ゐて、茶色墨色にならぬ樣に、何時も何時も眞白にして置きたいものです、茶色墨色は拭巾の役目を免職して雜巾にでも爲て御了ひなさい。

たわし　には刈萱だわし、棕梠だわし、簓だわし、繩だわし抔がありますが、此の四種は夫れ〳〵用途を異にして居ります、即ち刈萱は飯櫃、桶、手桶等を洗ふに適し、棕梠だわしは刈萱の代用になります、但し棕梠のは能く注意致しませんと、毛が殘つて不潔で御在ます、それから繩だわし、簓だわしは前の二者よりも以下の勤務を致します、今此の四者の使ひ方を申さうなら、釜、鍋を洗ふに當つて、先づ刈萱で内側を洗ひ、次に外側を繩だわしで、磨砂を付けて洗ひ、終りに流床の不潔に成つた處を簓だわしで、能く隅々まで洗ひ流すので御在ます、其れですから此の三通りは是非必要です。

雜巾　臺所用の雜巾に付いては拭巾の茶色に成つたのを利用して使ふこと、但し系にて刺して使ふこと、緣側用と勝手用とは混用すまじき



こと、使用後は能く丁寧に洗ふべきこと、雑巾掛は日光のよく當る處へしつらひ置くべきこと、是等が必要の條件であります。

箒　勝手用の箒は坐敷用の箒の廢りを卸すのが經濟向です、臺所箒は一週間に一度は必ず洗ふことが必要です、眞黒黒の黒箒を使つては清淨に掃けない許でなく、着物の裾や足袋の裏を汚して、上草履を穿いた位では追付かず、這麼不潔な事は御在ません、因に稈心箒は鹽水で洗ひますと先端が折れないで永保が致します。

薪　は雑木と堅木とありますが、堅木の方が徳用で御在ます、堅木の中でも海濱の山から伐出したのは、潮風に觸れて居りますから、質が堅固で、從つて燃出があり餘程經濟向です、又た薪を竈にくべる場合には、豫め竈の中に俗に「ウマ」と稱する鐵製の薪架を設置ひまして、之に薪を載せ掛けて焚いた方が、火の燃え方もよければ、餘燼を取るにも便利であります、それから薪は餘り澤山に買込で半年も一年も蓄つて置きますと、油氣（植物性の揮發油にして火のよくもへるもの）が脱けて性が脆くなり、燃してペロ〳〵に燒け切つて了ひますから、餘分の買置は御控へなすつたが御爲で御在ます。

炭　は土釜と堅炭とを混せて使つた方が宜しい、而して大炭は火鉢に用ひる様にし、細い炭や粉炭は坩爐に用ふる様になさい、俵の底に粉

箒と雜巾

箒と雜巾とは洒掃の要具也、されど其の使用法を誤る時は何んにも成らず、梅野松溪と云ふ人の書きたる「掃除の心得」中に擧げたる所は、能く箒と雜巾の使用法を說明したり、曰く、

イ　箒は棕櫚にて作りたるをよしとす、柄の竹は曲らざるを用ゆべし。

ロ　箒は表と裏とかはる〲使ふべし。

ハ　柄の頭を右の手にて、中程を左の手にて持つべし。

ニ　掃き方は少し斜にたてたるをよしとす、あまり斜にする時はよろしからず。

ホ　箒は其の穗先にて輕く掃くべし、然らざれば塵は去らぬものなり。

ヘ　あまり力を入れて掃く時は、箒の損するは勿論のこと、よく疊を損ずるものなり。

ト　箒の先が切れたる時は新しきをつかふべ

炭許溜めるのは大層な損で御在ます、それから炭は使用する前に當つて俵の上から水を注けるのが宜しい樣です、斯う致すと火保がよく成つて德用でもあれば、又取扱ひに手を汚す恐れも少いので御在ます。

米

砂の入つた白米は衞生に毒であることは無論の話で、其も搗立は左程でもないが、日を經るに從ひ、其の砂が米粒に固着して如何程磨いで流しても到底脫れません、而して炊いてから黑味を帶びて、綺麗な御飯の出來ないものです。其れで此の砂の入つた白米は磨いで磨いで磨ぎぬかなければなりませんが、田舍あたりで手搗の米を用ゐる場合は、餘り磨ぎ拔かない方が米の質を損めないで宜しう御在ます。

御飯の炊き方は磨いで直ぐに炊きませんで、凡そ二三時間は水に漬けて置いた方が、ふつくり炊けて體裁もよければ味も好う御在ます、水加減は水深凡そ八分を適度とし、火の焚き方は最初どん〲中ちよろ〲の燃加減に致し、沸騰した時に火を引いて了つて、餘燼ばかりにし、吹き溢させない方が飯の粘着氣を失はないで、味も好いのであります、異のある御飯や、焦付いた御飯を拵へるのは大層な不經濟で御在ます。

米は一度に澤山搗いて置きますと、鼠が減つて損な許りでなく、夏期は虫が喰つて損の上にも損の上塗を致します。

鹽　は小買の方が經濟です、澤山買つて置きますと梅雨時分は溶け

し、古きは却て損するものなり。

チ　新しき箒は、その毛を鹽水に漬けて後、よく乾したるをよしとす。

リ　塵拂ひは、其長き柄を二尺と定む、あまり長きはよからず、紙は美濃紙をよしとす、一寸ばかりに截ちて、これを三つに折り竹の本の所五分ばかりにて、横竹の小きを入れ、糊をもてその横竹の上より幾重にも貼り、別に生糸か又紙撚の強きものにて、一寸五分ばかりの所を固く巻き造るべし、これは店にて買ふよりは手前にて造るをよしとす、布片などにて造りしもあれど紙を一番となせり。

い　雑巾は木綿の強き布片を三重になし(幅は五六寸長は七八寸)、木綿の糸にて刺子にしたるものをよしとす。

ろ　使ふには水にて能く洗ひ、かたくしぼりてよし、なましぼりなる時は跡つきてよ

て水に成て了ひますから極く損です、鹽は笊に入れて甕を受にして置くのが宜いので、斯う致しますと下の甕に苦鹽が滴れて溜り、従つて濕氣もなくなつて、サラ／＼とした善い鹽になります。

味噌　は自家で作つた方が徳用です、三割の質は置いても味噌は自家で作れと婆さん達は言つたものです、自家で作ると少しの費用で澤山に出來て味も宜しう御在ます、たゞ黴るのと腐るのとの恐れがありますから、之を防ぐ手當が必要です。

今味噌の拵へ方をお話し申さうならば、先づ大豆(味噌豆と稱するもの)一升に米糀(若くは麥糀)一升と鹽四合の割合で用意致して、扨て豆を磨いて水に浸し置き、十分潤脹けた所で釜に仕掛け、水も多量入れて、最初は火をドン／＼燃して、次第に弱くし、水を引いたらば復た水を注して、凡そ半日間も焚詰で置くのです、其の煮え加減は豆粒を拇指と小指で押して見て直ぐに潰れる様な軟かさに煮えた頃を度として、火を引き、蓋を能くして蒸らして置き、餘まり冷めぬ内臼に移して、之を搗き砕いて後、笊に上げて冷して置き、糀と鹽とを能く攪交せ置いたのを冷めたる搗豆の中に加へて、能く搗き合せ、べと／＼に成つた時を見計らひ、之に豆の煮汁を稍々味噌豆の柔かに成る位に投入して後、之を吟味したる味噌樽の中に押馴らしながら入れて、其上に美濃紙を覆せて、

ろしからず。

は　あまりに汚れたる所は二度も拭くべし、又幾度も洗ひ用ゆべし。

に　使ひ古りて裂けたるものは用ゆべからず。

ほ　使ひ畢らば水にて能く洗ひ、竿にかけて干すべし。

へ　戸棚などを拭くものと、敷居などを拭くものとは別々になすべし。（舟人）

夜具の處置

一　衾は必らず毎朝起きて後に、少らく新鮮なる空氣に曝して、其中にこもれる濕氣を發散せしむべし、

一　夜具蒲團は久しく用ゆる時は、綿其中に硬結りて、人體より排泄しなる汚物もまた之に混和して一種不快を感じ、大いに健康を害するものなれば、數々太陽に曝して打ちて塵埃を拂ひ、能く乾燥せしむべし。

一　蒲團には白き敷布を被ひ置き、常に其の敷布を取りかへて洗濯するをよしとす。

蓋を確乎として蓄はへ置きます、斯うして凡そ三十日間許も經てば、熟れて使用に堪へます。

醬油　は小買をせずに樽で買つた方が經濟です、人によると下等醬油が徳だと言ひますが、是は大間違ひで、極く上等を選んで使つた方が餘計に要らなくて、利目もよく、又た料理の味も好くして、都てに大層の徳があります、醬油の黴を防ぐには、火の邊に陶器に入れて遠火に温め置くのです、若し又た黴びれば漉して煮立てゝお使ひなさい、尤も樽醬油なら黴びることは滅多に御在ません。

酢　は尾州半田の丸勘印が一等としてあります、小買は直ぐに味を失ひますから、買つたらば即刻に鹽を酢一合に付一撮程の割合で投げ込んで置く事です、斯うして置けば幾日經ても濁ることなく、從つて味を損することもありません。

堅魚節　は土佐節が一等です、其の選方は餘り大節でなく、小節を良いとしてあります、而して少しでも虫の食つてる節は煮だしが利きません、又た節の頭に割れ目のある物は原料の古いのを用ひた所爲ですから、是も亦た煮だしが利きませんから御買ひなさる時は此の邊に御注意なさい、又た蓄へ方は、大概炭灰に挿して置いたり、或は黴びたからと言つて天日に干すが、是は折角のだしを枯らす樣なものです。

應急心得草

應急心得草は不慮の外傷を受け又は急發の疾病を起したる時迅速に醫師を迎ふる能はざる時、臨機應變の處置を施して生命を保護する時の心得なり。

救急法は常に家庭と離るべからず、故に子を持てる主婦は平素の心掛を怠らずして其の大意を了解すべし。

救急法を行ふには適宜なる材料を要す、即ち消毒藥及び防腐材料なり、消毒藥としては常に石炭酸水、ザルチル散、軟膏、硼酸、明礬の類を貯へ防腐材料として昇汞ガーゼ、晒木綿、油紙等の類を用意すべし。

△卒倒の手當

卒倒は腦の震盪に由て起るものにして大人にもあれども小兒に尤も多し頭腦を劇しく打ち又は柱などに衝突し或は劇しく驚き又は出血したる時急に倒れて劇しく搐搦を搦く等

料理山海經

珍味の菓物

●林檎の蜜漬

半熟の疵なき林檎を選び、悉く皮を剝き、姑らく清水中に浸し置き、菓實中に含まれたる甘酸い液が稍々脫したる後、取上げて水氣を乾かし、蜜の中に浸し、七日間を經たる所で、別に壜若くは陶器に精製の砂糖を入れ、其中に能く蜜の滲入せる菓實を入れて、密封し、之を暗き處に貯へ置き、月を經て食すれば、其味ひ甚だ佳し。

●金柑の鹽漬

金柑の餘り熟さぬ内にとりて、水と鹽と等分に煎じ一夜さまして器に入れ、金柑とピタ〳〵にして風の這入らぬやう目張をしてかこふべし、而して遣ふ度に上水をこぼしてピタ〳〵にして置くべし、味ひ甚だ妙にして、いつまでも保つものなり。

●柚の青漬

柚の實のいらざる青き内に取りて、寒天を流して灰のあくを附けて、きなこ團子の如くにして壺に入れ、目張をして貯はふべし、使ふ時微溫湯に

に由つて一時氣絶して人事不省となり、精神朦朧として氣分遠くなり、目も見へず、耳も聽へず、呼吸微かにして四體冷へ脉も微弱となり冷汗を催す、或は其儘死する事あり、(小兒は高き所より墜落して此の如き卒倒を見る事あり) 此際はまづ帶紐(洋服ならばボタン)を解き、身體を寛やかにし、身體を檢査し、外傷の有無を檢して應急の手當(外傷の部に詳し)を施し、頭部を高くして横臥せしめ、顔面に冷水を吹掛け、氷囊又は濡たる手拭もて頭部を冷却し、茶椀に酢を入れ其中に火を投じて揮發瓦斯を鼻孔に嗅がしむべし、而して酒又はアルコールを水に和して口中に與へ芥子末を湯にて濃く煉り、厚紙布片の類にて厚くのべて兩腕の上部と兩こむらに貼り付て冷水にて濡したる手拭に右の胸の下、即ち心臓の在る所ろを輕くうちフラネル片にて胸をさすり、足のひらを擦るべし、此の如くすれば大抵元氣回復すべし、回復すれば冷水を與ふべし、若し回復せざる時は次項の人工呼吸法を行ふべし。

て洗ひ落せば、色も香も失せずしてモギ立の柚の如く、味變らず。

●葡萄の蜜漬

葡萄の半熟の内に房を採り、剪を以て蔕を少し付けて挾み取り、葡萄の實百匁なれば、蜂蜜も又た百匁を倶に鍋の中に投じ、よく煮て笊の中に掬ひ揚げ、試みに一果を味ひ見て、蜜分よく平均するを適度とし、之を陰干にして器に入れ、固く封を爲し置くなり。

●柿の粕漬

蜂谷と云へる細長き柿を青きうちに取りて粕に漬るなり、自然澁味拔けて、大した甘味はあらざれど風味甚だ美なり、會席などにて香の物の附合せに適す。

●蜜柑の砂糖漬

上等の蜜柑を選びて皮を剝き、適宜の鉢又は桶に入れ、蜜柑五十個、白砂糖一斤、燒酎一升を入れ、之に蓋をかぶせ、日數凡そ一ヶ月程を經て食用となすべし、其味頗る佳良にして數ヶ月を經るも味更に變ることなし。

●李の蜜漬

半熟の李を採りて針にて刺し通し、手桶の清水に少許の食鹽を加へて攪拌し、而して又た蒸餾水を沸かして「マグチシヤ」五十匁を和合し、之を手桶に入れて右の李を投げ入れ、蓋をして翌日に至つて水を傾け去り、又

△窒息の手當

窒息とは食道の閉塞、毒氣、縊死、溺死、壓死、實死、凍死、其他に依て呼吸の機能を失ひ終に死するものなり、食道の閉塞は餅、團子の類を食し喉に塞りて呼吸中絶し顔面赤色を呈し人事不省となりたるもの、此時は指を喉中に入れ吐出せしむるか、又は俯して臥せしめ腹に枕を入れ強く背を打つ時は自然に吐出すべし、若し出でざる時は扇子の親骨を去りたるものを地紙と共に水中に濕し之を以て口中に押入し閉塞物を押込むべし扇子なければ箸の先端に綿を丸く結びつけたるものにて押込むべし。

△魚の骨の懸りたる時

食道に魚の骨の刺りたる時は米飯を丸呑にし又は麵包を少しくかみて飲むべし、若し是等の法にて治せざれば絹綿を球状となし之に長き糸を付け其端を握り水にて飲み下し更に糸を靜かに引き出すべし此の如くして骨を

た蒸餾水のみを以て「マグチシヤ」を注入す、而して能く水氣を乾かし蜜を入れ李を投入し緊く口をして放任り置くこと三十日たちて一箇を試みに食するに蜜分よく感染して適度と認むれば、笊にて悉く掬ひ上げ、能く乾かして壺に入れ、上蜜を適宜に注入して密封し置くなり、是は茶菓子として甚だ佳良なり。

●梅實の蜜漬

梅の實の半ば黄ばみし時、疵なきものを採り、上部の中心より針を以て核に及ぶまで刺し通し、又た四方よりも刺し通し、而して蒸餾水百匁、「マグチシヤ」五十匁を鍋の内に入れ、シヤモジを以て能く攪拌し、之に幾多の梅實を投入し、打捨て置くこと一日間にして笊の中に取り揚げ、蒸餾水を注いで洗ひ、再び手桶に右の梅を投入し、次に蒸餾水を沸騰し、梅の上より注ぎかけ濕し置くこと四時間ばかり、然すれば「マグチシヤ」消退す、而して器の中に蜂蜜を入れ梅の實を投入し置くこと三十日にして一箇を食し試むべし、蜜十分に感染するを度とし笊に掬ひ上げ、水分を乾して白糖を表したるものを壜に入れ、且つ布を温湯に浸して蓋を固くし、暗き處にかこひ置くこと數ヶ月すれば、食後の食料として好箇の美味を得べし。

●青梅の鹽漬

去りたる時は、油揚、天麩羅の如き油つよき物を食すべし。

△氣道に物の詰りたる時

劇しく咳をすれば吐出すれども萬一吐出せざる時は俯臥して胸に枕を當て背を打たしむれば吐出するものなり、指を喉中に入れてもよし。

△炭酸中毒

麹室、廢井、孔坑、若しくは密室に多人數集合したる時又は火鉢より發する炭氣等にて窒息し、人事不省となり、面色蒼白となり、皮膚冷却して死する事あり、此の時は直に空氣の流通よき室内に運び、衣服を寛くし、冷水を頭部に灌ぎ次項の人工呼吸法を行ふべし又四肢を毛布にて摩擦し胸と腹にも冷水を灌ぎ漸く覺醒する時は少量の酒、又はラム子等を與へ、此際睡眠に陷らんとする時は努めて妨害し、眠らしめずして醫師を迎ふべし、此の災害は室内に起る時は直ちに窓を開

梅の實の若きを取りて水に一夜ほど漬けて置き、翌日になりて水をきり、鹽一升に梅五合位の割合にて輕く押しを置くなり、斯くして漬けたる時は其の水を去りて、水氣を成丈け除き、新しき鹽にて漬けるなり、風味至つて佳し。

●柚の砂糖漬

青柚を採りて輪切りにして實のみ除き、簀の上に並べて十五六日間天日に干して、燒鹽に漬けて苦味を去りて後、鹽をはらひて三盆砂糖に漬けて、硝子の壜などに蓄へ置くべし、茶菓子として妙なり。

●梨の粕漬

あはゆきと云ふ梨の無疵なるを選び、梨の實と梨の實と當り合はぬやうに粕澤山にして漬けるなり。

●蜜柑菓子の製方

蜜柑六個、精製砂糖半斤、玉子の黄味六個、煮菓子の品二斤、是等の品品を揃へ置き、其製法は蜜柑の皮を去り、皮と共に細かにし、但し種を去り、其の液を搾りて其實を去り、汁と玉子の黄味を細かにしたる皮と混じ、又た之を煮菓子の品に混和して、之を靜かに三時間程煮詰むる時は、極めて美味の茶菓子を製し得べし。

●梨酒

くべきも井中、坑中等に起る時は救助者なも害するものなれば冷水を散布し又は大氣を吹き送り、手拭に水を浸し鼻目を掩ひて迅速に救ひ來るべし、又古井、廢坑の炭酸を檢するには蠟燭に火を點し垂れ下げて低部に達せしむれば炭酸の多量なる時は滅して光を失ふ、故に滅光したる孔中に冷水を散布し又は石灰水を注ぎ後濕布の覆面して下るべし。

△縊死の手當

縊死は氣道閉塞と同じければ最も迅速に手當せざれば多く生命を失ふ、故に體を抱き繩を弛め、切斷して横臥せしめ衣服を寬め、顔面に冷水を吹きかけ、手足腹部を手巾にて摩擦し或は溫湯を以て暖め、紙捻子にて鼻孔を攪拌し、噴嚏を起さしめ、又繩の壓痕を擦して消散せしめ、人工呼吸法を行ふべし。

△溺死の手當

溺死は水の爲めに呼吸を閉塞して死するものなり、まづ濡ひたる衣服を去り手拭にてよ

成熟したる梨の實を適宜に採り、之を桶に入れて核の碎けざる樣に壓碎し、之に水を加ふること其量百分の十乃至十五の割合にして、其儘靜かに一晝夜程置けば、自然に醱泡を生ず、そこで此の泡を發したるを見ば液汁を他の桶に移し、再び醱酵せしめたる後、其上に浮び出でたる澄清水を又た他の桶に移し、此時に至りても尙ほ泡を立てゝ炭酸瓦斯を發するものなれば、其桶の蓋は密封せざるをよしとす、但し梨の溶汁中に糖分を含蓄すること餘りに少きを覺ゆる時は、之に砂糖を加へて醱酵せしむべし、かくて釀造を終りたる時は冬季の間適宜の冷處に之を蓄へ置くなり。

●林檎酒

林檎の種類大小によりて製出高に增減あり、先づ普通の果實ならば果實一石六斗を以て林檎酒九斗餘を釀出することを得、其の法は林檎を碎き、少し經ちて其液汁を醞釀すること梨酒釀造に同じ。

●梅酒

大梅二箇、桂皮一分、沈木一分とを蒸餾して燒酎三升と共に、元水に抱き合すべし（元水とは紅花二十匁を木綿に包み、水一斗の中に浸すこと一晝夜にして白砂糖二百五十匁を投じ煮沸したるものなり）かくすれば四十分間程にて能く煮熟するものなり、煮熟したらば溫かなるまゝ食卓に出し、之に牛酪及び糖蜜を掛けて食すべし、其味淸涼にして芳味あり。

く水分を拭ひ、俯臥せしめ、腹部に枕を與へ頭部を低くして口を開かしめ、舌を指にて摘み出し、水を流出するに便ならしめ、次に紙捻子にて鼻の孔を掻き廻わし、くさめを催がし次に人工呼吸法を行ふべし、湯タンポを與へ、又は藁火を焚きて温かくし、毛布にて全身を擦し酒類、温茶、又はコーヒー等を與ふべし。

△壓死の手當

まづ鼻孔の土砂を去り、清洗し、衣服を寬くし、顔面に冷水を吹かけ、四肢を毛布にて擦り、紙捻子にて鼻孔中を探りてクサメを促がし人工呼吸法を行ひ、茶湯、酒類を與ふ而して外傷ある者は血止法を行ふ。

△縊死の手當

まづ衣服を寬かにし全身を横臥せしめ、頭部に氷嚢を與へ、四肢を摩擦し、紙捻子にて鼻中を攪拌し又は新氣を嗅がしめ、人工呼吸法を行ひて前記の手當をなすべし。

菓物乾燥法

水分多き果物を乾燥して水分を蒸發し、果液を濃厚にし、甘味を增加せしめて貯藏に便ならしむるは乾製の目的なり。すべて干製果物は一般に甘味強くして一種の香氣を有し且つ風味頗る高尚にして專ら菓子の代用をなし滋養の効あるものなり依て今其の種類並にその製法の大略を述べん。

〔干杏子〕これは杏の實のよく熟したるを指頭にて眞二つに割り、凹き方を上方に向けて板上にならべ、天日に向けて乾かすなり、天氣の都合さへよくば數日にして乾しあぐる事を得べし、されど蠅のつき易きものなれば務めてこれを防ぐの工風をなさゞるべからず、又砂糖又はアルコールに浸けて多く調理用に供さる、桃及び李の乾燥法も大略これに同じ。

〔乾林檎〕原料は甘種、酸種、苦種共に用ふべけれど、甘種最もよろし、實のよく熟して新鮮なるものを撰び、其の外皮を剝き、果心を拔き薄く輪切にして火氣中に乾かす又天候多濕にして陽乾に適せざる時は炭火の上に亞鉛製の金網を置き其上に並べて乾燥せしむ、又前者の輪切を乾燥器内に入れて華氏百五十度乃至二百度の熱度を加ふる時は凡そ二三時間にして乾上がるものなり。

〔干葡萄〕よく熟したる葡萄の皮厚く味甘美なるものを撰み（酸味強きも

△凍死の手當

嚴寒中野外を旅行し昏睡して人事不省となりしもの此時は直ちに暖き所に運ばずして冷所にて衣服を脱し、雪塊を以て全身を摩擦し漸次温布にて摩拭すべし、又始めより冷水濕布にて拭擦するもよし、此の如くして全身を柔軟ならしめ、寒冷なる臥床に横はしめ、頭部を低くし、足部を高くし、尚盛んに全身を濕布にて摩擦し、人工呼吸法を行ふ、皮膚既に赤色を呈する時は暖かなる處に移し、茶又は珈琲等の微温湯を與ふべし。

△中毒の手當

中毒の種類は頗る多し、藥物中劇藥、毒藥に屬するものはすべて其分量多き時は中毒を起すものなり、又酒類、蕈、河豚、鴉片、腐敗したる魚、蕈類、曼陀羅華、樒、馬錢木其他モルヒ子、ストリキニー子、水銀劑、鉛、銅の化合物、鹽酸、硫酸、苛性曹達、燐寸等の藥物最も中毒する事多し。

のは不可なり）焙爐のごときものゝ上に鐵網を置きて葡萄を其上にのせ弱き火にて屢々廻轉し皮果の皺を生ずるを待ちて乾燥す、右は普通の製法なるが、猶一層完全に製せんとならば、上等の葡萄を橄欖油を滴らしたる湯の中に入れ暫時浮ばせ其の果皮の皺を生ずるを待ちて取出し、暫らく大氣中に乾燥したる後糖蜜の液中に投じ、更らに取あげて陽干したるものなり。

豆腐料理十五品

豆腐は支那より傳來したるもの、割烹、調菜上最も輕便簡易にして風味の佳良なる、供給の容易なる、且つ市價の低廉なる、而して滋養に効ある、蓋し食膳の王たるに背かずといふべし。

△製　法

大豆を水に浸け、大約一夜を過ぎ、碓に掛けて碎き、其汁を釜に移して煮、荏の油少許をさして泡を押へ、布袋に入れて強く絞れば粘液は袋を洩れて外に出づるを桶に受け、これに苦鹽を加へ攪きまぜて槽に布を布きたるに汲み入れ、押蓋をして固めるなり、但し此の槽には四面に小孔を穿ち押して水の洩るゝ様に仕掛けしものなり、

△特　色

すべて毒藥に屬する物、及び藥物は其中毒の樣子多くは全身に亘り、倦怠、頭痛、惡心、嘔吐、等を催ふし、呼吸、鼾聲を帶び、流涎を惹し、呼吸中止して死に至る又劇藥類は多くは通過したる局部を侵蝕し、食道に沿ふて劇痛を起し、黒き物を吐出し甚だしく苦しむものなり、前者は菌中毒、河豚、鴉片、腐魚、茸類、馬錢木、「モルヒ子」「ストリキニー子」水銀劑等なり、後者に屬するものは酸類、アルカリ類、酸性鹽類なり。

すべて中毒の際は多量の湯又は水を飲み、嘔吐すべし、嘔吐を催ふすの法は指を口中に挿入すべし、此の如く多量の水を飲み、吐出すれば一二回にして胃を洗淨する故大抵は全治すべし、次に牛乳、生卵、葛湯等を多量に用ふべし、又頭部に氷嚢を置き、腹部に芥子泥を貼すれば大に腹痛を去るべし其他珈琲茶等を與ふべし、又呼吸中止したるものには人工呼吸法を行ふべし又鹽類硝酸、硫酸等の中毒には石鹼水又は曹達水或は石灰水等を與へ、牛乳を多量に用ふべし、又苛性曹達、青

豆腐は貴賤上下に通じて食用最も廣し、花晨月夕僅かに一丁の菽乳あれば又獻酬の佳趣を幇助し、其興味珍羞にも勝ること多し、而してこの物地方到る處ろに普くして如何なる僻陬、偏邑と雖も購ふに困難ならず、而してこの物、水分多しと雖も凍結して氷豆腐とせば固形體となりて久しく貯藏すべく、又油を熱して油揚となせば亦よく十日の蓄へを便ず、されば一朝不漁に際し鮮魚の市に上らざる時、臨時來客の即席饗膳必らず料を此物に資るを常とす、是を以て調味簡練なる庖丁に托すれば一種の豆腐以て厨下の百味を兼ねしむといふ。

△湯豆腐

豆腐を厚く切り、菓子昆布を鍋底に布き、（鍋の形に切るべし、これは豆腐の味を添ふると煮固まらぬ爲めなり）豆腐を其上に置き、又中央を少しくあけて猪口を据へ、堅魚ぶしの煮汁に味淋を和し、煮つめたるを入れ、水を多くして豆腐を煮るなり、香味には燒海苔、おろし大根、葱みぢん、唐がらし、陳皮などよろし。

△餡かけ豆腐

厚さ三分、縱橫三寸ほどに切り、湯を多くし、鹽を少し入れ、溫めて、葛餡をかける也、餡は葛粉を水にて溶き、醬油に少し味淋を和し、砂糖を程よく入れ、攪き廻しながら煮込むなり、香味には擦生姜、卸し山葵等よ

性加里等には酢を水に溶かして與へ又酒石酸の水液を與へ次に牛乳葛湯等を用ふべし、

△蜂に螫されし時

直ちに「アンモニヤ」水を局部に點滴すべし、或は鹽水にて洗ふもよし、蛇毒は其上部を縛り口を以てよく局部を吸ひ、苛性曹達を摩擦すべし、或は干柿、又は澁汁を局部に用ゆ、干柿は酢にて煉るべし。

△人工呼吸法

前記の如く急發病にて人事不省となり、呼吸中絶したる時囘復せしむるの法は鼻孔に紙捻子、羽毛、藁、葱等を挿入し、又は酢、「アンモニヤ」「エーテル」等を嗅がしめ或は顔部に冷水を吹きかけ、胸部を濕布にて輕く打つなどの外、直接に呼吸器を運動せしめ以て呼吸を回復せしむるの法あり普通にこれを人工呼吸法といふ。

まづ第一の法は患者を仰臥にし、枕を以て上體を高くせしめ、舌を引出し、紐にて結び

ろし。

△ぎせい豆腐

豆腐をくづし、煮ぬきて笊にあげ、水氣を去り、味淋を多く入れ、よく炒りつけ、醤油と砂糖少しを加へ煮あげて鷄卵をかきませ、角鍋に胡麻油をひき、焙りたるに詰め、上下より火を加へて燒くなり。

△雷豆腐

胡麻の油を煎りて豆腐を掴みくづして、打ち入れ直ぐに醤油をさして加減をし、葱の白根をザク〳〵に切り、卸し大根、おろし山葵にて食す。

△凍り豆腐

豆腐一丁を八つほどに切り、笊にならべ、沸湯をかけ、外へ出し、極く寒天に一夜さらし、翌日又湯にて柔らげ、浮きあがる時取あげ、少し押をかけ置き、又笊にならべ幾日も天日に曝すなり、時刻は夜中より後ちに曝らすをよろしとす、宵はよろしからず。

△鷄卵豆腐

豆腐をよく水を絞り、葛粉をつなぎに入れ、よく摺り少し堅めにして人參の眞のなきを丸むきにし、よく柔らかに煮て、右の摺り豆腐にて卷きつつみ、又竹の皮にて卷きくゝり、茹でゝ小口切にす。又人參の代りに薩摩芋にてもよろし。

つけ、次に兩腕を握り頭上に引上げ、二秒時にして再び膝の所に兩腕を復し、膝の兩側面を壓し、二秒時にして又頭上に引上げ、又引下るべし、此の如くせば大氣は自然と肺臟を出入して呼吸を回復するに至るべし。

第二法は患者を仰臥せしめ兩腕を背下に敷き、口を開き、舌を出し、結びつけ、次に患者の上に跨り其臀部を股に挟み、膝にて立ち兩手を以て胸に並べ拇指を以て「みづおち」の軟骨部を壓し二秒時にて急に手を放ち、二秒時にして又壓する事前の如く反覆するなり。

△挫創の手當

身體の一部を物體に衝突し、又は打撲し、車輪に轢かへされ、高所より落ち、牛馬に蹴られたる等にて皮膚を破り、若しくは軟部を挫傷したるものを通例打傷といふ、(すべて挫傷したるものを通例打傷といふ)すべて挫傷は赤色を呈して腫起り或は紫色を呈するものなり此際には濕布を當て冷水を以て冷却し

△なじみ豆腐

上々の白味噌をよく擂り、酒にて中薄にのべ、豆腐を適宜に切り、二時間あまり浸し置き、其まゝ文火にて煮立つるなり、藥味には葱の白根ザク／＼青蕃椒、卸し大根を置く、柚味噌にて食するもよし。

△石燒豆腐

一體石にて燒くものなれど略して燒鍋を用ふるなり、其法は炭火を熾こし、鍋に油を少し入れ、よく塗りまわして萬遍なく油を布くなり、而して豆腐を一寸四方、厚三分ばかりに切りて鍋に一寸置けば躍り動くなり其時鷄卵を匙にて打返し、直ぐに用ふるなり。

△揚流し

豆腐を適宜に切り、胡麻の油にてあげ、鍋より直に水へうつし入れて、油氣を去り、別に葛湯をぐら／＼沸らし置き、油ぬき豆腐を入れ湯奴の加減にて山葵味噌をかけるなり、但し山葵味噌の製法は味噌に白胡麻、胡桃等をよく擂り合せ置き、用ふる時、擂山葵を入るゝなり。

△木の芽田樂

温き湯を淺き桶の中に貯へ之に豆腐を入れ、切るも、串にさすも皆その湯の中にてするなり、柔らかなる豆腐にても、危ふく落つるなどの憂なし湯より引あげ直ちに火にかけるなり、味噌に木の芽を用ふる事勿論なれど

成可は氷嚢を以て冷却すべし、若し著るしく着色し、其儘置き時は百倍の石炭酸を以て濕したる濕布を施すべし、出血する時は其部を二十五倍の石炭酸水又は清水にて能く洗ひ二十五倍の石炭酸水に浸したる濕布を巻き其部を高くして靜息して直に醫師を招くべし。

△擦傷の手當

すり傷の時は直に冷水を以て傷部を洗ひ、前記の石炭酸濕布を施すべし。

△打撲の手當

これは皮膚に損傷なき挫傷にして濕布を以て強く其部を壓迫し、其上より氷嚢を以て冷却すべし。此如くして一週間を經て膿水を生ずる事なければ沃度丁幾を塗布すべし輕きものは最初より只沃度丁幾を塗布するのみにて差支なし。

△創傷の手當

も、甘酒の固ねりを味噌の十分の二、さし加へ、擂りませれば尤も可なり。

△霰豆腐

水をよく絞りたる豆腐を小さき賽の目に切り、笊にて振りまわし、角を取りて油でザッとあげるなり、調味は好み次第。

△飛龍頭

豆腐の水を絞り、よく擂り、葛の粉をつなぎに入れ加藥に皮牛蒡の針、銀杏、木耳、麻の實又小骰ものには燒栗、慈姑の內一品入れ、又加藥を油にて煎りつけ、麻の實は後に入れて豆腐に包み大小よろしきに隨ひ又油にて揚ぐるなり。又饂飩粉の衣をかくるは最もよし、煎り酒に卸し山葵、或は白酢に山葵の針を置くか、又は田樂にして靑味噌に罌粟を撒るをよしとす。

△松重豆腐

水禪寺海苔をしき擂り豆腐を鷄卵白身につなぎ入れ、海苔の厚さ一倍にのべ布き蒸して味をつけるなり、切方は好み次第。

△海膽田樂

海膽を酒にてよき加減溶き用ふ、常の田樂のごとし、對馬と、肥前の平戸より產する海膽を最上品とす。

△鹿の子豆腐

これは其種類甚だ多く切創、刺創等ありいづれも盛んに出血し、甚だしきに至つては人事不省に陥る事ありて生命を失ふ故に其創大なれば到底素人の處置し難きのみならず、出血従つて多く危險なるが故に血止法を施して速に醫師を招ぐべしすべて創傷を蒙りたる時は清潔を第一とす故にまづ清水又は前記二十五倍の石炭酸水を以て其部分を洗ひ、附着せる不潔分、血液等を去り、自然に出血の止まるを待ち（能く洗へば自然に止血する事多し）切口を接合して石炭酸水を以て濕したる綿を以て掩ひ、白木綿を以て巻くべし、然る後傷部を高くし、靜かに保つ時は全癒すべし、此際直ちに不潔なる布片を以て局部を包み又は清洗を怠る時は甚だ害あり、故に出血に狼狽する事なく、速に清水又は石炭酸水を以て洗ふべし、又石炭酸の備へなき時は水洗の後切口に白砂糖を盛り、白木綿を巻くも可なり。

△骨傷の手當

水氣を絞りよく擂りて煮過ごさぬ様によろしき加減に赤豆を交合せ適宜に取りて蒸すなり。其上の調和は好みに任すべし。

鷄卵料理十品

〔カステラ玉子〕

鷄卵をとき、山の薯をおろして十分に掻き廻し小麥粉と砂糖をほどよく入て擂りませ、燒鍋にて燒くなり、新海苔に茗荷の芽などを入て吸物とす。

〔玉子しんしよ〕

よき葛粉を水にて溶き、鷄卵をすりませ、味淋醬油を加へ、鉢に入れて蒸籠にて蒸すなり、豆腐のごとく固りたるを金杓子にてかきとり、葛あん掛にてもよし、又其時の野菜取あはせ椀盛にもするなり。

〔ふきよせ〕

鷄卵をゆで、白身と黄身とをわけ、裏ごしにかけ、鹽と砂糖にて味をつけ、まづ白身を箱につめ、其上に黄味をつめ、ザット押をかけて蒸籠に入れて蒸すなり。

〔きみ酢〕

鷄卵をゆで、黄身ばかりを裏ごしにして酢に少し鹽を入れたるにてザツ

これは種々の過失により或は外物の衝突により骨を折りたるものなり、此種の傷は身體素人の治療し難きもの故、患者を靜臥せしめ徐々に其衣服を去り局部を靜かに氷嚢にて冷却し、然る後醫師の來るを待つべし、總て骨傷は動搖せしむることなく安靜を保つこと尤も肝要なり。

△異物竄入

皮膚に竹木の尖りたるもの挿入したる時は速に毛拔にて拔去るべし、若し拔き能はざれば熱濕布を繃帶に入れたるものにて局部を溫め膿を持たしめ、破開して挿入せる竹木を去るべし、後油を塗布すれば治すべし、又耳の中に豆、小石、果物の核等を入れたる時は馬の尾を彎曲して異物の側より靜かに其の奥に入れ、之に引かけて毛の兩端をよじ合せて引出すべし、若し出でざれば、紙捻子の端に膠又は麩粉の類を附け其先を耳中に挿入して異物に當て暫くして後徐かに引出すべし。多くは粘着して出づるものなり。又夏日、

ト炒り、鯛又は海老、サヨリ、キス、甘鯛など當座酢の魚を仕立つるごとくにして箱に入て押すなり。

〔茶碗むし〕

鷄卵を溶きよくかきませ、かつぶしの煮汁と味淋醬油とを加へ、茶碗に入れ蒸籠に入て蒸すなり。

茶碗種には魚、鳥、銀杏、きくらげ、せり、三つ葉等入てよし。

〔鷄卵豆腐〕

鷄卵をよく解きよく攪き廻し、煮汁に味淋醬油を合せたるを卵の半分ほどに入れ、猶十分にかきまわして、丼に盛り、蒸籠にて蒸し上げるなり。

〔泡雪たまご〕

玉子三ツばかりの白身ばかりを鉢に取り、茶筅にて攪き廻はし、泡立ちしをかつぶしの煮汁に味淋と醬油を加へ、十分に煮立たる中へ、杓子にかけて一とすくひづゝ別々に入れ、少時にして固まりたるを椀に盛るべし。なま海苔、しん菊の根など取合せてよし。

〔フライエッグ〕

鍋の上にて油にて燒きたるものなり、フライ鍋を火上に用意し、バタをよく敷き、其上へ卵を形のまゝにて落し、固まるまで燒き、鹽、胡椒をふりかけ皿にうつして供す。

蚊、蚋、蜂等の耳中に入りたる時は胡麻油を注入すべし痛みも去り蟲も出づべし若し蟲出でざる時は夜間突然光を見せしむれば驚ろきて出づべし。又耳脂の溜りて聾となる事多き故時々耳中を温湯にて濕ほし耳搔にて去るべし。

△火傷の手當

これは熱湯又は火、蒸氣、腐蝕薬等にて身體の一部を損傷するものにして普通の病狀を三種に區別す、第一は皮膚に疼痛を感じ、紅潮を呈し、僅かに膨起するものにして第一は多少水泡を生じ泡内に水樣の透明の液若しくは黄濁せる液を蓄へ第三は皮膚に潰爛を生じ灰白色、又は褐色、黒色を呈することあり、火傷の大なるものは發熱して譫言を發して或は生命を失ふ事あり。

右第一の火傷は直ちに冷水を灌ぎ冷やし後油を塗り或は饂飩粉を散布し又馬鈴薯、大根おろしをつけ綿にて掩ふべし、其局部は常に氷嚢を以て冷却するを可とす、第二の火傷は

〔カスタード〕

まづ玉子五個を黄身と白身を別々にとき砂糖大さじ五杯、牛乳三杯半、ナツトメツグ小さじ一杯、右共によくまぜて深き鉢に入れ、弱き火加減のオーブンに入て固めしむるなり、冷して食す、之を小さき茶碗數個に入て、焼くもよし、

〔オムレツ〕

玉子六個、黄白を別々にとき、牛乳大匙三杯、鹽ならびに胡椒少しばかり（これは味をつけるに用ふるものなれば隨意に加減すべし）さてフライ鍋に多量のバタを敷きて熱くし卵の黄味に牛乳、鹽、胡椒を加へ、終りによく溶きたる白身の泡を混じ、直ぐに用意の鍋中へうつし込むべし、熱するに隨ひ三四倍に膨脹すべし、既に上下固まりたる時薄き庖丁にて卵と鍋の間を靜かに別たしめ、中央より二つに折り、碎けぬ樣注意して皿に入るべし、このオムレツは出來次第食すべし、然らざれば下縮して美味を失ふものなり。

〔肉入オムレツ〕

前方同樣に製すれども卵を右の半量用ひ、肉を包む皮のごとくになすなり中へは左のものを入る。

牛肉、又は鷄肉及びハム、のいづれにても細かく切りたるものと、葱を

水泡を生ずるものなれば其一部を針にて破り含みし液を出し被膜を去ることなくして之に亜鉛化軟膏又はメリケン粉の濕布を施し靜かに保ち氷嚢にて冷すべし第三の火傷は冷水にて冷し石炭酸濕布を施し直ちに醫師を招ぐべしすべて此の患者は渇を感ずるもの故冷水又は「ラムネ」を與へ氣分惡しきものには酒類を與へ又寶丹、清心丹を與ふべし、藥品にて負傷したる時は直ちに冷水を以て局部を洗ひ牛乳又は石鹸水を塗布すべし。

△凍傷の手當

凍傷は皮膚紅色となり或は水泡を發し、潰れ壞るゝものなり、この時には急劇に温度を加へず、冷水濕布の摩擦を行ひ、快温を感ずるに至りて軟らかに布にて拭ひ、油を塗布し木綿にて輕く巻きて其部を高くし靜かに保つべし。

△咬傷の手當

咬傷には犬又は其他動物に咬まれたるもの

細末にしたものを交へて油にてあげ、用意のオムレツの上へ一面にのせ折り込むなり。

大根料理八種

〔風呂吹〕冬大根の皮を去り、厚く輪切にして食鹽を少し加へ、煠で、三回ほど煮汁をこぼし、新たに水をさし煮て辛味のなくなる頃ろ、水にてよく洗ひ、鍋の蓋を堅くして、軟らかに蒸し、鰹節のだしを入てよく煮、胡麻味噌を添へて出す。

胡麻味噌のつくり方は黒胡麻を炒り擂盆にてよく擂り、漉して砂糖、味淋を加へ、火にかけて煉りつむべし。

〔甘漬〕中位の大根を小皺のいるほど日に乾かして、白米を炊ぎよくさまし、麹と、鹽を加へてつけ、壓をかくべし、水の揚りたる時直ちに壓を輕くし、大凡七八十日を經て漬上るなり、この法によりてほどよく漬るときは夏季に至りても食味變ることなし、其割合は大根百本に米、麹各一斗づつ、鹽は三升入るべし。

〔當座味噌づけ〕冬大根を薄く輪切にして、皺のいるほど大陽に乾かし、味噌に酒を加へ解きてつけ込むべし概ね一週間にして食用に供さるべし。

と蟲類に刺されたるものとの二種あり、狂犬及び毒蛇最も恐るべし、此の際には手拭の類にて局部の上方を堅く縛り毒質の全身に蔓延するを防ぎ創部よりなるべく血を出し、且つ口を以て毒を吸出すべし、然る後ち多量の茶を飲み、或は「ラム子」を飲みて發汗と小便を促がし、酒を飲みて沈醉せしむるもよし。又蜂、蜈蚣、南京虫に螫されし時は食鹽水にて洗ひ茶の揉み汁をつけてよし、又アンモニヤ水をつけてもよし。

△血止法

創傷の爲めに出血する時は冷水又は石炭酸水を灌ぎながら其部を高くして靜かに保持すれば止まるものなり、若し止まらざれば直ちに止血法を行ひ醫師に行くべし。止血法は種々あれども醫師にあらざれば行ひ難き故實行し易きものゝみを示さん、即ち清潔なる木綿又は綿を傷部に掩ひ指にて強く壓さば止まるものなれども血液迸流して止まる模様なければ小石を手拭に包み傷部に當て固く縛り

〔味噌づけ〕柔らかに煮たる大豆の煮汁へ鹽を加へて大根をつけ、押をかけて二週間ほど過ぎて取出し、太陽に乾かして鹽辛き味噌一貫目に大根二本位の割合にて漬るなり、又味噌桶の底につけ込み、上に味噌を置くもよし。

〔粕漬〕大根を熱湯にくゞらせ、一日太陽に乾かし、よき酒粕に鹽少し許りて和して桶に漬けこみ、壓石を置き水の上りしのち、漸次に壓を輕くし粕を増すべし、守口大根を漬るもこの仕方によるべし。

〔巻大根〕大根の皮を去り、長さ一寸ほど薄く丸くむきて、うづまきの如くにし、合せ目に練り葛粉を挾み、ゆでゝ蕎麥醬油につけるなり。蕎麥したぢは醬油五合、味淋三合にかつぶしの煮汁を加へ煮返したるものなり。

〔細根のあちやら〕大根の莖を殘し、首尾を去り、ざつと煠でゝ醬油味淋を合せ、煮つめたるに漬込むなり、但し唐がらしを刻み入るべし。

〔百一漬〕有觸たれば略す

蕪の料理三種

かぶは煮物、又は鹽漬、糠味噌等の外左に

醫師を待つべし又途上負傷したる時は車にて運ぶは動揺して甚だ害あり、却て出血を促がし眩暈を發し失神する事あり、故に擔架にて運ぶをよしとす。

腕の出血は上膊の力瘤とする處ろの内側の淺き溝の所を壓迫すべし。

脚の出血は鼠蹊部と稱する股の附け根の中心な両拇指にて壓迫し或は小石又は銅貨を包み其部に當て紳にてれぢ廻し強く壓迫するなり。

顔面の出血は顋の尖頭と後角との間にて後方より三分一の所にて強く骨に向つて壓するなり。

右指壓力は甚だ便なるも患者を運び或は永き時間を經過するに便ならず故に手拭に小石又は銅貨を包み之を動脈管の所に當て兩端を結びつけ、之に筆の軸又は煙管を入てれぢ廻し堅くしめつけ、止血すべし。又藥品を用ふる法は十倍の明礬水に綿を濕ほし強く壓するなどいろ〳〵あり。

〔辛味漬〕小蕪を薄く切り、鹽につけて輕き押をかけ柚の皮と唐がらしを刻み、前の蕪にまぜ、柚の絞り酢にてつくるなり若し醤油に少し鹽を加へ置く時は一夜にしてよく熟すなり。

〔千枚漬〕大なる蕪を薄く庖丁目を入れ、後尾の方を切り離さず、重ねたるまゝ、鹽漬にして押を置き水の上りたるを出し、半日ほど太陽に乾かして味淋、醤油、酢を合せ、煮つめたるに漬け込むべし。

〔貯藏法〕蕪をよく春まで貯藏するには根莖より凡一寸の處より葉を切去り、乾砂にて根を覆ひ、疵つかざる様穴に入れ冬日を經過せしむべし。

柚の料理六種

柚子は花實とも羹汁の吸口として、又酢を絞りて鱠に用ひ、或は種々の料理に香味として其皮を用ふるものなり。

〔照り煮〕柚子の皮をむき庖刀目を入れ、よく茹でこぼして後、苦味の取れるまで水につけ、味淋と砂糖と鹽とを加へて煮あぐるなり青皮は茹でる時銅鍋を用ふれば其色變ることなし。

〔柚味噌〕柚の蔕をつけて皮を薄く切り、其口より肉を取出し、釜をこしらへ、さてこの肉を擂りつぶして炒り、胡麻及び味噌を擂りまぜ裏漉にか

良妻の面影

家貧しうして良妻を思ふと謂へど、良妻を思ふは啻に逆境に處せる場合のみならず、善きにつけ、惡しきにつけ、總ての場合を通じて吾人の念頭に起る所の感想なり、若し夫れ良妻を得て之に家政の事務を委れんか、吾人は後顧の憂なくして家運の隆盛を來たすべく又た夫れ賢妻を得て之に子女の教育を托さんか、吾人は干渉の煩なくして効果の大なるを見るべし、是に由て之を觀れば、良妻は實に吾人にとりて唯一の後援者といふべく、其の手腕に頼むべき事の多きは茲に言ふまでもなし。

今や年改り家新にして婦人の面目に一段の光彩を加ふるの時、吾人の敬愛する良妻の面影を寫し出して、讀者の一瞥に供するも、用なき業にてはあらざるべし。（青人）

一　赤心能く遺孤を全うす

け味淋と砂糖を加へ前の釜に入れ、蒂付の皮を蓋とするなり。

〔柚子びしほ〕味噌三百目に砂糖百目とを擂り合せて味淋醤油とも各五合を加へ、これに柚子三十か四十ほどの皮を取り、刻みて茹たるを入れ文火にて煉りませ猶黒豆を柔かに煮て薄醤油にて味をつけ前の味噌にませるなり。

〔柚皮糠漬〕粉糠一升に鹽五合を加へ、水をさしてゆるくかきませ、柚子の實を去り皮ばかりを漬るなり香氣の洩れぬ様よく蓋をするなり。

〔砂糖づけ〕青き中位の柚の實を切り、茹でゝ湯のたぎらざる様、數回水をさして煮こぼし、酸味の去るを窺ひ、少し鹽を加へ銅鍋にて數十分間煮るべし、柚百個に砂糖一貫目とし、水三升を入るゝ割合なり、

〔柚餅子〕柚十個、砂糖五百目、糯米粉一合の割合とす、まづ柚の熟したる黄皮を薄く剝き、酸味を絞り、肉を細かに刻みて茹で、幾度も水をさし又こぼし、よく煮とかして篩にて漉し炭火にかけて焦付かぬ様に煉り、水分の去りし時、砂糖と米粉とを加へ、共に煉りませ鍋を下して葛粉を入れ蒸籠にかけ、十分ほどよく蒸すべし。

鹽鮭料理八品

欽明天皇の御宇、紫の御馬飼に歌依と云ふ者あり、よく忠節を謹んでたる程に、天皇其志を愛でさせ給ひ、重く用ゐたるを嫉ましく思ふ者あり、天皇に讒訴して申しけるは、歌依の妻は皇后の御帯を盗へりと、天皇よりて有司に命じ歌依を獄に下して厳しく拷問せしむ、されど歌依は身に覚えのなき事とて、罪に服さず、こは讒者の言と覚えたり、吾は御帯を盗みし覚え毛頭無しと言ひ張るを、遂に責め殺されぬ、然るに死して一時間も経たぬに、廷尉の軒より火燃え上り、勢頗る猛烈なり、頓て獄吏共は歌依の子の兄弟二人を捕へて火中に投ぜんとす、母は之を見るより駈け来りて、廷尉に縋り、子供には罰せる罪のなきものを、あはれ許してたべ、そも殺さればならずば、幼い方を殺して兄の方は助けてたべ、と泣き叫びて訴へければ、廷尉は之を不思議に思ひ、人の親としては誰しも幼きを不愍がるが人情なるに、其方は又た何故に幼きを捨てゝ兄を助けんとはするぞと訊りけるに、母親涙の顔を上げて、其の御

〔炮烙焼〕塩引の鮭其まゝ大賽の目に切り炮烙に入れ酒ばかりにて煮出し卵を打破り、掻まぜて上にかけ閉ぢるなり。

〔麹漬〕皮を去り、身のよき處ろを細引作りて麹を酒にて溶き、一日ばかりこれに漬け置きて麹のまゝ使ふなり、但し硯蓋などには笹の葉に包みて積み合せるなど手ぎはよろし。

〔鮭びしほ〕鮭の肉、よき處を庖刀の刄にてかき取り上に酒の粕によくたゝきませ、小板につけて硯蓋等積み合すなり。

〔茶碗せんば煮〕鮭をよき程に見取り、酒塩少し、醤油少し入て鹽梅するなり。

〔刺身長皿〕薄く作りて並べたるまゝにて出す或は其上に白酒をかけるもよし。

〔一夜漬こけら鮨〕鮭を水につけ、塩少し出し、薄く大きく身をすきて木耳、麻の實、せん生姜、又色よき澤庵大根を繊に切入て飯にませつけるなり。但しこけら鮨といふは飯にかきませて漬るをいふなり。

〔鱠皿〕鮭の頭を割りて氷頭を取り、薄く切り酢につけ、大根八人前にて卸し、酢醤油ませる、又獨活の白髪などよし。

〔大猪口及び小丼〕鮭の皮ばかりよく水に冷し置き、こけを去り絞りて水氣を去り、胡麻の油にて揚げ大根の絞り汁に醤油合せてかける、付合せは

不審はさることながら、幼きは妾が産の子なるも兄は先妻の産みし子にて謂はゞ妾が爲には義理ある子、其故今繼子の兄を捨て、實の子の弟を助けなば、彼の世に在す先妻は嘸ぞや妾を恨むことならん、そも協はぬものならば妾も共に殺してたべとて、只泣きに泣きくづされぬ、據りて此の趣を奏問に及びし所天皇大ひに悔悟ましまし、兄弟の者を赦免して御馬飼の職をも元の如く復され、やがて讒訴せる者も顯れて罰せられしとなん、是れ全く母の赤心天に達せしによるものにて、當時の人聞いて感ぜぬはなかりしとぞ。

二　金を遺れて賢女を得たり

龜山天皇の文永年中に、陸奥の富人某上京の途中、駿州原驛の旅舍に一泊し、翌朝金五十兩を遺れて旅立ちけり、然るに歸路再び此の驛を過ぎて同じ旅舍に宿る、此家の婢之を見て曩に遺れたる金子を出して還したれば、富人見て大ひに喜び、其の謝禮にとて十金を

むかごの油揚などよし。

鱈料理三種

〔交膾〕これは水に浸置たる鱈を水氣を去り、焼きて細かにむしり、ちさの葉、こま〴〵に切りて交せ合せ酢と醤油をかけ、生栗を採みくだきて入れるなり。

〔小井でんぶ〕干鱈を大骨ばかり、骨のつがひより切れば小さき車になるこれに味噌豆と、鰹節澤山入れて、みりん酒と醤油を加減して煮るなり。

〔手鹽もの〕干鱈をよく洗ひ、小さき短冊ほどに切りて壺に酒を入てこの内に浸け、よく目張して四五日乃至六七日を經ちて使ふなり。

白魚料理五品

此魚は又銀魚とも言ひ春季多く漁す其煮乾かしたるものは清國に輸出し其鮮らしきは膾、羹もの、油揚等に用ひてよし。

これを料理するには、菜のつまみあしらひで清汁など常の事なり、又よせ豆腐、八重成りのもやしなど取合せて葛たまりかけ、おろし山葵を置て

分け與へんとす、さるに婢は辭して之を受けず、妾にして金を欲さば五十兩を私せん、何ぞ今に及んで十兩を受けんやと言ふに、富人益々感服して措かず、いかで迎へ歸りて妻にせばやと思ひ、其の意思を打付に告げたるに婢は固く辭して承諾はず、妾卑賤なりといへども親の許さぬ人と私に夫婦約束して出奔するを好まずと、凛然面を正して言ふ、よりて富人は一入その心ばえの强固なるに感じ人を親許に遣りて遂に其の承諾を得、公然娶り歸りしとぞ、此の婢は實に自ら重ずる念の厚きものにて、かゝれば嫁して後も貞妻の實を盡したること疑ひあるべからず、又た之を見出したる富人も流石に眼識ありと謂ふ可し。

三　糧食の密輸送
諜報の傳達

土肥二郎實平の妻は、性質怜悧にして仁心深く、婢僕に至るまで常に目をかけて使ひければ、皆な其恩に感じ身を盡して仕へけり、初めて頼朝が旗擧げせし時、實平を勧めて頼

もよし。

〔串燒〕山椒醬油つけて燒くなり、燒て後青串にさし代ふべし。

〔寄せ白魚〕鷄卵の白身を白魚にかきませ、箱に入れ適宜に切りすまし汁にするなり、もづく芽獨活取合せてよし。

〔霜ふり白魚〕鯒、おほそ何魚にてもよし、摺身を柔らかに製し、白魚を包みザッと湯煮をするなり、煮物によろし。

〔絹白魚〕鷄卵の黄味ばかりを饅頭の上粉に煉合せ、白魚をくるみ、胡麻油にて揚ぐるなり、白魚を燒くに常のごとく金網かくれば燒付て離れず、くだけ易し、これは網に燒付たるをかまわず網を打返して又燒き、よきほどに盆にうけて網の縁をうてば其儘落ちて碎くることなし。

〔白魚めし〕白魚に少し鹽をふり置き、常の飯の火を引く頃、うち込みて燒くなり、掛汁は前のごとく薄醬油にて、香味は靑苔海、卸し山葵の類よろし。

百合料理五品

百合はいろ〲の料理に使用さる、上品にして滋養ある食品なり今其の數種をのぶべし。

朝の麾下に馳せ参ぜしめたるが、軈て頼朝大庭景親の徒と石橋山に戦ひ、軍利あらずして實平等と共に土肥の杉山にかくれ、糧食盡きて飢餓に瀕せり、時に實平の妻之を察して一人の郎黨に變を覘らせて僧徒の姿に扮さしめ、糧食をば簀の子の中に入れて、表には樒を折かけて之をかくし、閼伽桶に酒を湛え、行者の花つむ樣に見せかけて、密々に運びし程に、杉山を包圍せる大庭の兵共にも見咎められで、首尾克く目的を達したり、之が爲め頼朝主従は飢餓を免かれ、隙を窺ひて包圍を脱することを得たり、其後又た實平の妻は夫の許に、三浦畠山合戰の狀況、安房上總の方へ三浦の一族が下りし事まで細々と書き認めて通信したりといふ、頼朝此の爲に機を誤らずして安房上總へ押渡り、關東諸國を從へて遂に平家を打亡し、覇を天下に稱するに至れり、良人の忠節を助けし實平の妻の如きは、亂世に處して其の道を得たりと謂ふべし。

百合羹

これは百合根より製したる羊羹の一種なり、百合の漉粉二百五十目、砂糖三百目、寒天一本の割合なり、百合は煠でてすり潰し、赤小豆の漉粉のごとくし、煮つめたる砂糖に入れ又寒天を漉込み、薄き箱のごとき塗り物へ流し込むべし、尤も百合は苦味を有するもの故、數回煮こぼすをよしとす、又紅流しのごとくするは紅明礬を少し加へ其粉の幾分を解き、まづ箱に薄く流し其上へ白き分を流し込むなり。

春かすみ

これは精進の寄物にして青き所と白き所と色どりたる故にこの名あり、まづ百合をほどよく、ほどきよく蒸して裏漉にて漉し、砂糖と食鹽を入れ、亦青色は青粉を加へてよく煉りて青白等分に合せ蒸籠にかけて蒸すなり。

鯨百合

百合を解し、煮て裏漉にかけ、昆布を焙りて藥研におろし、細末にしてよく篩ひ、裏漉にせし百合を少しまぜ、黒く色どり別に殘りの百合に上米粉を少し交ぜ前の黒き分を皮となし、白き分を内肉となして板につけ、竿蒲鉾のごとく煠でゝ油にて揚げるなり。

丸蒸

大なる百合を鹽水にて洗い、竹の皮を裂きはげぬ樣に卷き、糸にて縛り

四　陣中の内助
敗勢を輓回す

加賀國前田の家臣、奥村助右衛門の妻は、實性貞順にして風にも得堪ふまじき手弱女なれど、心様雄々しくて、猛きこと荒くれし武者にも勝れり、天正十一年の夏利家加能の國境末盛といふ所に城を築き、奥村助右衛門をして之を守らしむ、時に越中國より佐々成政一萬五千の兵を引具して此の城を包圍し攻撃急なり、是に於て奥村が妻は自ら薙刀を携へ數人の侍女を引連れて、晝夜の別なく陣中を見廻り、若し軍兵の中に眠れる者ある時は靜かに呼起し、又た疲れずして能く見張るものを看れば、一々其名を記して之を賞し、或る時は粥を與へ、酒を勸めて、士卒の心を慰め勵ますなど、能く心を盡したるが故に、城中の士卒皆な其の恩義に感じて、死を忘れて防戰に努めける程に、日ならずして利家大軍を率ゐて來り、成政を坂下に破りしかば、末森城の包圍も解けて、奥村の一族辛うじて

蒸籠にかけて蒸しあげ焼鹽をつけて食卓に上すなり、又葛粉を解き醤油、砂糖を加へうす餡仕立にして蒸し立香味にすり山葵を添ゆるもよし。

丸　煮

生のまゝ逆さにふせて鍋に入れ砂糖食鹽を加へ煮るなり、餘り長く煮れば容くづれ易し、二十分間にして概ね煮ゆるなり。

慈姑料理四品

くわゐの大なるは皮を去り、太鼓煮にして宜し又薄く切り合せて胡麻油にてサット揚げ、煮物にするも可なり、又長竿、扁豆の類にて餡を仕立て、きんとんにもすべし。

すりくわゐ

皮を剝き山葵おろしにて擦り、葛粉を少し交せ、又食鹽、砂糖をも入てよきほどに丸めて胡麻油にて揚るなり、椎茸、ぎんなんなど入て煮物にしても宜し、又油揚にせず、煠でゝ精進の羹汁に入るゝも可なり。

しんじよ

くわゐの煠でたるを皮を去り、卸して擂盆にてよく擂り、白玉の粉を加へ食鹽、砂糖を入れ平たく取りて蒸籠に掛て蒸すべし、よめ菜、つくしな

其の貴を全うすることを得、厚く利家の賞に預りしとぞ。

五　火急に際して騒がず慌てず

毛利吉就の夫人は酒井忠隆の女なり、少うして夫に別れ、寡となりければ麻布に隠居し固く操行を持して賢女の聞えあり、元祿十二年麻布に大火ありける砌、夫人の邸宅に火迫りて、甚だ危く見えしかば、家中の者共周章狼狽を極め、速かに立退かんことを勸め參らせしに、夫人は從容として騒がず、落着いて言はるゝやう、妾今立退かば、家中の者共自己が家の事を捨てゝ妾に從ひ來べければ、左あつては心殘の事多かるべし、幸ひ妾が邸内は餘地廣ければ火移りて後に立退くとも敢て遲からじとて、やがて家中の者共を召して諭すやうは、妾が家具には搆ふこと勿れ、其方達の家の物こそ、落なく取片付けて失はぬやうにせよ、又た斯る際には兎角過ちて自ら火を失することあれば、能く氣を注けて左様の

ど取合せ、精進の羹汁其他に用ふるなり。

茶碗蒸

くわゐを擦り卸して擂盆にてよく摺り、水を入れ、水嚢にて漉し、上水を去り葛粉三分の一を入れ猶よく摺り合せ、醤油、味淋、昆布の煮汁等を調合し、栗、松茸の類の加料を茶碗に盛り、くわゐの擦汁を其上にかけ、蒸籠に入て蒸すなり。

でんがく

大なるくわゐをゆでゝ皮を去り、あとさきを切り三個四個づゝ竹串にさし、遠火にかけて焙り、山椒味噌を附くるなり、或は山梔子の煮汁にて色をつけ、豁砂糖にて煮附け串に貫したるものなり。

蕨料理六種

蕨を料理するには其の灰を抜かざるべからずあくを抜くは根元を切り桶に入れて灰をかけ熱湯をそゝぎかけ暫らくして引あげ、水にて晒すなり、又早ゆでの法あり、生蕨の根を切りて鍋に堅炭一個を入れて茹でればあく氣なくして柔らかくなるなり。

荷　煮

間違なき樣にむすべし、其方達の妻子は妾が立退かん折に、倶に伴ふべければ案ずるに及ばずと、落付拂つて申渡されしかば、家中の面々勇んで其の命令を守り、力を合せて延焼を防ぎしかば、遂に事なくして止みしとなん

六　一椀の飯は妻の黒髪

昔、京都に侍某なるものあり、祿にはなれて、年頃馴れ睦びし妻と下婢一人とを拘へて佗しく暮せる程に、貯蓄は次第に迫る許にて遂に物具甲冑まで賣代なして、漸う／＼に其日／＼を過し、兎角すれども左るべき官にも得つかず、日を經るまゝ彌々落ぶれ行くまゝに、遂に朝夕の煙も絶々の事多く、容貌も淺猿しう窶れ果てゝ臥すばかりになりぬ、然るに妻は或る朝いと見事なる飯を調へて、夫にすゝめたり、夫之を怪みて如何して斯る米は求めつるぞと問へど、妻は默して其の故由を語らず、不圖見れば妻の被ぎたる帽子の端より、短き髪の毛の零れ出たるに、いとゞ怪し

蕨をゆでる時に鍋の中に銅錢一個を入れる時は其色佳色を呈すべし、さて味淋に酢を少し加へ、又唐がらしを入れて煮かへしたるに浸すなり、但しすべて蕨をゆでるには、穗を摘み取りて桶に入れ、灰をかけ、熱湯をそそぎ入れ暫くして冷水に晒すなり。

飯漬

麥飯を炊き冷して後、蕨をそろへ、飯を間々に挿み桶に漬け込むべし其味永く變ることなし。

蕨汁

わらびの灰を去り、五分切にしてゆで味噌汁に入れば味佳良なり。

味噌づけ

わらびの嫩芽を取り、元末を去りてあくを脱り又よくゆでゝ味噌づけにすれば風味殊によし。

右の外獸肉の添物として煮れば味よく又かつ魚のだしにて煮れば總菜としてよく或はゆでて味噌あへとなし、亦鮓などの具となせば尤もよし。

鹽漬

わらびを貯藏するには鹽漬、乾蕨にするなり、まづ鹽漬せんとならば、鹽に灰をまぜ、幾層も重ねて桶に漬け込むなり、これは需用の四五日前に取出し、水に漬け置き熱湯をかけ灰を洗ひ落すべし、又鹽ばかりにて漬込

と思ひ、密かに婢を呼びて譯を尋ねければ、奥様には此頃中の御難儀を凌がんとて、母御より讓られし物ども、悉く賣り果たし、唯だ一つありし鏡までも賣り給へり、斯くてある隙にいづ方へなりとありつき給へかしと、神佛にも祈り在しけるが、今は詮樣なくて、今宵は髪を剪みて賣代となし、其金にて此米は調へられたるなりとて、共々潸々と泣くにぞ、夫聞きも終らず、妻の手を握りて、あゝ不甲斐なき吾故に斯る憂目を見すること口惜しとも口惜し、女の魂にも比すべき鏡、簪笄は言ふに及ばず、髪毛まで賣りて吾を養ひながら少しもさる景色を見せぬいとほしさよ、斯く殊勝なる妻を吾故に難儀さする事本意にあらず、吾だになくば、異人に身を寄せて、心易く世を渡る術もありなんとて、折角心を籠めし飯にはあれど、箸も得とらで涙に咽びつゝ今は世にありて甲斐なき身を捨てゝ、せめては君が恩出にもと書置認めて、行方知れずになりぬ、妻は足摺りして叫び歎きしが、跡追ふすべもなきに、心地煩はしくなりて、其後

むも可なり鹽多くして押をかくれば二三年を經ても味變はることなし。

干蕨

嫩きわらびの木末を切捨て熱湯に入れて簀の子か筵の上にならべ太陽に乾かし雨天には爐上に棚をつりて其上に置くなり、さて十分乾きたる時、濕氣なき箱などに入れて貯ふべし、入梅の折には黴の生じ易きが故に、苞に入れ爐邊に吊り置くべし、又蕨を糸にて貫き、簾のごとくにして陰干にし、大約三週間の後澁紙にて包み置くべし、是を使用する時は水に浸し太陽に晒すこと三日間、柔軟になるを待ちてゆでるなり、蕨のなき時に出して使用せば珍らしくして又風味よし。

筍料理八品

たけのこは其類により味の異なるもの故、調理方も亦隨て注意すべきは勿論なり、然れども食用には多く孟宗竹を用ふることなれば今此にはすべて孟宗のことを掲ぐべし。

鹽漬

筍二つ割にして節の間に鹽を一杯入れ、幾つも重ねて桶につめこみ押石を置くべし、これを用ふるには鹽湯に入れ、ゆでゝ白湯につけるなり、又

幾程もなく歿かりけるとかや。

七　三年の丹精二十金を貯ふ

三宅尙齋の妻田代氏は學貞の聞え高き賢女なり、夫尙齋は武州忍の城主、阿部正武が世子の傅として仕へけるが、其の主の不行跡を諫めて、罪を得、入牢を命ぜられしが、家を出づるに當りて、老母と二人の子とを妻に托し、金二十兩を渡して、吾が不在の間は之にて老母を養ひ、子供を育てゝゆめ〳〵疎畧はしあるなと言ひ置き、軈て立出し後、三年を經、免されて家に歸りし節、田代氏兼て預りし金子を出して夫の前に置き、此の金は斯く御赦うけて歸り玉はん時の料にとて、些かも手を付けず、貯へ置きたるものにし侍れば受納め給へといふに、尙齋痛く腹たちて、斯く此金を貯へ置くからには、母への孝養愿ひも行らず、定めて御不自由を見せ參らせつらん彼程に頼み置きたるに言ひ甲斐なき女かな、不孝の罪は免れ難しと言ひけるに、田代氏容

筍を細かく刻み、鹽煮にしてよく乾かし、壺又は瓶に入れ密封して置けば翌年まで其色變ずる事なし。

いどみ竹

太き筍をゆで皮を去り、あとさきを切取り又ふしを操ぬき味淋砂糖にて味をつけ、其中に鯛、烏賊、其他の魚肉を細かに刻み或は豆腐、椎茸、栗、銀杏の類又味淋醤油にて煮〆、十分につめこみ昆布にて包み糸にてしばり、薄醤油に煮上げて小口切にすべし。

筍卷

たけのこを煠て皮を去り二つに割り節を取り、醤油味淋砂糖を合せて煮、味をつけ、布などに包み、押し平めて葛をふりつなぎにして幾つも遣り交はせて重ねたるを堅く卷きて榧の油にて揚げ小口切にするなり。

酢漬

竹の子の極めて柔らかなるを皮を去り、細かく切り水に浸すこと二時間ばかりにして桶にあげ鹽を多く加へ押をかけて漬け四五日過ぎ出して鹽水を煮立たる中に入れ暫くして引揚げ罎につめ込み、さて酢に丁子、唐がらしの二味を加へたるを煮立て冷まして紙漉にして注ぎ入るなり。

丸燒

太き筍を藁灰にくすべ蒸燒にして皮を去り、よく洗ひ、山椒醤油をかく

を正して徐に述べけるは、成程左恩召さんも道理なり、さり乍ら是には仔細こそ侍れ、吾が夫囚の身となり玉ひてし後は、その妻子たるものいかで安穩に過さるべき、縁りて別れ参らせて後は人に雇はれ、あるは洗濯、賃仕事、卑しき賤の手業も試みざる事なく、かくて儲け得たる賃金をもて、母君には何不足なきやう十分に孝養を盡し参らせたり、又た吾身と子供とは冬も綿入も着ず、夏は蚊帳を吊らずして、種々樣々の艱苦に甘んじ、やうやう此の三年は過し侍りき、其故にこそ此金をば斯くは手も付けで、返しまつるなれ、必ず怪しみ玉ひぞと留守中の事共有の儘に語りければ、倫齋も其の志に感じ、その勞を厚く謝しけるとぞ。

八　三人寄りても姦し　からぬ賢婦の折合

細井平洲尾張に在りける時、其の友小河天門妻子を携へて平洲が家に來り同居したり、後ち平洲が江戸に引移りける時も、天門夫婦

るなり又、燒鹽に胡椒粉かけてもよし、或は葛あん掛けにして香味に山葵を入れたるも可なり。

でんがく

竹の子をゆで皮を去り軟らかき處ろを程よく切り、竹串にさして燒き、山椒味噌を附くるなり。

蒸し筍

よき竹の子を釜に入れ七八分目ほど水をさして粃ぬかを加へ、息の洩れぬ樣に蓋をなし、三四時間も徐かに蒸し煮するなり、さて蒸せるを取出して板の上にのせ置き押し平めて寄掛けて水氣を去るべし、大約二十日ほどは貯ふべし、たとへ外皮に黴を生ずるも變味せざるなり。

切干

竹の子を細くきり、太陽に乾かして、壺瓶に收め置くべし、竹の子の苦味を去るには蕃椒を丸のまゝ入て煠でるなり。

木の芽和へ、芥子あへ

右二品有觸たる料理法なれば略す。

壽司拵へ方秘傳

に從ひ行きけるに、程なく飛鳥圭洲も亦た妻子を引連れて、同じく平洲が家に身を寄せ、かくて三家の者共竈を同じうすること四年の久しきに及べり、其頃平洲の父正長も老て家に養はれけるが、天門圭洲の二人之に事ふること恰かも實の子の如く、能くまめだちて老人の心を慰め、年月を經る程に、此の二人又た平洲と兄弟の如くなり、何かにつけ力を合せ睦じく過しければ、此の三人の妻たちも夫の心を心として互ひに仲うるはしく、子供の養育、裁縫の業は言ふも更なり、煮焼の事に至るまで、いとねもごろに手傳ひて、隔心なく明し暮しけるが、中にも平洲が妻石村氏は淑徳めでたく、舅正長にまめ〳〵しく事へける程に、天門圭洲二人の妻も其の徳に感化されて、皆なよく眞心を盡して睦り合ひ、些かも妬み恨み爭ふ等のはしたなき振舞なく、仲むつまじう暮せる様、他の眼には宛ら實の姉妹の如かりしとかや。

○鮨に用ふる飯　は俗に鮨米と稱ふる上米で、粒のよく揃つた、炊いてから光澤のあるものを選びます、尤も鮨の飯は粳米一升の中に糯米一合の割で交せます、糯米を入れると飯に光澤が出るし、又た粘り氣も出るし、而して喰べての味も宜しいのであります。

○飯の炊き方　は先づ此の鮨米に糯米を混ぜたものを、十分に能く磨いで、少しも泔水が出なくなつた所で、釜に仕掛け、水加減は普通の飯よりは稍々内目にして、火力を強くし、少し硬目に炊くのです、それから蒸らして置く時間も、普通の飯よりは短かく、やゝ早目に移すのです。

○酢の合せ方　は飯一升に付、酢三合、砂糖を茶呑茶碗に一杯、鹽を小匙に一杯と致して、よく之を煮立せた上で、又た能く之を冷却し、そこで飯を飯臺（素人の家なれば木鉢を用ひてよし）に移し、飯の上に其の酢を一遍にザブリと零し注けて、團扇で扇ぎながら、飯杓子で手早く攪き交せるのです、素人の方は手水でも打つかの様に手の先に酢を掬つて、チヨイ〳〵と飯の上に振りかけますが、是では酢の利く譯がありません、思ひ切つて一度に飯の上に傾けて了ふが宜しい、斯うすると最初は殆ど御茶漬飯の様にドブ〳〵水漬いて見えますけれども、構ひません、攪き廻してゐる内に一粒宛別々に離れてパラッと良い鹽梅になります。▲そこで能く交ざつた所で、此の酢飯を平らに一寸許の厚さに擴げて冷却して置きます。

九　茲の褥に

笹の屋根

岩村八作氏は嘗て御料局長たりし岩村氏の令息なり、明治二十六年北海拓殖の目的を抱いて、令閨麟子を伴ひ、彼地に渡りけるが、先づ適當の場所を選ばんと諸處の山野を跋渉し、やうやう翌年の春に及び、石狩國に六十餘萬坪の荒地を得たれば、爰に形計りの庵を結ばんと、夫妻諸共雪を碎きて礎を固め、笹を刈りて屋根を葺き、かくて床も天井もなき巣立の小舍を作り、之に荒薦を敷きて冷かなる夢を結びけるにぞ、不自由は言ふまでもなけれど、少しも厭ふ心なく、夫妻共々心を合せて農事にいそしみける程に、心なき人夫共も其の熱心に勵まされて怠らず働らきたり去る程に八作氏は是等の者と木を伐り、地を耕して夜を日に繼ぎ、又た令閨麟子は家に在りて、多勢の者の炊事をつかさどり、外觀を飾り風姿を繕ふ暇もなく、顔は日に燒け、腕は泥まみれになりて、ありし面影は見え別か

○鮨と生姜の關係は恰も刺身の薬味に於けるが如きもので、味を助けると云ふ譯から、鮨には乾度生姜が附物であります、生姜の漬け方は、新生姜ならば一寸ばかり莖を附けて置いて、莖ぐるみ雑と甘酢に浸し、古生姜でしたら薄く刻んで甘酢に漬けて置いて、鮨に添えるのであります。

○五月鮨に入れる具は、野菜類、魚類、貝類、燒鷄卵などの類で、いづれも細かに刻み、別々に味を付けます、貝類は可成く薄く切つて、魚類もまた薄く切つて甘酢に漬けて置くのです、それから野菜類等の煮た物は能く煮汁を搾つてから飯に混せるのです、若し搾りが甲斐ないと、飯に煮汁が泌込んで色が着きますから、體裁を惡く致します、又た鳥類を入れる場合には、そぼろに致すが宜しく、卵は燒いて薄く細長く切りますか、又はおぼろに入れるが宜しう御在ます、又たみつ葉や獨活の類は雑と湯に通すのであります。

○握鮨のにぎり方は仲々熟練を要します、素人方は握飯でも結ぶ様な鹽梅に固く握り締めますから不可ません、商賣人の遣り方は、左の手の指を内側に箱形に折曲げて、之に飯を載せ、右の手の食指と中指の二本で以て上からトンと叩いて輕く壓し、裏を引繰返して又たトンと一つ押すと、ちやんと四角に體裁よく纏るのですが、こゝがコツなのであります。

○握鮨の材料には赤貝、車海老、烏賊、鮪、おぼろ、こはだ、燒

ぬまでになりぬ、然かりし程に明治二十八年父なる岩村氏、岩倉公爵と共に彼の地を巡覧の序を以て、令息八作氏の庵に立寄られけるが、折しも令息は野猟の留守なりければ、庵の奥より一個の女立出で、慇懃に挨拶する者あり、年の頃は二十四五にて、身には洗ひざらしの木綿衣を裾短かに纏ひ、髪は油気もなく打乱れて、見るもいぶせき様なれば、下婢にもやと思ひて、つくづく見れば吾が子の嫁なり、餘りの痛ましさに胸つぶれて言句も出です、無量の感に打たれつゝ扨て其夜は假小屋に親子の者久振にて膝を交へて語り明しけるが、父は浅猿しう窶れし二人の有様を見て拓殖事業の困難はさることながら、其方達の窮んせうは餘りに極端ならずやと言ひしとぞ此事後に皇后宮の御耳に入り、御感斜ならずして、数々の賜物ありけるとぞ。



卵、鰆、あなご等を重に用ひます、次に是等の物の拵へ方を御話し致すと▲赤貝 は貝を剝いて身を取出し、二片に割いて腸を去り、縁と肉は適宜に料理し、扨て之を笊に入れ、上より鹽を振りかけ、笊を搖動しながら水で能く洗つて、水氣を去り、酢と砂糖と鹽を好き程に鹽梅した中に漬けて置いて、其の漬加減を見計つて取出し、布巾で拭いて、之を飯を握つた上に載けるのです、但し是には普通山葵を挿むものと御承知ありたし。▲車海老 は頭を取つて能く湯煮て皮を剝くのです、尤も尾は其儘殘し置いて、酢と鹽と砂糖とを混せ合せた中に漬けて、よき時分に取出して水氣を瀝らし、脊より二つに開いて、山葵を付けて飯に付けるのです。▲烏賊 は圓烏賊が一番鮨に適して居ります、で之を拵へるには先づ脚を拔き取り、脊より二つに裂いて、甲を拔出し、其の肉を能く水で洗つて、味淋と醬油で煮付け、斜に薄く切つて用ひます。▲鮪 は少しも筋の無い上等の部分を選んで、鮨の大きさよりも少し大きく切り、薄くそいで、山葵を入れて握るのです。▲おぼろ は比目魚、海老なら上等ですが、其他何によらず白い肉の魚類を三枚に卸し、細かに刻んで、之に酒、鹽、砂糖を適度に混和し、尚ほ紅をも少許溶し入れて、扨て之を煮て擂鉢に入れ雑と擂りつぶし、湯煎にして煎り付け、冷却してから細かに揉み碎すのです。▲こはだ は頭を切り去り、腹は頭の方に向いて斜に切り取り、其の儘開いて脊骨を拔

育兒要訣

△產湯

嬰兒が未だ母體中にある時は羊水と稱する脂肪に富みたる液體中に浮かみ居るを以て始めて母體より出たる時は殆んど右脂肪性の垢を以て掩はれ居るなり、故にこれを清淨にする爲め、所謂產湯を使はせ、其湯は微温にて攝氏二十八度乃至三十八度を適當とし、純良なる石鹼にて十分に垢を洗ひ去るべし、然れどもこゝに注意すべきは是に用ふる水なり、これは極めて清淨にして黴菌等を含有する等の憂ひなきものを要し、これが爲めには一旦煮沸して殺菌したるものか、然らざれば水道の水を使ふべく、其故は後產即ち胞衣を除く爲め、臍帶を切るを以て、產湯中に黴菌等を含む時は直ちにこの傷口より病毒を吸收する事屢々なればなり、俗にこれを酸漿蟲（俗に口より泡を吹きて酸漿の狀を爲す）と稱するは即ちこの傷により病毒を吸收したる結果にして一種の破傷風なり、注意せざるべから

き、水で洗つて、薄鹽をかけ、能く水氣を去つてから酢に漬けるのです。▲鱚は頭を取り、脊を開いて膓を出し、脊骨を去り、能く洗つて水氣を去り、酢に漬けて置くのです。

○海苔卷　を拵へますには、先づ海苔を炙つて、竹簀か又は葭簀の上に載せ、其の上に鮨飯を厚さ二三分許に敷き並べ、その手前の方に、捲き込むべき具をば長く伸べて置き、そこで手に酢を付けて、簀と一緒に前方に捲き、海苔の一端が飯に屆いた時、簀を前に伸ばして、靜かに中の海苔を轉がして押へながら捲くのです、而して捲き終つた所で、簀に卷きくるんで、兩方の小口を叩くのであります。▲それから切り方は、鐵砲捲なら海苔一枚の長さを三つに切り、太捲なら四五分の厚さに切るのです。▲庖丁は成るべく銳利な薄刄庖丁を用ひ、刄に酢を塗つて、手早く切るのです。▲海苔卷に用ひます具は、乾瓢が臺で、其他酢漬の魚類、燒卵などをも用ひます、乾瓢は長いまゝで茹でゝ、之に味を付け、能く其の煮汁を搾つて用ひます。

○玉子捲　は布巾で捲いて其上を簾で捲きます、玉子捲に用ひます卵は、卵ばかりでは硬張つて不可ません故、魚の肉を混せます、其法は鱚なり針魚なり、白い身の魚の肉二片ばかりを擂鉢で擂り碎して、其に卵の大きいのを五個程割つて入れ、能く擂り混せて、扨て卵燒器に移し燒くので

ざる事なり。

△産衣

元來母の胎内は吾人の想像以上の高温度なるを以て、この高温度の中より出でゝ遽かに冷氣に觸るゝ嬰兒は、非常に寒冷を感じ、隨つて感冒の恐少からざるなり、故にこの豫防法として産衣にはなるべく體温を發散せざるもの即ちフランネルの如き毛織製のものを用ひ且つ心臓より、遠かりたる部分、即ち手足等は一層寒冷を感ずべき故、間斷なく注意して肌膚を露出せしめざる樣に注意し隨つて又嚴寒の際には適當なる、暖房裝置の必要なる云ふまでもなし、又殊に注意すべきはむかしより産ボロと稱して、襁褓其他に、汚れたるボロを用ふるの例なれど、これ又非常なる危險にして斯くの如きボロは黴菌の培養所ともいふべきなれば、襁褓其他にはなるべく消毒したるガーゼの如きものを用ひ止むを得ずボロを用ふる場合には一旦熱湯に煮沸して全く殺菌を行ひたるものを用ふべし。

あります。

○稲荷鮨　は油揚豆腐を茹でこぼして二つに切り、之を砂糖、と味淋と醤油で煮付け、さて切口を開いて五目鮨を其中に詰込み、干瓢の煮たので好き程に縛つて置くのです、之に入れる具は大抵蓮根、胡蘿蔔、椎茸、牛蒡、木耳などであります。

菓子製法十二種

小倉野

これは糯の粉一升、白砂糖六百目に米一升を入れて垢を取り、蜜に煎じ、地黄煎五百目入れ求肥のごとく煉りつめて箱にうどんの粉しきならし置、二日ばかりを置て切り、あんを包み、上へ砂糖煮の小粒豆をつける、此の小豆の拵へ樣は上赤小豆をよく煮て、つぶれたるを擇り去り、砂糖蜜にて又煮、鹽見合せて入る、斯くして笊に揚げ酒をたらし、冷め乾きし時上に衣を着せるなり。

松風

白砂糖一貫目に水一升五合入て煎じよくさまし、麥の粉一貫六百目入れよく煉り桶に入れ冬ならば一週間、夏ならば三日ほど臥かし上に泡出でし

△食慾の遲速

嬰兒が未だ母の胎內にある間の生活に要する營養分は臍帶によりて母體より直接に供給せらるゝが故に其の生活は母の生活の一分派とも見るべく從つて自から食慾を感ずることなきも一たび母體を離れて營養分供給の道を絶たるゝに及べば此に始めて獨立したる生活となり延ひて食慾を催ふすなり、而して最初に食慾を起すは普通生後十二時間前後なるが是れはその嬰兒の健康の程度に從つて一樣ならずして往々一晝夜の後に至つて始めて食慾を催ふすものなり、故に世間にては生後十二時間、若しくは未だ其以內に於て嬰兒に食物を與へ其の嚥下せざるを見て直ちに心配する人あれども是は決して憂ふるに足らず一晝夜の後に至りて始めて榮養分を取るとも決して嬰兒の健康には害なきものなり。

△最初の飲料

嬰兒の最初の飲料としては純良なる砂糖を一旦煮沸して冷却したる微溫湯に溶解せるも

時、又砂糖一貫目入れよくかきませ、鍋へ流し、上へけしをふりて上下へ火をいけ燒く色づけばあげていろ〳〵に切るなり。

葛饅頭

葛粉をおろし、一升に水一升二合、砂糖蜜一升五合入れ、右の內三分の一を取殘し殘る二分を鍋に入れゆるやかな火にかけ煉り固まりたる時鍋よりあげて殘し置きたるを入れ火にかけすして煉り堅め、箆にて取わけ手を水にて濡らし、餡を包み、蒸籠にならべむすなり、色少しうるみ、つや出たる時上る、夏日冷水に浸して用ふるもよし。

砂糖蜜の製り方

大白糖一貫目山の芋皮去りて二百目卸し、砂糖によく交せ、水一升五合を段々に少しづゝ入れ砂糖を和煎し、煮へ立ちて火を引、暫らく休ませれば垢の分子たまりて上に浮くなり、其時網杓子にてすくい取りて又一と煎へすれば殘らず垢上へ浮ぶを取つくし布漉にして壺へ貯へ置くなり。

輕燒

糯米を白搗にしてよく洗ひ、寒の水に二十日ほど漬けて餅につき白砂糖入れて又よく搗き搔餅のやうになし、銅鍋にて松風のやうに燒く。

饅頭

小麥粉を甘酒にて硬くこね、柔らかに揉み、丸くひらめ、中に餡を包み

のを最も適當とす、而して砂糖湯は單に榮養物としてのみならず、幾分か便通を促がす氣味あるを以て母體内にありし時、蓄積したる糞便を、排出するの一助ともなるなり、從來我邦にてはマクリと稱するものを用ふる習慣なれども、これは大黄を含有するを以て同じく宿便を排泄せしむるの効あるも同時に胃を弱して消化不良を起さしむる恐あり。

△荒　乳

從來我國の習慣によれば産後直ちに母體より出づる稀薄なる乳は荒乳なりとてこれを嬰児に飲ましめざるの例なるがこれは甚だしき誤解にてこの稀薄なる乳汁は元より普通の乳汁と性質を異にし、脂肪を多量に含み居る故、生後直ちにこれを飲用せしむれば前記マクリの代りとなり、適宜に便通を促がし且つ母體にありても嬰児をして生産後直ちに乳房を吸はしむるは一旦擴張したる子宮を、縮少せしむるに多大の効能あるものにて從つて母の肥立即ち健康を回復するの遲速にも關係あ

いろりに火を置き夏は二時間、冬は三時間ほど暖め其後飯に並べ蒸すなり、
右甘酒の作り方は糯米を柔らかに飯にして飯一升に水二合入れ、上白米の麹五合但し麹の花を洗ひ捨て夏は三日程、冬は七日程にてこして遣ふ。

菓子パン

メリケン粉五斤に食鹽少許を加へ、ぬるま湯をそゝぎ柔かに解き酵母を匙に三四杯入れ、まぜ合せ毛布に包み、一夜置き翌日泡立たるを度とし、メリケン粉を増加し堅く煉り、大小適宜に取りて焼麺器に少許の油汁をひき其上にのせ焼竈に入れて焼くなり。

甘納豆

さゝげ一升をよく洗ひ、水一升五合を入れ、くづれざる様に煮て笊にうつし水を掛け、冷まして、さて白砂糖五斤水一升加へて解き、これを煮て蛋白を加へて灰を引き、鍋を卸ろし冷まし後、小角豆を入れ再び火にかけ、杓子にてかき廻しながらあまり强からぬ火にて煮るなり、煮汁全く盡くるを待ちて引あげ更に砂糖一斤ほど撒りかくべし。

牛皮糖

まづ材料は白玉の粉二百目、砂糖三百五十匁、晒水百目の割合を用意すべし。
白玉粉に水一升ほど加へ鍋に入れ炭火にかけて徐かに掻廻しながら煮つ

るものなれば、マタリの如き器械を用ひず、生後直ちに造物主が自然の妙機になる母體の乳に依らしむるを肝要なりとす。

△母乳と牛乳

嬰兒の爲には母の乳が牛乳に勝る事は勿論の事なるが、母乳の量少きか又は其他の原因によつて母乳を呑ましめざるの事は止むを得ず牛乳を以てこれに代へざるべからず、此の場合には生乳を用ふる方が其榮養分に於て煉乳に勝ることは無論なるも生乳は其内に含む脂肪分の量日々不同にして且つ嬰兒の弱き胃にありて其の感覺鋭敏なるを以て斯くの如く脂肪分の一定せざる乳汁を與ふるは消化力を害するが故に寧ろ反つて其の脂肪分に不同なき煉乳を用ふるをよしとす而してその煉乳は瑞西製の鷲印若しくは下山、高橋兩博士の監督にかゝる飴ミルクが品質佳良なり、近來山羊の乳を用ふるものあれども是はその實に於ては無論牛乳に勝るべきも價格高ければ（一合十錢内外ならん）未だ一般の需用に適

むるなり、別に水一升五合を備へ置き右白玉の煮詰まる度毎に五勺位づゝ加へて半日ほど煉り、砂糖を入れて復た煉りて堅くなりたる時、更に水飴を入れて煉りあぐるなり、さてこの煉上げたる牛皮に葛粉をふりて板に取り延ばして堅むるなり。

草牛皮糖

これも材料は前にほゞ同じく糯白粉二百目、砂糖蜜四百目、晒水飴百目の外に餅草を少し加へて煉るなり、煉り方も以前と同じ、但し餅草は三月頃の柔らかき葉ばかりを取り灰汁を和して煠で、一夜ほど經て擂盆にて擂り牛皮の上り際に入るべし、これを取るには葛粉を割りたる氷おろしを用ふべし（氷おろしといふは上品の砂糖をおろし、ふるひて漉したるものなり。）

牛皮饅頭

牛皮糖を煉りて熱き内に上餡をつゝみ、氷おろしに葛粉を少し篩ひかけるなり、若し牛皮の冷めたる時は少許の水をさして煉り直してよし、又餡の製し方は混り物のなきよき赤豆をよく煮て笊にあげ煮汁を切り新たに水を加へて煮立て尙其汁をこぼして後、煮くづし擂盆にて擂り、水を入れて水嚢にて漉し厚き木綿の袋に盛り締木にかけて絞るなり、是を漉粉といふ、大凡赤豆一升の漉粉に砂糖六百目を入るゝを上餡とし、四百目を入るゝを

し難し。

△乳房の消毒

前記の如く母體の乳量少き時は已むを得ず牛乳、殊に錬乳を用ゐざるべからざる出來得る限りは母の乳を飲ましめたゞ其の不足だけを牛乳にて補ふ樣にすべし且つ勉めて嬰兒をして乳房を吸はしむれば其の初め乳量少きものも代謝作用によりて次第に其の量を増すものなり、次に乳房は其所に附着する乳汁の腐敗し易き爲め往々病毒を釀すものなれば乳哺せしむる前には必らず清淨なる布片にアルコールを浸せるものにて清潔に拭ひ去るべし而して哺乳は通常一時半、置き位に於てするを最も適度とす。

△吐　乳

嬰兒には間々哺乳したる乳を吐出することあり、是れ嬰兒にありては其の胃の位置が未だ大人の如く正しからず、即ち左右に長く横はるべき筈の胃が稍や斜めに縱に近き形狀に

並餡とす、菓子製造の赤豆の煮方漉方とも皆此法に寄るものなり。

懷中汁粉

赤小豆五升の漉粉に白砂糖一貫目を加へ、牛皮糖を細かに切りたるを一二片づゝつゝみ、型に入れ、柔らかに入れ打扱きて乾かすなり、又別法は餅を燒型に入れて燒きたる外皮に餡を包みたるもあり、京坂地方にては汁粉を善哉といふ。

柿なます

先づ大根と胡蘿蔔と等分におろし、即ち共に薄く皮をむき突きおろしにて細くおろし、鹽を振りかけて能くかきませ、暫くして水に浸しかきませて鹽分をぬき、堅く兩掌で絞りて水氣を去り、酢味噌の中へ入れて和へるなり、その時柿串の柿を竪に二つに引きさきて種を去り竪に細長く剝みて膾に混せるべし。

養老酒

藥用人參二匁、丁子三匁、大黃二匁、甘草五匁、當歸三匁、味芎二匁、茴香三匁、サフラン五匁以上八味を水四合に投じ之を煮じ詰めて半量となしこれに味淋一升を混合すればよし又甘露酒といふに上等の古酒三升に鷄卵五十顆を解き合せ鍋に入れ、焦げつかぬやうに煮て泡立つ時鍋を卸ろし、少時冷まし、砂糖百五十目、汚汗を去り再び酒を暖めながら少しつゝ加へ

あるを以て人の手に抱き上げらる等の塲合に外部より壓迫を受くる時は一旦胃に入りたる乳が再び押出され易きに依るなり。故にこれは素人の驚く程のことにはあらざるも餘り屢々なる時は驚風の原因となることあるべければ此の塲合には宜しく醫師に就て診斷を請ふべし。

△乳と糞便

是も又造物主が自然の妙用なるが母の乳を飲む嬰兒の糞便は黄金色にして其硬軟の度適宜なるも牛乳を以てする者は淡白色にして硬く從つて便秘を起すことあり、此の塲合に於ては無論灌腸によつて便通を促がさゞるべからざるが灌腸は清淨なる水を以て冷水灌腸を行ふを最良とし、普通人が屢々用ふるグリスリン灌腸は反つて宜しからず、

△臍帶の脫離

臍帶を切斷したる殘り即ちまだ嬰兒に附着し居る部分は普通は生後六日目にて自然に脫離するものなり、而して一旦脫離するに及べば其痕跡は外皮を以て覆はるゝが故に最早外界より、病毒を吸收する虞なきも未だ脫離に至らざる間は其切斷したる創面は直ちに嬰兒の體内に通じ居るを以てこの間は勉めて病毒に接せざる樣且つ腐敗を防ぐ爲め成るべく其の創面を乾燥せしむる樣に消毒したる脫脂綿を當てゝ置き浴湯の時の外は決して手を觸るべからず然すれば其創面だけは二三日後には乾燥して痂となるものなり。

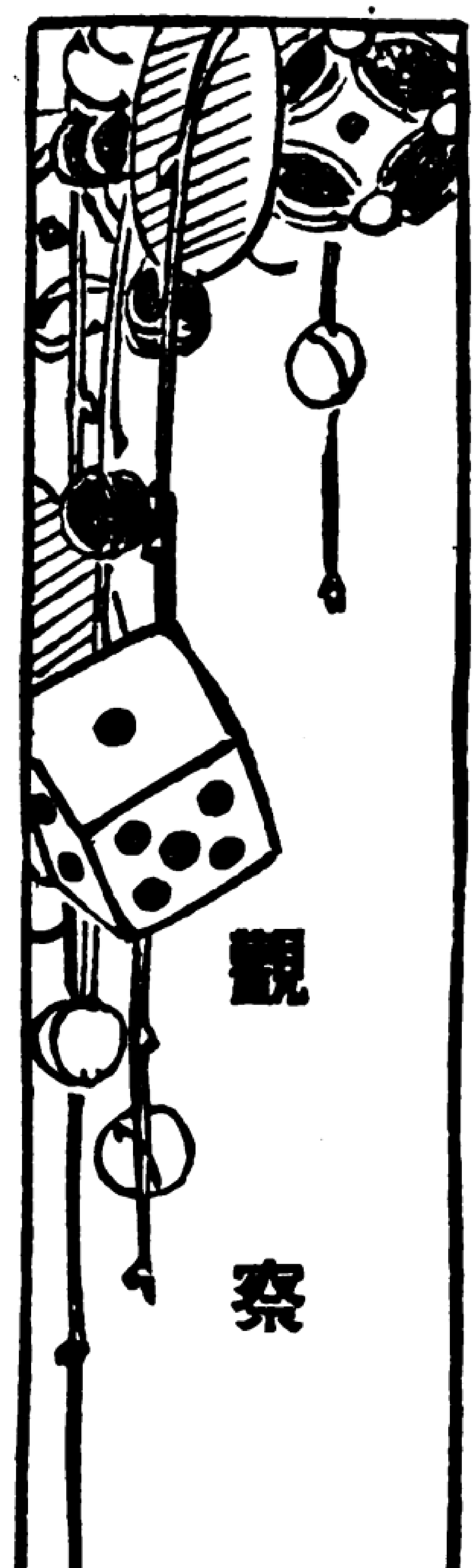
△嬰兒の體量

體量は男子に重くして女子に輕きが普通なるが不思議なるは男女共生れ立ちは重くして爾後四五月間は多少の食物を取るに拘はらず漸次其の重量を減ずるの一事なり、然れども是れ實は當然のことにて其の重量を減ずる所以は母體内に在るとき蓄積したる不用分即ち胎便等が排出せらるゝ爲めにして隨つて七夜頃に至れば復た漸次重量を加へ始めこの度は眞に體質を增加し行くものなり。

次に葛粉五匁を酒にとき混和し、是に附子、肉桂、蓮の肉の細末各一匁を入るべし是を藥味卵といふ。

濱名納豆

大豆一升を煮て釜のまゝ一夜置き翌朝に至り莚席に擴ろげ小麥の粉五升を交ぜ、麹板に盛り、室或は戸棚に入れ、氣候の寒暖により二三日にして白黴を生ずる故、鹽二升七合と水一斗を和し山椒の粉をちらし、再び煮て桶に移し壓蓋をすること七八十日にして笊に揚げ、水を切り、一日ほど太陽にさらすべし。



人の噂

福田琴月

はや、正月も半を過ぎぬ。彼方此方の宴會に身體も疲れたれば、今日は一日冬籠りせんと、埋火のもとに書をひろげて、幸に京より貰ひし鳩居堂の香など薫らし、心のどかに半日を消す。折柄、

「御免下さい。」

と尻上りの聲にて訪ふ人あり。こは聲覺えある友人某工學士の細君なり。あゝ、今日だけは自分の身體と思つたが、と一寸眉を顰めしが、是非なければ、奥へ請じ、妻を呼びよせて雜談に時を移す。

此奥樣、本年三十を一つ二つ超えたまへど、心は至つて若く、打扮は恰で娘樣なり。某女學校を卒業したまひし時は、英語も少しは出來、文學美術の話しなども好んで仕たまひしかど、今はガラリと樣子變りて、衣服と芝居の話か、さらずば料理の話位が關の山なり。お里方は富百萬と數へらるゝ豪商にて、お嫁入の時には、少なからぬ持參金さへ携へたまひしとの噂ありしが、兎角人の口は半分にて、別に大した事もなしとの打消もあり。一通りの挨拶濟みて、

「眞實にあなた、私の里の事を思や、ね、一時間も生きて居られませんのよ。」

と冒頭を置いて、

「里の姉はあなた、昨年の末は三越へ三枚重ねを誂へたのでせう。三百圓でしたさうです。そりや、ね。兄さんは養子ですし、何も彼も仕度放題ですから………御存じでせう。姉の金剛石、あれはマニラから買つて歸つて貰つたんですつて、何でも、千三百弗とかいふんですから、日本のお金にすると、二千五百圓からなんでせう。能くお金の罰が當りません事ねえ。」

と恨み顏なり。人は多きが上にも多きを望むが情ならんも、此奥樣は聊か諦めの足らぬ奥樣なり。良人の工學士は某會社の技師長にて、月俸百五十圓を得、若手の利者とて同僚間に評判喧すしく、やがてはあつぱれ實業界の立者となり玉ふ事はわれ人共に信ずる處なるに、此奥樣とかく其里方を引合に出したまうて、良人を見くびる事甚敷、さりとて別に犬も食はぬ喧嘩をしたまふ事のなきは、これはわが友たるその夫が、五歩も十歩も讓りゐる爲なるべし。

「あなた方がそんな事を仰しやつては、私共は如何するんで御座います。」

と妻は御挨拶に言へば、奥樣は、

「イヽエ。」

と力を入れて否定して、

「あなたは、旦那樣が御親切ですから宜う御座いますわ、私共はあなた、斯う申しては何で御座いますが、父がまあ本人さへ見込があれば、位置の無い處へやつておいてそれで其聟を世話してやる方が、娘を大事にかけても呉れるし、その方が氣樂で能い、といづて、今の處へ行つたのでせう。處があなた、氣樂處か、大苦勞なんで御座いますよ。」

と顏しかめる、餘りのをかしさにわれは、

「何が御苦勞があるんです。」

と聞けば、

「そりやもう、一枚の羽織も買へないんで御座いますよ。何しろあなた、箱さした樣なキチンとした經濟でせう……。御存じの通り、百五十圓……家賃があな

た三十五圓、會費が二十圓は出ますよ。すると殘りが九十五圓でせう。其内で國のお父樣とお母樣におくる養老費が、三十圓なんでせう。すると殘りが六十五圓、あなた、六十五圓で下女二人使つて、如何して體面を保つて行けるもんですか。』

と此方が知つた事の樣にいはれて、少々返事にドギマギする中に、

『そりやね。』

と少し沈んで、

『なに、モット經濟的に暮せない事もないのですよ十五圓位の家賃の處へ這入つて、下女も一人にして、車は止して電車で通つて、何も彼も現金で買つて、と考がへない事もないので



御座いますが、何分あなた良人が大學時分のお友達が、どなたも皆立派に成つて居らつしやいますから、あまり見すぼらしい事も出來ませんし、それに今が賣出しで、言はゞ人氣を取らんけりやならん時なんですから可成は店を張つてと存じまして、

といつたは中々道理の事なり。それぢやその考でやつて行けば、なにも不平のあらう筈はなからんに、

『左樣ですとも。』

といふか云はぬに、

『さあ、其位に私が苦心致して居るんで御座いませう。それにあなた、此頃はお交際だとか何とか申しまして、夜がおそくなつたり

致しますの。』

とこゝまで聞けばもう分つたり、里を羨むムシヤクシヤと、そこへ少々悋氣が交りての小不平、實に天下は太平なるかな。畢竟するに、衣食住に困らざる上に、所謂榮燿の餅の皮、兩親は國にあり、里方は金持なり、夫婦さし向ひのわが儘が長じて、かゝる苦情を言ふものなるべし。

たゞ此奥樣相當に年取り玉うて、まだ一人のお子樣もなきが氣の毒、自然心も若やぎて、里方の姉樣を見、世間の華美なる方面ばかり見ての泣言に止まる。馬車や自動車の快走するを見てこれを羨まんより、わが足元に氣を注けるが肝要なり。

右の奥樣歸りたまうて、又しばしは寂寞の境に入り机上の書を手にしたる時、ふと『人間は隱れ場所がなければ困る。殊に婦人はさうだ』といふ事を考へ出して、それからそれと思ひつゞける。

臥龍の山莊は孔明の隱れ場所にして、日野山は長明の隱れ場所なり。大石は山科に隱れて大企圖をなし、兼好は一度紅塵を遁れて、木曾の山中に隱れしも、こゝもまた浮世なりけりと、出でゝ京の雙ヶ岡に住みき。こはいづれもそが身體の隱れ場處にして、偉人傑士この事多し。されどわがいふ隱れ場處とは、かゝる身體の隱れ場處にあらずして、精神の隱れ場處なり。

福澤先生の言と覺えし。人生は芝居の如し、上手な俳優が乞食になる事もあれば、大根俳優が殿樣となることあり、とかくあまり人生を重く見ず、捨身になりて何事も一心にするがよし、と眞に味ある敎なり。われは時折此の芝居を見物人になりて興せんこそ、尤とも面白き慰安法なれと思ふ。見物人になつて見るは、わが所謂隱れ場處なり。精神を隱れ場處におく事になる。

家庭の主婦が、日々夜々凡てのキリモリに心疲れて、尙其上に夜の夢圓かならざらんには、其苦痛如何ばかりぞ、語るに人なき夜半の床に、たゞ一人眼冴えて、心穩かならざる時は、其人の不幸如何ばかりぞ。もとより深く人生の妙奥を悟り、百八の煩惱を消して、虚心

の境に至る事は、普通人の中々に難き處、寸時と雖何事かを考へ居らざるべからざる凡人は、宜敷精神を一轉して其隠れ場處に入り、實在の苦悶を外にして、想像の世界に逍遙すべし、そは如何なる方法ならんか、と問く人あらば、われは詩味を解せよ、と答へん。

かく云はゞ、大層六ケ敷事の様なれど、つまり、和歌とか俳句其他の詩の味を知ることなり。詩の味を知らば、心は直ちに其詩中に吸收されて、實在の苦は暫時にても退散するなり。名家の筆になれる背景の前に、名優の妙技を見る時は、その間は實在の苦を忘るると同じく、名歌名句を記憶し居りて、そを胸の中にくりかへす時は、自然と人事との美は冥想の中に歴々とあらはれて、心清しく氣ものびやかに成る事受合なり。さりとて、その作者となりて、盛んに吹聴せん事は、おのが隠れ場處は、多くの人を招待して却つて、向ふに迷惑かける理窟となる、それでは隠れ場處でも何でもなし、たゞ其隠れ場處を各自に有するの域に達せば家庭の品性は高くなり。個人の安樂また此上なかるべし。たゞし作つても讀んでも其味の知れざる人は、これは縁なき衆生也。など考ふる中に、「これが最上の隠れ場處か知らん」と又考へ直す。詩歌俳句を解する時は、其時を思ひ、其句を誦する時にのみ



安樂にして、その氣失すれば、又俗念胸に往來するにあらずや。あゝ、さなり、さなり、こゝに宗教あり、宗教あり、國の文明は宗教の上に建設されざるべからざると共に、人の安慰は宗教によるの外なからん。と又問題が新になりかゝりしが、否々、宗教はわが所謂隱れ場處にあらず。宗教は人心を導く崇高なる道義なり、わがこゝにいふ隱れ場處は、あまり衣服や金や、悋氣や、生活や、と常に第二者となつて苦しみ居る婦人の頭を、一寸第三者の位置に持つて行くまでなり。宗教を信ずる者は、二六時中信仰の念を忘るべきにあらず、隱れ場處は始終居る處にあらず、苦しい時はチヨツト隱れる安樂境なり。とまづ斷案を下したる時、再び玄關に女客の聲す。

　招じ入れて見れば、某實業家の奧樣なり、この奧樣は前の奧樣と違つて、頗るさばけた、道理の分つた、世話好の快活で雄辯なお方なり。話しは正月の禮者の事より、主婦は正月が一番忙がしいといふ事、次いで左の樣な話しとなりぬ。わざとこゝに其の口吻を寫す。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

丁度この二日の事で御座います。馬の聲が聞こえて、それが宅の表で止まつたと思ふと、

「ヤアお目出度う」

と這入つて來らしつたのは、夫の親友で、花岡さんといふ少佐で御座いました。此日は必らず私の取次に出るに定つて居りますから、飛んで出て、

『來らつしやいまし。』と出迎へまするると、

「ヤア。奧さん、お目出度う。相變りませず。」

と流石は軍人で活潑なものです、私は新年の御挨拶を申上げて、さてこの日はそのまゝにお返し申す事は出來ませんから、

「さあ、何卒お上り遊ばして」と申しますと、

「太田さんはお宅ですの。」

「ハイ。今日は、早朝からお待受致して居ります」

「オヽ、左樣だつた。例年の御年酒日か、どりや、それぢや初氣焔でも吐かうか。」

と洋刀ガチャ〳〵と上つてゐらつしやいました。奥へお通りに成つて、

「ヤア、太田君お目出度う。」

「オヽ、花岡君、お目出度う。」

と同じ様な事を云つて、これから御酒になるので御座います。

此お方は軍人だけにさつぱりして居つしやいますが、其お酒が廻ると、氣燄が中々高いので御座います。

直ぐに膳部を出しますると、初めは形式だけにお屠蘇、その次が灘から取りよせた、生一本の正宗を差出すのです。

「花岡君、これは生一本の正宗で、軍人の君には縁儀が宜いだらう。ハツ〳〵」

と夫が笑ひ出すと、花岡さんは、

「さうかい、それは結構だ。酒は西に限るよどりや大杯滿引と仕るか。」

と三組の大きな方に、なみ〳〵と酌がせて、息も次かずにグーッと一乾、

「ヤア。お手際だ。今一献。」

と夫は銚子を取らうとしますから、私は、

「私が、」と銚子を取つて、溢れるばかりに酌ぎますと

「ヤー。奥さん。贔負ぶりに有難う。花岡は今年は運が向きますよ。」

と又グーッと一乾。此時夫は、



「運と云や花岡君、君は去年が幸運だつたぢやないか。」

「エ、幸運、何故、何故、」

「だつて、五級だつたぢやいか。」

「そりや、君、と又も酌がせて、

「五級は僕の幸運とは思はんな、僕は四級がものはある。四級の働きはしたつもりだよ。」

「ハヽヽ。さう慾張つてちや仕様が無いぢやないか。

「イヤ、慾張りはせんが僕はさう思ふねえ。しかしだ。君國のために盡したのは、なにも勳章のために働いたのでないから、それはまあ仕方が無いとして、僕は今年の幸運を、一つ君の手によつて得たいと思ふんだがねえ。」

とうそろ〳〵お酒が廻つて來たのです。

「ハヽア、僕の手から、幸運を、如何して……」

「イヤ、君の手ぢやない、君と奥様の手から頂きたいのだ。」

「分らんな。僕と妻との手からといふと。」

「困るなあ。」

と又一口がぶりと飲んで、

「僕の家庭を賑はせといふのぢや。ハツ〳〵〳〵とここで初めて私も夫も分つたので御座います。

此方は今年まだ三十二、少佐としてはお若い方で、陸軍部内の俊才として聞こえて居ります。二三年前までは、獨逸に留學してゐらしつたのを、日露戰爭のために呼びもどされて、ある主要なるお役目をお勤めになり、凱旋後は如何したわけか隊附をやめて、今は陸軍のある學校の教官をして被入るんです。この様な俊才で、またその上に其品性が高潔で、モ一つ容貌が極めて好いんですもの、たとへどんな華族様からでもお嫁に行きたいといふお方は澤山あるので御座います。

「又君の求婚か、それは君、出來ない相談だよ、」

と夫は笑ひながら云つて退けました。

「何故、何故。」

と首つき出してお問ひになるのを、別に氣にも留めずに夫は、

「到底我輩共の力には及ばんよ。第一其條件が極めて複雑だから」

「複雑……イヤさうでもないよ。」

「あるも無いもあるものか。嘗て某子爵から云ひ込んだ時も、君は斷然はねつけたぢやないか。」

「あれは、ダメさ。」

「さ、あれがダメなら、外の口は無論落第だ、第一君は君が今日まで苦心して、失敬ながらとにかく佐官にまで漕ぎつけたものが、何にも知らぬポカンとした海老茶位が、すぐと飛んで來て少佐の妻で御座るといふ樣に、濟まあして暮らすのはちと勿



體なさ過ぎるといふんだらう。」

「イヤ、さう云ふとちと語弊があるよ。なにも勿體ないの何のといふ事はないさ。しかし、僕は妻を迎へた以上は、つまり少佐の妻として恥かしからぬ尊敬を社會から拂はるゝ樣に暮さねばならんといふのだ。」

「ハハア、まづ具體的に云ば。」

「さうさ。例令僕が観菊の御宴に招待されたとする。無論毎年招待されるが、其時は君、宮内大臣が、夫人と連名だ此方も無論夫人同伴でなければならぬ。獨身のものな

ら是非がないが、妻があるなら病氣で無い限りは、妻と打連れたいね。」

「そりや道理だ。」

「否、行きたいぢやない、苟しくも畏きあたりの命により、宮内大臣から招待の榮を被つた以上は、虚僞の申立をして、不參するなどは、軍人たるべきものゝ恥辱だ。」

「成程。」

「そこで、われ〳〵同僚で、果してその婦人を携帶して行つて居るものが、果して幾人かあるだ。これ行かざるにあらず、行けざるなりで。一ヶ月百圓の經濟でとにかく少佐としてまづ二十圓以上の家に住み、書生の一人や下女の一人、中には小兒の二三人もある人もあつて、乳母も居るといふ家庭に、夫と共に公會の席へ、洋裝をして出るといふ事は、事實免さんからね。」

「如何様。」

「だから其處に至ると、たゞ〳〵其主人たる少佐殿は嚴めしき軍服で、馬上悠かに往來の人を眼下に見て、いかにも立派に暮してゐる様なものゝ、家内は盡くたゞもうケチで、妻が子を抱く、おしめを仕易へる、其間に客があるそれ酒だ、ビールだ。肴は少々惡いが、坂下の方が安い、なんかんと、イヤにケチ〳〵して暮さんけりやならん。金ピカの馬上の佐官は、家にあつては瓦斯の衣類に木綿の兵子帶、恰で巡査が非番の體で、酒も少しは制減せねばならぬ。とあまかういふ生活の止むなきに至るのだ。僕はなにも華美を喜び、贅澤を歡ぶのぢやないが、外廣がりの内すぼまり、門外の馬上の君は、門内の一書生といふ様なる、そんな矛盾な不揃な暮しは、それは學者だとか、美術家だとか、文士だとかなら、又一風流でをかしからうが、戰捷國の軍人として、體面上如何にも無様千萬、不恰好千萬、否武士の面目に對して忍ぶべからざる不愉快なことだと思ふんだ。」

「一理あるナ。」

「そこでぢや。僕をして其地位を保たせ、そして極めて謙遜なる妻が欲しい。」

「如何様尤ぢやが、まづ六ケしいナ。」

「何故、六ケしい……」

「其地位を保たせる妻君は、今が今でもある。」

「あるかい。」

「あるとも、君と云つたら三人でも五人でもある。謙遜の二字が六ケしいナ。所謂これは道理の問題でなくて、愛の問題だ、露骨に言へば持参金を持つて行つて、尚且謙遜淑徳、よく君に仕へるといふのは、まづ君の腕でさがす外は無いて、ハッハッ〱。」

「ヤア。一本参つた。ハヽヽ」

と、とう〱其お話しはお酒に流れて了ひましたのですよ。オホヽヽヽ。

＊　＊　＊　＊　＊

わはれ今日來訪の二細君より、ゆくりなくも今の婦人社會のある裏面を窺ひ得たる心地して、暫時首俯垂れぬ。

窓の下薄黒うなりぬ。今日も暮るゝか障子を開けば小庭の白梅夕日に照りて、垣の外には追羽子に疲れたる少女等が、下駄音輕く走け行く樣など實に靜なる初春の夕暮なりけり。



▲露西亞の乳母　露西亞の中流以上の社會に至れば子供に對して乳母を雇ひ入れ、實母に代りて其子を養育せしめ、從つて其子に對する權利は乳母の方寧ろ實母に優るものあり、其乳母は其子の成長したる後には解雇するものあれども、其家庭が貧しからざる以上は其乳母を終生其家庭に於いて養育するのみならず、家庭に於いても頗る地位を與ふるといふ。

文の栞——春の部

雪

○白妙の雪の景色のうるはしさよ
遠き深山は堆き銀かと疑はれ
近き林は玉の梢をならべけるかと思はれぬ

○軒端につもる白雪は
旭にとけて滴るめり

○梢の雪は溶もやらで
所々に梅の花さく

霜

○霜夜の鐘は
何となう遠く聞へ
陰より出でゝ陰に入る心地ぞする



○夜更けて風寒ければ
庭面に置く霜の白きを見るばかりなり

霞

○遠く棚曳く朝霞、嶺も野原も
紫の色を染めたるごとくなり

○春霞を破りて
出づる鶯の
羽風に花の
香を送りぬ

○東雲の影さす
彼方に霞
たなびきて
春のけはひ
の長閑さ
まさりぬ

梅

○梅が香を
袖にうつし
て誇らばや
花の林に
住める
身なれば

○軒端の梅の
影をとめて
窓の彼方に
匂ふめり

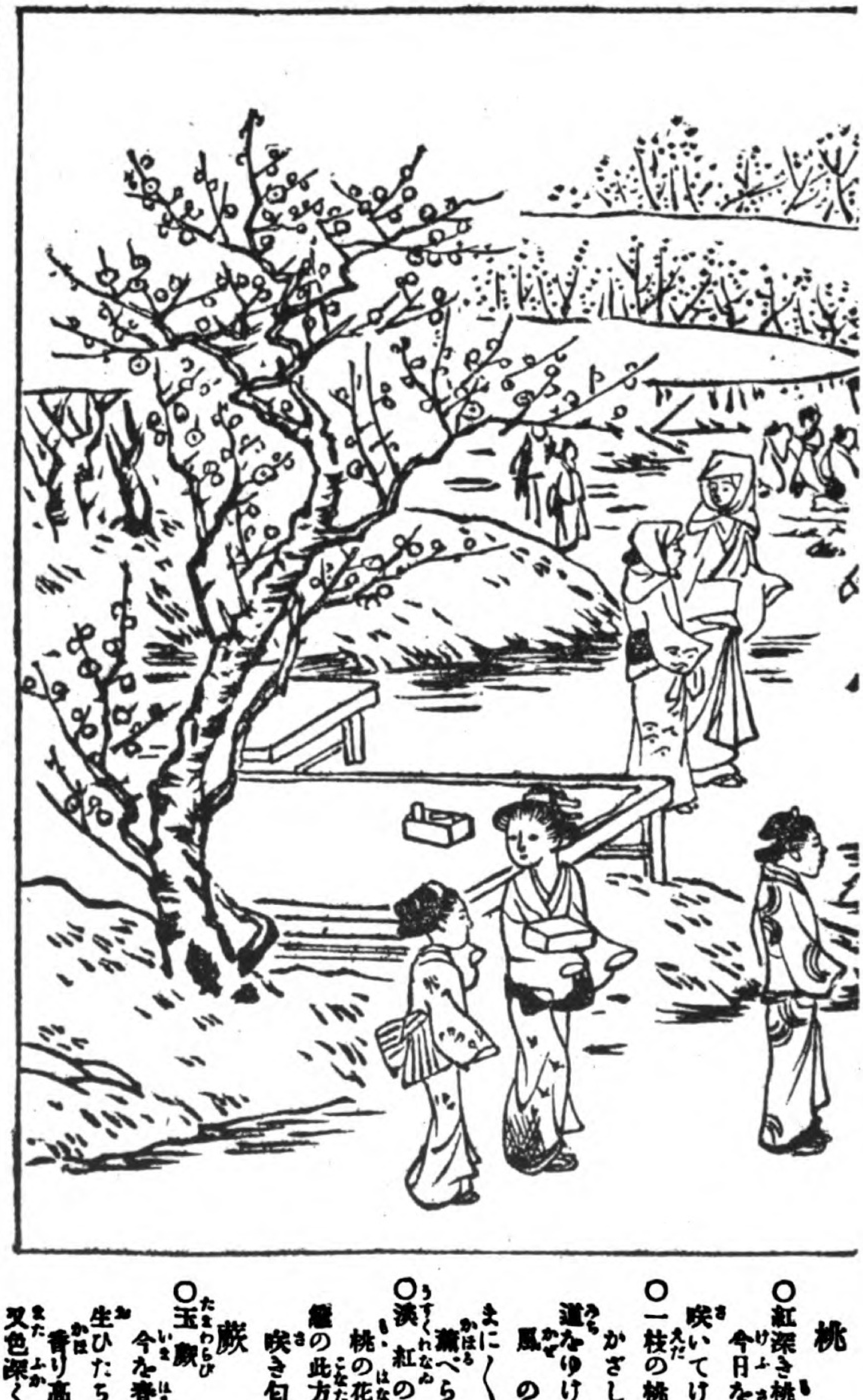
櫻

○峯の櫻は
今日を盛と
咲出でぬれば
遠く
谷底までも
うらゝかに
見ゆるゝ
心地ぞする

○庭面の櫻の
花の下陰に
春の景色や
深からん

○春風の齎らす香 深ければ
花の在かは問はで知らる

○霞横、今一しほの色こめて
とくさけよかし



桃

○紅深き桃の花
今日を盛と
咲いてけりな

○一枝の桃を
かざして
道をゆけば
風の
まに〱
薫べらなり

○淡紅の
桃の花は
緋の此方に
咲き匂へり

蕨

○玉蕨
今を春べと
生ひたちて
香り高くも
又色深くも

○蕨がもとの雉子の聲
春をつげてぞ長閑なり

○二折三折りのわらび艸
摘とりてこそ家土産にせん

漢文に描かれたる梅

作者は幕府の碩儒佐藤一齋氏、
原文は杉田梅林の紀行也

予幼時家君の杖履に陪して杉田村(武藏)に遊び、梅を觀る、今に二十餘年恍乎として夢のごとし、再び往くを思ふて而して未だ能はず、去歳天澤林公に從ふて金橋(小金井)の櫻花を訪ふ其の偉觀たる獨り吾が武に儁卒なるのみならず、而かも他亦或は是れ無し(中略)

今春氷霜早く解け、天地和暢、是に於て觀梅の興動き乃ち三谷恂南、平出濟士を拉し正月八日を以て發し、金河の(神奈川)驛に投宿す是日朝雨霽れて而して猶ほ曇り、薄暮西北の風起る、逆旅の主人曰く此風蓋夜にして而して歇まん盍ぞ舟を買はざる、杉田は此を距る四里にして而かも遠し、一葦之れに航するの近く且つ便なるに如かずと、諸を二子に謀る、議諧はず、乃ち止む、翌早、風未だ歇まず發して程ケ谷驛に迄る左折す、石灘阪といふ、氷箏(霜柱の事也)鞋を沒す、阪盡く、原田豁如不二山を回顧するに、積雪朝暾と輝映して淡紅色を成し右楽左筒屹然として對峙し、亦一白一青、殊に佳觀を爲す、迤邐として原に下り、太田村井戸谷村を歷て大岡村に抵り農夫に遇ふて路を問ふ農夫曰ふ、關村よりして而して入れば二里にして而も遠し、赤穗川を經れば嶮なれども而かも捷しと、乃ち捷徑に就く、果して嶮なり、其巔に造りしに、樹木轇轕、茅筏蒙密す、穿つこと數百歩、蜿々として而して下る、則ち倏ち、復た軒豁、東南は是れ海、左は錦屏と爲し、金澤となし、山麓を森邨となす、次に中原村、稍南を杉田村となす目歷して而して指數すべし、風既に歇み、海面熨の如く、是に於て逆旅主人の言、吾を欺かざるを知る、然れども是の佳境を得て、勞も又償ふべきなり、既にして森邨に抵る、田間往々梅を觀る、幽馥時に來つて人の衣裾を襲ふ、左に禪宇を見る、林香庵といふ、又數百武中原村となす、野水分離し、清徹鑑すべし、而して梅花是を掩映す、橋を渡り南すること百數歩、之を杉田村となす、一巨刹を得、東漸寺といふ、梅多く鐘あり、永仁六年の鑄造實に五

百年外の物、銘も又奇古、翫すべし、予嘗に聞く村に老農あり、善悪居士といふ、頗る韻事を解すと、既にして寺を出で、路に一禿翁に遭ふ、依て就て之を問ふ翁は即ち居士也、喜ぶ事甚だしく引いて其の廬に至る環廬皆梅、其幾數株なるを知らず、居士の曰く、公等暫く装を解き、村中を逍遙して可なり、田家供すべきものなし、晩將さに梅花餅を炊かんとす、幸に一宿して以て夜梅を見よ、頗る清賞するに足ると予之を謝し即ち出で、林間を穿ちまづ妙觀寺後の山に攀づ、山腹に至つて伽藍を廻瞻するに、梅花の裡に埋沒して一村皆白雲世界其頂を窮めて俯瞰せしに花光、雲影、遠近相含み、而して海灣晶々然、一大鏡を磨し、漁舟其間に往來し、誠に絶景となす、獨り梅花のみにあらず既にして山を下つて南す、小塢あり八幡の祠を置く、祠外百歩、左右皆梅、石華表あり、表外、即ち農戸、園圃相隣りし、其梅皆奇絶、徑有て歷觀すべし一家の植ゆる處ろ凡そ四五十株老樹は一根七八幹、根圍合抱に過ぐるもの、概ね六七章、倒れて而して又起き起て

而して又偃る、虬龍の狀を爲すものあり、半身朽ち、一而して花猶繁きものあり、長條水に倒れて山猿臂を伸ばし爭ふて澗泉を掬する如きものあり全幹蒼蘚、樹皮を現はさゞるものあり、根株蟠屈獰獸の如きものあり鐵枝百出して兵戟相交はる如きものあり、其餘種々異狀、具さに擧ぐるに堪へず、是に至つて花の冷艶と香の馥郁と固より得て而して名狀すべからず、村南に寺あり妙法寺といふ、照水梅一株、蟠梅株、皆老ゆ野梅又無數南すること數百歩、山あり、水其麓を繞り、淙々然として海に入る、水汭一農戸、老樹殊に多く、花尤も稠し、之を一村の盡る處ろとなす、遂に左して海濱に沿ひ、而して歸る、居士門に候して曰く何ぞ晏きや、餅熟すること既に久しと、即ち入りて地爐に就て環坐す、須臾にして童兒、饌を供ふ、香氣薫然、問はずして而して梅花餅なるを知る、餅の製、蓋し梅花蕚を去る、漬くるに鹹水を以てし、餅に和して是を炊ぐ色微黄にして極めて異味となす、健啖數椀、又村醪、海參腸、羅蔔羹を設く皆土産なり、既にして而して月光昏を破り、林間玲瓏たり是に於て、復興發し、樹下に蓆して苦茗を煮る、二子韻を捻り、思を搆ふ、予も又漫りに賦一篇を作る（下略す）

文の栞――春の部

若草

○若草のめだす頃にや、
いづれの野面も
緑を現はしぬ

○橋のたもとに
生茂る
若草の元に
露深みて
蝶の姿の
映らふ樣見ゆ

○庭の面に生茂る
其若草の
色や薫るらむ

菫

○田面にさける
菫の花
風にゆるぎて
おかしうぞ
見ゆ

○紫のいろな焼けん春の野は
すみれの花のさかりとぞ知れ

○千草のかげに色ふかみて
紫匂ふすみれ草



土筆

○緑の草の
間より
淡赤う
いろどりて
あやしう
生伸びぬる
土筆かも

○つくしの形は
怪しけれど
筆に似たる
樣のいとゞ
床しけれ

鶯

○谷のあなたに
鶯の聲を聞
山のこなたに
春風を迎ふ

○鶯の一こへにて
春の長閑を
覺えてけり
○のどなる林の
影の所々
またのどかなる
鶯の聲

雲雀

○早や姿さへ見え
わかぬまで
高く飛のぼれる
雲雀はいづこ
○雲井をさして
高く飛去り
聲をかぎりに
啼きたつる
雲雀の心こそ
あやしけれ
○ひばりの羽かけ遠く映りて
青き麥畑のほとりに風あり



○叢のなきに巣を搆へて
多くの雛を育つる身の
いとゞ切なきおもゝちあり

蝶

○黄金の色深き
菜の花や
見ゆる限りの
畑と畑
蝶の群飛ぶ
氣色ぞゆかし
○春のあたしの
風の下に
翅をひろげて
飛ぶさまの
殊更しほらしう
見るぞかし

雉子

○森の下影
暗うして
三聲ばかり
雉子の啼なり

日記に描かれたる食物

筆者は明治の閨秀中島湘煙女史

十九日晴

けふは珍らしく顔にあかみなきとの事なれど、氣はあしからずして机に對せり。昨夜よりあすはとたのしみ居りし品(下婢の名)の土産の薄茶一服命せり幸美果もあり、服加減甚だ口に適せり。昨年よりの宿望を果せり。是よりたのしみは、新茶にあり。昨今はなまくさきもの好まず。されど、新茶の顔見たら鯛の茶漬たうべて見んかと思ふ。新聞何より先に茶の消息を伺へり。靜岡は積出せしとの事なれば、本月中いのちあらば、あの香り唇を濡し得んか。

牡丹侯の家より、一枝を寄せ來れり。殊更の名種といふにはあらざれど、いづれにしても、牡丹は丹牡なり。一枝にして忽ち玉堂に座するの思あらしめ、昨年も一昨年も、此名花と相見るを得ざれば、嘆賞更に不能措。牡丹の前に死なむ哉と呼びし人あり。吾にも亦其情あり。されど今死ぬわけにもゆかず。いかにすれば、此情を滿足し得らるゝやと考ふるに、矢張筆に其おもかげをとゞむるの外なきなり。此名花の眞影を留め得んとは烏滸の沙汰なれど、着色にて其一端を寫せり。其まゝなりと母君賞し給ふ。

二十日晴

朝半日又もや墨牡丹を描けり。意に適せねば改めんとて、愉快なり。意に適すれば、更に愉快なり。筆を弄する爲めに、病勢を添るとの注告はあれど、いづれ不治の病と定まりし以上は、三十分間にてもおもしろきが何よりの賜なり。此賜物あるが爲に、尙餘生ある如く吾は思惟するなり。又此愉快を全く抛擲せねばならぬならば、一日も身を措き度世界とは吾には思はれざるなり。其故發熱は覺悟の上にて、聊かにても、氣分よければ、直ちに机に對するなり。此日は熱低くして三食も座して喫せり。この時節は吾の好物澤山の折なり。ふきの葉の砂糖煮、木の芽、つく田煮、わらび、たけのこ、木の芽合、或は鳥のむま煮、昔は筍豆腐汁とて、たけのこを油でいりしを豆腐と和して味噌

汁に爲すなり。今とても、口には美味なれど、汁を啜る元氣衰へし爲、もし一椀を喫し得ば、がつかりとして外のものに箸降す能はずしてやむが常なり。茶椀蒸等も皆廢せり。量の少きものにて甘きもの尤も妙なるを覺ふ。蕎麥ずきでありしが、かれの眞味を知らんと欲せば、行儀を顧みぬにあり。音せざらんと欲しては、眞味不出、故に吾他人の前にては喫せざるなり。自らいふもおかしけれど、吾は食事行儀のよき方なり。獨蕎麥のみは特別の許可を得て、幾分の音を爲すなり。今日はすゝる事少しも出來ざれば、音させんと欲するも得ず、隨て眞味亦出る能はず、こゝに於て蕎麥を試むるも極めて稀なるに至れり。茶の如きものむといふよりは、かむといふ方に近し。茶はのむより、かむ方がむまし。一口の玉露唯無意味にのみては味ふいとまがない。かむ氣味にて眞のむまさが分る。私は茶はきらいで、何卒湯を頂戴といふ客往々來る。これだけで吾が友でない心地す。何より茶がすきといふ者に逢ふと、少々嫌ひのところはありとも容赦が出來る。矢張酒ずきが、吾れを見れば無風流共に語るに足らぬ人物と思ふならんか。曩きに一客あり、吾茶器を改めてすすめしが手にとるや灰ふきの中に投じた。其勇氣に一驚を喫した。此勇氣を最初吾が煎ぜんとする時に出して、お茶は頂戴しませぬからといふてもらひたかつた。

文章は人格なり、殊に日記文に於て然り、凡そ日記は其人の平生を見、其人の行住を知り、其人の思想、感情のありのまゝなるを寫し出されたるによりて殊に然るを知るべし。
湘煙女史は明治の閨秀にして詩書文墨の嗜み深かりしのみならず、よく社會を知り人事を知り、殊に家政は其最も長ずるところにして文墨、詩書の樂みを深ふする間に巨萬の富を成せる事既に常人の及び易からざる處ろなりとす、その平生交歡する處ろの人多くは當時政界の名士にして、風流韻事の間胸裡自から權勢移動の靈行をも秘めたりと傳へらる其の日記文のごとき、瀟灑洒落の妙を極め、また大患の其の身にあるを知らざるものゝごとし。

文の栞——夏の部

雨

○雨がちなる五月の空には
　いつも〳〵雲脚ゆるやかなり

○梅雨空の
　鬱々しく
野もせの風さへ
　しめりてけり

○野路の村雲
　なか〳〵に
烈しければ
　往來ふ旅人の
煩ひや
　さはならむ

雲

○墨よりも
　黒き雨雲の
いと深う
　籠りぬる
山も見ゆ



○夏の夕の空を見渡せば
　飛白かとおもほゆるまで
　いとうつくしき雲もあり

○晴れ渡る雲の脚は
　遠近の山々を踏みてけるかな

雷

○俄に鳴はためく
　雷の聲

○此の嶺より
　鳴響きて
南の山に
　巡ぐろさまは
げに恐ろしき
　ことにこそ

○またゝく間に
　千里を越え
遠く鳴渡る雷の
　怖ろしさよ

虹

○高く弓形な
なせる虹の色は
青田の彼方より
殊更に濃見ゆ

○七色なせる
虹の色
いと美はしう
眺めらる
○谷より山に
架渡せる
七色の橋もあり

菖蒲

○五月の空の
雨勝なる中に
池の菖蒲は
甚じう色増ぬ
○彼方此方に
打渡る八橋や
紫　にほふ
ゆかりの花
實にうつくしき
菖蒲さく

藤

○高き岩角より白う咲亂れたる藤の色よ
風よけれど斜めにゆるぎて
最もこゝちよきおもゝちを示し



○垂れ下る
につれて
増々美しう
見ゆる藤の花の
ゆかしさよ
○池の水面に
影を浮べて
漣のうれ〱
漂ふ紫の
色ゆかし

躑躅

○嶮しき岩山に
咲みつる
姫つゝじ
あたり限なく
紅を染てけり
○赤きつゝじの夕日に燃へて
一層うつくしう見えにけり

國文に書かれたる雨

作者は國文の名手加藤千蔭翁石濱の雨と題したり

八月二十日あまり、秋の氣はひなつかしくて、例の隅田川のほとり、石濱のいほりに行きて宿りぬ、有明の月のにほひも霧たちわたる曙のさまも、所がら世に似ぬものから、こゝは雨のそほふる日なん、殊に哀れは深かりける、元より、萱葺ける庵なれば、音だになくて軒のしづくのみつよく、落ちこむるより、籬垣の萩の下葉の色づきたるが、ほろ〳〵と散るもあわれなり、水の面は動くともなくて鏡のごとくなる雲の濃き薄きうつろひてかつ浮び、かつ消ゆる水泡にこそ雨のけはひはしるかりけれ、澪の一すじはさし引汐にも交らで、とはに澪の色に流れいにて沖にいづめり、これや水上の秩父の山の眞淸水の落ち來るならん、打向ふ岸のはりはらのみ濃き墨がきのごとなるが中に、柞黄味たるは流石にほのかに見えて、其のひま〳〵より長き堤の見え渡るに、堤のおちなる梢はやう〳〵に淡墨もてかきけちたらんごとく、いとしき遙けもはたゞなびかぬ煙とのみぞ見えける。

漢文に描かれたる菖蒲

作者は川村梅窠、原文は堀切菖蒲園の記

紫菖蒲は蓋し菖蒲の別種なり、俗に呼んで花菖蒲といふ、其の花は燕子花と相類す、而して其開くや稍や後る邪、墨堤より綾瀬に至り、稍や折れて東行すること數里、田舎の間往々にしてこの花を見る、而して其尤も多く且つ美なるものは堀切村に如くものなきなり。其他圃畦にして柴門、竹籬、灑然として人に可なり、門を入れば則ち茅舍數楹、苔庭を拓くこと數十弓、遶らすに渠を以てす、渠外は則ち植花の畹たり、無慮無慮數百畝、漑すに水を以てし、而して遠く田疇と相接し、其花或は白にして而して淡紅、或は紫にして而して點素、深碧なるあり、深絳なるあり、絞纈絢爛、綺穀相錯り、愛すべく翫ふべく、而して其幹や昂るものは飛燕のごとく、低るものは睡蝶のごとく、縮まるものはひそめる如く、展たるものは笑ふがごとく戻るものは戻るがごとく、媚柔綽娜、各々奇を競ひ妍を衒ひ、悉く狀すべからず、其莖たる凡そ幾千其品たる凡そ幾百、而して毎品畦を別ち、標するに佳名を以てす、亦一々記すべからず、庭中別に土を築き、榭を設けて以て客を延く、登つて眺むるに一面の平地只見る千百段の錦繡を鋪張し、而して煥然、爛然、直ちに日華と相映射し人をして殆んど目を眩し、魂を奪はしむ

眞に奇觀なり、噫陶甄何等の手以て此の奇花を製する、其術も亦巧なる哉、然れども人の勞敬して之を厚養するに事缺りせば則ち此花も又哀は深淵、幽谿中に埋沒して群草と同じく枯落するのみ。

國文に書かれたる月

作者は藤原雅雄、隅田川の月と題せり

月のさかりは水の面こそ、物よりもけなれ、いでや其心を隅田川原の月に船浮べんとて、友垣をうちつらねてふみおへる、鉛島てふ所より、綱手はなちて、玉くしげ箱崎をすぎ、さき舞の三保の江に漕ぎ出で、大河面を、みをのぼるに、今宵、そらの海に立ちたるも霧もあらず、月のみふねに障らふ雲もなく、只上つ瀬の大橋しもつせの長橋のみぞ、とほしろき川の隅にはありける、和田津海の八重の潮は鴨島の佃の島ひゝきて滿つるまに／＼掉もとらざるにゆき、擢もはねずして上るはたゝみそら行心地なんしける、人々味ひ物にあき、旨酒に醉ひて、大和なる、唐なる、歌とも、文ども、天飛ぶ雁のごとつらねうたひ、波による玉も綾をなしつゝ千々の心すさびもこれに如くものもなく百夜の秋も今宵によりて永かれとなん覺ゆる、同じく、宵のすさびに歌へる詞、大ふねに小舟ひき添へ月の照る隅田河原をいや川登る。

國文に書かれたる蕈

作者滋野貞融

松茸いとおかし、松の下蔭にのみ生ふと思ひしに、さゝ竹のしたおひにおひしげれる中つゝじの根にこもりたるよ、夕日影は笠たてゝ道もせに出でたる、いと／＼おかし、しめじ霜ふり、千本といへる、いとめでたく、初茸はめでたけれど、虫ばみたるが多きぞにくき、金たけ、ねずみたけ、ものげなし、雪たけ、神無月ばかり、これたてまつれ給へなどいひて、山里人のもとより消ゑして得させたる、いとありかたく又めでたし、岩たけ、草たけ、椎茸、精進のをりなどいはん方なし、柳桑などの木に出でたるも、折にふれてはをかし。

文の栞——夏の部

牡丹

○廣々なる園の中に
殊更設置たる
牡丹の圃あり
○廿日草色深くも
咲出づれば
周圍まばゆく
見へてけり

蓮

○濁りに深まぬ
蓮葉の
清き姿も
見まくほりす
○朝風の吹く
まに〳〵
白き蓮の
咲いてけりな

麥

○麥秋なれば
おちこちの
圃のうれ〳〵
黄みけり



○黄み渡れる麥の圃
雲雀の聲ぞいと高き
○麥の穗は綠を增してけりな
最と暖う風の吹く

粟

○粟の圃の美しう
見ゆるは
細なる玉の穗の
群れ連なりて
○小鳥の羣れて
鳴く圃や
粟の穗さきの
ゆるぐらし

瓜

○二つばかりの
瓜の實を取て
氷の水に浸たる
さま最すゞし

燕

○柳の蔭に飛ぶ燕
搖ぐ梢に
招かれて
二つ三つ
四つまた五つ

○高き臺の壁に構
燕の巣こそ
おかしけれ

○今朝吹く風に
翼を撫でられ
飛んで柳の
影にかくれぬ

子規

○子規の一と聲は
雲の中より
洩れてけりな

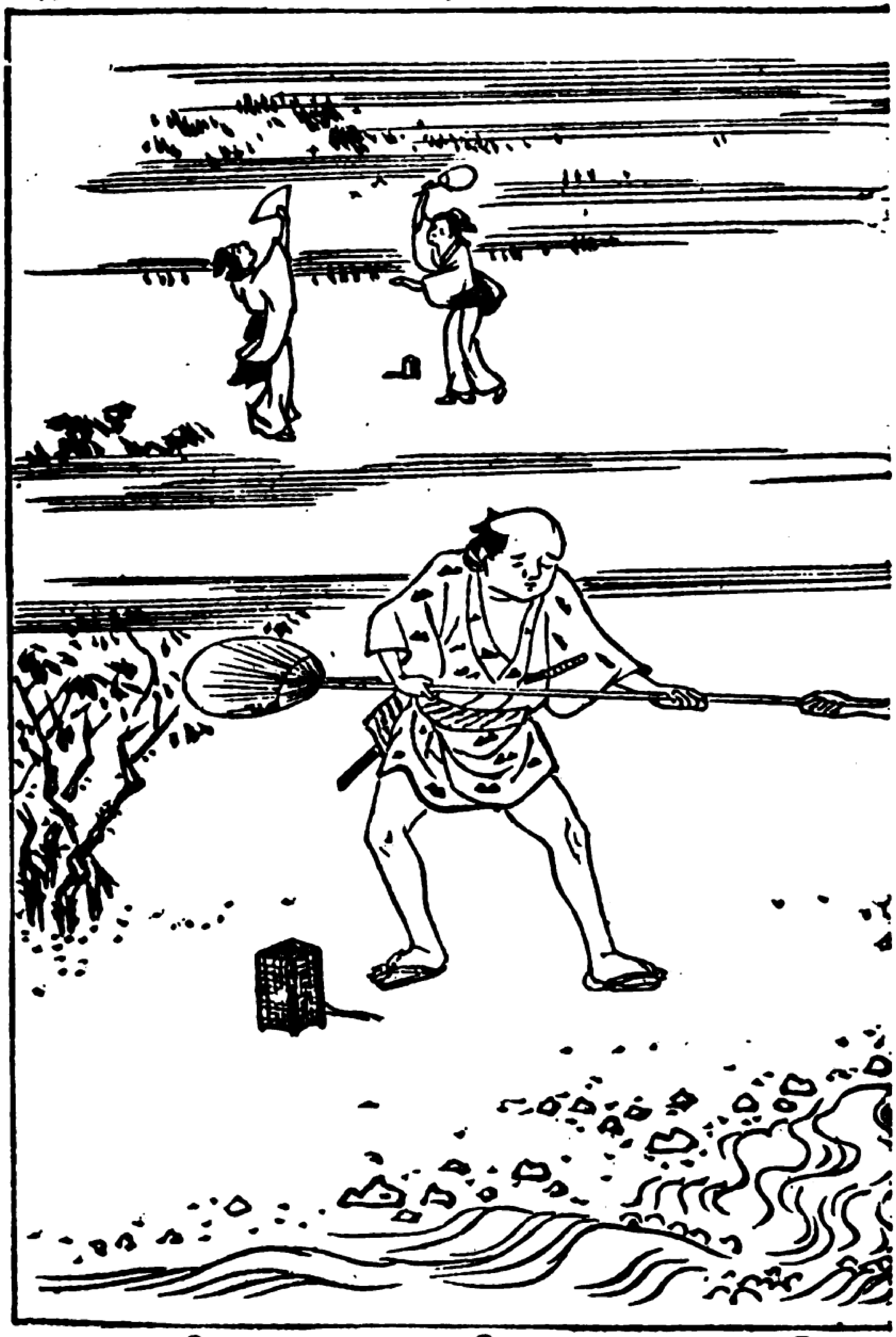
○月影の中に
聲高く
音づる郭公

○森の中に杜鵑の
聲をきけば
空合たかく
月は照るらん

蟬

○暑さもいとはで鳴き立つる蟬の聲々は
一層苦しう覺えられぬ

○蒸すばかりなる暑き日なれば
松の枝に鳴く蟬もいとゞ枯たる樣に見ゆ



螢

○池の面に
うつらふ螢の
火影あれば
夜はふけ
ながらも
なほ更やらぬ
こゝちぞする

○夕去れば
門田の稲葉
露にぬれぬ
螢の火かげを
うつしてかな

鮎

○川瀬に竹の
簗をしつらひ
遡ぎてのぼる
鮎を獲てけり

○谷水の清き川瀬にうつろひて
白かねの針のどひちがふやうに見ゆる鮎

○香りもたかふ、味いもいと優ぐれたるは
この魚の特色にぞある

日記に描かれたる菫たんぽゝ

筆者湘煙女史湘煙日記の一節

二十一日晴

午後熱が出るともまゝよと、久しぶりに車に駕して庭園を廻れり。白藤花々短かく凛々しく咲けり。五六日後が見ごろならん如く見ゆるは何なると見れば、鷄頭と松葉牡丹が頭持ち上しなりと、このみが鼠程に育ちなば、最早土を覆ひ盡すならんと想像せらる。取のこされのいちご白き花のみと思ひしに、はや一隅には珊瑚二個葉下に潜みたり。昨年已に盛りにてありしものを、今年更に盛りならしめんと欲して大に失敗せり。給へるに忙しくなくて、これも或は可ならん。路傍の草悉く抜けよと命じ度も、各其天職を竭くして咲て居るものをと思ひては、なか／＼に其の勇氣も出ず、而して花がおの／＼さゝやくところをきくに、一々理ありて、同情に堪へぬなり。むくつけき腕を四方に張り、おのが領分には、すみれ、たんぽの樣なる弱むし、一歩も足ぶみさゝぬと、ふるればさゝんとする、凛としたる薊の中得もいへぬくれないを含みしあざみの風情、勇者が鎧の袖に花一枝の趣ありしと評せんか。よは／＼しきが草花の本色、又徒らに人手にかゝりて、人のこはらしきを濟度するが吾々の慈悲心、冬より仕度して稍く開きし苦勞は、露程も察せず、開くや否。みつけ次第に摘みとりて、時には美人の雲鬢紳士の帽に登る、これとても聊か情をよろこばすに足らず、されど指尖にてもみくちやにして、すげなく地に擲げらるゝに比しては榮ありといはんか、此まゝに、何人の目にも手にもかゝらずして、思ふ存分咲きて後天壽を全くするが第一の希望。次は眞に吾を愛する人に逢ふて、うつくしき瓶にひいやりとしたる水に足浸され、どうも此色此形此のまゝに寫し難く、又來春再會の期までと寫眞にとらるゝ時は嗚呼すみれにむまれて來たならばこそと得意になるも、如此事に會するは極めて稀なれば、摘まれて地に擲げらるゝが、すみれたるものゝ本分と甘ずるとやさしげにいふを蒲公英は、笑てわたしはすみれさんのやうなる氣にもなれぬ故、人

が手を出すと、いやな汁をつけて困らしてやる、又座敷に登されるは大嫌ひ故、すぐ、すぼんでやる。菊菜ほうれん草等食品に定りたるものあるに、わざ〳〵本分でもあらぬわれを食ふけちなやつがある。其上甘いとほめる事はめつたにあらず。にがいだとか、あく多いとか、又は熱湯かけて其まゝ食ひもせず、どうせ錢出したもので無いからといふ根性にて、疎遇を極める。毎年蝶に誘はれて、人間界に來て見るが、どうもかむばしき處でない。然し今年は妙な事、關西には野一面此花と聞いて居た、げんげさんが新入して來て、われわれも初對面をして、いろ〳〵其物語りも聞きしが、こゝの主人が關西產故昔し名染にとて招がれ、好まぬ事ながら、義理にちらほら頭出して見たが、わたしは獨立の出來ぬもので、大勢でなければ、大勢でなければとんと見榮がない。夫故矢張野に置け、げんげ草などゝ輕蔑するやからもあるが、元來わたしは皆さんの樣に春をかざるばかりに生れて來るのではなく、大なる必用がある爲である。今それを說くと身分がいやしげに聞こゆるから語りませぬ。といふて居りしが、誰にも不平はあるもの哉とさゝやくを、吾も憫れにもおもしろく感じたれど、いつ迄も聞き居る能はざれば歸りぬ。

此日熱低し。黃昏醫來る。團子を賞して去る。

醫者の去りしあとにて、あの聽診器とかいふものにて、おなかの中なにかきこゑるものでしようかと五十近きはるといふ女の發言なり、聞へるとも、耳を人の背にあてれば、大きな音のきこゑるものなりとは、母君の答語。きゝて見なさい、わたしの背なと手を組みて丸きせなかを出して其の聞くをまちて居給ふ左樣ですか、それでは鳥渡伺いて見ましようと、うしろに廻はり、七八寸隔てゝ耳をすまして聞く、母君は今かいまかとまち顏なり。女は頻りに耳をすましていろらしき其の兩方の樣、吾は熟視してをかしさもとび越てをかしくもあらざりし。女は終に發語せり。何もきこゑませぬと、母君ふりむきて、あゝいやな事耳をべつたりせなかにあてゝるだわ、あゝそうですかと、稍く聞きて、成程大きな音のするものですなと其あきれ顏、何ともいへぬさまなり。其顏を吾の方に向て誰でもですかと問ふ。生きて居ればと吾答ふ。わたしにでも音がするでしようか。それは分らぬ。おまへ自身に先生て居るのか、死て居るのかを聞て見なけりやと吾の戲れを彼は何と解してや、極まじめの顏付にて、そうでしようなあと答へた。事每に、厘毛の損得を說く彼が敏腦、ちと金錢外に融通の出來ぬものか、實に不自由のものなりと感ず。

文の栞‖秋の部

霧

○所々晴渡る霧のなかより
峯も現れ白雲
なも見てけり
○霧たちこめて遠
はわかれど
鴫の羽かく音は
聞へぬ

電

○電まのきらめき
渡る雲間より
漸く晴ろゝ氣は
ひも見ゆ
○閃々ときらめき
わたる電の
いとすさまじき
光に照され
虫も鳴く音を止
めてけり



桔梗

○千草のなかにゆかりの色ふかく
一層めだつ桔梗の花
○朝風ひやゝかに吹そめぬれば
薄桔梗のいろ
愈々こまや
かなり

萩

○庭のまがきに
咲亂れぬる
萩の花よ
○朝風の吹かぬ
まに早咲そ
ろへる萩の花
○朝露は緑の葉
の面に殘り
所々色とりど
りに咲出ぬ

薄

○夕の露の玉散
りて、薄の
穗先乾き出ぬ

○玉の穗長きすゝき艸、夜半の月影照りそふて、色なき露に色やますらむ

稲

○稲田の影のうるはしき風吹くまゝにゆらぐさまは

○鳴子の音のやみまなき稲田の風情おもしろき

茸狩

○山の峯打續きて夥多のきのこは生ひてけり

○方の山に人聲してあれよこれよとのゝしろは茸を獲むとて騒ぎつゝあるなり



○松の葉かげの苔の下塵の中より生いぬる茸も見へき

○今日秋日和な幸に多くの友とち打連れて北の深山に行きて見む數限りなふ生たちぬる茸かりして遊ばなん

菊

○百夜艸の香をこめて千歳を祝ふ今日

○庭の彼方の千代見艸、露を含みて色ふかし

○露にをごれる菊の花籬のまがきにみちてけり

紀行文に描かれたる風俗

（筆者は美濃屋平七寶暦年間尾張の人京より長崎へ旅せし時の紀行の一節也）

○八日猶しも晴やらぬ五月雨につれ〳〵として閒坐したるに、柳谷氏が許より手簡をして我を招ぐ。いと嬉しくて例の宿主を伴ひて。申刻頃より勝山町柳谷が方に赴く。亭主喜び出迎へて言葉多く急がはしく延請して坐敷に通す。甚潔淨にしつらひ儲たり。床には唐畫の法を用ひ畫たる富士の横幅をかけて、前に唐めきたる卓、陶瓦の獅子を置たり。主の同役何の太四郎とかいふ人を招きて相伴せしめて、種々饗應取合せよく唐物種々出し見せて、様々珍しく面白き事共を聞たり。實飲談話に數刻をうつして。亥刻頃に歸宿せり。今夜の献立

座附　つるし柿

茶菓子　天門冬砂糖漬　名月餅　唐菓子なり

盃

長　蓋　海老　水仙玉子

かまぼこ　しそ穂

しそづけ大根

造り身

吸物　鯛ひれ

皿　引　三島のり　かいしき

錫皿陶器猪口

坪　椎茸　みやうが　小皿引　煎ふた

吸　物　しんしよ　魚のすり身にてつくれり

坪　おろし芋　あんかう　一もじ　肉　椿

茶漬

皿　なら漬　焼飯二　唐焼の小さき壺茶碗にもる

あち造り身

竹の子　ふき

大　鉢　花ゑび　かまぼこ　どんぶり鉢　大こん

ゑびもち

麩

あわび

どんぶり鉢　一もじ

ぎんなん

かくのごとし。遊女は引田屋の千歌。年は二十一二な

るべし。貌形大抵にして人柄賤しからず。瑇瑁の笄の濶一寸長一尺二三寸なるが、又瑇瑁の簪八九本、瑇瑁の櫛をさしたりき衣服は桔梗の紋羅に、江戸褄摸様をつけたる。紅絹裏の袷帷子を着て、黒びろうどの帯を前に結びたり。着替は花色紋縮緬に、裾摸様の袷、夜具は黒天鵞絨に。緋縮緬裏の蒲團。花色緞子に緋縮裏の夜着を用ひたり。一人は引田屋のみしを瑇瑁の櫛笄簪　五六本に。銀の簪をさして。藤色の紋羅の裾。摸様つけたる紅絹裏の袷帷子に。島びろうどの帯を是も前に結びたり。禿子一人は例の國吉。岸島の袷に糸錦の古き帯をしたり。一人は市彌。郡内島の大筋なるに。ちゝぶ裏の袷を着て。帯は國吉に同じ。櫛笄簪二人共に甚も粗賤し。これは遊女屋より禁制して。すべて禿子共の衣服頭の飾華美を許さゞる所なりとぞ。かくて暮頃より夜半迄飲宴して。つひに客中の客となり。一宿して歸りぬ。此夜の雜用。取惣て百目に餘れり。壯年の心の如く淫蕩を好むにはあらねど。遠境異風の奇遇を珍しき事にして。寢物語に唐客の風情の委しき有様を尋ね問ふ事を楽みとしたるのみ。

◎此頃の途行く人、頭のみ先に、足のひきずられ行くは時の大切なるを悟りたるが形に表はれたるならん、去れど歩む折のみ、時あるにあらず、居るにも、寢ぬるにも、業に就ける折にも、時はあるぞかし。

◎道を行くに胸突き出して悠然たる女子の多くなれるは、女子體育の進みたるしるしならんか。

◎赤門おしろいの廣告あり、早稲田香水又耳に入りぬと、ある瓦斯燈に婦女小間物の文字あり、男子小間物の看板も近き將來に見らるべし。

◎瓦斯燈眠むげなあかりの下に、扇を顔にあて何やら唱ふ書生風の男、聞けば女學生の惡口なり、然し扇に顔をかくしたるは恥づる處ありてにや。

◎元祿風の銀杏髷、葡萄色の羽織に前掛、風にひるがへれば、裏は赤きいちまつの仇姿、家も、倉庫も、身も、靈も、彼れに捧ぐるものゝある世なり（さくら）

文の栞――冬の部

水仙

○寒き夜中の文机の上に文よむ友として愛られつゝあり

○水の中より最白う咲き出づる水仙花

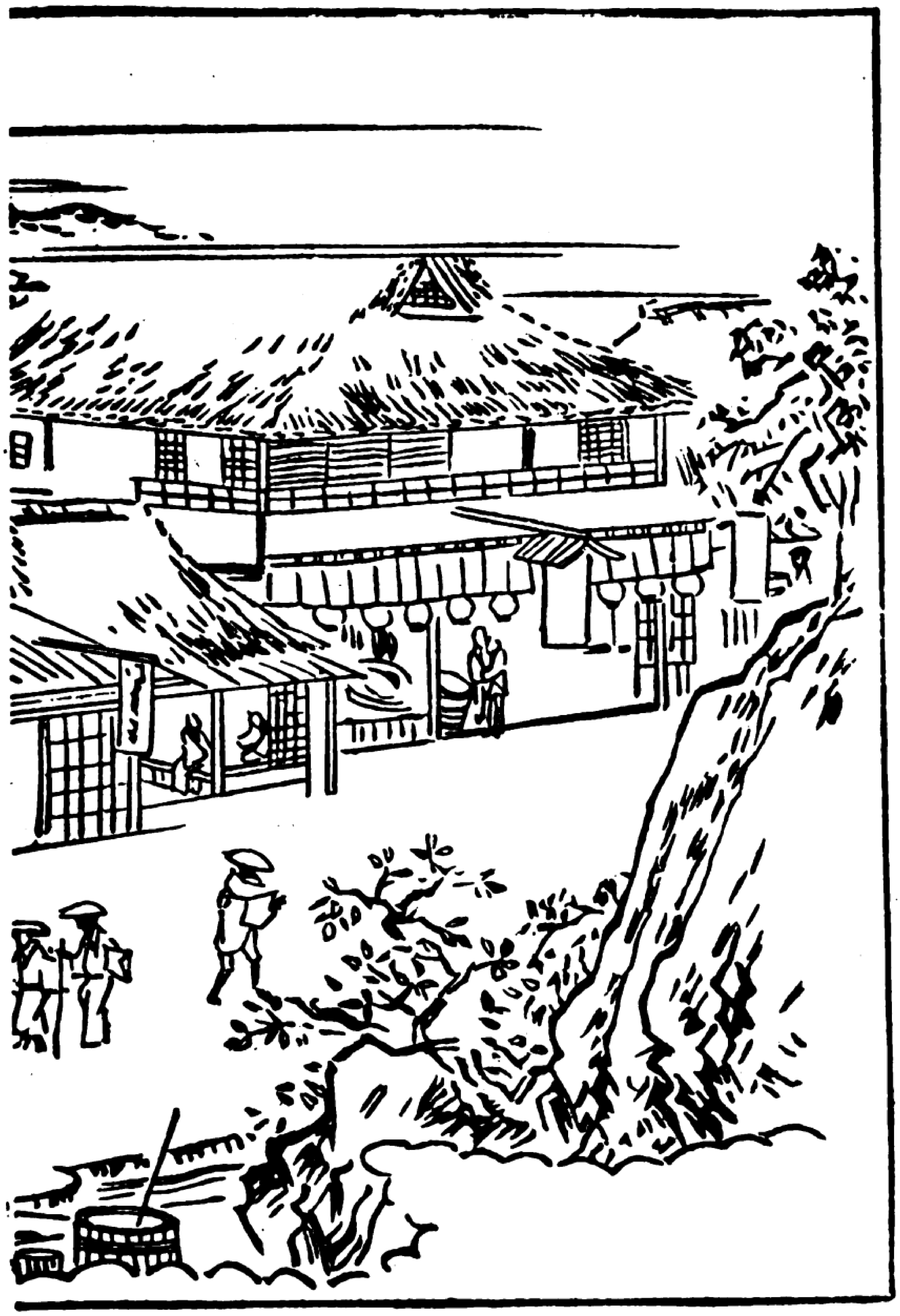
○殊更に清らかなる花は水仙の外あらじ

椿

○霰かげに綻びそむる玉椿

○寒風に吹かれながらも中々に麗しき

○白う咲きける椿の花のくさむらに開きつらなれるまゝの美ごとさよ



福壽草

○黄金の莖、黄金の花、三種揃ふて美しう見られぬ

○福壽艸の名のおもしろさよ富み榮へぬる幸あるが上に

○目出度きことの兆を示しける

大根

○殊更味よき品にはあられど種々なる獻立に用ひられて

○畑の傍の籠の中に

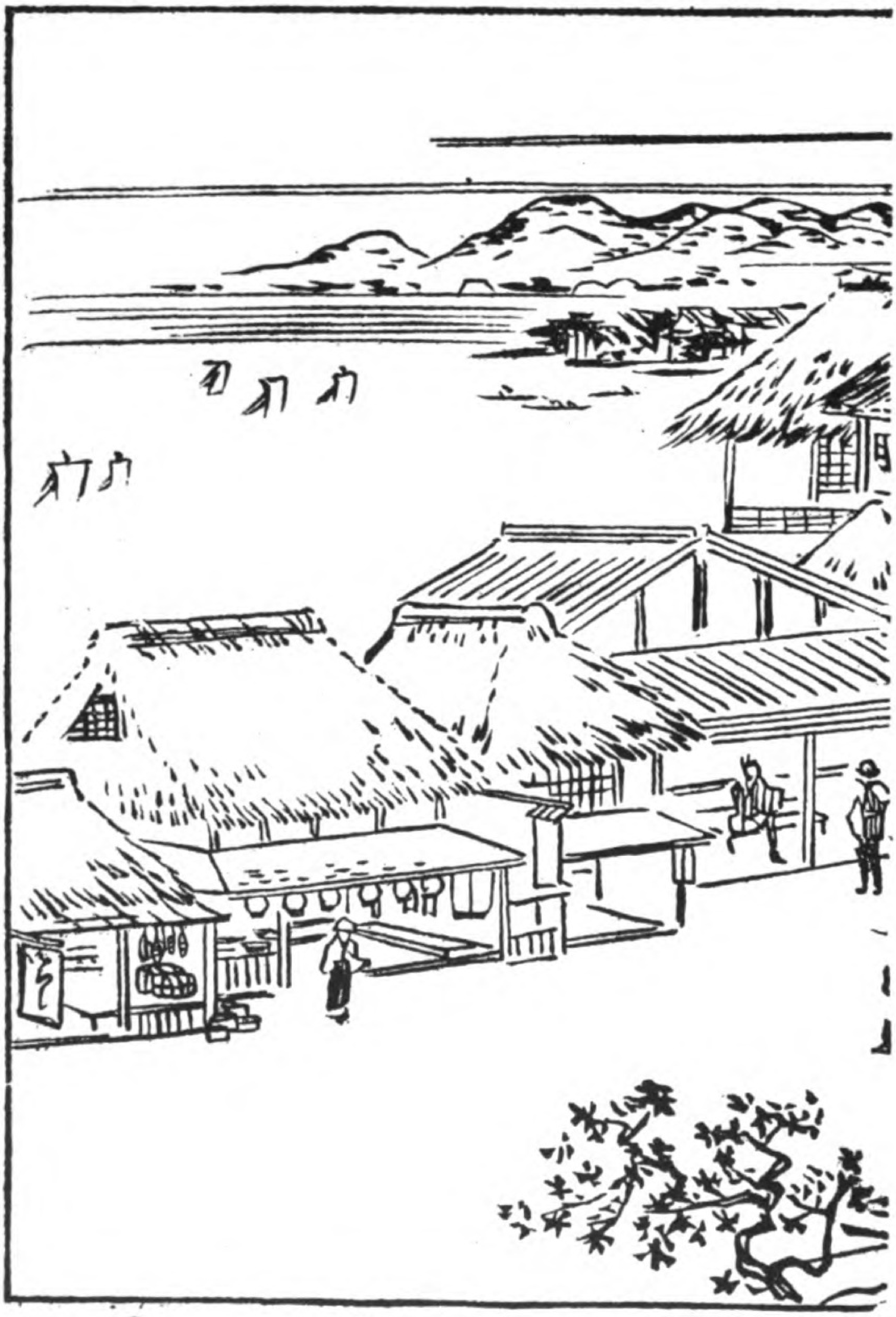
溢るゝまでに盛りあげぬ

避寒

○昨今はことに寒さまさりて肌も凍へんばかりの風模様しばしそれ等の温泉に趣かなん

○山陰ながら南なうけて濱邊なれば寒さを避けん爲にとて師走の始めつ方より多くの人々の集りつゝあり

○殊更雪のあけぼのには世に類なき風情あれば夥多の人々寄つどひて



海苔

○荒磯の岩に降る雪のとけかちなる頃よりしてあまた生ひ茂りつゝある海苔めづらかなり

○乙女子が荒磯をあさりて刈來れる海苔にぞある

○寒き磯邊にあさる身のつらきつとめを思ひては海苔の一ト葉もおろそかにはならじ

○清きかほりとゆかしき味は酒客の賞づるところなり

紀行文に描かれたる風俗

（筆者は美屋平七長崎紀行の一節なり）

○十一日　興福寺といふ黄檗派の寺へ參詣す。此處に通商する南京人の菩提所あり。隱元禪師の開基あり。大門の額は東明として。元祿三年庚午仲春黄檗。賜紫悅峯書すとあり。聯は同筆にて。寶林檀乘千祉茂り福地明山萬古隆んなりとあり。觀音堂の額。大雄寶殿の隱元書とあり。石垣高く築き上て。境内廣く風景よし。夫より山道を行けば道すがら唐人共の墓數多あり。四五丁行て町に出れば、太神宮の遙拜所あり、聖堂あり。春德寺といふ寺あり。此寺の上の方に東海氏の墓あり。すべて三段に石垣を築上て。石塀を立。一段ごとに手を盡したる彫物あり。敷石ほどに至る迄。其細工の精功なる事筆紙に盡されぬ程あるに。近頃は取繕ふべき人もなきや。惜哉破損したる所もありすべて此地は唐風のうつりてや。墓所に殊に念を入るゝ所あり、取廻したる山々の内所々に多し。松森天神の社。本社拜殿共に構作の様華好なり。諏訪の社、土人是を氏神なりとて。美を盡して崇奉す。祭れる神は住吉。諏訪。森崎の三社なり。神主は青木大宮司。一年の受用銀七貫目計。町中及唐人よりの音物三拾貫目計り。すべて百貫目計りを納むといふ。壹番鳥集。貳番鳥集とて。石の鳥集二つ。磴道三百段を登る間。左右に石の塀を立つゞけたり。隨身門。能舞臺。廻廊。拜殿。本社。皆檜皮葺なり。かくて宿に歸りて。未剋頃より海老屋善助方へ招かれ往て。卓子の饌具。唐風の饗應を珍らしく賞して。飲燕談話の後。圍碁の遊びをして。戌剋頃に歸宿す。此日の獻立。

茶菓子　狀柱 [illegible]　丸ぼふる

盃　三ッ組

舟盛　鯛ひれ　味噌

吸物　もち　同　大かん

こんぶ　肉梅

卓子

なます　香の物　かまぼこ

小菜　鯛切身　しそ　同　大こん　同　すゐび
白うり　瓜　しそつけ大こん
同　山桃　同黒豆　くず
けんちあん　ばせゑび　あげかまぼこ
川たけ　あわび　竹の子
一鉢　はすいも　二　どんぶり
胡椒の粉　五
すゞき　花ゑび
三鉢　みそかけ　四　とんぶり　金ひれ　飯　味噌
ごま豆腐　なすび
吸物　しひたけ　いりこ　六どんぶり　さたう入つくばれ

かくのごとし。

○十二日　昨日の主善助を伴ひ大徳寺に詣でゝ。前に見殘せし庭を見る。庭の様古風にて廣く打晴たり。西の方に入海の面より港口まで。隱るゝ所なく一目に見えて外の所より見るとは一際風景取合て。面白き事筆も及ばず。けふは空晴たれば。殊に心目を爽かにし。近くは唐人の館目の下に手に掬如くなり。館の内に町三筋あり。皆々樓上住居にて。唐人共の打解たる様。或は遊女とさし向ひ情話様抔悉く委細に窺ひつべし。寺内に關帝の祠あるに入て拜す。異國の神を唐めきたる構に齋籠たるを見にも。只異國に來れる心地せり。

◎足袋屋夜見世の景氣に、追羽子を竹にはさみたるが如くに、大より小に至るまで幾十となく足袋をつるせり、人の生れて小より大に至る此足袋の數盡くす頃には、人各の運命に依りて悲しき、樂しき歴史を作りて、やがて葬らるゝならんと胸に浮ぶ

◎如何に女は多様なるかな、人の妻となりての代名詞に、御臺所と稱へ、奥様と呼び、お内儀、御新造、女房、コラ、オイ、噢、山神とほゝ笑まれたるに、我を行過ぎたる若き紳士八字の髭のいかめしく、皺の少なき塵除をふわりと、握り太の洋杖應揚に角の漬物屋に入りて、オイ澤庵をくれ、麹のついて居るのだ、あゝ面倒な紙に包んでくれよ、懐に入れて行くのだ、此人妻を呼ぶに必ず何子さんなるべし。

◎廂髪に紋綸子流行色の羽織、ボアーを襟元に巻き締めたる婦人と肩を並べたるは、實に好一對の高襟なり、飽まで歐米風に染みたる若紳士、あゝ高襟とならんには思ひきつてハイカラとなるべし、半高襟、デモ高襟は氣障の骨頂なり。

文の栞━禽鳥の部

鶴

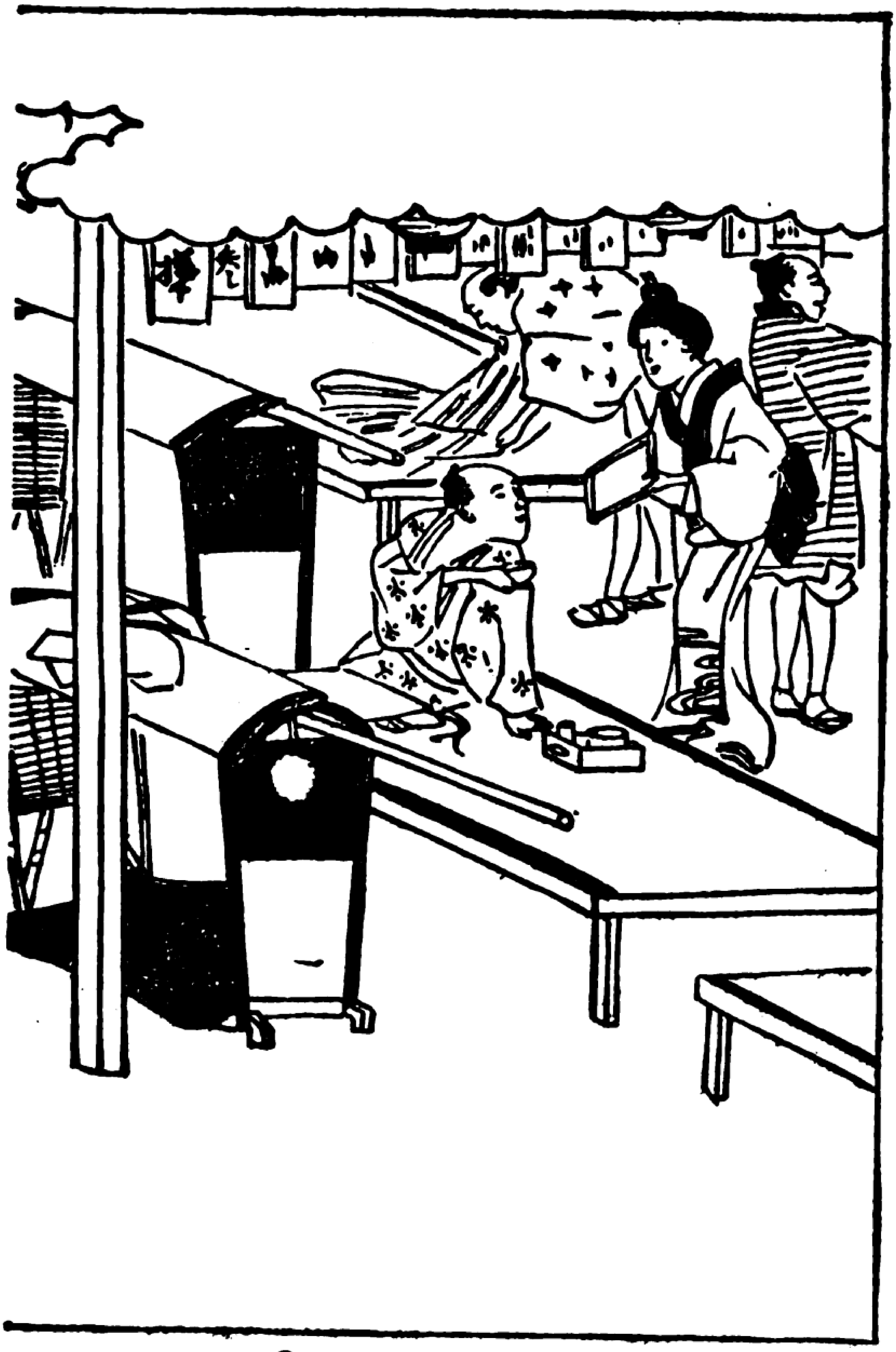
○白き衣に黒き裳、紅なせる冠は鶴の装束と見えにき

○千歳をよばふ鶴なれば遠きむかしの有様などいと委しう知れるならんに

○千代の齢を重ねけん蓬萊山の鶴なれば

雁

○青空高くかけわたる雁の一つらながふつゝきて



此より南のはてしくまでくの字をかけるに似たりける

○歸る雁に文をよせて君が慕ふまゝを言づれなんか

○雁金のなく音を聞く折柄郵便ありとの聲高く表の扉を叩くものあり

鶏

○早やくだかけの聲すなり曉には間もあるまじ

○山住ひの身はくだかけの音をたよりとして時の行くを數ふばかり

鳩

○大なる寺の庭面
古き社のかた
はらなど
数かぎりなきま
で
群あつまれる鳩
ありき
○家々の軒端を栖
みて
あなたこなたに
はせ飛ぶ鳩を
見よ
能くも人々に馴
れ親しみて
恐れもやらず集
ひ来ることぞ

百舌鳥

○軒端の雪解玉水
となりて
したゝる音のきこゆる折から
庭のかたへの南天樹
百舌鳥の羽風にゆらぎけり
○枯木につもる雪を拂ふ



百舌鳥の羽風
の雄々しさ
よ

鴛鴦

○つがひのなさ
け殊更に
親しきものな
れば
いつとてかわ
かれたつこ
とやはある
されば人々
の縁ふかきを
鴛鴦にたと
ふるものとは
なりぬ
○いと美事なる
羽毛もて装へ
る
鴛鴦の姿の品
からぞ目出たき

鸚鵡

○鸚鵡よくものいへど
その事わけを知れるにはあらず

國文に書かれたる　漁村

作者　中島廣足

蜑のすみ家ばかり、憐れなるものはなし、いとたよりなき海邊の風も、たまらぬ松蔭などに、たゞかりそめに作りたる、藁屋どものさま、浪うち寄せなば、やがて流れもうせぬべう、いとはかなげに見ゆるを、繪にかきすさびたるなどは、なに心地かせましと、おもひ遣るだに、こゝろぼそし、夕つかたなど、年老たるをのこの、手からみしたるが、磯邊に立ちて、けふはいと遲くもあるかななど、言ひつゝ沖の方をまはりをり、孫どもにやあらむ、眞砂の上を、走りありきつゝ遊び居たるに、入日さしたる島かげより、三つふたつ歸りくる船の、かぢ引とりて、誇らしげなるを、老人まちゐる顏に、打頰笑みたるは、幸多かりしにやと見ゆ渚に寄せて、飛おるゝまゝに、綱繰よせなど、兎角しつ、罵るに、男も女も數多出で來て大きなる籠に、魚ともとり入れつゝ、擔ひ行くさま、さはいへどにぎはしげなり、くゞつめく物もてきて、ちひさき魚、三四、乞ひもて行く童などもあり、すべて人多くたちこみ噪ぎて、船のあたり、かしがましく、さしよりて覗くべうもあらず、いとながき網の渚にかけ干したるを繰りためてとり納れなど、やうやう靜まり行けば、こなた彼方火ともしたるすき影、壁もあらはにて、いと哀れに見ゆ、一夜やどりて見れば、浪風のひゞき枕をゆすりて、つゆまどろまれず、曉方隣の家々めざまして、生業の事どもなるべし、あやしう聞知らぬ事どもを、おのがじゝ聲高に言ひかわしたる、げに海人のさへづり、めづらしかしも、をかしうを

漢文に書かれたる　庭園

——後樂園の記の一節——

作者　長谷川東洲

癸巳六月予東京に遊ぶ、石樓鐵閣、鱗次櫛比し車塵馬蹄、喧譁、雜遝す、眞に一場の熱鬧海なり、一日某を訪ふ、談偶々山水に及ぶ、某曰ふ輦轂の下名園に乏し稱して名園と爲すべきもの獨り後樂園有るのみ、後

樂園は礫川なる舊水戸邸内に在り、これを東京絶勝の名園となすと予曰く豈ぞ導かざる、乃ち明日を約して往て遊ぶ、門に額あり後樂園の三字を書す、明の遺臣舜朱水之瑜が題する處、(中略)

門に入れば、則ち庭樹蓊欝仰で日を見ず、碧水清淨にして玻璃のごとし、樹や老蒼愛す可く、水や明媚掬すべく、乾坤瀟洒、眞に後樂園の名に負かざるなり、園の中央に一大池あり、細波穀のごとく平澹鑑のごとく水底の天、倒掛の樹與幻相映じ奇觀言ふべからず、池中に島あり天妃を祀る、巨木大樹欝然として林を成す、池の西北に亭あり涵徳亭といふ、結構華にして而して侈ならず、儉にして而して陋ならず、以て休憩所となす、亭の左に一少流あり、水淺くして底を見る、鯈魚數十髭を張り尾を揮ひ馳逐追隨或は浮び或は沈み洋々焉として江湖に相樂しむ、之れを大堰川といふ、蓋し山城の大堰川に擬せしなり、水の東北綠葉森然四面創成翠色滴たらんと欲する者、是れを富士山といふ、蓋し駿河の富士山に模せしなり、某予に謂つて曰く此の樹皆白色翩翩なり、花開くの候は全山白雪を戴く如し、此れ富士の名ある所以なりと、水を渡り山に登り、石磴數十級にして而して嶺に達す山影水色、森樹情波悉く杖履の下に萃まる洵に園中の奇觀なり、(中略)

南して磴を下る數級、地稍平曠又一小園を爲す、梅數十株あり、大なるものは合抱、小なるものは拱すべし或は古瘦、或は勁拔、而して其枝葉或は密、或は疎、又以て陽春開花の盛觀を想ふべし、西を池となす池畔環らすに菖蒲を以てす、列植數十萬なるを知らず花開く既に七八分濃紫、淡白相交り彩を弄し妍を呈し綽約として處女のごとく、婉婉純婦のごとく、歡んで而して厭かず觀て而して倦ます、山水亦これが爲に景を添ふるもの丶如し(下略)

文の栞——魚類の部

鮎

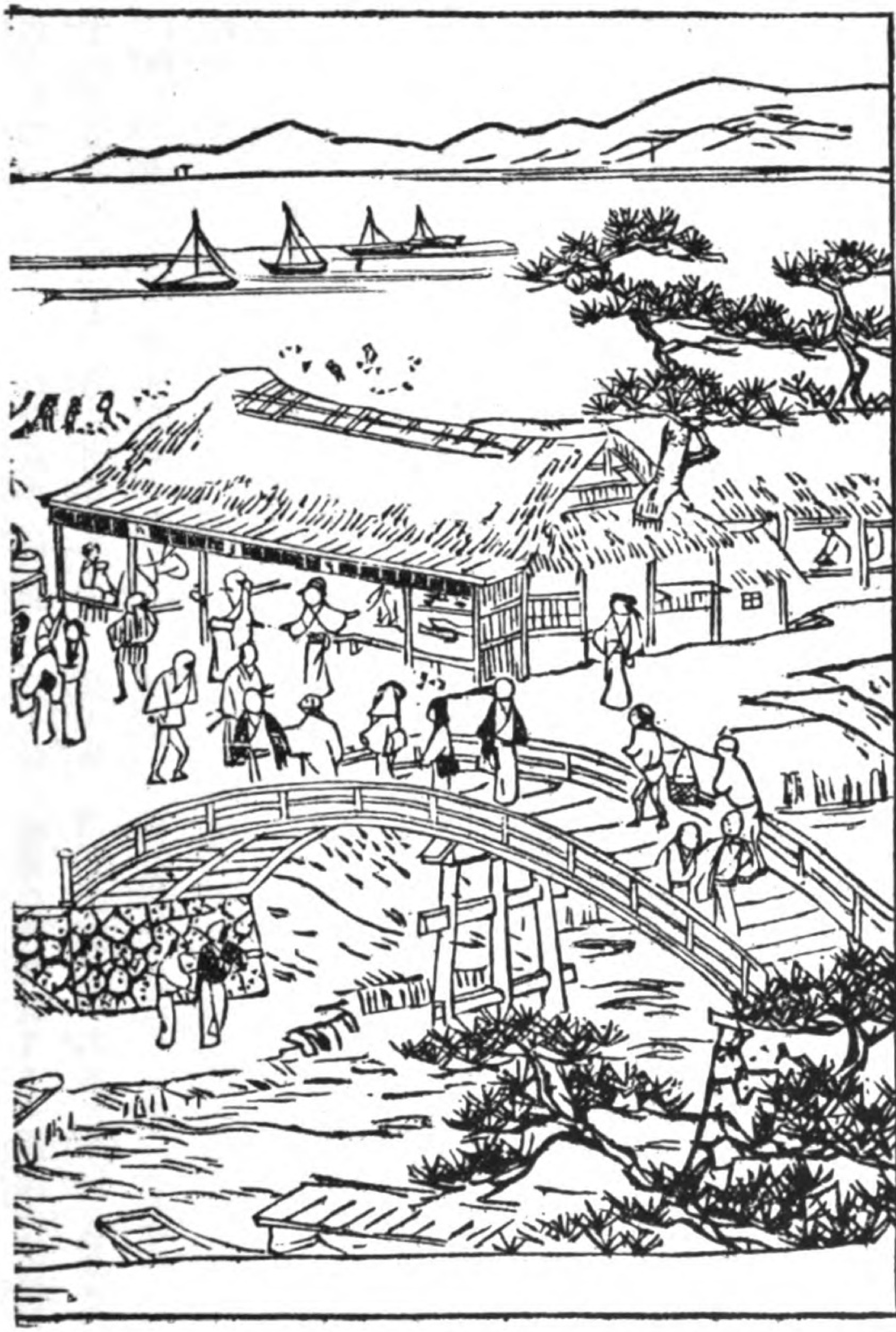
○川瀬に竹の簗をしつらへ
游ぎてのぼる
鮎を獲てけり

○夥しくも盛り
たてられたる
鮎の器、黄金の
色を湛へけり

○さすがは鮎の名
所なり
味甘く香さへ美
しや

白魚

○磯の砂のかゞ
やきて、濤に
ゆるげる間より
いと白う美し
き魚の游くさま
見ゆ



○いとうつくしき白魚は
水の底にも透通りて
玉なす樣に見えけり

海老

○芽出度き祝ひ
のむしろに
は
海老とやら
んの名によせ
て
高く三寶に備
はるぞかし

○車えびのおも
しろう
水底めぐりま
わるさま

○伊勢の海、千
尋の濱の沖
合より
漁とりこせ
る海老の圖づ
と

鯉

○川水のことさらませる折柄に所々に鯉のとぶめり

○あふるゝまでに漲る川水や鯉のふるまい中々おもしろけり

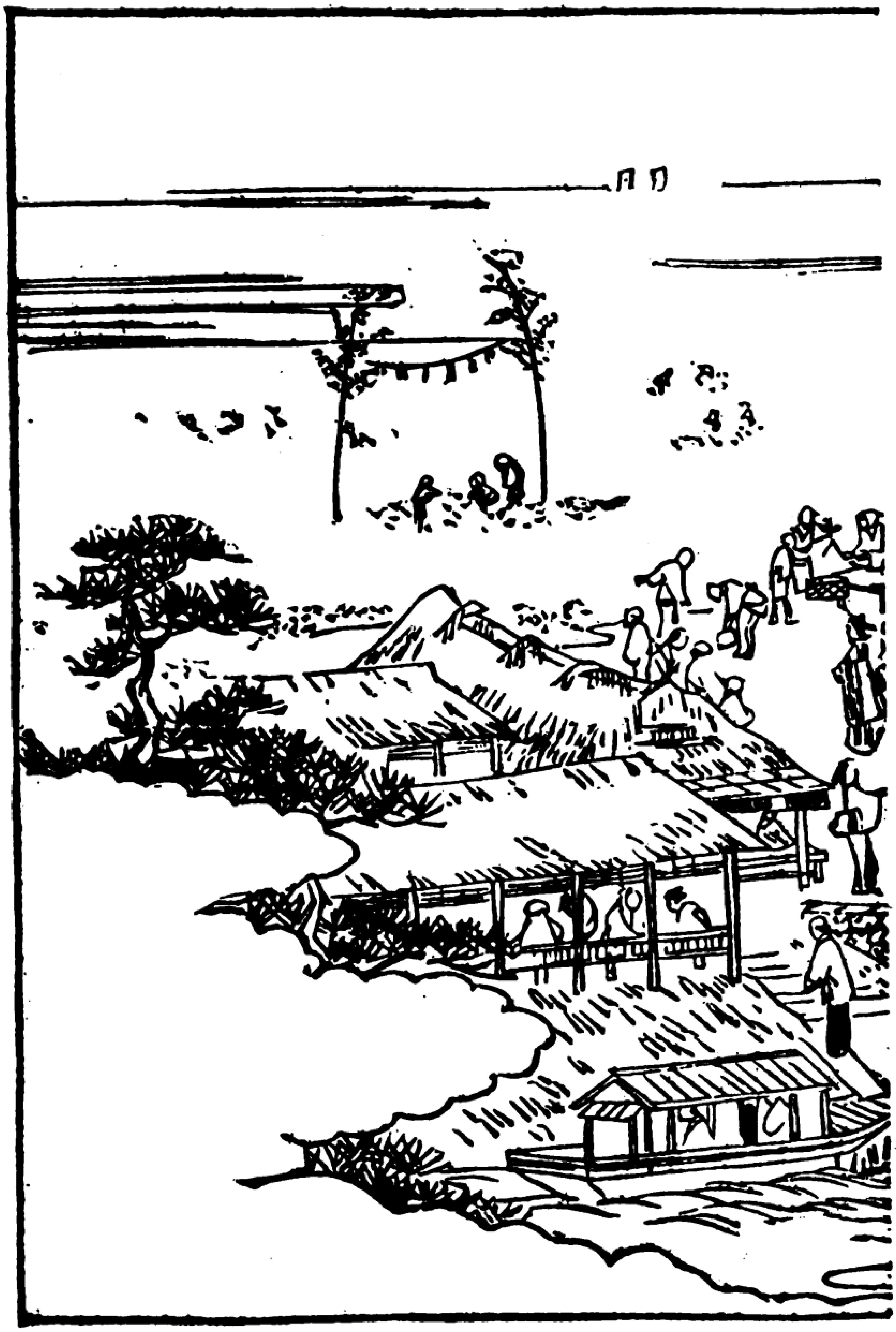
鯛

○潮ながるゝ海原の底にむれつゝ游ぐなり鯛の姿のうつくしき

○沖の小島にゆきて見よ群れて泳げる鯛をも釣らる

鮒

○濁れる水底もいとひやらで



浮びてはしつみ、潜みてはたゝよふなど、鮒のふるまひおもしろし

金魚

まどかなる盥の玻璃のうつはに流金のいろ美くしき魚

○南風の薫ずろうてなに眼をよろこばすはこの魚なり

○金鱗のあざやかなる鰭尾のかゞはしき世に愛すべき金魚ならずや

○浮藻をくゞる紅ゐのはたらきねむけざましにいろめづらかなり

物まなびの心得

（本居宣長翁玉勝間の一ふし）

珍らしき書を得たらむにも、親しきも疎きも同じ志しならむ人にはかたみに安く借して見せもし寫させもして世にひろくせまほしきわざなるを、人には見せず、己れひとり見て、ほこらむとするは、いと〳〵心きたなく物學ぶ人のあるましきことなり、たゞしえがたき文を、遠く便り惡しき國などへかしやりたるに、或は道のほとにてはふれうせ、あるはその人にはかになくなり杯して遂にその書かへらずなることあるは、いと心うきわざなりされば遠きさかひより借りたらんふみは道のほどのことをもよくしたゝめ、又人の命は、にわかなることもはかりかたき物にしあればなからむ後にも、はふらさす、たしかにかへすべくかきておくへきわざなり、總て人の書をかりたらむには、速かに見てかへすべきわざなるを久しくとゞめおくは心なし、さるは、書のみにあらず、人に借りたるものは、何も〳〵同じことなるうちに、書はことに、用なくなりて後もなをざりにうち捨おきて、ひさしくかへさぬ人の世に多きものぞかし、

また

人に借りたる本に、既によみたるさかひに、をりめつくるはいと心なきしわざなり、本にをりめつきたるはなほるよなきものぞかし、

おのが物まなびの有しやう

おのれいときなかりしほどより、書をよむことをなむ、よろづよりもおもしろくおもひて、よみける、さるははか〳〵しく師に就きてわざと學問すとにもあらず、何と心ざすこともなく、そのすぢと定めたるかたもなくてたゞからの大和の、くさ〳〵のふみを、あるにまかせうるにまかせ古き近きをもいはず何くれと讀ける程に、十七八なりしほどより、歌よまほしくおもふ心いできてよみはじめけるをそれはた師にしたがひてまなべるにもあらず、ひとに見することなどもせずたゞ獨りよみ出るばかりなりき、集ども、古きちかき、これかれと見て、かたの如く今の世のよみざまなりき、かくてはたちあまりなりしほど、學問しにとて、京になん昇りけるさるは十一のとし、父におくれしにあはせて江戸にありし、家のなりはひをさんにうしなひたりし程にて、母なりし人のおもむきにて、くすしのわざをならひ、又その爲めに、よの常の儒學をもせむとてなりけりさて京にありしほどに、百人一首の改觀抄を人にかりて見てはしめて契沖といひし人の説をしり、その世にすぐれたるほどをもしりて、此人のあらはしたる物、餘材抄勢語臆斷、などをはじめ、そのほかつぎ〳〵に、もとめ出で見ける程に、すべて歌まなびのすぢのよき惡しき差別をもやう〳〵にわきまへさとりつ、さるまゝに、今の世の歌よみのおもへるむねは、大かた心にかなはず、その歌のさまも、おかしからずおぼえけれど、そのかみ同じ心なる友はなかりければ、たゞ世の人なみに、こゝかしこの會などにも出まじらひつゝよみありきけり、さて人のよむふりは、今の世のふりにも、そむかれば、人はとかめずぞ有

けろ、そはまるべきことわりあり、別にいひてん、さて後國に歸りたりし頃江戸よりのほれりし人の、近きころ出たりとて、冠辭考といふ物を見せたるにぞ、縣居大人の御名をも始めて知りけり、かくてそのふみ、はじめに一わたり見しには、さらに思ひもかけぬるのみにして、あまりことゝほく、あやしきやうにおほえて、さらに信ずる心もあらさりしかど、猶あるやうあるへしと思ひて、立かへり今一たび見れば、まれ〳〵には、げにさもやとおほゆるふし〴〵もいて來ければ、又立かへり見るにいよ〳〵實にとおほゆることおほくなりて、見るたびに、信ずる心の出來つゝ、遂にいにしへぶりのこゝろ言葉のまことに然ることをさとりぬ、かくて後におもひくらぶれは、かの契沖が言葉の說は、なほいまだしきことのみぞ多かりける、おのが歌まなひの有しやう、大かたかくの如くなりき、さて又道の學ひはまつはじめより、神書といふすぢの物、ふるきちかきこれやかれやとよみつるを、はたちばかりのほどよりわきて心ざしありしかどとりたてゝわざとまなふことはなかりしに、京に昇りてはわざとも學ばむと、心ざしはすゝめぬるなかの契沖が歌ぶみの說になずらへて、皇國のいにしへの意をおもふに世に神道者といふものゝ說おもむきは、みないたくたがへりとはやくさとりぬれば師とたのむべき人もなかりしほどにわれいかで古へのまことのむねを、かむがへ出む、と思ふこゝろざしふかゝりしにあはせて、かの冠辭考を得てかへす〳〵讀みあぢはふほどにいよ〳〵こゝろざし深くなりつゝ、此大人をしたふこゝろ、日にそへてせちなりしに、一年此大人、田安の殿の仰ごとをうけ給はり給ひて、此伊勢の國より大和山城など、こゝかしこと尋れめぐられし事の有しをり此松坂の里にも二日三日とゞまり給へりしを、さることつゆしらで、後にきゝて、いみじく口惜しかりしを、かたるさまにも、又一夜やとり給へるをうかゞひまちて、いと〳〵うれしくいそぎやどりにまうで、をしへをうけ給はることにはなりたりきかし。

▲書うつし物かく事

ふみをうつすに、同しくだりのうち、あるはならへるくだりなどに、同しことばのあるときは、見まがへて、その間なる詞どもを寫しもらすこと、常によくあるわざなり、又ひとひらとおもひて二ひら重ねてかへしてはその間一ひらを見ながしおとすこともあり、これ等つれに心すべきわざなり、又よく似て、見まがへやすき文字などはことにまがふまじくたしかに、書くべきなり、これは寫しがきのみにもあらずおほかた物かくに、心得べきことぞ總て物をかくはこゝろをしめさんとてなればおふな〳〵もじさだかにこそかゝまほしけれ。

さるをひたすら、筆のいきほひを見せむとのみしたるは、いかなることをも、讀ときかたきが世におほかる、あぢきなきわざなり、常に書をかはす、消息文なども、文字よみかたくては、いひやるすぢゆきとほらずよむ人はたくるしみて、頭かたふけつゝ、かへさひよめとも遂に讀えすなどしては、こゝよみかたしと、かへし問むも、さすがになめしきやうなればたゞおしはかりに心得ても、事たがひもするぞかし、

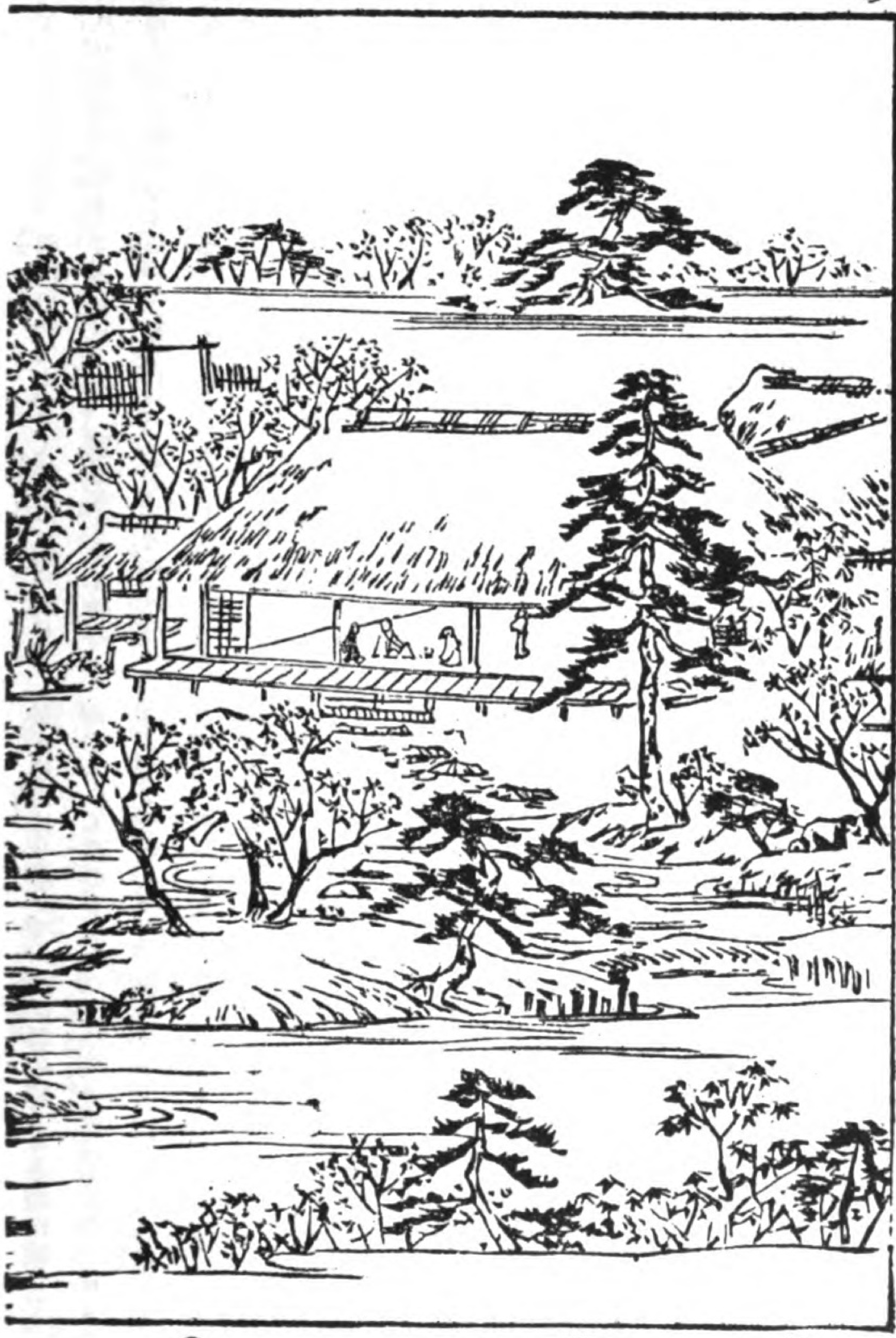
文の栞＝名所古蹟

須磨

○須磨の浦波しづかにて
往來のふれの
帆かげ白し
○濱にゆきかふ
船とふれ
磯にかけとぶ
鳥とどり
○須磨の浦邊に
啼く千鳥
淡路をさして
通ふならん

舞子

○まどかなる
月のかげ
さす濱松に
秋月いたく
吹きければ



琴の音色にまがへるまで
いとうろはしき聲すなり
○舞子の濱の松か枝より
滴る露にうろほふてや
眞砂のいろもとりどりに見ゆ

二見ヶ浦

○二見ヶ浦に
漕ぐふれの
ろかひに燦く
浪の花
○二見ヶ浦の
浪の音
遠く千尋の
水底より
ひゞき渡れる
心地ぞする

三笠山

○望の月かげ
照りそふて
三笠の山の
姿ぞ高き

○三笠山、
霞の中に
　こめられて
ほのかに見ゆるも
いとおかし

吉野山

○吉野山今を
　さかりの櫻花
かすみとばかり
　見まがれぬ
○花より出でゝ
　花に入る
吉野の山の
　春は來にけり

和歌の浦

○和歌の浦曲の波間より
　生茂りぬる声が根に
　れむれる鷗の翅ぞ白き

日光



○緑の山の
中ほどに
朱に染みぬる
玉垣あり
黄金白銀もて
飾られたる
社あり
まばゆきまでに
輝きて
いとおごそかに
見えにけり

隅田川

○隅田の川に
船をうかべて
櫻の蔭に
棹させば
にしきの中を行かとおもはる
○岸を挾むの柳は綠煙をこめ
十里につらなるつゝみは
蛇の這ふにも似たりけり

隨感錄

いにしへの人の正直なりし事

筆者　小川直子

あはれ我敎子だちよ、今日はいと靜けくてさう〳〵しけれど、爰に來給へかたらまほしき事こそあれ、我古里は加賀國石川のあがたにて昔は前田家の御領國なりしが、御城下を金澤といひけるが、そも金澤と名附られたる故よしは、御城の中に蓮池の御庭とていとうるはしき御園ありき、今は公園となれるが爰に金澤の池とていと淸らなる水の湧き出て吹きわかれつゝ、如何なる旱にも水のかるゝ事なくて大蛇すめりなども言ひ傳ふべしとぞ聞きし、此城下の中に小豆野といふ所ありて、山の手なれどいと高き土地にて往來するにはいづれよりゆくにも坂をのぼりて通ふ也、よりて四方に廣坂よ尻たれ坂よと多きが中に馬坂とて九折にこそあらねくね〳〵しき坂ありて、此坂より下る行手には田井村あるは田上村などいふ里々あまた有りて、此里より小豆野へ通ふ賤の男ども薪よ炭よと種々の重荷を馬あるは牛どもに背負せてのぼる通路なれば、往來の繁き事大方ならず、其半斗に少し平なる所ありて爰にひとりの情ある老父が筵を敷てこれに居り、我前に額一歩といふ銀貨あるは寛永通寶といふ錢など堆く盛り置てゆきゝの山がつどもが錢少し貸し給へとて乞へば乞ふまゝに貸し與へ、只帳簿に何村の何右衞門何村の何兵衞何日に如何程の金子を借請け何日に返すべしと契り置く其言葉をしるし置くのみにて、一ひらのあかし文をもとらざりけるとなむ、さるに借りたる者も亦一たび契りし言は違ふ間敷習ひなれば、若、間違ひては大なる耻なりとて契り置きし日に至れば、必もて來て相當の日合など添て返しつゝ帳簿を消させて忝なしと禮を述べ笑を含みて歸りきとぞ、あはれ古人の人の正直にして耻を知る事斯のごとし、いかにうるはしき心ならずや、此事は誰より聞き傳へたるかといふに、おのれひとりのせうと有りき、名を久和といひて世にいましける程孝行の聞え高かりし人なり、其いまだ若

かりける時家に折々出入する老人有りて其名を今村や少平といひけるが、俳諧など好みていやしからぬ町人なりきとぞ、ある時かたらひ出ていふ樣若君よ能く聞き給へ少平のいまだ若かりける頃の事にて正しく見聞たりける事にしあれば、委にこそかたらはめ心を止めて聞き給へ、はた末の世の人々にも語り傳へ給はらばや、あはれ末の世に至りなば聞く人いぶかしみて信にやいかになどいふ者もこそあらめやとて、語りきとなむ、いにしへの人のすなほにして信義を守る事の厚かりし心の奥のなつかしさたとへむ方こそなかりけれ、さるを今の世の中人の心薄情の上に僞りをさへいふがあれば、法律よ規則よとこと〴〵しうあかし文に押手正しく跡つくるも猶足らずとて、保證人なくては叶ふまじとす、これにも押手をさへ加へよなど堅き契りのあかり文をとりて後貸し與ふる事ぞとよ、かゝる契りを結び置ながら猶等閑に打捨て置き知らず顏して契り置きたる日に至りても音信だにせず、つれなくもてなし居る人なきにしもあらずとか、又はかしこの家は差押へに逢へり、爰の何某は破產しつなど聞き苦敷事どもの多きは歎かしき限りならずや、斯く借りたる金子返さぬ人如何なる心にてかゝる淺間敷振舞をなすにか、つく〴〵思ひ見よ貸したる人は如何にして此金を積たるにか、天より降り來れるにもあらず、地より湧き出たるにもあらず、各々其身にとれる家業を勤め朝はとく起き夜は遲く寢ねいそ〳〵と勤むる事大方ならず、はた己に克といふ銳心を振り起して質素儉約塵も積れば山となるといふ諺を忘れず艱難の上に苦心を重ねて貯へたる金子にあらずや、さるを借る時の地藏顏とて笑を含みなごやかなる言を盡して借り出したるならん、さるを濟す時の閻魔顏とて鬼よりもげにおそろしく眼を怒らして人を見下し、遂には惡口をさへ吐き出す輩のなきにしもあらずとか、假令貸したる人は大やうにて促したてずとも、我と我身に耻る心のなからむや、彼の古言に仰で天に耻ぢず伏て地に耻ぢず、顧みて我身にはづる事なかれともあるぞかし、耳そばだてゝ聞き給へ、假令此世にて天網にもるとも、後の世如何にせむ愼むべし〳〵。

文の栞――名所古蹟

松島

○千賀の浦波しづかなれば
とりどり
映ふ島の影
松の梢と
もろ共に
緑を添ゆる
ばかりなり

橋立

○涙に映らふ
松が枝を
おばしまとせん
天の橋立
○いさごの橋を
かけぬるごとき
松原あり
世に天の
橋立とぞ
名づけらる



厳島

○緑の水にうかびぬる
朱の宮居のうつくしさ
○宮居の林の下かけて
緑をたゝゆる
潮の涙

加茂川

○加茂の川水
濁りなければ
いではづかしう
覺えてやら
住む魚さへも
姿をかくしぬ

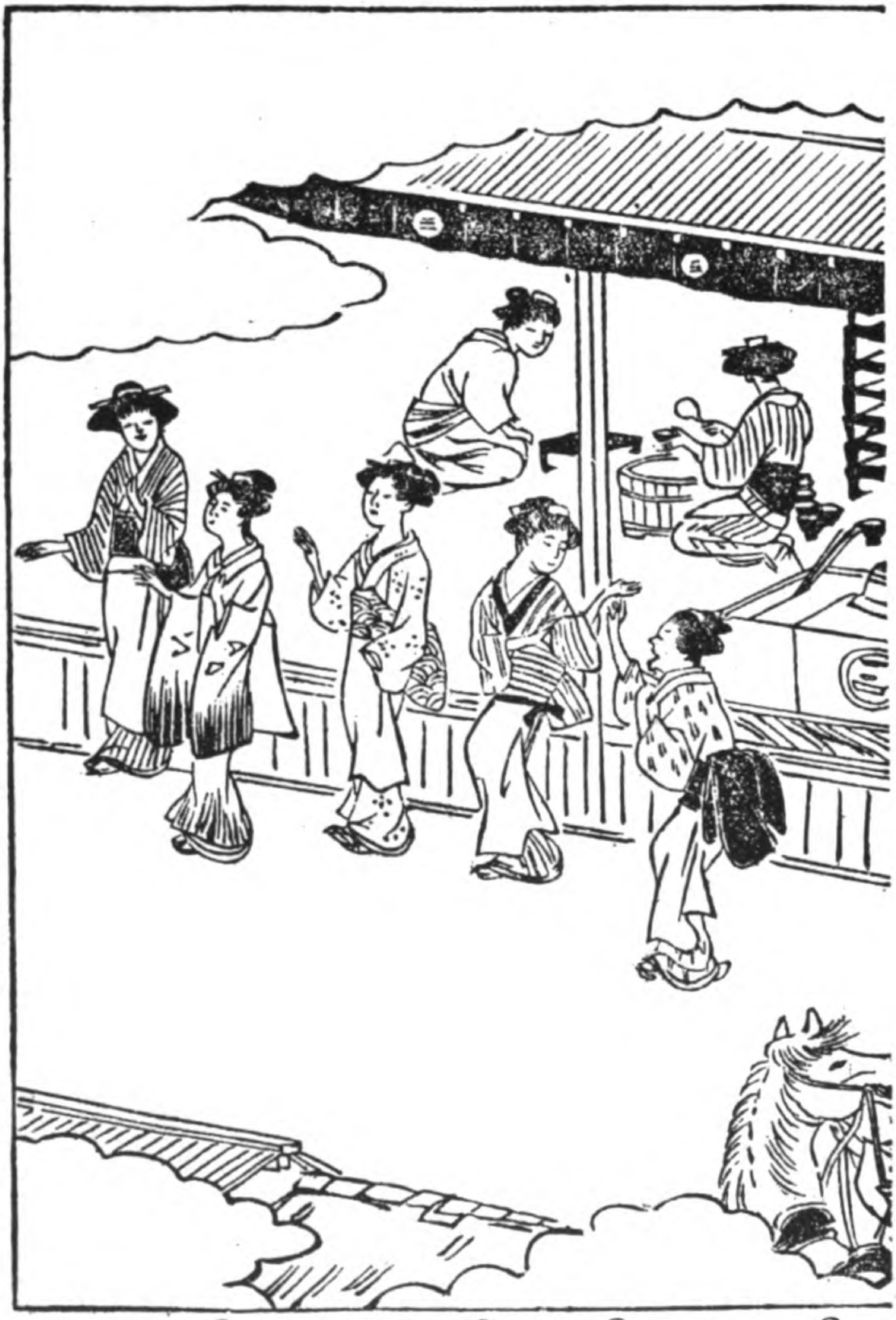
立田山

○立田山、
みれのもみぢの
いろいろを
川瀬に
うつして
流しつゝ

○春はみどり
秋くれなゐの
立田山
○立田山
けふは紅葉の
色まして
實に
唐にしき
織りなしぬ

富士山

○雲井はるかに
仰ぎ見れば
青空たかく
そびえける
富士の峯より
嵐ふくらし
○白き扇をさかしまに
懸けたらんかとおもはるゝ
富士の姿のとうとさよ



武藏野

○茫々たる野原の
果てに家あ
りて
けぶりの立のぼ
れるが見ゆ
○果しらぬ芒原に
日は出で〻日
は入りぬ
○一望茫漠、風蕭
しみ日暗く
野はうらがれ
てあかふな
りぬ

宮寺

○瑞がきめぐる
み社や
杉の木すゑに
月おちて
明ぼしはやも
きらめけり
○五十すゞ川の水上にあゝ壯嚴や宮ばしら
ふとしき立てゝ國たみがいつきまつれる大神や
○古りにし寺の御堂のこがれ剝げたる中に入りて
かべに書きたる畫を見ればむかしゆかしき奈良の町

感冒の注意

△追々寒さが喉く惡い感冒が流行りますから御用心　さて寒時の衛生を云へば感冒の豫防が第一である、寒氣は諸種の呼吸器病を誘ひ易い、インフリューエンザ、肺炎、肋膜炎等から結核性に罹る事が多い、呼吸器病の多くは感冒から及ぼすのである。

△寒暖の急變　冷たき外氣が體温を奪つて行かうとする、これに對して油斷なく抵抗力を養成せればならぬ、其の方法は先づ第一に體温を供給する材料を豐富にせればならぬ、それには炭素に富んで居るもの即ち温熱製造に最も適する脂肪質に富んだ肉類などを多く食ふのが肝要である、併し胃を損ねぬやうに消化のよい物を撰ぶのは勿論である。

△體温の放散　體温の供給を豐富にすると同時に體温の放散を防ぐことは無論必要である、併し寒いとて無闇に厚衣して肩掛や襟巻などを着けると、皮膚の血管の收縮を怠らせ、發汗などするところへ冷たい風が當れば却てそれがため風をひくことになる。

△浴後の注意　入浴後ポツポと湯氣の立つのを碌々拭ひもせず、急いで衣類を着るが、これが甚く惡いのだ、入浴後は十分に身體を拭ひて温りをさまして衣類を着るがよい、

△衛生的防寒法　は寝る間際に冷水摩擦を行ふのである、冷水摩擦をすれば血管の循環をよくして暖かく心地よく眠られる。

△感冒の豫防　冷水浴である、外氣の成るべく當らぬ所で、バケツに約三杯を頭より浴びて、成るべく急速に手拭を以て皮膚が赤くなるまで强く摩擦して皮膚を乾かすのである。

元祿姉さん秘密箱

× × ×

全體が强情で。

甚だ從順しく無い。其の證據には、小供の時から學校に居ても、女の癖して行狀評點が何時も乙だと云つて、先生に叱られる樣な事は無論しなかつた樣だつたけれど、其の代り褒められた事は一度もなかつた。加之に頗る以て、

性の惡い横着者

と來て居るから足まらない。てんから先生なんて馬鹿にし切て、些つとも恐がらぬのみか、算術や作文等の題を出されても、何かしら一生懸命に右顧左視したり饒舌りしたり、下らぬ入道の首なんか幾つも書いたりして、先生が石筆を擱けと仰つしやる時に迄、滿足に答へを出して置いた事は決して無かつた。而してかけられると未だ出來ませんと何時でも澄ます。其の癖先生が時として、むつかしい問題でも出して、之れを正當に解く事が出來たら、出來た人から順に家へ歸つても宜しい等と云はれると、何の事は無い、其の時丈は感心な者だ。偉いものだ。半時間は愚か、二十分の上乾度二分とは云はず。誰れよりも〳〵眞つ先に出來上がらして、先生歸宅つても可いんですか等と、殆んど强迫がましう催促して、先生が宜しいと仰つしやるが早いか、脫兎の勢ひで飛び出す。試驗や等の時も此の方法で演るから、何の分らなきや分らぬで、さつさと大きな丸を先生に突きつけて、教場を拔け出したが最後韋駄天を極め込む。時には今一度考へ直して御書きなさい等と先生に叱責を喰はされる事もあるが、其處が性來の强情却々默つては居ず。「知らざるを知らずとせよ、之れ知るなり」と一度答案の終りに大書した事があつた。處が、之れは實の處、昨夜父から漢書のお講義に聞き掠つた、

受け賣り

だつたのだつたけれど、はし無くも大に先生の御威

に入つて。思はぬ僥倖を博した事もあつた。

　何時だつたか。同級生の男の兒の一人が先生に止め置きを命ぜられて、泣いて居つたのを見たら急に氣の毒になつて來て、可いじや無いか、お歸りよ。お歸宅つたらお歸宅よ。若しも先生が怒つて明日も止めたら又お歸宅よ、歸宅れなかつたら其の時はお逃げよ。何有些つとも構ふもんかねと。大口利いて、友に命令二重違反の罪を敢て犯さしめた事もあつた。だから先生は自分を之れと別に咎め立てゝ、叱責するの罰するの等と云ふ樣な事はなさらなかつたけれど、乾度癪に障るいけ好かない奴位には思つて居らしつたであらう。自分は然う思つて居る。現に今でも餘り人に好かれる方の柄じや無いんだから。

　今だから正直に白狀もするが、其の頃學校も先生も大嫌ひだつたけれど、夫れかと云つて家に居たからとて、外の小供の樣にお友達を誘ひ出して、風船玉を上げて遊ばうの、鬼ごつこして狎戯けやうの等と云ふ考へも無かつたし、第一自分は小供の樣にも無い、其の頃から餘り他人には馴染まなかつた。唯何て事なしに一日うつそりとして何事をもせず何事をも考へず、寒い日ならば獨り法師火閣にでも潛り込んで、ちら〳〵と降り積む如更の雪空を、凝然窓からでも眺めて居りたかつたのである。夏ならば、太陽のかん〳〵と照りつけるにも關はず、

　　西向きの小椽

に、玩弄物箱でも持ち出して、出しては入れ、入れては出し、散らすでも無く取り片附けるでも無く、時には小猫の首輪でも拵へて居りたかつたのである。這麼具合に、自分は不思議と平和な家庭に育ちながら、父母にも餘り親しまなかつた。兄弟も餘り懷かしくは無かつた。母の京參りに行つた時も、父が一年と六十日病院に入院つて居つた間も、別に淋しいとも何とも思はなかつた、然るを況して、先生たりとも朋友たりとも、根が他人たるに於てをやである。

　自分と始終交際つて、自分を能く知つて居るものは總べて誰れでも自分の事を、熱情が無い。冷淡だ。薄

情だ。不眞面目だ。皮肉だと評して呉れる。けれど私は之れを非認して憤氣になつて辯護するだけの價値も必要も理由も不幸にして發見し得無いので、寧しろ大に喜んで此の評を甘受して居る。否自分自身でも、或は他の人を比較したら冷淡であらう。輕薄であらう。事に接しては不眞面目であらう。人に對しては熱情が足ら無からう。冷めたからう寒むからうと自覺して居る處か。實以て内心頗る之れを誇りとして居るのである。笑つて貰つちや甚だ困るが、扨て御目出度い、次第ではある。

なまなか、
大方の女子の樣に、同情深くて涙脆くて、星や菫に泣憐憫をかけて居つたら、肝心な大切の場合に淸い美しい麗しい私の無い公明な正大な涙が翻れませうか。事實は何よりも〳〵雄辯であると云ふ。聞けば、當節御若い美しい皆さんの熱は優しい同情に捕れ樣とする因果な有象無象が、矢鱈無性と皆さんの御身邊に出沒して居ると云ふ事であるから、卻々以て油斷も透き間もありやし無い。時には風とも變らう。時には雨とも化らう。秋は況して雲の佇まひ。西の空の夕映え赤う。唯赤う紅を浸せる樣なる其の中にも出るわ表はれるわ、飛ぶわ走るわ雲の峰。素灰白色銀灰白色墨色淡う。流るゝ星の影急に落ちて、秋の夜は慘澹凄愴、荒涼さは梟の聲一つ。

去るを何れの木強漢ぞ。「偽りの無き世なりけり神無月」等と、其れこそ眞實の虚言偽り。世に偽りのあればこそ稀には乙な涙も翻るれ。眞の信は時雨るゝ袖には籠らぬものぞとよ。笑止や我れは知らず。チツク香水、學士高等官、位階黄金、甚だしきはサーベル厳めしき迄、同情の種子ともなり熱涙の分子ともなると云ふ。扨ても詮なき如才なき、轉倒んでも唯は起き上がらなき鼠鳴き烏鳴き、如何樣女子の同情深い事、涙脆い事優しい事、何處迄手を延ばして活動して居るか方圖が知れぬ。と云つて、想ひに想つて戀ひに焦慮れて幾度も死ぬ心になつて、時には又死んだ氣にもなつて

熱い涙も流し合つて同情もし合つて、

悶えて泣いて

漸つとの事でいざとなつて、漕ぎ着く彼岸の朝は嬉しう。夕は悲しう。其れも一瞬之れも一瞬。春宵の一夢はかなく覺むれば此處に七十五日。目元も可愛ゆからず口元も愛しからず。人間一切塞翁の馬の耳にも東風吹き渡れば、春の淡雪花とも散れ露とも消えよ。嘘妾は飛んだ見損ひをした。フ、ン俺等こそ見當違ひをした等と、今更の樣に周章き出す、そんじよ其處等の氣の弱い多涙多恨の優しい方々に迄、後學の爲め御意を得て置かうと云ふのでも何でも無い。近からん者は目にも見よ。遠からん者は音にも聞け。涙の福音同情の功德、お門違ひのお宗旨ながら、特別の御贔氣を以て、序に我れ等も濟度して賜はれと願つて置くのである。

然るを古人は我等に訓ふ。「至仁は親しみ無く至悲は涙無し」と。猶又古人は我等に訓ふ。「水清ければ魚住まず。人察無ければ友なし」と。何ぞ夫れ活殺擒縱の自由なる自在なる。馬鹿〱しい程御丁寧で居らつしやるお向ふの熊さんたちならば、將にヘン人笑はしやがらあと鼻の先きで待遇ふ處。此處に於てか吾人は吾人の眞趣に迷ふ。とまあ、

調法な口

は、眞面目に忠實に辯護もして與れるが、之れは眞實の處手前味噌ばかりなんで。

假面を脫して、掛け値の無い處を白狀に及べばまあ斯う云ふ次第である。

恥かしながら實際性は爭はれぬものである。習慣は恐ろしいものである。自分は年十三でもつて早く既に暖い父母の膝下を遠く離れて、冷めたい寄宿舍内に三年云ふばかり無き寂寞を幼心にも味はされた事があつたけれど、夫れでも其の間、父母懷かしいの古里戀ひしいのと云ふ念は他の人程起こらなかつた樣であつた。先生も無論嫌ひであつた。同窓の友も厭やであつた。第一自分の學んで居る學校からして疳癪に障る程氣に喰はなかつた。けれど物事には冷淡な不眞面目

な自分は、殆んど批評的に自分の地位を看過して、云はゞお厭じなしの、頗るお目出度く御輿を据えて居つたのである。元より虚僞でもなければ虚飾でも無い。

其の後、正眞我れに血を分けて賜はつた。

一人の最愛な

父に別れた時にすらも、母の樣に兄や姉の樣に、若しくは近親知己の人たち程、父が靈前に哀悼の涙を灑ぎ得なかつた。其れでも、夜一陣風の香爐と止みて、僧が誦する枕經の細う悲しう、香の香氣の冷めたう寂しう、通夜を明かす曉がた三時、流石に我れ知らず悚然として心からほろりとしなかつでも無かつた。

夫れから一度、親類に不幸のあつた時自分が弔慰に行つた事があつた。聞けば十七の末だから若う、病床についてからやう〳〵三日目と云ふ事であつた。病む身の如何に苦しかりしか辛らかりしか、崩れ掛かりし島田の根元ゆら〳〵に弛みて、縞瀧銘仙の寐卷き着亂次無う、括り枕心ばかり前の方に倒りて、俯伏しに伏せし片頬の蒼白さ、誠に目も當てられぬ悲慘な有樣であつた。御所親兄弟の君たちは更にも云はず、親類縁者其家にありとある程の人は、眞から悲し狀に涙を流して其の不幸を悼まなかつた者は無かつた。處が自分は怎うであつたらうか。春は花に憧れて、恍惚となる樣な長閑な雨の夕でもあつたけれど、實際彼の時位何とも云へぬ悲しい、淋しいはかない厭やな感じのした事は無かつたが、矢つ張り、泣かれなかつた涙が翻れなかつた。

一通りの時儀

は述べたけれど、自分ばかりあつけらかんとして居るのであるから、人の思はくもあるもの、極りも惡くなつて來る恥かしくもなつて來る。如何にも不體裁千萬なので、自分ながら馬鹿〳〵しいとは思つたが、勉めて涙の翻れる樣な方法を講じて苦心もしたけれど、所謂馬に水を飲ませる丈の準備迄には怎うにか漕ぎつける事が出來ても、終々矢つ張り水は飲まされなかつた即ち什麼しても心から泣く事が出來なかつた。遂には自分ながら自分の阿房らしさ加減には、ほと〳〵吹き

出し度い程可笑しくなつて來て涙處か、頗る以て不得要領の面相して倉皇に引き退つた事もあつた。

遂志が、宋の世祖の寵姫、貴妃に涙を濺ぎしと云ふ術は知らねど、親に別れた時にさへ翻さぬ大切の涙を況して他人の死位に翻しては足まるもんじや無い。自分は更めて斷言するが、自分は冷めたい人間である。否物の哀れをも解する餘裕の無いけちな人間である。否自分は人間の最大墮落者である。何を匿さう我れは矢つ張り、釋迦にもクリストにも見捨てられた女である。

扨ても女子の心安さ、杉葉の立てるに橫白眼みせず、ともあれ、一椀の澁茶あれば足れり一切れの羊羹あれば足れり。寢そべつても疊一枚は出ず、地一分離れては一歩も歩行し得ず、雪の降る日は寒い!!

……………風も止んだ。夜も更けた。

あつたら唇に風引かせたりな。

●日本女子美術學校の發展 并に書繪展覽會

同校は明治三十六年四月の創立にかゝり、校舍は東京市本郷區千駄木林町にあり、開校以來校運兎角振はざりしも今回大に規模を擴張し校規を振作し從來の課程に加ふるに更らに深奥なる學科を研究すべき高等科を併置し、組織を改めて會員出資の財團法人となし、内部の組織は教務部、財務部、製作部の三大部に分ち、東京美術學校教官石川、高村、竹内、海野、其他帝室技藝員の有力者創立發起人となり、島田蕃根翁を顧問とし在野の名家數十名の賛成を得て更に大に大發展を期せんとし、尚ほ其の基金を作らんが爲め橋本雅邦、荒木寛畝、村田丹陵、寺崎廣業其他當代一流の畫伯に請ひ絹地の大版に丹精を凝せるもの百枚を本年二月一日新校内に展列して一人十圓醵金の出金者に對し抽籤法を以て之れを分ち併せて其の出資者を長く同校の設立者となす由なれば、一擧兩得の好案にして同好の士なると否とに拘らず、實に以て同校の隆盛を圖らざるべからず。

活潑靈變は人事の常

風雷倏忽は世態の情

萬有を呑吐し陰陽を奕理す

人生不可思議

滿は損を招く亢龍に悔あり

吉凶は變すべし

禍福は一所不住なり

遊戲？信仰？

人生不可思議

轉變道人

易は伏義に始まり周公之れを用ひて陰陽を爽理し以て國家の治平に損益せり、孔夫子傳を尋ぐに至つて韋編三絶の信頼あり以て其の蘊奥を發く、後世之を人事に用ひて損益を見る多し、下つて末世に及び賣卜者流の手に墮つるに至り虚誕妄說多く只管迷信者流を喜ばすの具となりしは歎ずべし」とは是れ儒者、易學者のいふ處なりし。

さり乍ら易は神明の感通にして人心の機微を現はし氣運の發動を指示するもの、これを信ずれば神と冥合し、活潑靈變にして以て一代の運勢を指導し以て現下の利害を默示するもの又是れ精神界の妙作用、哲學上不可解の一大產物なりとは易に心醉する人の言なり。

道人學淺くして未だ斯道の妙所を窺ひ得るの域に達せず故に說の可否を容易に識別する能はずと雖も、時に之れを信じて神明の力の恐るべきものあるを感得する事あり、或は時に妄誕無稽只徒らに不完全なる人の好奇心に投ずる一種の漫戯に過ぎずと思ふ事もなきにあらず、其の信と不信、感通と否とは一に其人々の頭腦の作用又其の時の心象の如何に依るものなれば、道人は今直ちに之れに向つて批を試むるの冒險を敢てせざると同時に、又之に向つて見神の嘆聲を捧ぐるを敢てせざるなり、依て聊かその大體を俗解して信疑兩者の掌裏に便すといふ。

卦象の大意

易は八卦を以て人事の運行人心の機秘を占ふ、八卦は宇宙萬象に象どりて作り、これを天、地、火、風、水、雷、澤、山の八大に假設す、其名稱は須らく古來の字義を套襲してこれを乾、兌、離、震、巽、坎、艮、坤に配す即ち左のごとし。

☰は乾の卦なり、乾は天に象どる

☱は兌の卦なり、兌は澤に象どる

☲は離の卦なり、離は火に象どる

☳は震の卦なり、震は雷に象どる
☴は巽の卦なり、巽は風に象どる
☵は坎の卦なり、坎は水に象どる
☶は艮の卦なり、艮は山に象どる
☷は坤の卦なり、坤は地に象どる

即ち天地宇宙萬有萬象の氣を八大に區分し乾、兌、離、震、巽、坎、艮、坤の八卦となしてこれを天、澤、火、雷、風、水、山、地の八物象に符したるものなり。

猶一層これを通俗に解釋すれば天は高上昇騰の象とも見るべく、地は泰下不動の象とも見るべく、山、雷、澤、水、風、火の如き皆其の名に因て萬物の氣に象どり各卦交合變化して以て人事百般に應用す、假令へばこゝに今䷮の卦を得るとせんか、上卦は澤にして下卦は水なり、易に是れを澤水困と稱す、澤は澤なり、澤の水は停滯して流通せざるなり、故にこの卦は困窮難澁の卦にして諸事不自由に我が志し通達せず苦勞多きものと判斷す、又䷩の卦を得たりとせんか、上卦は風にして下卦は雷なり、易に是れを風雷益と稱す、風は風なり、動搖して一所不住の象あり、雷は雷霆なり、是又運動變轉の意あり、故に此卦は上下共に動いて安靜ならず、故に住所安からず心身定まらずして辛苦ありと判斷するものなり。

斯の如くして乾爲天より坤爲地に至るまで八卦は變化して六十四卦となり、以て人事百般に應用さる、今六十四卦の目案を揭ぐれば左のごとし。

▲乾下卦の部

乾爲天　澤天夬　火天大有　雷天大壯
風天小畜　水天需　山天大畜　地天泰

▲兌下卦の部

天澤履　兌爲澤　火澤睽　雷澤歸妹
風澤中孚　水澤節　山澤損　地澤臨

▲離下卦の部

天火同人　澤火革　離爲火　雷火豐
風火家人　水火既濟　山火賁　地火明夷

▲震下卦の部

天雷無妄　澤雷隨　火雷噬嗑　震爲雷

風雷益	水雷屯	山雷頤	地雷復
	▲巽下卦の部		
天風姤	澤風大過	火風鼎	雷風恒
巽爲風	水風井	山風蠱	地風升
	▲坎下卦の部		
天水訟	澤水困	火水未濟	雷水解
風水渙	坎爲水	山水蒙	地水師
	▲艮下卦の部		
天山遯	澤山咸	火山旅	雷山小過
風山漸	水山蹇	艮爲山	地山謙
	▲坤下卦の部		
天地否	澤地萃	火地晉	雷地豫
風地觀	水地比	山地剝	坤爲地

以上六十四卦の變化を知り各卦の特象を察して後之れを人事に應用して深く考へ、密に慮る處あれば自から其の運命の開闔氣勢の變動を自得發明するに至らんこと必せり。

乍併、玆に易を信ずる人に就て第一に注意すべきは吉卦に安心せず、凶卦に失望せざるの一事なり、すべて人事には絶體の吉事といふものなく、又絶體の凶事といふものなきがごとく、吉と思ひて慢心增長すれば手を飜へさずして凶事至り、凶と思ひて戒心謹慎すれば禍變じて福となるものなり、吉事の裏には必らず凶事を宿し、凶事の裏には必らず吉事を宿し、吉凶禍福はあざなへる繩のごとく、其の刹那に變化するものなれば(即ち易の變卦なり、變卦の事は今略す)易の示す處に依つて其の運勢天機の發動する處を察し活斷して誤るなからん事を深く戒しむるものなり。

易を筮する法は種々あり、筮竹又は紙捻を以てするは易占者の事なれども錢を擲げて其の表裏の出づるに隨つて算木を立るもよし、最も簡單なるは人をして一二三の數を呼ばしめ、其奇數と偶數とに依つて筮するも又一法なり、すべて筮する時は、無念無想、心を靜め氣を平らかにして正に是れ天地神明の示現を求むるの一念を以て行ふべし、示現に出したる、卦は專ら易學小筌、梅花心易、周易須知に依りて斟酌せり。

示現

䷀ 乾爲天、龍變化を示すの象なり、此卦は高貴大人には吉なれども平人には凶なり
△萬事進む事は凶 退くによろし
△物事困難なる形あり
△移轉又は旅行等凶なり
△願望は不成就の象
△事業には失敗あれば謹戒すべし
△結婚は中吉 但し媒介等に妨あり
△他人の世話を爲して苦勞多し
△盜難の憂あり戒むべし
△懷妊すれども胎を成さず
△其他仕ぞこないありて悔む事多し

䷁ 坤爲地、物資の生盛を示す、此卦は地の德にして萬物生育するの理あり
△願ひ事は調へど遲し少しく妨あり
△結婚、縁談調へど急にすれば障あり
△妊娠は安產也
△待人は來らず
△遺失物は不明
△病氣は重くして危し

䷂ 水雷屯、龍の水中に動くの象なり、草木の始めて生じて未だ伸びざるの意にて萬事に就き其きざしはあれど因循姑息にて容易にまとまらぬ意あり
△旅行は戒愼を要す
△金錢貸借は見合すべし
△天運未だ盛ならず故に急に進むは不利
△婚姻は吉兆なれど變に因ては吉と定め難し
△待人は遲し
△遺失物は尋れ難し
△產は不安、病氣は危險
△すべて雷の水中に住むの象なれば其の住所未定不安の時なり

䷃ 山水蒙、蒙は暗し又雲の意あり斷崖絶壁に雲霧のかゝりたる象なり、恰も兒童の智惠に暗き意あり、されど時を過ぐれば、漸次開發して知を生ずるに至るものなり
△物事急にする事は宜しからず
△種々入亂れたる象あれば紛糾錯雜勞多くして功少し
△萬事見込違の事あり戒むべし
△迷ふて五里夢中に彷徨する意あり
△遺失物尋れ難し待人來らず
△病は長く、妊娠は障なし

䷄ 水天需、是れ密雲にして雨降らざるの象なり此卦は諸事急にする事は成就し難く却て難義に遭ふ事あり但しゆる〳〵とする時は吉なり、吉事あれども時節未だ到らず故に時の至るを待つべし強いて爲せば恰も溢張したる川を強いて渡らんとして

危険に陥いるがごとし

△旅行中難事來る事あり、戒むべし
△病は長し婚は成就し難し
△遺失物は急に知れ難し
△待人來らず來るも遲し

☰☵ 天水訟、天水違ひ行くの象なり、傳に田獵獲物なしの意とあり此卦は上下別れ〳〵になりて相交らざるの義にして背き爭ふの卦なり

△心身不安煩悶の事多し
△萬事調ひ難し
△住居を移轉し、業を改むるに不利なり
△人に誤解さるゝことあり、友人を失ふ義あり
△結婚は不結果に了る
△病は長引くけれども凶事には至らず
△產は安し待人來らず
△爭論の事愼むべし

☷☵ 地水師、地勢淵に臨むの象、此卦寡を以て衆を伏するの意なり、此卦は大人の德ありて偉人には吉なり、されど普通一般の人には大抵不利なり

△旅行は愼むべし、住所に辛苦あり
△物事入りこみて解決し難き意あり
△色情を戒むべし、盜難愼むべし
△病危し又變のあることあり
△待人は來る遺失物は不明に了る
△時に思ひ寄らぬ幸福に遭ふ事あれど凶なれば警戒せよ

☵☷ 水地比、和樂にして隔意なきの意なり、此卦は親みありて人と相和樂するの卦なり、故に知己、朋友、親戚など寄り合ふて協力するの義なり

△願ひ事は調ふべし但し少し遲し
△結婚は成就す但し遲ければ調ひ難し
△病は長し、危し
△待つ事は音信あるべし
△遺失は尋れ難し
△物事は急にせよ延引すれば調ひ難し

☰☱ 天澤履、虎の尾を履むがごときの意あり、始は驚く事ありて後には喜ぶ意ある卦なり

△戀愛の意あり
△爭論は愼むべし
△婚は調へど和し難し
△病は危しされど望なきにあらず
△遺失物は不明
△憂悶の意あり
△財物は求むるに妨げあれど成就すべし
△物事敗れ易き象あり

☴☰ 風天小畜、相親み、相疎んずるの意、物事塞がり止まるの意あり、又目に見て手に取られぬ象なれば萬事急には調ひ難し變卦に大畜を得ば甚しき苦勞あり

△住所に辛苦あり

△心中に煩悶あり
△夫婦の交情不安の意あり
△胎兒は流るべし
△病治し難し
△待人來らず
△萬事まとまりのつかぬ象なり

䷊ 地天泰、此卦大人には宜しされど常人には凶なり
△色情に就て困難あり
△住居安寧ならず
△物事手違ありて心勞多し
△願ひ事は急に叶ひ難し
△病人は凶
△遺品は出づべし、但し品は破壞されたる意あり
△待事は信あり

䷋ 天地否、月霧裏に匿るゝの意萬事塞りて通せざるの義にて思ふ樣になり難し地位の高き人より慳貪に逢ふの意あり

始は困難にして後には榮ゆる卦にて何事も始は人と不和合にて勞する事多けれど末は終に志を達す
△夫婦の間に口舌あり
△胎は不安
△病長くして危し
△遺失物は歸る事あり

䷌ 天火同人、闇夜に燈を揭ぐるの象なり、人心和合して親しみ深し
△諸事成就し立身出世あり
△此卦は正直にして邪曲なき卦なれば若し姦佞邪惡の心ある人占ひ得ば大凶となるべし
△病人凶
△產は安し
△婚姻は平なれど不貞の意あり能く吟味して取り結ぶべし
△待人來る
△遺失物尋れ難し
△短氣を愼むべし

䷍ 火天大有、窓を穿ちて明を開くの象なり、日輪天上にありて照り人も時を得たる卦なりされど滿れば缺くる諺の如く財物に損する事あり
△親戚朋友の間に苦勞あり
△外部は美にして內實は惡しき意あり
△胎は流產の恐あり豫防すべし
△願ひ事は叶ひ難し

䷎ 地山謙、山に登りて平安なるの象、此卦は先に屈して後に伸ぶるの意あり
諸事控へ目よろし、强情我慢を出せば凶、何事も謙遜なるがよし
△結婚は成る
△產は平安
△病は不治
△待人到らず或は遲し
△遺物不明

䷏ 雷地豫、雷地を出でゝ震ふの

象にて立身出世の喜びあり、勝利の意あり又新らしく物事を取組む意あり

△他心を抱くべからず
△結婚は吉但し女の家に少紛あり
△胎は不安
△遺物不明
△すべて奮進よろし

☱☳ 澤雷隨、馬に乘つて鹿を逐ふの象

△住所は變する方吉
△病は凶
△願ひ事は調ふ
△遺失物は婦人に求むべし
△胎は平産
△進んで行ふ事は凶
△女難を愼み警戒すべし

☶☴ 山風蠱、門内に賊あるの象、此卦は山中に風を含み、吹き出して壞るの意にして諸事に就て難義迷惑する事あり愼むべし

△萬事心に任せず強いて行へば身をやぶる
△親族中に苦勞あり

☷☱ 地澤臨、少女母に從ふの意あり、卦は貴賤交りて親しむる卦なれば柔和なるをよしとす、剛氣なれば凶

△結婚は吉
△横合より難題言ひ出されて苦勞する事あり

☴☷ 風地觀、風塵埃を揚ぐるの象此卦は吉なれども晴天に雲の起るが如く思ひ掛なき事出來し苦勢ありされど人に仰ぎ尊まるゝ意ある卦なり又風の地上を吹上げて行く象あり、萬事調るの義なれば相談事調ふ

△住所は變動す
△吉事あれども急に叶ひ難し
△人に尊まるゝの意あり
△婚は調ひ難し
△待人來らんとして來り難し
△遺失物求めがたし

☲☳ 火雷噬嗑、蛟魚物を噬むの象噬も嗑も嚙むの意にして物事咬み合ふの象あり、傳に夫婦閨に怒るの意と解す又頤中に物あるの象なり故に諸事障礙ありて調ひ難し、されど咬み合ひて通ずる義あれば後には成就すべし
又龍の淵に匿るゝの勢あり、短氣を戒しむ、萬事温和をよしとす爭論、訴訟等障り多し

△婚は成る
△產は平安
△病は凶に近し
△遺失は不明

䷕山火賁、門内美を競ふの象とあり、又虎の林に出でゝ遊ぶの象あり

△立身出世あるべし
△住居を轉ずるによし、旅行もよし
△人と誤解を生じて不和となる
△器物調度を美にする象あり
△願ひ事叶ふべしされど遅滞して急には調はず
△望を過大にすれば必ず損あり小なるを吉とす

䷖山地剝、舊を去りて新を生ずるの意あり新規に物を始むるによろし

△時を逸して思慮の定らざる意あり
△物の高所より落つる象あり
△病は凶
△願ひ違ひして事を傷ぶる意あり
△人に邪魔を入れらるゝ事あり婚は凶
△相手へ物をしかけるには凶

䷗地雷復、地を掘りて寶を得るの象とあり此卦は物盡きて又始まるの象なれば吉事に向ふ時節にして諸事思ふ事就るべし

△願望は成就す
△婚は調ふ
△病は治す
△待人來る
△住所に苦あれど久しからず

䷘天雷無妄、雷暑に逢ふて震ふの象あり此卦は天理に隨つて動く義にして妄るゝことなし吉卦なり、然れども人情には弱點あり、順當にして吉なるを以て人々愼戒の意なし故に此の卦を得れば過半は凶となる

△物を覆ひ包む象あり故に物事遠かならず
△遺物は來る、願ひ事は通じ難し、強いてすれば災あり

䷙山天大畜、淺水に舟を行るの意あり此卦は龍の山中に潜み居て震ひ起らんとするの卦なり故に希望多けれども苦勞多し物に忌み嫌あり、又畏るゝ意あり

△物事増殖の意あれど又破壊の障あり
△人物は性急の生れにて事を破る
△爭論ありて心一定せず
△婚は非、病重し遺物不明

䷚山雷頤、匣中に物を秘するの意と傳す此卦は養ふの義にして物の成就する卦なれども時節未だ到らず急にすれば不利なり心中思ふ處ありて忍ぶ意あり

△婚は成る末不和、遺物は他の物の中に混じてあり
△人の多く集まる意あり
△病は凶

䷛ 澤風大過、何事も不足にして思慮安からず、我思ふ事を强いて行へば後には困難あり物事不順なり表面は善きも跡のなき形なり人と協同の事は可なり

△胎は難產、遺物不明

△待人來らず

△進んで爲す事宜しからず

䷜ 坎爲水、二人水に溺るゝの象、又寶を載せて船を破ぶるの意あり此卦は困難窮迫の卦なり遠く住所を去つてよし

△病は難病にて不治の症なり

△願望叶ひ難し遺失物は空しくなる

△結婚は老人ならばよし其他は不吉

△二人連立て行く意あり又人に匿るゝ意あり

䷝ 離爲火、秋葉風に飄るの意あり此卦は離別の卦なれば親子兄弟朋友などに別るゝなり罪を受ける事あり金銭上に損失あり口舌の上に憂ひあり

△婚禮養子の類調へ難し

△病は凶兆但し危きに瀕して復活する氣あり

△此卦は始め凶にして後に利あり

䷞ 澤山咸、山澤氣を通づるの象、此卦は物に感通して速に調ふ卦なり思はざる吉事ありと知るべし、

△婚姻は吉、產は平安

△願ひ事急ぐべし色情のなやみあり

△外國へ行くには歸らざるの意あり

䷟ 雷風恒、並び行き相背くの象此卦は物の生長する義あり又物の散失する意あり住所につき苦勞あり新たに物を取り始むる事宜しからず吉凶共に久ふして後變るの卦なれば急にする事皆禍と知るべし

△病は不安

△願ひ事叶ひ難し

䷠ 天山遯、貴人山に隱るゝの象なり、此卦は退くと訓む字にて住所などに辛勞あり思慮分別定まらずして諸事間違ひの事多し

△願ひ事は邪魔するものありて調ひがたし

△物事成就の樣に見へても又調はずして損亡し又難義する事あり

△病人中吉なれば變卦によりて吉凶を定むべし

△婚姻は成らず成るも凶也

△遺失物は空し待人來らず

△他所より故鄉へかへるにはよし

䷡ 雷天大壯、猛虎角を生ずるの象此卦は陽氣盛に長ずる卦なれば諸事過ちありて苦勞難義に遭ふべし

△金銭につき苦勞あり短慮を愼むべし

△物事悠揚する意あり

△婚は不眞

△遺失は歸らず
△待人來らず

䷢ 火地晉、滿地錦繡の象、人玉階に登るの意也此卦は朝日の登る象ありて次第に繁昌し立身出世の趣あり又上流の人より恵みを受け取用ひらるゝ義なり

△住所は變る意あり變はるは吉なり
△願ひ事は叶ふべし
△病人は凶
△婚姻は成就す
△胎は平安
△遺失は遠く持ち去らる
△陰惡の人此卦を得れば大凶なり

䷣ 地火明夷、嚢中に物のある象、此卦は日の地中に入りて分明ならざるの意あり、故に人も思ふ處を失ひて困難迷惑する事ありされど始め困窮して後に榮花するの卦なれば終には出世榮達すべし

△女の爲に災難を蒙ることあり
△病は危し遺失は得難し
△婚は多少の障あり

䷤ 風火家人、氣ありて形なきの意、此卦は家内安全の卦なり萬事婦人を以て行へば吉

△婚姻は吉
△胎は平安
△遺失は出づる
△願望遲し
△色情に就てなやみあり
△立身榮達に望あり

䷥ 火澤睽、桃李競ひ開くの象此の卦は人心相乖き違ひて事を成難し、男女の間に難儀あり爭論舌をつつしむべし

△心中に辛苦多く又財寶散亂する事あり
△人と絶交する事あり
△知己と離るゝ意あり
△婦人を占ふて此卦を得ば大凶にして其女姦曲なり
△病は重す、遺失は得がたく、待人來らず

䷦ 水山蹇、門前に陷あるの象、此卦は龍の珠を失ふ意にして財貨散じ、貧にして苦勞あるの卦なり

△萬事卑屈なる意あり
△危險を見て止まるの卦なれば大過なし人に隨ひてよし
△病人重し婚は成らず
△願ひ事叶はずされど後によし
△萬事心細き意あり

䷧ 雷水解、川を渉りて未だ乾かざるの象なり、此卦は魚の網を逃れ出たる意にして難み、解け散るなり故に人も難儀なる所を遁れ出でる卦なり、されど謹まざれば再び禍あり

△諸事思ふ事早くするによし
△遲ければ調ひがたし
△力になる人を得べし
△遠方の人と交はる意あり
△婚は吉、但し後不慮の妨をふせぐべし

䷨ 山澤損、貴賤位を正すの象なり此卦は元減省して物の損失あるの卦なり

△親族の間に損失の事あり
△急にする事は成らず二度三度かゝれば成る
△苦勞と面倒多し
△立身望あり
△病人吉
△遺失空し
△待人來らず

䷩ 風雷益、風芦花を拂ふの象、此卦は上下共動いて安堵ならず故に住所一定せず心身定まらず辛苦ありと知るべし

△思ひ寄らざる災難ありて損亡す
△婚姻はよし
△胎は障あり
△旅行はよし

䷪ 澤天光、蛟龍天に登るの象、此卦は剛强に過ぐるの卦なれば性急にしては事を破るものなり愼むべし

○大器決斷の性質なれども柔和にして堪忍する事を得ざるべし
人と衝突して中絶する事あるべし
△願望は妨げあり
△待人は來る
△產は大概安產なり
△災難に遭ふ事あれど外より助けらるべし
△旅行すれば驚く事あり

䷫ 天風姤、果實の樹上にあるの象、此卦は貞節ならざる婦人のごとき象あり、思ひ掛なくして會合するの意あり、相談事は人に依賴すれば成る

△婚儀に就て女に難あり
△貴人に近くの意あり
△病氣は凶兆なれど或は變卦によるべし
△遺失は出づる、思ふ人來る

䷬ 澤地萃、鯉龍門に登るの象、此卦は物の集會して繁榮するの意あり

△財產集積するの意あれども多少爭論を免かれず
△中絶、離別の人に廻り遭ひて又親しくなるの意あり
△病人は凶
△婚儀は吉
△產は安
△思ふ人來る
△旅行は不可
△希望は達す

䷭ 地風升、橋上に往來するの象、此卦は草木の地下にありて漸次

に地上に發達するの意にして漸次成功の域に入るの卦也
△住居に就て苦勞あり
△願望は成就すれども急にすれば凶
△病人重し
△婚姻は成る
△待人は來る
△産は平安

䷮ 澤水困、鴉枯木に鳴くの象、困窮難儀の卦にして萬事不自由なること澤の水のごとく、通達する事なし苦勞多き卦なり
△願望叶ひがたし凶なれども貴人の救を得て立身するの意あり
△病難をつゝしむべし
△婚姻は吉
△胎は安
△遺失は出です
△待人遲し
△困窮すれども末は榮花を樂み得べし

䷯ 水風井、海人魚を求むるの象、萬事改め變る事はよろしからず各自其の本職を守り、敢て妄りに新規の事に着手すべからず皆損あり益なし
△病は重く長し
△胎は多少の難産
△遺失物は出づる
△思慮を一定すべし
△他所より歸るには吉、行くには凶

䷰ 澤火革、腐草化して螢となるの象、萬事改むるによろし、今までなせし事の世に用ひられざるの類は速に舊を棄て新に就くべし
△願意達すべし 初は調ひ難きも末には必らず成る
△色情に就て苦勞あり
△爭論を愼むべし
△立身成功あれども遲し
△遺失物は空に歸す
△待人は手間取る
△福あれども隔てらるゝの意あり

䷱ 火風鼎、鼎中味を調ふるの象、事を改むるに吉、物を煮て食用するの義あり堅きを柔らかにし生を熟し皆變革の義なり舊を捨て新を取るによし
△親友を得
△福を受く
△結婚は成る
△病は變あり
△待人來る
△産安からず愼むべし

䷲ 震爲雷、双龍珠を爭ふの象、本來祥福ありて繁榮の卦なれども普通人には宜しからず
△驚く事あるべし物の變動する意あり又怒つて物を破るの意あり

△願望障あり
△待人信あり
△婚姻は不可
△胎は障なし
△遺失は空し

䷳ 艮爲山、山上關を鎖すの象、止まるに宜しく進むに損あり又喜憂の二山重りたる義なり故に中は關ひ中は不關なり
△危き場合、及び財產上損失ありされど他より救助くる意あり
△進で歸路を忘れ迷惑する意あり
△婚姻は平安
△待人來らず
△病は不治
△遺失はあり

䷴ 風山漸、山中樹を植ゆるの象、成功達意の卦なり出世すべし
△財貨に就て惱みあり
△病人凶

△待人來る
△遺失空し
△女の男を慕ふの卦なり婚姻成る

䷵ 雷澤歸妹、少女男を追ふの象、不意の禍ある卦なれば謹むべし
△願望始あり相談契約期を失ひて破るる意あり
△婚は凶、孕は安、病は凶
△失物は出づ待人は來る
△惡人に害てられ我が本意顯はれずして困難する事あり

䷶ 雷火豐、發花雨を待つの意あり、此卦は盛大なる勢ある卦なり、されど餘り大過にて却て其形を失ふ意に見るべし譬へば水中の月の如く目に見て手に取るべからざる狀況ありと知るべし
△虚言、僞り、謀計あるべし、且つ思ひ寄らぬ驚きあるべし、又損失の事あり故に

△公事訴訟等は慎むべし
△婚は可ならず
△寶物を得る意あり
△胎は成らず
△病は凶
△遺失物發見すべし
△待人來らず
△又豐は多なり、盛大なり而して衰ふの始めなり萬事退によろしく進むに利ならず

䷷ 火山旅、日輪西山に傾くの象、鳥を見て矢を失ふの意、此卦は始めよろしく末悲みとなるの意あり萬事に就て戒愼すべし、又困窮にして不自由なる意あり
△財物を求むるに少しく得べし
△遠く求むるに利なり、近く求むるに不利なり
△心中浮きたるもの丶如く安からざる意あり
△住所につき苦勞多し旅宿して居る如く心細く思ふなるべし

△旅行は宜しからず盗難を防ぐべし
△病人不直、一時は宜しきも終には凶
△親身を失ひて困窮流浪の人となる
△婚姻よろしからず
△遺失物尋れ當るべし
△胎孕の惱みあり
△待人來る
△喜の内に憂の意あり

䷸ 巽爲風、枝折れ幹倒るゝの意

△巽は散なり又柔順なり、此卦通じて達せず、止めて久しからず、百事名ありて形なし
△遠方へ通ずる事あるべし
△住所辛苦あり、心身一定せず迷ふの意あり
△願ひ事は十中の五を得べし
△待事は信あり
△婚姻はよろしからず
△病氣は危險
△遺失物は出難し或は既に遠く持去る
△胎は平安
△難澁に遭ふ事あり
△伏し匿るゝ意あり

䷹ 兌爲澤、新月池に映ずるの象、此卦は喜びの顯はるゝ卦なれども又物事取締りなく埒のあかぬ意あり又外見はよろしきも内心の宜しからざる意あり

△人の多く集る義あり
△口舌の上の爭あり
△財物を求むるの類事多く疑慮ありて決せず
△願望病人過半宜しからず
△色欲のなやみあり
△心身苦勞して後には宜し
△遺失物出難し
△待人來る
△婚姻には口舌を含む

䷺ 風水渙、順風に帆を颺するの象、此卦は物の散解する意ありて惡事の身を離るゝの吉兆とすされど散亂の義ありて又損失あるべし

△遠方に來往し又諸事遠路他國より取結ぶ事皆障りなし
△横合より思ひ寄らぬ災難又は損失を受くる事又世話苦勞あるべし兼々愼むべし
△心底安からざる意あり
△待人來り難し
△産は平安
△病氣は凶なれども病人の新舊によるべし
△願望は遲くなるべし
△婚姻成る少しく說破すべし

䷻ 水澤節、狐泥中を涉るの象、此卦は物事滯りて阻ある卦あり

△不意に災難に遇ふ事あるべし愼むべし
△閉ぢ塞がるの意あり
△旅行は不可
△結婚は平安
△胎は平安にして少しく遲し
△病は凶なり

△遺失物は知れ難し
△財物を求むるの類成就すべし
△物に誤りありて止めらるゝ意あれば諸事手廣くする事不可
△願望は叶ひ難し
△穴を作つて自から隱るゝの意あり

☴☱ 風澤中孚、鍋釜に蓋を得たる象あり、此卦は誠あるの卦にして心中正直丁寧なれば吉とす邪念を欲して此卦を得れば大凶と知るべし

△相談事は整ふべし
△始は惡しくして末は吉
△待人來る
△遺失物久しくして始めて信あるべし
△病氣は大抵凶
△婚姻は吉
△親愛せらるゝの意あり
△心を一圖にして變ずる事なくば願望は叶ふ
△人の爲に苦勞する事あり
△隔てゝ物を案ずるの意あり

☳☶ 雷山小過、飛鳥山を過ぐるの象、此卦は鳥の飛ぶを目に見、其聲を耳に聞けども手に取る事能はず故に萬事調ひ難し

△大なる願はなけれども常に苦勞氣がれ多くして我身心に任せざる意あり
△婚姻は不成就に了る
△物を十分に滿さんとすれば又不足の事發し調ひ難き卦なり、故に小事には宜し大事には宜しからず
△旅行なやみあり
△人と中絶する事あり
△病は治すべし
△産は平安　△待人遲し

☵☲ 水火既濟、芙蓉霜を戴くの象あり、此卦を得れば物事一旦は成就すれども末には破るゝの意あり愼むべし

△渡りに行きて舟を得たる意ありて宜しき事に逢ふの義あれども又今より後の變る卦なれば油斷はなり難し貞正を守るべし
△口舌爭論あり　△遺失は出難し
△何事にも終りを保たざるの意あり
△婚は不可凶と知るべし
△病は凶　△産は平安
△人と中絶する事あり

☲☵ 火水未濟、曉光海に浮ぶの象、此卦は物の成就する卦なり

△願意は叶ふ
△身心に苦辛ありて常に不足なり
△破れ易き意あり
△財物を求むるには成就遲し
△色情あり
△住所を去るによし　△病は凶兆
△遺失は出べし思ひ懸なき處にあり
△待人來らず
△女は悅あり、男は窮苦ありて後によろし
△婚姻養子共に吉
△花落ちて實を結ぶの意あり

紹　介

書道一班　中村不折著

不折畫伯が當代傑出の材なることは具眼者の夙に欣仰する處ろ、書道の一班、秩序を立てゝ說明尤も詳細、流派の論、技術の心得、單に初學の人を益するのみならず、又專門家の參考として一讀すべきものなり定價八十五錢日本葉書會發行

新式漢文捷徑　竹內松治氏

科學教育に多大の時間を課せらるゝ當今の靑年は元より漢文を熟修するの餘裕なからんも、支那文學の大要を智得せんには本書の如き便宜なる書にたよるを捷徑とす、殊に卷末の漢書解題は當今の靑年に便宜多しとす（定價六十錢寳文館）

乙女の生涯　大村仁太郎氏

女子の生ひ立ちより結婚期に至るまで十數年間、所謂乙女なるものがその母の手にあり、學校にあり、家庭にありて如何に成育し、如何に知惠づき、如何に感化され、如何に成長しつゝあるか、これを日常卑近の例につき眞摯なる指導を與へんと試みたるは本書なり、家庭教育論者として現代の智識たる大村氏の着眼遉かに敬服の至りなり（價六十錢精華書院刊）

黑風（小說）　田口掬汀氏

小說の目的が現代生活を描ぐを以て唯一のものとすべきや否やは知らざれども、本篇は正しくこの現代の影を捉ふる事に於て尤も成功したるものなり、其の顯はれ出づる人物、描き出されし事柄、思想、感情一として現代に欲らざるなきは本篇の特色にしてやがて又掬汀氏の現代に歡迎せられつゝある所以ならんか、文に浮辭の嫌なく、叙事巧みにして人物の活動も申分なく一體に癖のなき好小說なり（價七十錢春陽堂版）

小婦人　北田秋園女史

文壇には初聞の作家なれど、飜譯にしてこれほどに讀ますは中々の腕前といふべし、坪內氏の序文に小公子以來よき家庭の讀物なりとありしが文の用意は兎も角歐西の事情を日本風に反してこれほどに成功せしめたるは近來稀有のものなるべし（價五十錢彩雲閣）

野分（ほとゝぎすの新年小說）

猫文士と異名されたる夏目氏は遂に文壇の大立物となれり、當今の世何者を倣ひ來るも夏目の上に立たんこと難し、草枕、ぼつちやん、亭々として獨り高きは何故ぞ、本篇野分に至つて更に一段の光彩鮮やかなるを見る、小說としてはあまりに議論の多きに遜易するといふものもあれど、評者はそんな事聊かも苦にならず、滔々たる俗惡世界を罵しり盡し、黃金跋扈の陋弊を打擊し盡して、痛快を極む、眞に心のゆく作物なり、煩悶の人に慰籍を與へ、飢へたる人に糧を與ふ

歷史講話　早稻田通俗講話

池田晃淵氏の日本歷史、浮田和民氏の西洋歷史、前者は賴朝、楠公、謙信、信玄、秀吉、信長、家康の事蹟に就て、後者はビスマーク、ナポレオン兩雄の事蹟に就て各々前人未發の創見あり、古人を見るの眼はこの歷史講話によつて更に一段の趣味を感ず

古今集評釋（第四卷）　金子元臣氏

古書は必ず相當の講說を俟ちて、致知悟道の妙境に達するを逕路とす。本書は、勅選歌集の始祖たる古今集に就いて、精細なる評釋を施したるものなり。これを彼の餘材、打聽、正義、遠鏡等の既刊の釋書に比するに甚しき逕庭あり。彼は到底、學者の參考に資するに充分ならざるに、此は、釋書としても、優に以上の諸書を凌ぎ、剩へ、嚴密なる批評を一首毎に施して、其の好惡巧拙を判たれたれば、實に斯學の燈明臺なり。（定價四十五錢、明治書院）

靈海新潮

當代思想界の巨人海老名彈正氏の著なり、情は情と戰ひ、智は智と衝突し、時代の潮流はいよ〳〵複雜に入り波瀾洶湧して人心の歸趨に迷ふこの時代の暗黑界に向つて確かに一道の光明を與ふるものは實にこの書ならんか（金尾文淵堂發行　價八十錢）

現代處世燈　成功社

成功新年增刊は現代第一名流家の處世訓を滿載せり、年と共に人の心も改まりてよき習慣をつけ、善事を積まば成功は必らずしも遠き未來の事にはあらざるなり。

二月號記事豫告

二月五日發行

每月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內（定刊數……十二册
增刊四回…一、四、七、十月價格同一）

郵稅　一册　二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁（廿二行）	一頁（六十四行）
特等	……	二十圓	割引　四十圓
一等	五十八錢	十七圓	割引　三十三圓
二等	五十錢	十四圓五十錢	割引　二十八圓
三等	四十二錢	十二圓	割引　二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵劵代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢劵相添申込あれ

明治四十年一月二十日發行第七卷第貳號

編輯兼發行人　松原岩五郎

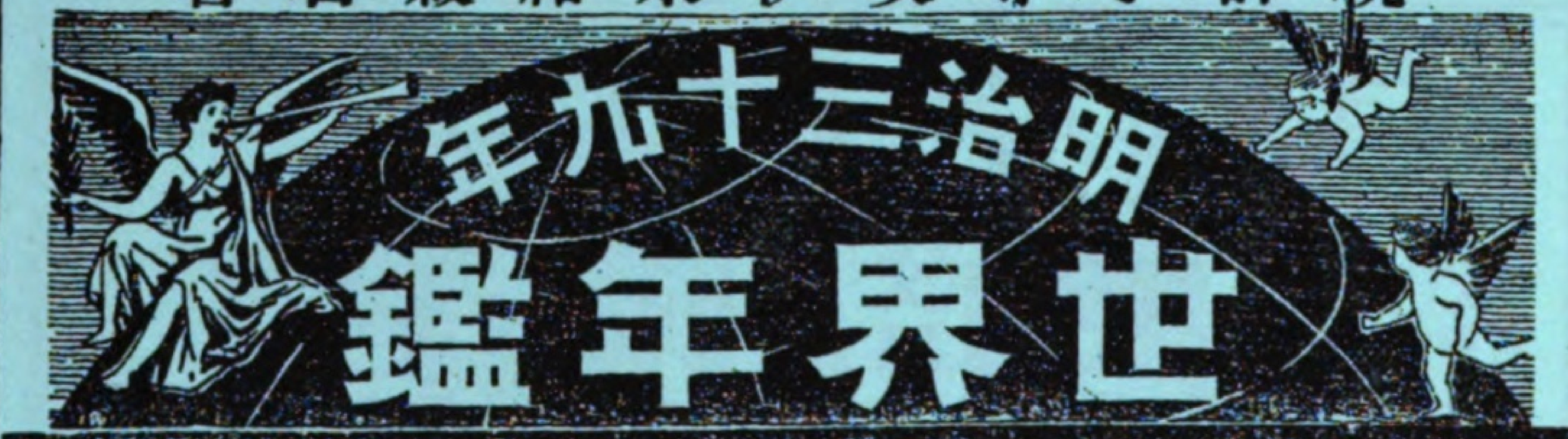
印刷人　山田英二

印刷所　博文館印刷所（東京市小石川區久堅町百八番地）

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

伊藤侯　山縣侯　井上伯　西園寺侯
澁澤男　後藤男　題辭　大隈伯　序文
統計學專攻　伊東祐穀君著



全一冊洋裝大判（縱八寸五分 橫六寸）總クロース金文字入頗美本 紙數約千五百頁 堅牢函入

●正價金五圓

●小包送料參拾錢

▲卷頭　各國地圖（本邦對外貿易及對外郵便色別圖あり）、各國海軍將官旗、寫眞版、描畫圖（日本人種の發展）二十枚挿入

▲內容　前年分に比し今記事更新の外日本之部說明を增加し、各國之部淸韓等東洋諸國に精を加へ、世界之部內外海軍戰鬪力比較を試む

國家戰捷の缺は能く彼を知り已を知るに在り爲政經綸の要も彼我の情勢を詳にするに非ざれば能はず。而して世界日進の氣運は昨の我既に今の我に非ず、今の彼亦必ず翌の彼に非ざるなり世界年鑑の必要缺く可からざる所以實に此に存す、是を以て歐米各國夙に「イーヤブック」の著あらざるはなく、朝野萬民賴て以て座右の寶典となせり。

然るに本邦久しく完全なる「イーヤブック」の出でざるを憾とし、本館曩きに統計學專攻の大家伊東祐穀君と謀り、年々完全無缺なる世界大年鑑を刊行せんと欲し、一昨明治三十七年を以て第一版を創刊したるに、果して朝野の需用に適し、大好評を博したるは本館の光榮とする所なり。

爾來約の如く年と共に改新增訂し、昨三十八年第二版を發刊し、本年又別に「ポケット」挿入用として袖珍世界年鑑を出し、大方の淸需愈々進み、推奬益々篤きを得たるに際し茲に更に第三版本年分の刊行を告白する機運に會せり、本書が廣く萬國の長を取て最新最精些の漏なきは既に江湖の諒知せらるゝ所にして、尙本書は第一版以後の最新統計の基礎に成り、殊に東洋諸國の記事精細一段を加へ、卷頭日本人種の發展圖の如き將に輓近海外移住の大勢を示し、光彩陸離たらしめんとす。

全編の區分は總て前回の分に倣ひ日本、各國、世界、實用、附錄の五大部に分ち、繁くるに許多の細目を以てし、加ふるに諸種の必要なる圖章を挿み、一日瞭然、座して宇內の大勢を了知すべからしむ、眞に我邦唯一の寶典なり。

明治四十年一月卅一日迄の御注文に限り ◉特價金參圓五拾錢（外に要送料）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（後付の一）

帝國百科全書

第百五拾七.八編

文學博士 金澤庄三郎君
後藤朝太郎君 共著

言語學

（上卷——既刊）
（下卷——未刊）

本書は言語の研究法を說き世界の諸言語を分類し且つその間の法則を說きたるのみならず歷史、宗敎、神話、土俗、人類等の諸學との關係を明かにし又他の形而下學との區別に論及せり二十世紀の今日苟も國語又は外國語に就て云々せんとするものはすべからく言語學の一般智識を有せざるべからざるは今更云ふ迄もなし本書の特色とする所は言語を頗る多方面多趣味に觀察し詳論して而かも平易なるにあり吾人は此の點に於て本邦在來の言語學の書に一步を進めたりと信ず。

（上下）
上製各五拾五錢
郵税各拾錢宛
並製各四拾錢
郵税各八錢宛

第百五拾九編

文學士 橋本忠夫君著

世界文學史

（既刊）

今や歐洲文學の研究漸く隆盛に向ひ其邦文に上るもの寡なからずと雖も多くは單に一時代一個人を以て對象とする故に未だ一般文學の史的研究に資するに足らず是れ文壇の缺陷といふべし本書は世界各國の長短異同を調査し其相互の感化影響を考察し之に系統と順序とを與へ以て其推移發展の跡を研究す故に史的性質をして縱に時代を以て區劃すると共に橫に分括するに一傾向一潮流を以てし某の時代某の傾向を有するものを網羅せり讀者本書に依て世界文學の源泉過程を知り併せて各國民詩歌の特性及び一般文學の體幹を知らば其研究に資する所決して鮮少にあらざるなり

上製五拾五錢
郵税拾錢
並製四拾錢
郵税八錢

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（後付の二〇）

工業叢書

木船構造術

工學士加藤成一君　工學士高山襄坪君共著

全一册

惟ふに今より百年前鐵船の現出せしより造船術上一大變化を來たし遠洋航海に用ゆる船舶は木船殆んど影を收めんとす然れども端艇小蒸汽漁船の如き小形船舶に至りては素より木材の力を籍らざるべからず況んや本邦の如く鐵材の大部を海外に仰ぐ國に於ては小形船舶には木材の使用を癈すること能はざるなり然り而して其造船所としては大阪中國四國其他全國に其數尠なからずと雖も其製造物は往々正式に合はず檢査に於て劣等の階級を付せらるゝは甚だ遺憾とする處なり本書は著者が自己の經驗に歐米實驗家の原書を參照して編述せられたるものなれば本業に志す士一讀せば木船構造術の大要を會得するに難からざるなり。

洋装中判
總クロース美本
紙數四百廿餘頁
正價壹圓廿錢
郵税拾貳錢

工業瓦斯

工科大學教授工學士　井上仁吉君著

全一册

本邦化學工業の現象は近時著しき發達を爲し就中各地に於て盛に瓦斯會社設立の計畫を見るは慶すべきなり此時に當つて瓦斯製造に關し其概念を與ふべき邦文の書なきは工業普及の一缺點にあらずや井上教授玆に見るありて本書を著はす而して其内容主として灯用熱用及び動力用瓦斯に就て其一斑を記述せらる挿圖精巧叙述簡明以て實業者多大の利便を得べきなり

洋装中判
總クロース美本
紙數二百八十四頁
正價壹圓貳拾錢
郵税八錢

東京　博文館　本町

女(後の四)

文學士 蜷川龍夫君著



於ける信念に渇し、修養の奥秘を求むるの聲、今や天下に洽く。其のこれを求むるや、唯だ理論的説明のみを以て足れりとせず、短刀直入、靈界偉人の胸臆を叩いて活ける光明と新しき生命とに接せんとす。然れども憾むらくは、我が邦建國以來民國の精神界を支配淘冶し來りし佛教の祖師高僧聖人の傳記敍述は、概ね靈怪の假裝を被り、奇蹟怪談、神秘的口吻を以て飾られ、未だ正確なる史的考察に基きて、その精神生活とその人格の至大とを仰視せしむるに足るもののなきが如し、本書は著者獨特の史的烱眼と多年研鑽の歸結とを以て、我が佛教史上第一流に任ずべき二十有餘の祖師聖人を我が民族思想史上の大立物となし。主として其人格の特色と各個獨創の修養法を詳述し、且つその時勢と四圍との調係を詳論し。次て精神生活の情態を最も詳密に、最も平易に發揮したるものにして、一讀古聖人の精神修養の心術と、人物養成の秘訣とを窺知するに足るものあり。蓋し本書によりて、我が思想界多年の渇望を滿すものあらん

全一册洋裝菊判
紙數約二百四十頁
定價金四拾錢
郵稅金拾錢

大哲 フイヒテー氏原著
文學士 杉谷泰山君紹述

人生解決 人間天職論

人間の自覺、人間の本分、自他の實在、社會の成立、國家の發展に就きて、破天荒の見解を與へ、天下を牽ゆる學者紳士の本領に關して、驚天動地の大文字あり、爲政家の用意、教育家の覺悟、著述家の準備等に論じ及びて、或は諭へ、或は戒め、殊に將來の學者紳士を以て任ずる學生の用意覺悟、成功の秘訣、天才と勉强と、關係、智能の發揮、德器の修養等に至りては、千古の卓說なり。更に又本書の後半は、人生問題の解決にして、人生に對する疑問、宇宙に對する難問に起點して、百問百答を試み、遂に人生に對する一大信仰の旗幟を鮮明にし、以て新天地に新生活を得て、一大快哉を呼べる所は、實に宗教と哲學と一丸とせるフイヒテーの大手腕なり、三讀四讀之を重ぬる毎に、益々心廣く體胖なるを覺ゆるは本書の特徵なり。

全一册

洋裝菊判
紙數三百餘頁
正價五拾五錢
郵稅八錢

東京 博文館 本町

通俗作文全書

記事論説或は紀行叙事等の雄篇大作より、尺牘葉書の日用文に至るまで、齊しく是れ文なる以上は、文明社會の人は皆文を以て互に意思を通じつゝある者と謂ふべし。然るに今日の状況を見るに、百般の藝術の駸々進歩するに反し作文の技のみ獨り退歩の觀あるは詢に痛嘆の至りといふべし。是れ多數の人士が文章に重きを置かざるに由ると雖も、從來作文法を教ふる完全なる書籍なきもの亦其一因なりといふべし。弊館之を遺憾とし、通俗作文全書を發行し聊か以て此缺點を裨補する所あらんとす。其の目は下に列記す。

第一編 **文章組立法** 大和田建樹君著

第二編 **書簡文作法** 同

第三編 **美文作法** 田山花袋君著

第四編 **商業作文法** 天城安政君著

第五編 **評釋支那時文軌範** 靑柳篤恒君著

全部二十四册洋裝四六判
並製紙數各三百頁
正價一册參拾五錢
郵税一册六錢宛

續刊

●書簡文範 ●女子消息文範 ●中等學生文範 ●論説記事文範 ●祝賀吊祭文範 ●言文一致文範 ●紀行文範 ●英和商業作文 ●雅俗はがき文範 ●英文作法

●才媛文集 ●寫生文範 ●日記文範 ●古今名家文話 ●明治時代文範 ●古今名家尺牘 文 ●古今文人逸話 ●古今名句集 ●作文熟語類集

東京 **博文館** 本町

（後付の八）

従來贈答品は我國の慣習として食品衣類に限られたるが如し、而して其内には全く虚飾に終りて實用の道なく、心あるもの常に之を歎せり、然るに世人未だ書籍を以て之に代用するの有益なるを知らず、書籍は少費にして之を贈るもの心安く之を受くるもの多益なり、而して食料の如く消費する物にあらず、高潔にして永く其家の備品となり、女子の良風家庭の良習皆な此の贈品より千發萬達すべし。

販賣用電話
本局二六二〇番

御進物用圖書切手調進仕候

東京
本町三丁目
博文館

◎圖書切手は優美高雅なる函入にて其儘御進物用として最も適當に御座候

◎右圖書切手は本館發行の圖書中御隨意のものと御引替可申候

◎切手函中には約三百頁の美装なる本館發行圖書總目錄相添へ圖書御撰擇の便に供し申候

◎圖書切手は本館及び全國各地賣捌店に於て持參の御方御望みの圖書と引替可申候

◎地方よりの御注文は送料及雜費として別に金拾錢を申受く

振替貯金番號
第二百四十番

女學世界定期增刊
第七巻第二號
寶の藏
（明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可）
（明治四十年一月廿日發行 每月一回五日發行）



（定價金貳拾錢）

博文館印刷所印行

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㊾
明治40年1月（第7巻第1号、第7巻第2号）

2008年12月10日　第1刷発行　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3504-2　C3321